

昭和四十九年五月三十一日

忘  
れ  
な  
草

第五号（最終編）

旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会

## 目

## 次

「忘れな草」の最終編に寄せて  
原爆当時の在学生  
付属医専の廃校と在学生の転校  
学部四年生の卒業試験日程表  
本誌一一四号の誤謬訂正  
全編を通じての総括

### 被爆生存学徒の手記

#### 卒業生の手記

草場	正藏	九
西川	勝	二四
林政	吉	四一

#### 学部学生の手記

浅宇	桂	四六
沼本	功	五三
島和	夫	六三
谷玄	之	六八
吉田	弘	七七
佐々木	博	八〇
築城	輝士郎	八五
丸道	達人	八八
市原	人夫	八九
山本	人夫	九二

#### 付属専門部生徒の手記

吉吉星	蜷田	井久	杉尾	安
永田	加川	中本	野原	立東
一光	秀親	満文	源正	保人
敏治	雄正	稔徳	通	寅
一	九三	九〇	九八	八五

日高	忠健	実博	二一
林高	健	忠人	三〇
日高	健	寅人	五〇
林高	忠	寅人	五八
日高	忠	寅人	五〇

蛭崎	安野	高賀	本田	小石
武徳	塚口	橋來	多中	川島
一	日	恭徹	辰彦	三代彦
九一	志	晋一郎	男夫	彦夫
九八	九一	八九	八三	七七

森	吳源雅彦	彦	二二
来	来助	助	二二
来	来助	助	二二
来	来助	助	二二
来	来助	助	二二

蛭崎武徳……………一〇〇  
 香田金朝……………一〇九  
 土山秀夫……………一一〇  
 川隆志……………一二四  
 原前嗣……………一二九  
 村寛一……………一三三  
 岩井手春雄……………一三六  
 磯野秀治……………一四〇  
 井順郎……………一四八  
 井雄……………一五六

堤琴緒方文作……………一〇八  
 村尾誠弥……………一一〇  
 村一真……………一二二  
 纯一……………一二六  
 駿一……………一三〇  
 松原西村……………一三三  
 本永信之……………一三八  
 田雅文……………一四四  
 真利郎……………一五四  
 井平一郎……………一五八

片中執行和善……………一〇九  
 野島上義雄……………一二七  
 東吉永春……………一三三  
 松串田武郎……………一四〇  
 北郷武照……………一三五  
 田英夫……………一四五  
 恒夫……………一五六  
 富大吉……………一六一

## 御遺族の方々への報告

長崎原爆台湾同学犠牲者追悼会を挙行するに至った経緯

長崎原爆台湾同学犠牲者追悼会式次

台北市で催された「長崎原爆台湾同学犠牲者追悼会」に参列して

原爆犠牲学徒の靖国神社合祀と遺族援護に対する請願運動

第七十回国会、社会労働委員会議録

昭和四十八年七月三十日に掲載された長崎新聞の記事

昭和四十八年十二月に行つた陳情の記録

昭和四十八年十二月二十九日の長崎新聞の報道

原爆犠牲学徒の遺族に対する援護法適用の認可確定報告書

残っていた遺族の手記（吉野久代・打田タカ子）

編集後記

旧長崎医科大学原爆犠牲者並に遺族代表者名簿

林忠実	調	来助	一七〇
田吉チエ	調	来助	一七六
一八六	一七八	一八八	一九〇
一八六	一七八	一八八	一九六
一七六	一七九	一七八	一九〇
一七三	一七九	一七八	一九〇
一六九	一七〇	一七〇	一九〇

## 口 絵 写 真

- 一、八月九日朝の慰靈碑前景
- 二、慰靈祭に参列した遺族たち
- 三、読経を聞く遺族たち
- 四、焼香中の遺族たち
- 五、台北市の臨濟護国禪寺、山門と大雄宝殿
- 六、長崎医薬台灣同学会々長李克承先生の祭文奉読
- 七、臨濟護国禪寺の大雄宝殿内祭場
- 八、長崎医大で原爆の犠牲となられた恩師と台湾同学の位牌
- 九、長崎医薬台灣北部同学会々員と遺族たち
- 一〇、長崎医薬台灣中部同学会々員と遺族たち
- 一一、長崎医薬台灣南部同学会々員と遺族たち
- 一二、原爆直後の浦上地区
- 一三、新興善救護所の被爆者診察風景
- 一四、同 上
- 一五、アメリカ軍医たちの血液検査風景（新興善救護所三階）
- 一六、新興善救護所での炊出し
- 一七、地面に寝転ぶ被爆者たち
- 一八、新興善救護所に担送されて来た原爆死亡者
- 一九、地べたに放置されている原爆死者の遺体
- 二〇、旧長崎医科大学附属病院及び東側丘陵の見取地図
- 二一、旧長崎医科大学基礎教室の配置図



1. 8月9日朝の慰霊碑前景



2. 慰霊祭に参列した遺族たち



3. 読経を聴く遺族たち



4. 焚香中の遺族たち

5. 台北市の臨済護国禅寺  
山門と大雄宝殿



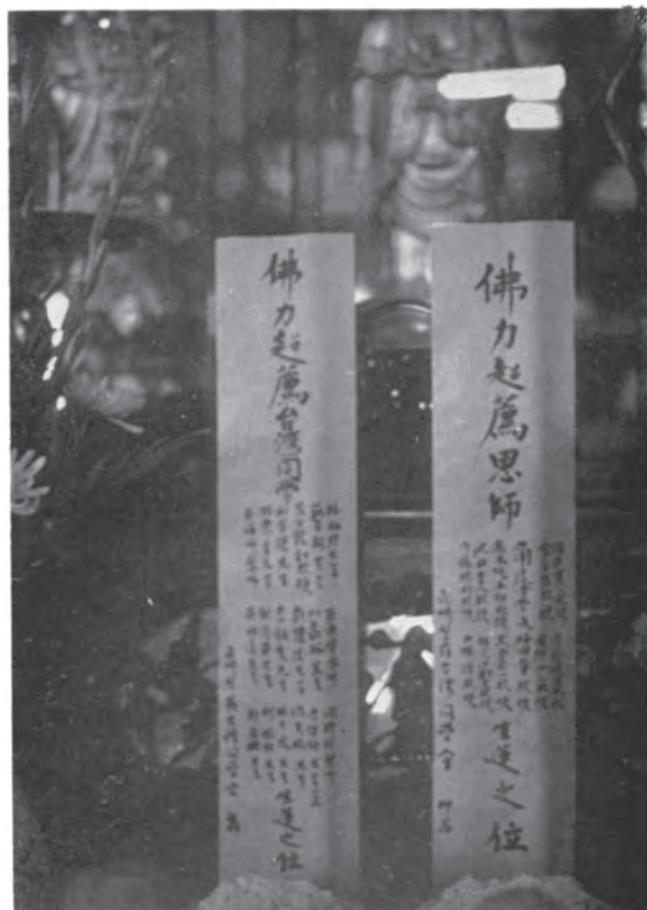
6. 長崎医薬台湾同学会々長  
李克承先生の祭文奉読



7. 臨済護国禅寺の  
大雄宝殿内祭場



8. 長崎医大で原爆の犠牲となられた恩師と台湾同学の位牌 →



9. 長崎医薬台灣北部学会々員と遺族たち  
前列の向って左より 1林忠実 6調 7佐藤 8近藤 9辻 10松田 11周百鍊 12李克承



10. 長崎医葉台湾中部同学会々員と遺族たち

(後列) 張夫人, 陳弄碧, 蔡夫人, 蔡江山, 柯敦伝, 張欽南, 吳威烈, 蔡秋梧, 徐寬容, 林國川  
(中列) 王夫人, 鄭夫人, 某, 王文其, 葉仲琅, 鄭鴻藻, 黃世超, 黃夫人, 葉國慶, 林政吉, 林忠美  
(前列) 沈水雲, 松田源治, 辻泰邦, 佐藤純一郎, 調來助, 近藤厚, 林雲川, 張嘉英, 陳正中



11. 長崎医葉台湾南部同学会々員と遺族たち

(後列) 陳見堯, 蔡灣潭, 黃耀宗, 林忠美, 蕭秀河, 康嘉音, 楊友香, 林五桂  
(中列) 蔡永正, 彭明哲, 趙夫人, 蔡夫人, 黃夫人, 康夫人, 彭夫人, 蕭夫人, 李明道  
(前列) 李炳森, 近藤厚, 調來助, 佐藤純一郎, 辻泰邦, 松田源治, 楊友登



12. 原爆直後の浦上地区



13. 新興善救護所の被爆者診察風景



14. 新興善救護所の被爆者診察風景



15. アメリカ軍医たちの血液検査風景(新興善救護所3階)



16. 新興善救護所での炊出し



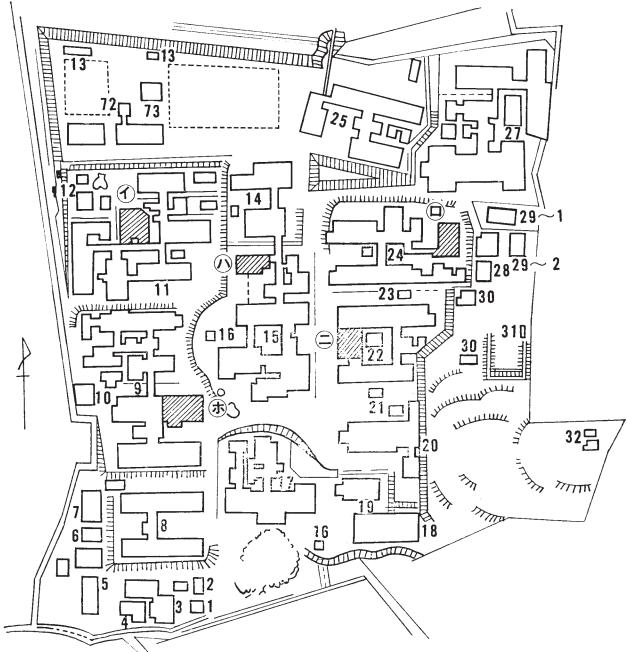
17. 地面に寝転ぶ被爆者たち



18. 新興善救護所に担送されて来た原爆死亡者



19. 地べたに放置されている原爆死者の遺体



旧長崎医科大学基礎教室の配置図

- |           |               |             |
|-----------|---------------|-------------|
| 1. 門 術 所  | 13. 物置、便所及脱衣所 | 25. 葉理学教室   |
| 2. 自動車庫々庫 | 14. 細菌学教室     | 26. 温室      |
| 3. 配電室    | 15. 衛生学教室     | 27. 葉学専門部   |
| 4. 学生会議室  | 16. 銅像        | 28. 水槽及ポンプ室 |
| 5. 柔剣道場   | 17. 本館        | 29~1 鋏器庫    |
| 6. 物置     | 18. 雨天体操場     | 29~2 生徒控所   |
| 7. 機械工室   | 19. 学生集会所     | 30. 大弓場     |
| 8. 法医学教室  | 20. 図書館       | 31. 射的場     |
| 9. 病理学教室  | 21. 大講堂       | 32. 睡会・議室   |
| 10. 土蔵    | 22. 生理学教室     | 72. 医学専門部   |
| 11. 解剖学教室 | 23. 薬電室       | 73. 生徒控所    |
| 12. 燃却場   | 24. 生化学教室     |             |

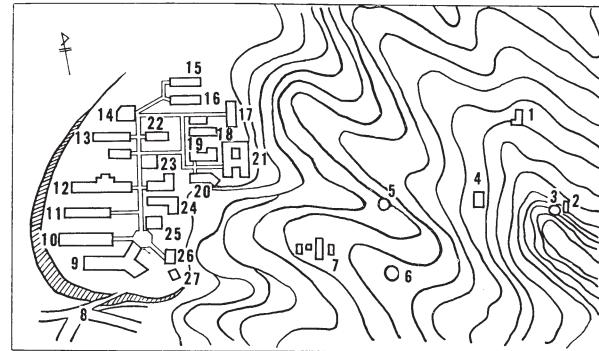
備考: 斜線は多数の学生が遭難した講堂を示す。

① 解剖学講堂 (医専1年第1小隊)

② 生化学教室 (医専1年第2小隊)

△ 卫生学講堂 (医専2年生)

○ 生理学講堂 (学部1年生) ■ 病理学講堂 (学部2年生)



旧長崎医科大学附属病院及び東側丘陵の見取地図

1. 丘の中腹の民家  
倒壊したが焼けず、この家より米と釜を持ち出し握り飯を作つて被爆者に配給した。
2. 穴弘法の茶店  
倒壊、焼けず。
3. 穴弘法 (様)  
入口は幅55cm、高さ145cm、奥行は約3×3m<sup>2</sup>の広さを有する洞窟で、奥に弘法大師が祀られている。一般の信仰が厚い。
4. 穴弘法寺  
小さいが綺麗なお寺であった。真言宗、原爆の際倒壊、但し火災は起らなかった。
5. 放射線科の急設パラックの所在地で、私(調)は8月9日の夜ここで一夜を過した。
6. 角尾学長及び高木附属医専部長が9日夜野宿されたところ。
7. 保健婦養生所  
古い木造建物、原爆爆発後間もなく発火炎上。
8. 外来本館前の坂道  
この坂道には人、馬などの死体が無数に見られた。
9. 外来本館: コンクリート建、地下1階、地上3階、全焼。
10. 内科病棟: 地下1階、地上3階
11. 耳鼻咽喉科病棟: 2階
12. 外科病棟: 3階
13. 産婦人科病棟: 3階
14. 北講堂: 階段教室
15. 小児科病棟: 2階
16. 眼科病棟: 2階
17. 精神科病棟: 2階
18. 皮膚泌尿器科病棟: 2階
19. 高北 (伝染病棟): 2階
20. 高南 (結核病棟): 地下1階、地上2階
21. 看護婦宿舎: 木造2階
22. 産婦人科手術室: 2階
23. 古屋野外科手術室: 2階
24. 調外科手術室: 2階
25. 南講堂: 1階平面、2階階段
26. 調理部: 2階
27. 洗濯室: 2階

## 「忘れな草」の最終編に寄せて

旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会々長

調 来 助

世界で二番目の、そしてまた恐らく最後でもある原子爆弾が、不運にもわが長崎市上空で炸裂してから、早くも満二十九年を経過しようとしています。うたた感無量というより外はありません。

一口に二十九年といえば、短い間のように思われますが、下世話にも「十年ひと昔」という諺があります。それに比べると、約三倍にもあたる長い歳月で、当時二十才だった青年も、今では五十才に手が届くような、血氣盛りの立派な大人に成長しております。でありますから、普通ならもうとつくに原爆のことなど、忘れてよい今日この頃であります。私共にとって、この災害だけは、忘れようとしても永久に忘れる出来ない、一大悲惨事であったのであります。

何万という無辜の老若男女が、ただ一閃の怪光によって、或いは即死し、或いは強烈な爆風・放射能等にさいなまれて、血みどろに傷つき、人相も判らぬほどに焼け爛れ、衣服はちぎれて半裸体となり、ヨロヨロとよろめき歩きながら、友の名を呼んでは助けを求め、人の姿を見ては水を欲しがる。その声は阿鼻叫喚となつて山に木霊し、あたりは鬼気を帯びて、さながら焦熱・無間の地獄そのものの様相を呈していたのであります。

その渦中にあって数々の辛酸を嘗め、僥倖にも九死に一生を得た人々は、皆等しく、「二度とこのような惨事があってはならない」と、機会あるごとに絶叫しつつ今日に至つております。

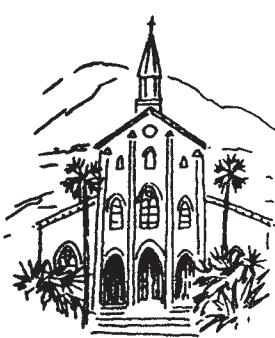
不肖私もその一人で、恐ろしい原爆被害の実態を、世の人々に知らせるために、昭和四十三年以来、原爆の犠牲となつて斃れた旧長崎医科大学の職員・学生・看護婦たちの御遺族から、貴重な原爆思い出の手記を戴き、これを集めて「忘れな草」と称する小冊子を出版して参りましたが、幸に皆様の温い御協力により、これまでに四巻を出版することが出来ました。

その内容は、そのままが旧長崎医科大学の原爆被災史であり、いつわりのない真相を伝え得たものと自負していますが、この度は、更に本誌の使命を充実させるために、実際に原爆を体験された当時の在学生諸君の生々しい手記を集め、これを従来の遺族の手記に追加すると同時に、生残り学生の動静を調査して、当時の在学生全員の消息を明確にしたいと思つたのであります。

その詳細については、次に項を改めて述べたいと思いますが、当時の業籍簿が原爆で焼失し、三十年の歳月を経過した今日では、洵に至難の業で、その完成は到底不可能ではないかと、ひそかに危ぶんでいる次第であります。

世界の平和を祈念して

(四九、四、二〇)



# 原爆当時の在学生

## 調来助

原爆当時の在学生は、学部、付属医専、付属薬専を合せて、約九〇〇名であったようである。

そのうち学部の学生は、二十回生から二十四回生までで、二十回生は昭和二十年三月に仮卒業し、学生時代に依託生であったものは、現役として軍医学校で六ヶ月間の教育を受けていたので、原爆当時はまだ学校に居り、依託生でなかつたものは、短期軍医として二ヵ月間（四月から六月まで）教育を受けた後、隊付の見習医官となつて軍務に服していたので（藤井浩君の証言による）、幸に難を免かれることが出来た。

学部の二十一回生は、原爆の当時四年生で、卒業試験の最中、このまま原爆がなければ、二十年九月に仮卒業して軍医学校に入學し、二十一年三月に本卒業の予定だつたが（浅沼桂君の証言による）、学内にいたために、不幸にして大量の犠牲者を出した。しかも終戦後は、修業年限短縮の制度が廃止されたので、生残った学生達は、二十一年四月以後も四年生に留まり、二十一年九月に初めて本卒業となつたのである。二十二回生は原爆当時三年生で、臨床実習に従事していたが、終戦後は本来の制度に復して、二十一年十月から四年生となり、入学後満四年を経過した二十二年九月に卒業したのである。

二十三回生と二十四回生は、それぞれ二年生、一年生として、講堂内で議義を受けた際に被爆し、生き残つたものは、二十二年三月まで同学年などつまり、それ以後は、平時の通り一年毎に進級して、入学後四年を経た時に卒業している。

二十五回生は原爆の翌年に入学したので、原爆とは全く関係がなく、又修業年限短縮による速成教育も受けっていない。（表一 参照）

付属医学専門部の在学生は、四期生から七期生に至る四学年で、四期生は二十年三月に仮卒業し、学部学生と同様に大半が軍医学校（海軍は海軍衛生学校、中村謙二君

証言）に入學し、短期軍医は既に隊付見習医官となつて、軍務に服務中に八月九日を迎えている。幸にして長崎市には軍隊も軍関係の病院もなかつたので、軍医として被爆死亡したものは一名もなかつた。ただ仮卒業生として、大学に残留していた五名だけが、原爆の犠牲となつたのである。

五期生は当時三年生で、卒業試験の最中であった。同期生の証言によると、二十年九月に卒業の予定だつたのが、原爆によって延期されて、生存者は二十一年四月に四年生となり、二十二年三月には再び卒業試験を受けていたところ、アメリカGHQの介入で文部省から廃校の宣言を受け、一年格下げとなつて、他校へ転校を余儀なくされたのである。（表二 参照）

当時の学長古屋教授、及び医学専門部長佐野教授は、極力その存続を政府に請願され、学生諸君も数回に亘つて陳情を行つたが、遂に願望が達せられず、廃校となつたのは甚だ遺憾であった。

第六期生及び第七期生は、それぞれ二年生、一年生として講堂での議義中に被爆し、その大半が爆死したのは真に哀れであった。大多数が座席についたまま、遺体となつていたという。而も大量の軍医養成のため、二年生が一六〇名、一年生が二〇〇名採用されていたので、この二学年だけで学生犠牲者の半数以上を占めていたのである。以上は、原爆当時の在学生についての大要で、実際に何名いたか正確な数字は完全不明であるが、試みに大約の数字を記してみると、おうよそ表三に示す通りである。この表のうち、死亡者数だけは比較的正確なようであるが、それでも付属医専一年生の死亡者割出しには、大変苦労させられた。

基礎資料となつた「追憶」を見ると、医専一年の死亡者は一二五名、行方不明者が二二名で、合計一四六名となつてゐるが、昭和四十二年二月に遺族へのお見舞金下付が決定すると、急に名乗り出るものが殖え、その真偽の決定に甚だ困惑した。依つて経済学部に保管されている戦時中の官報を点検したが、昭和十九年以後は官立学校入学者名の記載がなく、仕方なく県立図書館を行つて、二十年三月発行の長崎新聞を調べたところ、県内中学校からの入学者一〇六名の名は判名したが、県外からの入学者

は全く不明であった。

我々は死亡確認申請者について、種々検討を加えながら、文部省学生課とも相談し  
て、これを犠牲者と決定したが、今では「追憶」記載の数よりも二名増加して、一

六七名となつてゐる。それは恐らく、原爆災害が入学から僅か一ヵ月後に起つたの  
で、まだ馴染みが少く、生存者の記憶の中に浮び上つて来なかつたためと思われる。

(四九、四、二〇)

表一

学部				昭和十七年度		昭和十八年度		昭和十九年度		昭和二十年度		昭和二十一年度		昭和二十二年度		昭和二十三年度		昭和二十四年度	
				四月	十月	四月	十月	四月	十月	四月	十月	四月	十月	四月	十月	四月	十月	四月	十月
七期生	六期生	五期生	四期生	四月入学	昭和十七年度	四月入学	昭和十八年度	四月入学	昭和十九年度	四月入学	昭和二十年度	四月入学	昭和二十一年度	四月入学	昭和二十二年度	四月入学	昭和二十三年度	四月入学	昭和二十四年度
				四年生	十八年度	四年生	十九年度	四年生	二十年度	四年生	二十一年度	四年生	二十二年度	四年生	二十三年度	四年生	二十四年度	四年生	二十五年
				四年生	四年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生
				四年生	四年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生
一年生	一年生	一年生	一年生	卒業三年試験中	前二十周期	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時
一年生	一年生	一年生	一年生	細菌三年試験中	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度
一年生	一年生	一年生	一年生	学解受剖・年譜・生中生化	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生
一年生	一年生	一年生	一年生	年転高は付校試験月五下校等特級他学設医他卒生(三)皆校長専校未業は三一へ崎又の廢試三	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生

表二

七期生	六期生	五期生	四期生	付属医專	昭和十七年度	四月入学	昭和十八年度	四月入学	昭和十九年度	四月入学	昭和二十年度	四月入学	昭和二十一年度	四月入学	昭和二十二年度	四月入学	昭和二十三年度	四月入学	昭和二十四年度
				四年生	十七年度	四年生	十八年度	四年生	十九年度	四年生	二十年度	四年生	二十二年度	四年生	二十三年度	四年生	二十四年度	四年生	二十五年
				四年生	四年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生
				四年生	四年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生
一年生	一年生	一年生	一年生	卒業三年試験中	前二十周期	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時	一大三月部仮卒業召	原爆時
一年生	一年生	一年生	一年生	細菌三年試験中	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度	一大三月部仮卒業召	二十年度
一年生	一年生	一年生	一年生	学解受剖・年譜・生中生化	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生	二年生
一年生	一年生	一年生	一年生	年転高は付校試験月五下校等特級他学設医他卒生(三)皆校長専校未業は三一へ崎又の廢試三	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生	三年生

表三

クククク	医專仮卒生	クククク	四年生	学部仮卒生															
一年生	二年生	三年生	一年生	二年生	三年生	四年生													
約二〇〇〇	約一六〇〇	約八〇〇〇	約少數	約二一〇〇	約二二〇〇	約八〇〇〇													
死亡者数																			

# 付属医専の廃校と在学生の転校

## 調 来 助

戦時中、大量の軍医を養成する必要から、昭和十四年に七帝大と六医大に付属医学専門部が設置され、十七年九月に第一回卒業生を戦地に送った我が長崎医大附属医専は、二十年七月に第七期生を入学させたが、不幸にして二十年八月九日の原爆により、医大全体が潰滅的打撃を受けた為、「再建に支障を来す」という理由のもとに、全国で長崎の付属医専だけが、二十二年三月三十日を以て廃校となつた。

しかしその代償として（？）、同年四月一日に特設長崎高等学校が設置され、医専から高等学校、次で大学へと進む道が開かれたのである。

一方終戦後は、領土を失った台湾・朝鮮・満洲等から、学校の閉鎖と共に、多数の医学生が長崎医大付属医専にも転入して來た。それらの学生もふくめて、本学の原爆生残りの医専生徒たちは、特設高校へ入学するか、或いは他の大学付属の医専か旧制の医専へ、転出せざるを得ない状態に立ち到つたのである。

学生達は無念の涙をのんで、思い思いに、或いは特設高校へ入学し、或いは互いに誘い合せて他の医専へ転校して行つたが、その行先は凡そ次の通りであつた。

特設長崎高等学校	三四名	京都府大付属医専	二名
東大付属医専	一六名	前橋医専	二名
京大付属医専	二〇名	松本医専	三名
阪大付属医専	一三名	兵庫医専	二名
九大付属医専	二一名	米子医専	一名
千葉大付属医専	一名	山口医専	二五名
金沢大付属医専	九名	岩手医専	五名
岡山大付属医専	六名	久留米医専	七名
慈専大付属医専	二名	鹿児島医専	一三名

以上一八二名であった。しかしこの中には中途退学したり、途中で転校先を変更したりしたものがあるので、卒業した学校は上記とは多少違つてゐたようである。

これらの学生達は、全部が原爆生残りの学生ばかりではなく、外地の学校から転入した学生もこの中に含まれており、入学は長崎医大付属医専であつても、卒業は他校となつてゐるので、特設長崎高校から長崎医大に進んだもの、及び他校を卒業して、再び研究のため長崎医大の教室に入つたもの（賛助会員）以外は、残念ながら本学の同窓会名簿から削除されているのである。彼等は定めて不満のことと思う。

去る昭和四十七年五月十四日に、旧長崎医科大学付属医学専門部同窓生諸君によつて、廃校二十五周年記念のグビロ会総会が、医学部の記念講堂で催され、私もお招きを受けて出席したが、その席上で五期生の中山幹雄君から発言があり、

「自分たちは長年に亘つて、長崎医大付属医専に在学したにも拘らず、廃校の厄にあつて他校に転校したために、長崎大学の同窓会名簿には、我々の名が掲載されていない。甚だ残念に思う。どうか名前を載せて頂くよう、当局の方々にお願い申し上げたい。」

とのことであつた。私は直接同窓会には関係していないが、中山君たちの心情、まことに不憫に思われたので、僭越ながら次のように申し上げておいた。

「真に御尤もなお言葉である。医専一、二、三年の人たちも、原爆で死んだ方々の名前は名簿に記載されているので、同窓会長や医学部長にお願いして、是非掲載するよう努力致したい。」

その後、この事を佐藤医学部長にお願い申し上げたら、快諾が得られたので、名簿改訂の折もあり、進んでお手伝いの方を買って出で、且下大急ぎで新名簿作製申であります。来る七月か、遅くとも八月九日の原爆記念日までには、是非完成したいと思つてゐる。尚、本誌の巻末にもつけておいたので、御覽のほどお願い申し上げる。

（四九、四、二〇）

# 学部四年生の卒業試験日程表

調 来 助

表四 学部四年生の卒業試験日程表

原爆当時、学部四年生は卒業試験の真最中で、各グループは表四で明らかなるように、内科と外科は四週間づつ、その他の科には二週間づつ配属させられ、その間に試験が行なわれることになっていた。

試験は二十年四月九日から始まり、八月二十五日に終了する予定で進行し、原爆の落ちた八月九日は、太い線で囲まれた通りの配置となっていた。即ち角尾内科がA組、影浦内科がJ組、皮膚科がF組、小児科がB組、調外科がG組、古屋野外科がH組、精神科がC組、産婦人科がI組、眼科がE組、耳鼻科がD組だったのである。

各グループの者は、教授が外来に行けばそこでポリクリが行なわれ、廻診すれば入院患者について色々試問され、それらを総合して成績が決まるのである。その他の時間には本を読んだり、或いは受持医の指示によって、臨床検査などをやっていたようである。

八月九日に調外科に来ていたのはG組で、久野君は入院患者の血球計算をやっていて大怪我をしたが、調外科に来ていたのは、学部四年生ばかりでなく、木戸助教授（当時は既に医専教授になっていた）の受持っていた医専三年生も数名来ていて、廻診についていた。幸い地下室の患者を廻診中だったため、一人の犠牲者も出さずに助かった。調外科の看護婦が殆んど全員助かったのは、そのためである。

この表は学部四年の生存者である、谷本博玄君から提供していただいたもので、大へん懐かしく感じた。医専三年生も卒業試験中だったから、若しこのような日程表が残っておれば、死亡者も生存者も、全員の名前が判明して、まことに好都合だったと思うが、残念ながら残っていないようである。

		（）欠席者		・原爆死者	各グループの所属者名	グループ名	実習期間	角尾内科	影浦内科	皮膚科	小児科	調外科	古屋野外科	精神科	産婦人科	耳鼻科	
伊集院	石神	石川	安東	相羽	浅野	青木	A 9/V 21/IV	I	C	H	G	B	F	J	A	D	E
江上	梅原	宇本	今村	今西	今泉	岩切	B 23/IV 5/V	C	I	G	H	B	F	A	J	D	E
倪	久保	清崎	尾立	大津	大島	奥	C 7/V 19/V	H	G	B	F	J	A	D	E	I	C
杉原	(島田)	沢田	五島	小杉	小島	吉賀	D 21/V 2/VI	G	H	F	B	J	A	E	D	I	C
徳山	谷本	谷口	田中敏	田中疇	戴	蘇	E 4/VI 16/VI	B	F	J	A	D	E	I	C	H	G
原田	橋本	昇	西森	西	新名	中尾	F 18/VI 30/VI	F	B	A	J	D	E	C	I	H	G
宮崎	(松岡)	藤原	平井	久野	肥後	服巻	G 2/VI 14/VII	J	A	D	E	I	C	H	G	B	F
吉田	山田	屋久	安倉	山尾	森重	宮本	H 16/VI 28/VII	A	J	E	D	I	C	G	H	B	F
毛利	上原	松瀬	相川	脇川	林子	林申	I 30/VII 11/VIII	D	E	I	C	H	G	B	F	J	A
宮城	園田	永見	穂坂	土肥	日高	鬼塚	J 13/VIII 25/VIII	E	D	C	I	H	G	F	B	J	A

# 本誌一～四号の誤謬訂正

調 来 助

貴重な原爆被爆の記録に誤りがあつてはならないと、初号以来、相當慎重に編集して積りであるが、最近に至つて二、三の誤りのあることを発見した。誤りと解った以上、これを訂正するのは編者の義務と思うので、茲に一括して訂正することとした。

## 一、原爆破裂の際、付属医専一年生が講義を受けていた講堂

本誌の初号を出版する際に詳しく調査したが、医専一年は解剖学の講義中とのみ聞いていたので、口絵の旧長崎医大基礎教室の配置図でも、そのように記しておいたが、一年生は二百人の多数にのぼつたため、名前の五十音順によつて二つの小隊に分けられ、前半の第一小隊が解剖学講義中、後半の第二小隊は生化学の講義中だったとのことである。これを証言する生残り学生もいるので、間違いのないところである。

衛生学講堂で細菌学の講義待機中だったとのこと、それに間違はないようである。

## 二、原爆犠牲学徒と推定されていた二人の生存者

私が初めて原爆死亡学生を調査した際、基礎資料となつたのは、昭和三十年に大学から発行された「追憶」であった。その中から次の二人の生存者が発見されたのである。まことに申証ないことと思つてゐる。

(一) 学部二年生の杉原弘人君（「忘れな草」では杉原弘文となつてゐるが、それは誤り）

杉原君は、「追憶」では二年生の行方不明者として、何振欽君と一緒に書かれてゐる。その他行方不明者は、学部四年に二人、学部一年に十七人あげられているが、二年生の何君も、又他の十九人もすべて死亡していることが判明したので、杉原君も多分そうだろうという安易な判断から、一応は原爆碑建設委員会にも詢つたが、遂に死

亡者の中に入れ、銅板にもその名を刻んでしまつた。  
その後、昭和四十六、七年頃、京都市在住の鶴川親正君（当時学部三年生）から、川野正七君（当時学部三年生）を通して誤りであることを指摘され、私は少なからず驚いた。

然し急に訂正も出来ないので、確証を得てからと思つてゐるうちに、緊急な用事のために延び延びとなり、とうとう今日に至つてしまつた。

本誌の最終編を出版するに當り、この際どうしても誤りを訂正しておかねばと思ひ、鶴川君に杉原君のお住所を教えて頂き、直接お手紙を差上げて、お詫びかたがた、終戦後の御動静を通知していただいた。

それによると、杉原君は昭和二十年四月以来、徵集延期が出来なくなつたために、医大二年生の時（昭和十九年十月）に召集されて戦地（満洲）に赴き、シベリア抑留二年後の昭和二十二年十二月に復員、鶴川君から復学を勧められ、一応は復学したが、勉学の意欲を失い、岡山・京都などの高校で生物学を教え、その間に京都府立医大の医動物学教室で、三年間寄生虫の研究を行つて学位を得られたそうで、三十一年四月からは関西大学助教授、四十二年四月からは、同大学に新設された労働衛生学の教授として、元氣に勤務中のことである。早速銅板も訂正しなければならないと思つてゐる。

## (二) 医専一年生の西村裕君

西村君は昭和二十年七月、瓊浦中学から医専一年に入学され、同年八月九日の原爆に遭遇されたのである。「追憶」には明らかに死亡者として記載されているので、私は疑う余地もないものとして、最初から犠牲者として取扱い、銅板にもその名を刻んだのである。

ところがその後、遺族からは何の連絡もないで困つていたところ、同級生の小鉢祐則君（瓊浦中学出身、生存）から、西村君が生存中であることを指摘され、現住所まで教えていただきだいた。

早速、御本人に照会状を差上げ、それを確認することが出来たので、これも銅板の

名前を消して、訂正しなければならないと考えている。

### 三、野村仲徳君について

「忘れな草」第一号の巻末名簿で、医専仮卒業の欄に、野村仲徳の名が記載されている。この人は台湾の人で、官報（昭和十七年五月）の入学者欄には劉有德と書かれており、恐らく入学後に日本人名に改名されたものであろう。それにしても「有徳」が「仲徳」となった点については、全く理由が分らない。「追憶」でも「仲徳」となっているから、多分それをそのまま踏襲したのだろう。台湾の人に聞くと、「有徳」に間違いなそうだから、「仲徳」を誤りと認めたいたい。

次に「忘れな草」第三号と四号では副手の欄に書かれているが、仮卒業の林政吉君と同級であるから、「追憶」に副手と書かれているのが、誤りを生じた原因と思う。今度は又元に戻して仮卒業の欄に入れることとした。

### 四、昭和四十六年以後に発見された原爆犠牲学生

これは誤謬とは云えないが、昭和四十六年（「忘れな草」第四号）以後に発見された犠牲者が五名ある。

#### (一) 角尾内科副手 周积新君

黄遇伝君と同じく、昭和十八年の付属医専卒業。角尾内科教室から済生会病院に派遣されていて死亡された由。「追憶」に記載がないので名簿には入れてなかつたが、林忠実君から申請があつたので、入れることにした。

#### (二) 医専三年生 范 某君

范君の名は「追憶」にもなく、長崎医専台湾同学会からも通知がなかつたので、これまで「忘れな草」の名簿にも記載されていなかつたが、この度、北郷武照の手記の中に初めてその名が現われたので（本号一三〇頁参照）、同君に聞くと、「范君は私と同じグループで、当時高原繁巳という日本名を名乗つており、同級の李集鍾君と二人が台湾の人であつた」とのことである。

范君が高原君と同一人であれば、新しく発見された犠牲者でなくなる訳であるが、

そうなると、台湾同学会から通知のあつた謝遜英君の出所が不明となる。

唯今、台湾人犠牲者を調べて頂いた林忠実君に、再調査を依頼しているので、近く真相が判明することと思うが、それまでは范君を新発見者として、増加人数の中に加えておくこととする。

#### (三) 医専二年生 小島惇一君

昨年、母上の小島翁様から申出があり、文部省と相談した結果、追加した者である。昭和二十三年の死亡であったが、原爆症という死亡診断書が添えてあつたので、文部省も許可したものと考えられる。

#### (四) 医専一年生 下垣弘知君

昨年、兄上の下垣義光氏から申請があり、戸籍謄本、死亡診断の写しを審査した結果、長崎原爆で死亡したことが解り、犠牲者中に入れることにした。

#### (五) 医専一年生 吉野 克君

吉野君の名は、二十年三月の長崎新聞には記載されていたが、「追憶」にないので、生存しているものと思っていたが、同級生の小鉢祐則君から犠牲者であることを聞き、早速年金請求の手続きをされるよう連絡して頂いたところが、驚いたことには、数年前から既に年金を戴いておられるとのことであった。どのような手続きをされたのか、誰がそれを証明したのか、我々にはとんと合点がゆかない。但し今度から名簿にはお名前を記載することにした。

## 全編を通じての総括

調  
來  
助

多くの人々に愛読していただいた「忘れな草」も、ここに第五集の最終編を迎える。多残惜しい氣もするが、どうやら曲りなりにも、所期の目的をほぼ達し得たようにな考

えられる。ホッとした気持の今日この頃である。

顧みれば昭和四十一年、私が旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会の会長に推挙され、先ず考えたのは、原爆で一瞬のうちに愛し子を喪われた、年老いた遺族の方々への援護のことであった。

そのためには、昭和三十七年から続けていた請願運動を、どうしても実らせねばならないと、猛暑・酷寒をも厭わず、あらゆる手段を講じたが、長い間悉く徒労に帰して、悲憤やる方ない思いをさせられた。

そのころ脳裏に浮んだのが、学内犠牲者の名碑作製のことであった。靖国神社への合祀もさることながら、永久に朽ちることのない名碑を、学内のどこかに安置して、身近かにお参り出来るようにしておくことも、遺族の方々にとつては喜ばしいことではないか、と考えたからである。

初め私は、九百名に近い故人の名を、硬い石に刻ませようとを考えたが、大きな一枚板の石がなく、且つ完成までに長い時日を要するので、石工の奨めに従い、銅板に切替えて、三ヵ月後につれが完成した。犠牲者の名前は、僭越ながら私が書き、彫刻は謹厳なクリスチャンである松岡国一氏にお願いした。製作の費用は、遺族、同窓生、その他有志の方々に御寄付を仰ぎ、これに当ることとしたが、意外に多額の金が集つたので、その剩余金で思いついたのが、原爆思い出の手記集「忘れな草」の出版であつた。

遺族の方々や、原爆当時の在学生達には、生々しい思い出が心中に鬱勃としていたためか、書けども書けども尽きぬ有様で、とうとう第五集までこれを続けることが出来た。

その使命は大きく分けて、次の二項にあつたと思う。

### 一、遺族会々員との連絡、並びに事業報告

### (一) 遺族会の事業の主なものは、「遺族援護に対する請願運動」で、その経過を逐

一会員の方々に報告するのが、最も大きな使命であったが、そのためには、長崎在住

の役員達がどのような事をしてこれに当つたか、陳情費の寄付金募集、陳情の実状報告、見舞金下付の際の手続き連絡、等々、種々重要な事項があり、そのほかにも、慰靈祭への案内、情況報告、前記の銅板名碑作製の際の連絡、原爆思い出の手記の原稿お願いなど、色々な仕事があつて、この「忘れな草」は、それらの仕事を充分、果して來たように思う。

考えてみると、全国各地に御在住の遺族の方々と、長崎の本部役員達との連絡の窓口は、本誌を置いて他になかったのであるから、よくやつてくれた、と感謝の外はない。換言すれば、本誌のお蔭で多年の念願であった「遺族援護法適用」も、達成出来たと云えそうである（本誌の「社会労働委員会議録」参照、一七七頁）。そう考えると、尚更に本誌の存在が有意義であつた、と思われる所以である。

(二) 原子爆弾の災害については、文部省、厚生省、原爆後障害研究会、ABC Cなどから、殆んど余すところなく報道されているが、本誌に集められた手記は、すべてが偽りのない真実を物語るものばかりで、原爆資料としては、大きく評価されてよい貴重なものと思う。私が遺族の方々から思い出の手記を集め、当時の在学生の方々に被爆体験記をお願いしたのも、一つはその意図があつたからである。

本誌全編の手記は、遺族四四七人の方々から寄せられた七五一文と、被爆生存者九二人の方々の体験記一一四文とから成っている。これだけでは決して完璧とは云えないかも知れないが、学内の被害状況は充分描き尽されていると思う。

かくして「忘れな草」の出版は今後見られないであろうが、私は体力の続くかぎり、原爆犠牲学徒遺族会々長として、御遺族との連絡だけは、とり続けて行きたいと考えている。



被爆生存学徒の手記



# 一、卒業生の手記

## 長崎の空襲と原爆遭難

福岡市住吉新築島六〇四  
昭和十六年長崎医大卒業

### 草場正蔵

#### 長崎の空襲

これは、昭和二十年に起つた、身辺の出来事の記録である。

日本はもとより、世界中の人々にとっても、この年は大変な時代であつたと思われるが、その中でも、広島や長崎の人々には、忘れられない史上最悪の悲惨なものとなり、凄惨な傷跡を残されてしまった。

正直な記録を——と思って書き綴つてきた当時の原稿を、惜しいことに紛失してしまつたのは、返す返すも残念なことである。取り返しのつかないことになつたが、止むを得ないので、数年後になって改めて書き始めた。今度は余りにも時日が経ち過ぎていることも手伝つて、纏まつたものが書けず、殆んど断片的なことに終つてゐる。従つて氣乗りがしないまま、止絶えがちになつた。そして、それもまた行方不明となり、いつの間にか二十有余年の歳月が流れていった。

ところが、其の後になつて不図したことから、二つの原稿が相次いで見つかったので、読み返してみると、當時が懐ばれて、このまま葬つてしまうのは誠に惜しい気がして來た。今更の感もあるが、勇を鼓して纏めてみると、した。

この記録を認めながら、私はどれほどの涙を流したか測り知れない。もとより文才がなく、表現力に乏しいために意を尽し得ないが、私自身にとっては、當時のことが未だに、ありありと眼に浮んで再現されてくる。そしてその時の雰囲気の虜になつて、推敲の度毎に止めどもなく溢れ出る涙が、段々に大粒となり、いつしか嗚咽に変

つてくるのをどうすることも出来ない。それはどういう訳か、私にもはつきりとは判断の出来ない複雑な気持である。

この記録には私だけでなく、多くの友人や知己の消息が記載されているが、出来るだけ正鵠を期するために、眞面目にありのままを書き連ねた積りである。若し御迷惑を及ぼすような処があつたら、それは私の不徳の致すところと、あしからず御有恩のほどお願い申し上げたい。

長崎市の上空にも、追々敵機が出没するようになり、昭和二十年四月二十六日に、初めて空襲を受けた。

この日は長崎駅と大波止が爆撃され、沢山な負傷者が大学病院に運び込まれたが、その中には膨君の弟も混つてゐることであった。長崎としては最初の経験だったので、大学病院も大騒ぎである。外科だけでは人手が足りないというので、私たち婦人科からも応援に行くことになった。すぐに手術に取りかかるように、婦人科で手洗いを済ませ、準備を整えて外科の病棟へ向つた。私が軍医として野戦から帰つて間もないというので、真っ先に押し立てられ、婦人科の他の先生方は皆警ごみしている。白い手術衣姿に、念仏をする時のように両手を胸の前で揃え、三々五々中央廊下を歩いて行つたが、異様な有様に、通行人達は目を瞠つて立ち止つていた。

東京の大学に在学中の膨君の弟は、兄さんに会うために偶々長崎にやつて来て、この日長崎駅で遭難し、大腿部切断という重傷を負つたのである。ほんとに氣の毒なことがあつた。余りにも不運なアクシデントである。

このように長崎も、一度は空襲を受けて相当な被害者を出したが、何とはなしにまだ実感が湧かないようであつた。というのも、それからは敵機も余り飛んで来なかつたからであろう。しかし七月に入った頃だつたらうか、上空高く南西から北東の方へと、敵機の編隊が通過するようになった。大村の航空隊へ向うのとの噂である。それにしても、これだけの編隊がいつも決つたコースを通るが、長崎は警報だけで、有

難いことに常に肩すかしを喰つて、毎日無事に暮れていった。いつも大村の空襲だつたらしい。

「長崎は占領後公園にするから、爆撃はしない」と豪語したビラが、敵の飛行機から撒かれているということを、医局で誰かが云い出した。日本を占領した暁には、長崎や雲仙は国際公園にする計画で、無傷にしておくと云うのであらうか。だが敵の編隊が威風堂々と長崎の上空を通過するのは、全く薄意味の悪いものであつた。

八月に入ると、いきなり空襲が始まり、今度はわが身に振りかかってきた。八月一日の空襲がそれである。B29によつて大学及びその周辺に、集中的に爆弾の雨が落された。

大学病院はいくつかの直撃弾に見舞われ、婦人科も別館がその犠牲になつた。爆弾は丁度教授室に見事に命中して、隣の教授研究室に燃え移り、更に火は、その隣室の図書室を延焼したのである。直ちに消防活動が開始された。中央廊下では、学生や看護婦によつてバケツリレーが始まり、消防班の職員により消防ホースが通り、一方では患者の避難誘導で混雑していた。勇敢な学生が樓の上に攀じ登り、急造の鐘に仕立てた石油缶らしいものを乱打して、敵機襲来を知らせる。「待避!」「敵機襲来!」。こんな怒号が乱れ飛ぶと、その都度様々などよめきの中に、人の動きがはげしくなる。中央廊下から鉄筋の建物の中へ、人々は吸い込まれてゆく。患者、看護婦、学生といった具合に待避させ、あらかた避難の状況を見届けて、いざわが身を隠くそろうという段になると、どの室もどの室も人でいっぱいで、逃げ遅れた者は廊下にまでみ出し、足の踏み場もない。そうかといって愚図愚図はしておれない。咄嗟に私は検診台の下にもぐり込み、恰かも稻妻が空に光り、雷鳴が聞え始めた瞬間、子供達が眼を閉じ、両手で耳を押えて小さく蹲まるように、じっと躊躇しながら敵機の去るのを待つた。その間、何回となく耳をつんざく程の金属音をうならせて、熱拗に私達の頭上に襲いかかって来る。機銃掃射である。このような惨めな恰好で躊躇っていると、情ないこと此の上なしで、今までになく敵機が憎らしく思えてならない。またそれにも増して、云いようのない不安が募つてきた。

この日の空襲で、鉄道は不通になつてしまつた。帰途、浦上駅まで来てこのことを知つたので、長与まで帰るには、線路伝いに歩いて帰るほか術がなかつたのである。

丁度退勤時刻とみえて、三菱の工員をはじめ、沢山の人々の家路を急ぐ姿が、列をなしていた。滑石から通つておられた外科の調教授も、当時誰もが装つていた戦斗帽に巻脚紺姿で、黙々と歩いておられた。暫らく一緒だったが、道ノ尾駅で別れてからは、また一人ぼっちになつて、私も黙々と歩き続けた。

夏の夕陽を背に受けて、涯でしなく続く線路を、汗にまみれながら歩いていると、戦地の広野を北から南へと、何カ月もの間歩き続けた戦場での行軍を想い出しが、その頃は常に部下がついていたので、今よりは余程心強いものがあつたように思われる。

屋間の混乱は全く嘘であつたかのように、今はもう鎮まり返つて、夏草だけが生い茂つた線路であった。

長与に着いてみると、大学が爆撃されて大変だつたというニュースが、既に伝わつていて、近所の人達がいかに心配しておられたかということが、身に沁みて有難く感じられたことであつた。

鉄道はすぐに復旧し、翌朝の出勤時には開通していた。この頃から毎朝のように出勤時刻ごろに警報が発せられるのが、通例のようになつてしまつた。

それ以来急に緊張がたまつて、警戒警報が発令されると、職場を離れて待避するようになつた。弁当をぶらさげて、二木君と二人で裏山の穴弘法へよく行つた。時には丘の上の外人墓地の辺りをさまよつたものである。二木君は戦斗帽をあみだに冠り、眞面目に巻脚紺を卷いていた。當時配給されていたバラの煙草を、コンサイス型の辞書の紙で無器用に巻いて吸つたりするのが、このつれづれな間の時間つぶしでもあつた。何處で仕入れて来たのか、短いキセルの先に手製の紙巻煙草を挿して、二木君が吸つている姿を想い出すと、その恰好がいかにも滑稽で、今でも吹き出したくなる。然しこの頃はまだ呑氣でよかったと思う。懐かしい想い出の一コマである。

婦人科に落ちた直撃弾は、丁度教授の机のド真ん中を突き抜けていたので、私は二木君に、「プロフェッサーは危いぞ。離れておれよ」と、冗談を云つたりしていた。

その後医局で、「口今零時五分前！ 近日中に爆撃がある。早く退避せよ」という

意味のピラが、敵機から浦上<sup>うらかみ</sup>一帯に撒かれ、それを刑務所付近で誰かが拾つたという話を聞かされた。若し憲兵にこんなことを察知されたら、大変なことになるというので、自然と皆は遠慮がちな言動を強いたれていた。然し医局内も、次第に騒然とした空気に包まれ始めたようである。

大学の空襲以来、入院患者は殆んど退院するようになり、外来患者も日を逐つて少なく疎らになつていった。私達は診療を終わると、火災で燃え残つた図書を、三〇メートルほど離れた医局の隣の天秤室に運んで、取敢えず積み重ねておいた。

当時は内藤先生が病院長の職に就いておられた。八月一日には大学病院が攻撃目標になつたかのように、集中的に爆撃を喰つたので、大学としても、慌てて対策を樹てねばならなかつたのだろう、各科病棟の屋上には、急遽大きな赤十字の標識が、屋上いっぱいに次々に塗られていった。八月七日、婦人科の屋上で視察中の先生が、事務長と何事が協議中の様子であつたが、そこへ私が呼び出されて意見を求められた。この日私は初めて屋上にあがり、塗り終えたばかりの赤十字の標識を、この眼でしかと眺めた。まだ数人の作業員が屋上の一隅で、ベンキの缶をぶら下げながら、後始末をして帰りかけている様子であった。ここは病院だから爆撃はしないで欲しいと、敵機に手を合わせて抨むかのようにも見えるこの俄か標識に、些か腹立しさを覚えた。「もう今更慌ててこんな標識を描いても駄目ですよ。氣休めにしかなりません。」「そんならどうしたらよいか。」との質問に、「少々手遅れですが、疎開するほかないでしょ」と答えると、「では何処へ？」

ただできえ神経質な顔に、更に神経質に<sup>まばた</sup>しぬながら、詰め寄つて来られた。どう

して私如きを態々呼んで相談されるのか、しかも真剣な表情で私の意見を求められるのか、私には皆目判らなかつた。ただ私が野戦帰りの医局員といふところから、過大評価されているのではないか、と一瞬ぎくりとした。重い責任を負わされたようで、

ちょっぴり恐ろしくもなつてきただが、最早ひきさがる訳にもゆかなくなつてしまつた。

ので、思いきり意見を述べることにした。

「佐賀県の鹿島が一番よいと思います。鹿島には中学校、女学校、実業学校と三つの中等学校がかたまつてあるので、充分収容出来るのではないでしょうか。それに環境のいい城下町で、地形、地の利の点でも、申し分がないと思います。物資にも恵まれていますし、あらゆる点で鹿島がよいと思います。でも大急ぎでやらないと間に合わないし、手遅れになつてはどうしようもありません。」

当時はまだ若かつたので、大胆にもズバリズバリと答えたのだろう。常々そんなことを考えていた訳でもなかつたが、咄嗟の質問にも拘らず、明快な言葉が口をついて出たものだと、われながら感心した。先生の表情にも幾分安堵の色が見えてきて、時折晴れやかな微笑さえ窺われた。鹿島は県外のため佐賀県とも交渉せねばならないから、学長の帰島を待つて相談してみよう、ということになった。<sup>（つね）</sup>角尾学長はそのころ学長会議で上京中だったのである。

翌八日は大詔奉戴日で、朝大学のグラウンドに皆集つた。医局の人達も行つたが、私は直面だったので残念ながら参列出来ず、ひつそりとなつた医局で、一人ぼっちで留守番をしていた。三十分もすると朝礼が終つたらしく、お喋りしながらガヤガヤと先生達が医局に戻つて來た。二木君が真っ先に駆けよつて來て、「広島に新型爆弾が落ちたそうだよ、六日に。目茶目茶だそうだ。」というニュースを、逸早く私に知らせてくれた。

角尾先生は学長会議からの帰途、広島に爆弾が落ちたため帰任が遅れたが、やつと今朝の朝礼に間に合つて、その時に広島の話があつたとのことである。

「新型爆弾は、今までのより何十倍もの威力があるそうだ。大学なんか一边にふつ飛んでしまうぞ。」

「おい、おい、おどかすなよ。」

「本当に長崎に落されたら、どうするんかなあ——。」

こんなやりとりが医局員の間に交わされ、色々と議論が始まつて騒々しくなつた。然るに本当にその翌日、長崎が原爆に見舞われようとは、誰一人として予想し得なか

つたのである。

太陽がギラギラと焼きつくような、炎天続きの暑い天候であつたが、この日も昼前には又しても警報が出て、二木君と二人で例の外人墓地に待避した。空からの厳しい空襲とは対照的に、二木君と待避していることは、何となるんばかりとして愛嬌のある風景であった。

### 原 爆 遭 難

八月九日、朝しばらくは空襲警報が出ていたようだが、間もなく解除となつて診療に従事した。旧患の外来は菊地君と私で受持つていたが、八月一日の空襲以来、この頃では大学を訪れる患者は極端に少くなつていて、いつものように朝の診療を始め、私は早く終つたが、菊地君のテーブルには、未だ何人かの患者が順番を待つてゐるようであつた。それで私についていた二人の看護婦を、彼の診療の応援に残して、私は旧患の外来診察室を出て行つた。

先日の空襲で焼け残つた図書を、医局の隣にある天秤室に取敢えず収容したのは、それから数日後であつたが、それを采配したのは私らしかつた。

この日内藤先生は、これらの図書を病院新館の一室に整理するように指示されたので、手のすいた先生方や看護婦達は、その指示に従つて行動していた。そのようなことは無駄であると私は懸命に力説したが、どうしても先生には聞き入れられなかつた。それで私は天秤室からの発送係におさまつた。天秤室の入口にて、患者輸送車の上に燃え残つた書籍を數十冊づつ積みあげると、看護婦数人が長い廊下伝いに車を押したり引いたりして、二〇〇メートルほど先の新館の一室へ運んだ。その室では二木君等が整頓してくれた。

患者輸送車に私が洋書を並べていると、内藤先生が来られて、輸送車の向う側に立ち止まられた。「この本も助かつてよかったね」と、如何にも嬉しそうに、水浸になつた黒焦げの本に手を触れながら、あの蒼白い顔に微笑みを隠しきれないで喜ばれた。如何にも学者らしく、図書への執着を断ちきれない様子が窺えたのは、非常に印

象的で、終生忘れないシーンであった。

この時である。それこそ運命の一瞬であつた。先生の最後の言葉を聞き終つたその瞬間、頭上に突然物凄い爆音が起つた。耳をつんざかんばかりのその爆音は、猛然と吾々に向つて突つ込んで来るかのようと思われた。

「これはいけない。万事休す！」次の瞬間私は、「もう駄目だ」と直感した。そしてその場で意識を失つて倒れてしまつた。だが反射的に全力を振り絞り、無我夢中で逃げたらしい。まさに動物的本能から出た行動に違ひなかつた。

先ず中央廊下の方へ走つていると、丁度そこに二階から二、三人の看護婦が階段を駆け降りて來た。すると受付にいた別の看護婦が、「先生！ そこへは行けません。あっちへ戻りましょう」と云うので、「それではこっちへ皆ついて来い」という訳で、もと通つた廊下を反対の方向へ引返した。今まで働いていた天秤室の前を通り抜けようとする時、誰か助けを求めて通路でもがいているのを見つけて、手を引張つて起そうとしたがどうにもならず、余り長くなつては自分も逃げ遅れてしまうので、仕方なくそのまま振り切つて私の後を追つて來た、と云つてゐた。

後日、そこの廊下の壁に手の跡形がついていたと証言する者もあり、それが確かに内藤先生であったことは、疑う余地はない。當時私は無論、このことは全く気付かなかつた。それどころか、あの瞬間からすっかり意識をなくしてゐたので、看護婦が云つた言葉も記憶にない。然しながら不思議なことに、行動だけは間違わずに正氣の沙汰であつたらしい。

さて、私達は廊下から外に出て、建物の南側を抜けようとしたが、どうしても連れないので、今度は北側を廻つて、手術場脇の防空壕の入口まで辿り着いた。そこには五、六人の看護婦達がいたが、半狂乱の姿で右往左往しているようであつた。その中の一人が私の姿を見ると、いきなり上衣を脱がせようとするので、何をするかと云つて少々暴れたような記憶がある。後になつて静かに考えてみると、当時着ていた白い診察衣が、敵機の目標になり易いので、それを脱がせようとしたのに、私は普通の背広の上衣と感違ひして、暴れたらしい。

ここからどうやつて病院の構内を抜け出したか、全く見当がつかないが、無我夢中

で三人の看護婦と一緒に、山王神社下の山路を辿り、諏訪神社の方角へ急いでいた模様である。一キロ近く歩いた時だつたろうか、ほつと気がついてみると、樹々は将棋倒しに根こそぎ倒れ、その一本路も樹々の枝葉で覆われて、通り抜けられそうにもない。路傍の樹々の梢を通して、一段低い遙か向う側に広がる市街地を見ると、到る処から火災を起した煙が見える。眼の前には看護婦達がまるで幽霊のように髪を乱し、それが顔までも隠れるほどに垂れ下り、額から滴る真赤な血が、頬を伝つて白衣を染めている。このように痛々しい姿の看護婦達が、群がつて見える。まさに地獄絵図さながらの凄惨な光景である。

B29の飛来におののきつつ、倒れた樹木を跨いだり、或いは廻り路したりして、彼女達の肩を借りながらトボトボと歩く。時おり敵機の爆音がして、低空に機影が見えてくる。「先生！ 敵機です！ あの樹の下に隠れましょう」と、彼女達は引張つて行こうとするが、私は手足から、肩、腰、いや全身到るところが痛んで、彼女達に体を支えられながら、そろそろ歩くのが精一杯だった。自ら進んで敵機から身を隠し、危難を避けようという氣力は、微塵も残っていなかつたので、「私はもうどうでもいいから、君達だけ早く避難しろ！ 私にかまつて愚図愚図していると、逃げ遅れるぞ！」と云つて彼女の肩から腕を離そうとしたが、「先生！ そう仰言つても——」と、強引に樹陰にしゃがまされてしまった。腰をかがめるのは痛くて実に大儀だったが、立ち上るのは、それにも増して尚更苦痛であつた。

こんなことを何回となく繰返していたように思うが、その頃、古屋野教授が二、三人の男と一緒に、後から追いついて来られた。額の傷に白いハンカチで鉢巻をしておられた先生の姿は、印象的で、私の眼底にしつかりと焼き付けられている。看護婦達ともタモタして歩いている私を見詰めながら、「大丈夫か、伊良林小学校が救護所になつてゐるから、もう少しだ。頑張るんだよ」と声をかけられた。

「先生！ もう歩けません。担架を頼みます。」

「じゃ——先に行って迎えを寄こそう。しつかりしとるんだよ。」

そう云いながら、モタモタしている私達がもどかしい様子で、先を急がれた。

私は身体がこわ張つて、力が尽きてしまつたようである。看護婦達に縋りながら、黙々として脚を交わすばかりで、口を開ける勇気さえもなくなつてゐた。こんな状態が二、三時間も続いただらうか、やつとの思いで諏訪神社下の市民防空壕にたどりつき、精魂も尽き果てて、壕内に吸い込まれてしまつた。

ここで暫らく待避したので、幾分元氣を取り戻したらしく、それからは追い立てられるように山を下つたらしが、どのようにして伊良林まで歩いて行つたのか、全く記憶がない。目指す救護所に到着したのは、日没も間近い頃であったようだ。ここは小学校の講堂か雨天体操場らしい建物で、かなり広々とした板の間には、夥しい負傷者が寝かされて、満員の状態になつていた。そして多くの人が席を冠つてゐるようでもあつた。私は入口に近いところで、そのまま崩れるように寝ころんてしまつた。

「担架を迎えにやつたのに、何處で行き違いになつたのかな。でもよく頑張つて來たね。」と云いながら、古屋野先生は私の傷の手当てをして下さつた。そして先生は、お腹も空いただらうと炊き出しの大きな握り飯を渡された。でもどうしたのか、口が精々一センチ位しか開かず、いくら空腹でも、握り飯など到底食べられる筈がなかつた。

一緒にここまでついて来た看護婦達は、それぞれ彼女等の家にかえしたが、松尾看護婦だけは、自宅が余りにも遠方だったので、そのまま帰らずに付添つてくれた。ここから一キロほど離れた中川町に、知り合いの家があつて、予てから妻の母が行き来していたことを想い出した。両親が健在ならば、きっとこの救護所を訪ねて貰えると確信して待つた。然し一日待つてもその気配がなく、淡い望みは消え去つてしまつた。それかと云つて、このまま默然と救護所で待つてゐる氣にもなれないでの、うろ覚えに聞いていた道順を考えながら、貴重な持駒の松屋看護婦を使いに出すことにして、彼女は素直に、勇敢に出て行つてくれた。あの家を探し当たさえすれば、私がした。彼女は素直に、勇敢に出て行つてくれた。あの家を探し当たさえすれば、私が

伊良林校に救護されていることが判るので、その効果は大いに期待出来ると考えた。然し彼女は中々帰つて来なかつた。二時間経つても、三時間経つても——。段々不安

が募つて来た。あちこち家が倒れているかも知れないし、また道だつて果して通れるかどうか判らないのと、あんな小娘を唯一一人で使いに出したことが後悔された。薄

氣味悪い家並だろうに、その上夕闇も迫つて来る。むごいことをしてしまつた。無事に帰つて来てくれたは、少なからず失望させられたものの、唯一の頼みである彼女

が、無事に戻つてくれたのは、確かに嬉しかつた。

彼女の報告によると、男の人が一人留守番していて、伝えておく、と唯一言であつたといふのである。その男の人と、いうのが、どうしても合点がゆかなかつた。色々と彼女に訊ねてみたが、全く心当りのない人のようである。それにしても、ただ「伝えおく」とは、何と呑氣で不親切なことだらうと腹が立つた。仕方がないので、彼女の肩に組つても、私自身で出向く外はないと考えたが、もう真暗でどうすることも出来ない。その夜はこのままで過すことにした。

傷の痛み具合はどうだつたか、空腹感はどうのようであったか、救護所の様子や、寝ながら何を考えていたのかなど、そんなことは一切何の記憶も残つていない。そういう表現をするよりも、全く意識がなかつたと思われるような、空白状態が続いていたという方が適切であろう。

さて、翌十日になつても、矢張り誰も迎えには来なかつた。午後になると、私は意を決して彼女と救護所を脱出した。その途中どうやつて歩いたのか、まして通つた道の様子なども全く覚えていない。中川町の家に辿りついたのはよかつたが、玄関の脣の上にぱつたり倒れ、そのまま動けなくなつてしまつたらしい。しかしその時その家人は誰も居なかつたとみえ、近所に住む中年の婦人に色々と親切に介抱されて、牛乳や卵を飲ませて貰つたようである。微かな記憶ではあるが、この見も知らぬ女性の行為が嬉しくて、まるで天使のように思えた。

それから後になつて、やつと妻の母が荷物を探しにやつて來た。差し迫つて必要でもなかつたが、何となく落着かないような気がして訪ねたらしい。ところが玄関に誰

か寝ている、よく見ると私だつたのでびっくり仰天した、とは母の話。全く予期もしなかつたことだけに、驚きもし、また同時に安堵もしたことだろう。

何処から聞き出されたのか定かではないが、私がここに居るのを知つて、内藤教授夫人が訪ねて来られたとのことであつたが、私には全く記憶はなかつた。従つて周囲の人が、先生についてどのような情報を提供したか、かいもく想像がつかないままに終つてゐる。

### 長崎脱出

「広島に落されたような新型爆弾が、長崎にも落されて、大変なことになつた」という報道は、長与にも直ちに拡がり、長崎での負傷者が、夕刻には長与小学校の救護所に続々と運ばれて來たとのことである。また三々五々、水を飲ませてくれとか、食事をさせて欲しいと云つて、立寄るものもいたらしく、大学の学生には幾回ともなく私の安否を尋ねたが、誰も知つてゐる者はなかつたそうである。

当時門司鉄道局の長崎管理部が、段々と激烈になる戦禍を避ける意味で、こんな辺鄙な長与に疎開していた。その管理部に、妻の実家の近くに曾て住んでいて、大変懇意にしてゐる諫山という人がいたそうで、妻はこの方の好意で、その晩は管理部の防空壕に待避させて貰い、一夜を明したという。

私が行方不明というので、この諫山さんが鉄道電話で白石駅長に伝言を頼んだらしく、父へはこの駅長から市内電話で私の遭難が報ぜられた。父はかねてから信仰深く、この報らせにも動ざすことなく、母や当時博多から疎開中の姉達を慰め励ましたがらも、居たたまれない氣持で、即刻長崎へ向うことになった。取敢えず生卵を後生大事に用意して、白石駅に駆けつけたが、発車間際だつたため駅長に制止された。運悪くこの列車が長崎行の最終列車だつたのである。

途方に暮れた父は、あせる心も手伝つて、翌朝発<sup>た</sup>よりは早く着けるだらうと、白石から肥前山口に出て、早岐廻りの夜行列車に乗り込んだらしい。乗替えの接続が悪いローカル線ではあり、並々ならぬ難儀を重ねてやつと長与に着いたのは、翌日の午

後であった。

父は私の寓居に一応落着いたものの、それから先は鉄道が不通になつていて、長崎市内への交通機関はすべて杜絶していた。止むなくその夜は長与で一泊し、翌朝妻を伴つて、山を越えての長崎入りを決行することになった。折よく長崎へ向う学生が連れになり、快く案内を引受けたので、心強く勇氣百倍したことである。その学生にどうして助かったのかと訊ねてみたら、「何となく気が進まず、どうしても学校へ行く気にならなかつたので、とうとう休んでしまつた」と、彼は素直に白状したそうで、ほんとに何が幸いするか知れたものではない。

大学病院で國らざも古屋野先生に出逢つたところ、開口一番、「私が救護所で確かに手当をしてやつたが、その時は元気だったのに、それから亡くなつたと聞きました。ほんとにお氣の毒です。詳しいことは伊良林に行かれたら判ると思いますが——」と仰言つたとか。そんな筈はない。必ず生きている。そう信じきつていた父は、妻を促して伊良林まで、足を延して直行することになった。

救護所では死亡者名簿が貼り出しており、その中に確かに私の名前が記されてあつたとのことである。父はどうしても承服出来ず、訝りながら遺体を確認するため席で覆われた死体を一体一体調べたが、それらしいものは見付からなかつた。確認出来なければ、信じようにも信じられないものである。思案の末、私の行きそうな知合いの所を妻に検討させ、若しやという一縷の望みを託して、それでは兎に角中川町まで行つてみようということになつた。最早わが身かまわぬ懸命な気持が、そうさせたのである。

中川町の家を訪ねて玄関の戸を開けると、すぐそこに倒れている紛れもない私の姿に、感激の対面があつたに違ひない。意外に元気な様子に歓喜し、疲労困憊も忘れて勇氣百倍、とりあえず私は奥の部屋に抱きかかるようにして移され、それから色々と看護して貰つたのだろうが、その夜は初めて皆と共に一夜を明かし、翌日鉄道の開通を待つて長崎を離ることになったのである。この間父は駅や市役所を往復し、被爆証明書を貰つて鉄道の乗車手続きをすませたらしい。地理不案内の上に、市内の交

通機関が全く杜絶した情況下で、何かと大変な苦勞があつたことと思う。

兎に角痛む身体をひきすり、息をはずませながら、足を運ぶより仕方がなかつた。父と妻の肩に縋りつつ、牛の歩みよりもろい足どりであった。どこかに柵架はないかと父は物色したらしいが、見つかる筈もなく、空には頻々として敵機が飛来している。どこいら辺だつか判らないが、空襲から逃れるために、街並の民家に逃げこんだ。武家屋敷風の構えで、土塀を通り抜けると、僅かばかりの前庭があり、玄関脇には物置があつた。人の気配もなく、到るところ蜘蛛の巣だらけで、荒れ果てていた。

物置にあつた古ぼけた荷車によりかかつて、暫しの間身体を休ませていたが、それから先はどうやって駅まで行つたか、どんな汽車にどのようにして乗り込んだか、駅のこととも車中の様子なども、全然私は知らない。

車中では、私が痛みを訴えて余りに苦しがるので、長与で一応下車し、ひとまず私の寓居に落着くことに、俄かに予定を変更したようである。頭、頬、それから右腕に、白い包帯が巻かれていて、身体を動かすことが大変大儀であった。寝返りも出来ず、ただ痛みに堪えているほか、どうしようもなかつた。若干の必要な荷物を取り纏めて、白石のわが家へ帰つたのは、その翌日の八月十三日であった。

曾ては歎呼の声に送られて賑々しく出征したり、軍服に身を包み威風堂々と通られた故郷の街並ではあつたが、今日の帰省は誠に恥かしく、包帯を巻き不自由な足どりで、敗残兵のような慘めな姿を衆目にさらすのが忍び難く、穴があつたら入りたい程の気持がした。真夏の昼さがりで、幸い人影も少なく、ひつそり鎮まりかえつていたのは、私にとつて何よりも憐せなことであった。

わが家に辿りつくと、涼しい場所を選んで、大広間の真中に寝かせられたようであるが、母との対面の記憶は全く残つていない。母は定めし毒んだろうと思うのに、私にその記憶が全くないのは、返すがえすも残念で寂しいことである。のみならず、どうしても割り切れない気持がしてならない。

首を動せば痛いし、口もまだ満足には開かず、話をすることがすら不自由だつたので、何回か附近の歯科医にも往診して貰つてはいたようである。

私の指示に従い、手持ちの薬や衛生材料で、妻が毎日傷の手当てをしてくれた。当然縫合せねばならなかつた左前額部の裂傷も、順調に癒え、右腕の火傷も綺麗に治つて、ケロイドの心配もなかつた。ただ小さなガラスの破片があちこちの皮下に残つていたが、その一つは右膝関節の上外側に触れていた。当時ズボンとズボン下を着ていたのに、どうして入つてきたのか、想像もつかなかつた。不思議なことであつた。

家へ帰つて数日過ぎた或る晩、私は大分気分がよかつたので、頭に包帯をしたまま入口に背を向けて、薄暗い茶の間に坐つていた。そして不自由ながらも両親と何事を話をしていると、表の入口の戸ががらりと開いた。次の瞬間一〇メートルも離れた後方から、嗚咽ともつかない慌てふためいた声が聞えてきた。私は首が廻らないので、上半身を揺るようにして声のする方を振り向いたが、駆けよってきて私の後姿を見るが早いか、ワッと泣き崩れてしまつた。私の無事を喜んでくれた中原の姉の姿である。このドラマチックな光景を、私はいつまでも忘れることが出来ない。

中原というのは、白石と博多のほぼ中程の駅であるが、ここにも長崎の被爆者達が連日ドンドン送り込まれていたそうで、駅から七、八分位の道路沿いの姉の家にも、

大学の婦人科の看護婦達が二、三人負傷して來たそうである。みんな無残な姿で胸をつかれたが、彼女達は私を知つてるので、色々と被爆時の話をしたらしい。私の安否については、恐らく駄目ではないだろうかと云つたそうで、姉は居ても立つてもおれない氣持に駆られ、取るものも取りあえず、兎に角白石の実家へやつて來たのだと云う。入口の戸を開けた途端、頭に包帯をした姿が目に付いて、云うに云えない氣持であつたらしい。その包帯の男が私であることを確かめると、一度にドッと押え切れぬ感情が爆発したのである。

それから又しても私は、当分の間全く記憶を喪失している。例の玉音放送のこと、終戦のことも全然記憶はない。後になつて終戦時の模様を知りたいと思い、再三新聞を探して見たが、どうしても見当らなかつた。だから未だに、終戦の頃の戦況や、当時の詳細な事情、混乱した世相など、分らないままになつてゐる。

このように、被爆後は殆んど意識がなかつたのか、それとも健忘症になつて記憶が

呼び戻せなかつたのか、どうも訳のわからない時期が多かつた。これがやつと正常に戻つたのは、八月の末頃であつたような気がする。

そのころ私は、二木君の安否が気になつたので、長与の寓居を引き払いに行つた機会に、彼の疎開先だった湯江の住居を訪ねてみた。すると数日前に小長井の弟さんの近くに引越して行つたことだったので、その家の道順などを聞き、そのまま真っすぐ小長井の方へ歩いて行つた。尋ね尋ねしながら行く埃っぽい田舎道の、何と遠いことだつたろう。

彼の住居は山沿いの古めかしい素朴な家で、こんな田舎でよくも恰好なのが見つかったものだと思った。彼は元気だつた。そして奥さんと一緒にだつた。「弟がこの奥で診療を始めているから、そちらへ行こう」というので、あがりもせずに直ぐに弟さんの家へ出掛けた。じめじめした山蔭の路を五〇〇メートル程歩いたら、地蔵尊の御堂のある家についた。七、八坪の板張りの建物で、何の変哲もない。恐らくこの地区的集会にでも使用していたものであろう。部屋の中央には、立派な歯科の治療台がどつしりと据えてあつた。

「ミサエの家も焼かれたので、どうしようもなく結婚してしまつたよ。」

ここで初めて彼の結婚を知つた。そう云えば戦争中に何回か、彼の自転車に乗せられて彼女の家に案内され、御馳走になつたことがあつた。また彼の弟の服業氏の結婚の時も、その奥さんの実家に招待されたことがあつた。

私は被爆の際に奥歯が二、三本折れたので、服業氏にここで診て貰つた。そして何回か治療に通つて、急場を凌ぐだけのことをやつて貰つた。中々器用で、親切な人らしく、而もこんな時にこんな場所で診療をしているので、付近から割合に患者が集つて来て、食料には不自由しなかつたらしい。「歯科医は儲かるね。我々は及びもつかないよ」と、二木君は云つていた。

ところで大学の婦人科医局には、そのまま当時の荷物が残つてゐるそうだから、一緒に行つてみないか、と二木君に誘われたので、翌日早速行くことを約束した。但し若し雨が降つたら、僕には傘がないから行かないよ、といかにも二木らしいユーモラ

スな言葉をつけ加えた。

### 大学病院へ単身で乗り込む

翌朝は約束の九時何分かの汽車に乗るために、長与駅のホームで彼を探したが、どの窓からも顔を出してはくれなかつた。天気は快晴だったので中止する訳はないし、私も折角行く積りで出て来たのだから、懸命に探すが矢張り見つからない。とうとう見つからないまま、ホームを離れかけた列車に飛び乗つた。車内でもあちこち探したが、遂に徒労に終り、やがて汽車は浦上駅に着いた。降車客の中にも彼を発見出来なかつたが、このまま引返すのも大人氣ないので、止むを得ず、単身大学へ行くことにした。

原爆被爆後、この日が初の長崎入りだったので、すべてが目新しいものであつた。そう云えはよいが、それとは裏腹に、殺風景に変り果てていて、実に情ない有様だった。浦上駅は急造のブラック建てで、片田舎の忙しい駅にも及ばない貧弱なものであり、あたりは瓦礫の山で、駅から大学までの道路も、藁や紙屑などの塵芥が散らかり、片側にはブラックの倉庫が立つていて、私には全くよそよそしく感じられた。そして道幅が意外に広く思え、人影はおろか、猫の子一匹通るものはなく、夏の陽射しの強い、白昼の不気味さを味わわされた。

病院の門を入つて玄関までの石畳の坂道には、どうしたことか馬が倒れていて、そのままの形で殆んど白骨となり、臭氣ファンパンとして、見るも無残な姿になつているのには驚いた。

玄関の前を通り抜けて、いつも出勤の時に通る土手沿いのコースを、産婦人科の方へ向つた。この道路は手入れの行き届いたものではなく、自然に大きく生長した雑木や灌木のある庭で、樹々の梢越しに街並が眼下に見えて、かねてから私の好きな静かな場所であった。だが、今日の雰囲気は全く違う。平和な眺めではなく、實に殺伐とした光景である。行方を閉ざしている樹の枝を押し分けたり、跨いだりして、漸く産婦人科の建物まで辿りついた。入口にはコンクリートや木のかけら、ガラスの破片等が堆

積して盛り上り、文字通りの瓦礫の山、それに頑丈な下駄箱が捩じ倒れていて動かない。足を踏み入れるのを少し躊躇したが、やつとの思いで身体一つ漸く通れるくらいの通路をつくつて、中へ這入つていった。

建物の内部はすごく目茶々々になつていて、私は勇を鼓して医局に入つた。室の中央には七、八センチ角もある頑強な脚の大きなテーブルが二つ据えてあつたが、影もないよう押し潰されて、矢張り瓦礫の山という形容がびつたりする程、雑多な破壊物が折り重なつていて、重い天井がすっかり落ちてしまつたためであろうか。この調子では、建物の中に居ては絶対に助かりっこないことが、充分領けた。然るに私はどうして逃げられたのであろうか。

壁際に並んでいた医局員の木造のボックスは、中途半端に捩じ倒されて、足の踏み場もない。当時の手廻り品が入つてゐる筈なので、その扉を開けようと努力したが、なかなかどうして動きそうもない。一種の執念で、やつとの思いで扉が半開き程度まではなると、無理にこじ開けた。背広の上衣や鞄は、すでに何者かによつて持ち去られたらしいが、鞄の中味と弁当箱だけが残されていた。がつかりしたが、もうどうにもならないので、残されていたものだけを持ち帰ることにした。

真夏の真つ暑間ではあるが、誰も居ない鎮まりかえつた廢墟に、ただ私だけ一人で居るのは、身の毛のよだつほど薄氣味が悪いので、落着いてなどおれたものではなかつた。私の遭難現場や、旧患の外来診療室にも行つてみたいと願つてはいたが、もうそれどころではない。どこに誰の屍体が転がつてゐるかも知れないと思うと、ぞーっと全身に鳥肌が立つて、私は早々にあわてて立ち去つてしまつた。こんな訳で細かい観察が出来ず、後になつてこの記録を綴る時、返すがえすも口惜しい想いをしているが、当時はそれどころではなかつたのである。ただ単身で踏み込んだ勇気には、我ながら感心させられている。

家に帰つて今日の模様を妻に語り、もう少しで私自身の遺品となるところだつた品物を開いて見た。弁当箱は軍隊時代の将校飯盒で、市販のものよりも持ち易くて恰好のものだつたから、當時も愛用していた。中を開いて見ると、例によつて裏漉した味

附けの馬鈴薯が一杯詰まつていて、原爆当時のことが偲ばれた。勿論中味は腐っていたが、弁当箱の内側までが腐食して、大きな凹凸が出来ていた。愛着の品物だけに、今後使うものになるかどうかと心配しながら、一応磨いてみた。なかなか綺麗にはならないが、何とか使用には耐えそうなので安心した。

それから間もなく、長与の寓居を引き払つて、白石へ引き揚げることになった。

九月に入つてからだと記憶しているが、小長井から二木君が訪ねて来るという通知を受取つた。思いがけない訪問者にはしやいだ気持になり、駆に彼を出迎えて、白石の家へ案内した。彼は頭の毛が薄くなるほど抜けてきたと心細そだつたが、なるほど一遍に十年以上も年令を加えたように、薄い頭髮になつていた。その外は異状がないらしく、極めて元氣そうで朗らかである。話題は矢張り原爆のことと、被爆当時の思い出については話が尽きず、驚いたり笑つたり繰返しで、時間がつぶれていった。殊にあの日いつものように警報中だつたら、外人墓地か穴弘法あたりで、二人共どこかへ吹つ飛んでいたるうなあーと、感慨深げに語り合つたものである。それから彼は、広々とした静かな白石の家を羨ましそうに見廻しながら、ここで開業したつて好いじやないか、と頻りに奨めたりした。

彼はまだ、終戦のため大学に残ることを諦めて、故郷の台湾へ引揚げることにしたと云う。台湾出身の人達はみんな一緒に集団で帰国する予定で、いずれ二、三週間後には、引揚船が出来ることになっているらしい。私は少なからずショックを受けた。彼は既にアルバイトを終り、学位論文をすつかり書き終えていたことは、私も予てから承知していたが、色々な事情から、まだ教授会の審査が遅れているようだつた。彼にとって学位が唯一最大の土産だった筈なので、このことが気懸りで後髪を引かれる思いであつただろう。主任の内藤教授が亡くなられたために、彼はこの学位論文のことで非常に苦労し、あちこち奔走していたが、皮膚科の北村包彦教授が暫定的に婦人科の主任を兼務されたので、北村先生にそのあとをお願いすることになった。そして私も呉々も頼むと云つて、頼りにしている様子であった。

一番私の気になつていたのは角尾学長の消息であつたが、不本意ながら摑めないま

まに一ヵ月余りを過した。自分は九死に一生を得て負傷の身を救出され、生家に帰つて療養することが出来て幸せだったが、そのために知りたいその後の情報も入らず、平穏に過ぎてしまった。その間、学長は負傷して裏山に寝ておられたとか、重傷を負つて篠島助教授らと何処かにおられたとか、極めて断片的したことしか耳に入らなかつた。然し最終的には、八月二十二日に遂に滑石の救護所で逝去されたという悲報に接し、云いようのない憤怒を覚え、失望を感じた。誠に惜しいことであった。混乱の時期とは云え、先生に申訳ない氣持で一杯である。角尾先生！ 静かに御冥福をお祈りするほか、私には何も出来ないことをお許し下さい。

#### 大学病院再開と犠牲のこと

原爆によつて受けた大学の災害は極めて甚大で、ただただ唖然たらざるを得なかつた。基礎の各教室は木造建築物で、爆心地からも近かつたため、すべてが灰燼に帰して、荒涼とした原子野に変り果ててしまつた。付属病院もただ外郭だけを残し、内部はすつから瓦礫に埋もれて荒廃し、どうにもならない程の決定的打撃を受けて廃墟と化したのである。

このようになんと壊滅的状態になつてゐたため、戦後の混乱期の中では再起不能といふ烙印を受け、あらぬ噂が流れ始めていた。然しそのうちに医大は、大村海軍病院長泰山弘道少将の好意によつて大村に移り、やがて長崎市内にも新興善小学校を借り上げて、この二カ所で被爆者その他の診療を行い、大村では学生の講義も始められた。然しその後大村海軍病院に仮寓していた医大は、GHQサムス大佐の命によつて、諫早の旧海軍回復病院への移転を余儀なくされ、医者も学生も看護婦も、筆舌に尽せない苦労を嘗めさせられた。諫早の病院は大学病院と云つても、勿論極めてお粗末な急場処理のもので、初めのうちは野戰病院にも及ばない内容のものに過ぎなかつた。医療器具その他の設備も、みな廢墟から掘り出して集めたもので、不満足ずくめのものばかりであつた。大学を潰さないためには、何とかして余命を繋いでおかねばならないということで、涙ぐましい努力が払われたのである。

生死の線を彷徨つてきた私は、この病院開設には何一つ奉仕することが出来なかつたが、漸く傷も癒え、元気をとり戻して、再びこの病院に復帰出来るようになつた。

本多君、二木君、伊藤君たちは、それぞれ一命をとりとめた生存組だつたので、既に新興善に姿を見せていた。

ある日、若い医局の先生が新患の予診をとつて、そのカルテを私のところに持つて来た。それに目を通してみると、カーテンの向うから患者の鳴咽の声が聞えて來た。カルテの不備な点をその先生に問うてみたが、どうもはつきりしない。そこで私が直接に会つて詳しく聞いてみたいと思い、担架の上で顔を埋めて泣いている患者に近づき、どうしたんですかと声をかけたら、暫らくして泣き止んでから、私の顔を不思議そうに眺めていたが、次の瞬間、両手でいきなり私の手を握りしめたかと思うと、大声をたてて「ワッ」と泣き出した。一体何事かと詫かりながら事の仔細を尋ねてみると、次のようなことが解つた。

その人は曾て私が長い間受持つていた子宮頸癌の患者で、随分面倒もみてやつたし、それだけに私を信頼していたらしいが、空襲が激しくなつて大学病院が爆撃されからでは、不本意ながら退院を余儀なくされ、自宅療養中のところ最近病勢が悪化し、新興善に大学病院が再開されたことを知り、私を頼つて入院を希望してやつて來たとのことである。ところが受付で私のことを尋ねたら、原爆で亡くなつたと聞かされ、衰弱しきつた患者にとつては、かなりのショックだつたらしい。すっかり落胆して途方にくれていた時に、当の私がひょっこり彼女の前に突つ立つて立つたので、夢かとばかり嬉し涙が出て、このように劇的な場面が展開されたという次第である。

戦後の長崎には住む家もなく、私は妻の親戚に寄寓していたから、週末には白石へ帰るのが常であった。或る日帰省の車中で、一年先輩の五島君に出会つた。彼は吃驚した表情で、車内の隅々まで聞える程の大声をあげ、「あんたは亡くなつたと聞いていたが、無事だったのか」と、あたり構わず話しかけてきた。この一瞬、乗客の視線はさつと私達に集つて、俄かに英雄にでもなつたような錯覚を起した。私は求められるままに、遭難当時の概略をお話したが、内藤先生の有名な信奉者であつた彼は、

先生の不慮の死を逸早く知つて、一緒に居た私の安否を気遣つてくれたのである。

当時手術は諫早の分院で行われていたので、手術のある日は、長崎から諫早へ出向いていた。ある日手術が終つて医局へ戻ろうと廊下を歩いていると、もと長崎の病院で私の患者だった高田さんの附添婦に、ぱつたりと出会つた。吃驚した彼女は目を丸くして立ち止まり、「まあ！ 草場先生ではありませんか。先生はあの時お亡くなりになつたと聞いていましたが、御無事でよかったです」など、健在な私の姿に涙を流して喜んでくれた。恥も外聞も忘れて私にしがみつき、身体をふるわせている彼女の純真な気持に、私は強く心を打たれた。

被爆直後からずつと私に附添い、伊良林の救護所でも離れずに看護してくれた松尾看護婦は、外見上全く無垢で、病院が再開されてからも元気に朗らかに勤務していく。翌二十一年、正月の松の内に、当時看護婦宿舎に当てられていた仮りの寮で、婦人科総出の新年宴会が催されたが、この時看護婦達は一堂に集つて、原爆の惨禍から無事に生きのびたことを互に喜び合つていたそうである。私はどうした理由だったか、不幸にしてその会には参加出来なかつた。後で聞いたのであるが、彼女も大変上機嫌で、他の人達と一緒に踊つたり跳ねたり大騒ぎして、最後まで愉快に一夜を過ごし、終つて床に就いたが、数時間後の真夜中に、突然身体の異常を訴え、僅か二、三時間後に若い生命を絶つたとのことである。はつきりした原因をつかめないままに、急性白血病として、「二階級特進の看護婦長見習」という待遇をもつて、厚く靈を慰める」との告知が、病院の掲示板に貼り出された。

私はこの事実を知つて、複雑な気持に迫り立てられ、不思議なほど口になつてしまつた。そして恐ろしい不安がつのつて、私の心は動搖した。彼女とは極めて深い繋がりをもつていた私だったので、大学の車に同乗して稻佐の火葬場に行き、彼女の最後の世話をした。明日の命を誰が知ろうぞ！ という実感が、ひしひしと身に迫つて来る。ほんとに短ない若い命であつた。

私が曾て通つていた第一解剖学教室は、大学の中でも爆心地に最も近い場所だつた

から、その被害は云うに及ばぬことである。当時ここに居たものは、池田教授以下、全員が原爆死を遂げてしまった。ただ一人生き残ったのは佐藤助教授で、助教授は私と同級だった令弟の佐藤隆典君が海軍々医で戦死したため、その日遺骨を受取りに佐世保へ向いて命拾いをされた。令弟の靈が兄上を救つたとでも云えようか。正真正銘の実話である。私もここで実験に精出していたら、恐らく他の犠牲者と一緒に帰らぬ人となっていたことだろう。どのようなことが僕せをもたらすか、全く予測出来ない世の中である。

あの当日、仲よく診療に従事していた同僚の犠牲も、私には忘れられないことである。原爆投下のほんの少し前まで、同じ室で働いていたながら、菊地君と四名の看護婦並びに患者たち数人が、旧患外来治療室でそのまま命をおとしてしまった。若し私が菊地君の希望を退けて、私一人で旧患外来を受持つていたとしたら、当然ここで看護婦達と運命を共にせざるを得なかつたと思う。菊地君が身代りになつて、私を助けてくれたような結果となつた。全く不憫なことであつた。

内藤先生は原爆投下の直前、患者輸送車の中に押んで、僅か七〇センチ位しか離れていなかつたのに、先生は天井から落ちた梁に潰されて即死され、それに反して私はどうして助かつたのか、恐らく死の女神に突き放されて、九死に一生を得て脱出することが出来たのだろう。私は極めて稀にみる幸運兒であったことを、しみじみ嘆みしめている。これを紙一重の運命とも云うのである。先生にはほんとに申証ない結果になつてしまつた。ただただ御冥福を祈る外はない。

### 私の障害について

私は内藤先生の遭難現場に居合せたのだから、先生と同様に、身体に恐ろしい重力がかかつてきただの自然で、あの瞬間、私は頭から打ちのめされたようである。その証拠には、口が殆んど開かない程の打撲を受けて、歯も二、三本折れてしまった。第五、第六頸椎が扁平に変形し、頸椎間盤が圧縮され、首が廻らなくなつた。これらの傷害が強い打撲によって起つたことは頷けるが、頭蓋骨の異常のなかつたのは寧ろ

不思議と云えよう。その後は幸に原爆症らしい症状もなく、順調に治癒に向つたのは全く侥倛であつた。

原爆症の起らなかつた理由として、私は被爆現場の立地条件を考えてみた。婦人科病棟の建物は鉄筋コンクリートの三階建で、東西に長く、中央に廊下が通つていて、南北両側は沢山な部屋に分れ、天秤室は一階北側のほぼ中程にあつた。更にこの婦人科病棟の北側には、かなり接近して高い鉄筋の北講堂（階段講堂）が建つていた。

原爆投下の瞬間に私が立つていた場所は、この天秤室入口の廊下だったので、北講堂と天秤室のために採光が遮断されて、日中でも薄暗いところであつた。そのために直接原爆の光線を受けずに済んだのではないかと思う。敵機の凄じい爆音は聞いたが、爆発の際の閃光は感じていない。ただ爆風によつて天井が落下したために、遭難しただけである。従つて放射能の影響も少く、予後もよかつたと考えている。

ところで今に不可解なのは、私の意識喪失の点である。あの時は瞬間に失神してしまつたが、その後間もなく無意識のまま起き上つて、反射的に避難行為に移り、而も正しい行動をしている。この点では意識が全くなかつたとは云えないようである。然し数回に亘り、短時間ではあるが意識がすっかり回復して、極めてはつきりとした記憶が残つてゐるところもある。ただ遺憾なのは、生涯忘れられない筈の劇的な親子の対面や、玉音放送、終戦の報道など、極めて感動的な場面の記憶が少しもないことで、この事実は單なる健忘症として簡単に片付けられない気がする。また茫然自失といったような意識のはつきりしない期間が、約二十日間という余りにも長期に及んでいることを、どのように解釈したらいいのか、私にはさっぱり解らない。



# 原爆被爆の往時を顧みて

愛媛県上浮穴郡久万町立病院  
昭和十六年長崎医科大学卒業

林 忠 実

原爆被爆者としての手記を、とのことであります。当時は日記をつけておりませんが、あれから二十八年も経過しておりますので、正確な手記が書けるかどうか、多少不安を感じます。しかし、たとえ原爆が日本の無条件降伏への動機の一つとなり、日本を一億総戦死から救ったとは云え、その無残さ、非戦闘員の非人道的な大量殺戮など、戦慄すべき悲惨な記憶は、今日も尚、目の前に浮べることが出来ます。犠牲になられた恩師、学友たちを想うと、眞に無念でなりません。再びかよくなことが起つてはならぬ、と絶叫致します。

× × ×

当日産婦人科では、本多講師が外来の新患診察中で、私は助手講師として産科手術の講義を受持ち、ほかに図書室の係りと、レントゲン深部治療の係りを命ぜられておりましたが、八月一日の大学病院爆撃で、産婦人科では、教授室を貫いて階下の手術室まで達するような直撃弾の被害を受け、同時に図書室も大破しましたので、図書を外来新患診察室の隣の問診室に移すことになりました。私は看護婦たちに手伝つて貰い、図書を患者運搬車で外来に運ばせて、それを私が整理していました、丁度その時であります。突然玄関先で角尾学長の運転手と女事務員物凄い爆風で床に叩きつけられ、突然視力を失いました。思わず「助けてくれ！」と叫び、側にいた学生さんに引き起して貰い、階段を下りて外まで助け出して貰いました。見ると、病院前の家屋が吹き飛ばされ、岡の上の鎮西中学校が真二ツに割れいるのが見え、初めて視力をに戻したこと気に気付きました。現在、両眼のレンズの力

プセル後方に、直径二ミリの白内障の混濁が残つております。十九年前には突然、約二週間に亘つてスコトームが現われ、驚きました。私を助け出してくれた学生さんは、今名前を思い出せませんが、二十二年前に長崎を訪れた時には、病理学教室で研究中であります。

外来を逃れ出した私は、火の手をきけて穴弘法の丘に登り、金比羅山を越えて高等商業学校へ下り、長谷川教授、北村教授のお宅の側を通つて、四海樓近くの地下壕で一夜を過しました。着ていた筈の白衣も、ゲートルも、靴下もなく、途中で貸してもらったシャツを着て、ぶるぶると震えていました。

若しあの時、私がまだ図書を運搬して中央廊下を通つていたら、私もまた慰靈される方になつていただしよう。ところが不思議なことに、学生時代からの親友草場正蔵君も、もう駄目だろうと思われていたのに、僥倖にも外来治療を同級の菊地秀人君と代つたために、草場君が助かり、菊地君が犠牲者となりました。その直前、草場君は旧患外来の廊下で、患者運搬車を中心にして、内藤教授から指示を受けたそうであります。ですが、その内藤教授が爆死され、草場君が助かつたことも、何だか幸運に恵まれていたよう思います。

連続三選され、長大医学部長として母校のために奮闘しておられる佐藤純一郎先生は、当時池田解剖学教室の助教授であります。が、当时、令弟佐藤隆典君の遺骨（戰病死）を佐世保に受取りに行かれなかつたら、高木解剖学教室の呂雲龍君と、同じ運命に陥られただろうと思ひます。

人間生死の運命は、全く紙一重の差であります。「八月九日には長崎で何か起るようだが、その時は俺がお前の所へ行くから、どんな事が起つても、お前は長崎へ来てはならぬ」と云いつけた小長井の弟が、オニギリとリュックを背負つて、八月十日に医大にいた私を探しにやって来ました。それと入れ違いに、私は小長井へ向い、途中道ノ尾の林政吉君（昭和二十年付属医専卒、台湾の人）の下宿で一休みしましたが、小長井につくと、下痢はするし、食欲もなく、便所に起きるものやつとで、長崎から見舞に来ていた家内も、衰れと思ったのか、私との結婚を承諾してくれました。その

うち弟夫婦や家の看病で、少しつつ元気になり、近くの村民の被爆者治療を行なつたりしました。

被爆後三週間頃から、風呂に入る度に頭髪が抜けて、多分秋毛だろうと思つてはいましたが、そのうち一度の入浴でタワシが出来る程抜けるようになりましたので、これは放射線の影響であることに気付きました。長崎へ出られるようになつて、新興善小学校で白血球を検査して貰いました。四〇〇〇足らずとのことでありました。幸い、昨年十二月に、三谷先生が院長をしておられる原爆病院で検査をして貰つたら、血液その他、全く正常とのことで安心しました。

台湾に帰った直後、私と一緒に呂雲龍助教授の御遺骨を持ち、台北市士林区のお父上を訪れた林合成先生（昭和十六年長崎医大卒、眼科教室で被爆）も、一昨年他界されました。また被爆後、永井先生と行動を共にされて、被爆患者の治療に努力された施焜山先生は、台北で行われた原爆犠牲者追悼会に元気で出席されたのに、その後間もなく他界され、又原爆被爆の台湾の学生を数名収容して、最後まで世話をされ、私も貴重なビタミン剤を沢山戴いた康嘉音先生（昭和十六年長崎医大卒、原爆当時肥前長田で開業）も、追悼会の時は私と同じテーブルに居られたのですが、最近突然他界されました。全く人生の無情を感じさせられます。

私は幸にも生き残りましたので、原爆犠牲者の分まで少しでも多く働かねば、と思つておりましたが、昨年同級生の野北教授が、門下生から還暦のお祝いをして貰つたと聞きましたし、私も無為に生きておるうちに、もう若くない部類に入つてしまつたことに驚き、これからでも、牛歩ながらも少しでも、人類の為にお役に立つことが出来れば、と念願しております。

× × ×

以上、手記と申しますよりも、とりとめのない思い出話になりまして、真に相済みません。

終戦当時の状態は、夢ではなかつたかと思われる程の、現在の日本の各界、各方面の発展、並びに国民の福祉に、目を見張つて驚いておりますが、調先生の二十七年余

に亘る長崎医大原爆犠牲者へのお心遣いには、最大の敬意を表します。

（四八、五、一七記）

## 懐かしい母校の思い出

台灣省台北市克難街三五六号  
昭和二十年長崎医大仮卒業

吳 源 泉

二十八年前の事跡は、漫長な歳月を経た今日でも、尚明らかに脳裡に刻まれているので、思い出は悲喜こもごも果てる所を知らない。中でも最も遺憾に思つたのは、母校が原爆によつて潰滅に帰したことで、角尾学長以下、一〇〇〇人に近い犠牲者を出し、教育界における未曾有の大惨事であつた。この惨事は、現場で体験した人でなければ、恐らく完全に了解することは出来ないであろう。恰かも世界の末日が来たような、阿修羅の世界、地獄の世界、何とも形容、描写することの出来ない、末世の世界だったのである。

当時私は、時局が次第に悪化するのを見て、無医村だった諫早市外の久山村に疎開し、医大を仮卒業した後、恩師調先生の教室に入つて、インターとして恩師や木戸助教授、村山婦長のお世話を受けながら、平和な愉快な日々を過していましたが、原爆の約一ヵ月半前からは、屢々敵機の空襲を受けるようになつた。しかし空襲警報はいつも五分か十五分で解除され、七月末までは一度も投弾がなく、ただ空から宣伝ビラを撒いて通り過ぎるだけだったので、学生達の恐怖感も、緊張感も、次第に薄らいで行つたようであつた。

宣伝ビラは、赤、黄、青、緑、白などの薄い紙で、それに丁寧な日本語で印刷が施してあつた。例えば、「親愛なる友達よ、御機嫌いかがですか。〇月〇日に又訪問に参ります。」といったような文句でした。校庭に出ると学生達の話が耳に入ります。「皮肉なことを云つてゐるじゃないか。馬鹿にしてる。」「<sup>おど</sup> 嘘に来たんだ。このビラ

は心理作戦のためなんだ。」等々。いざれも慨嘆にたえない憤怒の情を表わしていた。

教室では、木戸助教授と二人で、一日置きに包帯交換の当直をなし、万一の異変に応ずることが出来るようになっていた。夏休みは云うまでもなく、日曜も祭日も、一切休日はなかった。

原爆の前夜、即ち八月八日の夜、私はとても恐ろしい夢を見て、一晩中呻き通した。そうで、翌九日の朝、家内が、「今日は縁起が悪いから行かない方がよい」と云い、又家主の助言もあつたので、恩師には済まないと思つたが、とうとう病院を休むことにした。

午前十一時頃、突然物凄い音がして、家がガタガタと揺れ、屋内にいた人々は、皆大声をあげて飛び出し、鶏小屋の屋根にいた鶏は、けたたましい鳴声をたてて飛び下りた。野良仕事をしていた農夫達も、すさまじい爆風におおられて、皆ころげるように倒れていた。

初めは、近所に大型爆弾が落ちたのかと思つたが、西の方を見ると、長崎市の上空かと思われる辺りが、水平線から天空に到るまで真赤に染まっている。「これは唯事ではない」と思うと、急に激しい動悸が打ち、体がガタガタ震え出した。きっと何か異変が起つたに違いない。病院や外科教室は安全だろうか、先生や看護婦、患者達は皆元気だらうかなど、大学のことが心配になつて來た。

疎開先の久山村は、直線距離にしても長崎から二〇キロ離れているが、それでも屋根瓦が落ち、窓ガラスが割れた程の影響があり、村人達は右往左往しながら、高声に語り合っていた。間もなく村長があつたと駆けつけ、「早く握り飯を作りなさい。車一台分だよ。長崎から負傷者が数え切れない程やつて来る。」と云うなり、又急ぎ足に何處かへ去つて行つた。

私は立つても居てもおれない氣持で、村の人達と一緒に長崎へ出かけた。歩きながら頭の中は、四月に長崎駅と大波止が爆撃され、悲惨な負傷者が次々に大学病院に運ばれて來た時の光景や、六月に佐世保市に焼夷弾が投下され、恩師の命令で救護に出

かけた時の慘状が、走馬灯のように駆け廻つていた。

長崎市に入ると、牛、馬、鶏などの家畜が道に横たわつたり、水に浮いているのをまざまざと見せつけられた。道は瓦礫で埋まり、余熱がまだ残つていて、靴履きの足の底が熱くてたまらなかつた。三義兵器や製鋼所の工場の鉄骨が餉のように曲り、瓦斯タンクは無残に潰され、木造の家々は全部焼け落ちて、何処に消えたのか、姿かたちさえ見ることは出来なかつた。

西浦上の住吉町辺りでは、大勢の人が死傷者を運搬するのに出会つたが、担架から洩れる悲鳴や呻き声は聞くに耐えず、思わず耳目を掩つた程だつた。実に戦争は嫌なものだ。無辜の命を剝奪する冷酷非道の所業。益してや一発の爆弾でかくも悲惨な災害を引き起す原子爆弾に至つては、言語同断と云わねばならない。

大橋の近くに行つたところで、警官に呼び止められ、危いから引返すように云われたので、止むを得ず駆早に帰つた。

翌十日午後、家内を連れて再度長崎に行つたが、今度は真直ぐ大学に行つた。病院の壁も天井も剝がれ、天井の杉板はぶらつと垂れ下つてゐた。正門の巨大な門柱は斜めに傾き、門前の店も民家も完全に消えてなくなり、割れた瓦だけがうず高く積み重なつてゐた。いつの間に片付けたのか、死骸は一つもなく、人影もあたりには見えなかつた。私達はすぐに大学を出て、滑石町に疎開しておられる恩師を訪ねたが、御夫婦とも元気に過しておられたので、何よりも嬉しかつた。

十三日の朝だつたか、私は又長崎に出て、道ノ尾にある岩屋クラブに行つてみた。そこは二十四坪ほどある木造の建物で、以前は村の青年会館だつたそつだが、今は臨時救護所として約三十名の負傷者を収容し、調教授以下、木戸助教授、学生七、八名、調外科の看護婦八人で、被爆者を治療しておられた。とても忙しそうだつた。部屋の奥の方に担架が二つ並んでいて、それには角尾学長と山根教授が載つておられ、これから滑石太神宮の拝殿に移すことであつた。角尾学長はいつものようニコニコしておられ、特徴の金歯が光つて見えたが、山根教授のお顔は憂鬱で、一体何の病氣かと不審に思い、恩師の方を向くと、恩師も亦憂愁な表情で、何のお返事も

なかつた。

担架の手前には、大勢の学生たちが板床の上に寝転んでおり、頭や手足には包帯が巻かれていたが、それは多分爆撃で受けた怪我だろうと思った。彼等は皆顔色が蒼白で、全く血色がない。物も云わざ静かに横たわって、回復を待つてゐるかのようであった。そこへ、手伝いに来ていた学生達が、握り飯を持って來た。学長に付添つておられた城島助教授が、一つ取つて学長に差上げたが、一向に食欲がないらしく、取り上げようともされなかつた。私も山根教授に一つ差上げようとしたが、指の怪我で持つことが出来ず、茶碗と匙を要求されたので、学生がすぐに持つて來たが、矢張り見向こうともされなかつた。

やがて太神宮の収容準備も整つたので、学長と山根教授はその方へ移られ、あとは学生や学内事務員の負傷者だけになつた。しかし彼等は普通の外傷や熱傷と違つて、三十九度ないし四十度にも及ぶ高熱を發し、全身倦怠がひどく、嘔吐や下痢が頻繁に起り、中には血便を出すものもいて、赤痢ではないかと大騒ぎしたりした。

救護に従事している学生や看護婦達は、休む暇もなくキリキリ舞いして働いていたが、民家からは、断りもなく重傷者を抱き込んだり、人手も少いのに往診を頼みに來たりした。

家が遠いので、夕方お暇して疎開先に帰つたが、ここでも異変が起つてゐた。被爆者達が多数近所の民家に避難しているらしく、まだ歎医の私の所に、往診の依頼が殺到した。疲れている上に、薬品の備えも充分にないのにと思つたが、隣人達の信頼を裏切る訳にもゆかず、行ってみると、岩屋クラブで診た被爆者達と全く同様で、何とも手の施しようもなかつた。病因もわからず、ただ壳葉の「ノーサン（脳心）」を与えただけでは癒る見込みもなく、患者は次々に死んで行くばかりで、我ながら不用斐ない悲しい気がしてならなかつた。

恩師調先生が二人の愛兒を喪われた痛ましい心情が、しみじみと察せられ、それも意とせずに、老身に鞭打つて原爆犠牲者のために奔走されるお姿は、神々しくさえ思われた。

戦後二十八年、當時まだ生れていた我が子が、今では、或いは父となり、或いは母となつて、我々は骨董品にも類似する老境に達したが、浦上天主堂は、原爆によって破壊されてもすぐに再建され、平和を告げる鐘は、昔と変らず高らかに打ち鳴らされているであろう。あたかも二十幾万人の原爆犠牲者の靈魂を慰めるかのように――。

終りに臨み、角屋学長以下、原爆の犠牲となられた恩師、同窓の御冥福をお祈りして、拙い思い出の筆を擱きます。  
(四八、三、三〇)

## 原子爆弾余話

長崎県南松浦郡新魚目町立串  
昭和二十年付属医専仮卒業

西川勝

勝

### 一、新型爆弾投下される

昭和二十年（一九四五）八月九日は雲一つない快晴で、當時陸軍々医少尉であつた私は、熊本県天草郡佐伊津村の一民家を借り、臨時の医務室として、独立混成第四二三四三部隊の傷病者の診療に従事していた。毎日四十名前後の傷病者には、特に重症者もなく、連日の作業に疲労を訴えるものや、擦過傷を起したもの等々の軽傷者ばかりで、当日の予定患者の大半は既に診療を了えて、残り十名たらざが順番を待つてゐるに過ぎなかつた。

額の汗をふきながら、東北地方から召集されて來たといふ二等兵の右上胸部にできた化膿巣を、麻酔薬がないので無麻酔のまま、今までに切開しようとした瞬間、突然にすぐ近くで、「ドカン！」と強烈な爆発音が起つた。今でいえば、ジェット機が飛びたつ瞬間に起る、あの突然の爆音と同じであつた。一瞬皆の顔が硬直した。私は思わず、「伏せろ！」と叫んでいた。

一分——二分。いやもつと時間が過ぎてゐたかも知れない。そのあとは何の変化も

ないので、私は傷病者に動かぬように命じて、室外に出てみた。

すぐ近くと思ったのは間違いで、西北の長崎市上空の一角に、空高く淡紅色のキノコ雲が眺められた。まだムクムクと盛上るように動きつつ、太陽にさらめいていた。

私は「きれいだ」と思った。無意識にのぞいた腕時計は、十一時四分を指していた。あとで十一時二分の出来事と知つた。

私は傷病者達に、全員出て来るよう命じた。彼等は出てくるなり、皆一齊に「きれいだ」と連発した。つづいて「何だろう?」という疑問の声が口々に囁かれた。勿論誰も知る由はなかった。私は當時軍部内で噂に上っていた、風船爆弾ではないかと思つた。風船爆弾とは風船に吊した爆弾を、日本本土から季節風に乗せて東へ飛ばし、アメリカ大陸の西海岸上空で破裂させようとする、新しい考案になる日本の新型爆弾のことである。當時まだ日本側でも実際に使用したことは一度もなかつたが、このような研究が進められていたのは、事実のようであった。

今にして思えば、それが原子爆弾であったことは疑いもないが、戦後のある書物によると、どこの国よりも早く原子爆弾の研究を始め、かつ実用化の一歩手前まで完成しつつあったのは、我が日本国であったという。云うなれば、アメリカに先に使用されたために、日本は急速な終戦に踏み切らざるを得なかつたわけで、甚だ残念至極に思われる。

乞食同然の姿といった方が、あたつていたかも知れない。

長崎市内の惨状に思いをはせつつ、空しく六日間が過ぎた。八月十五日の朝、部隊長命令で、「本日正午に重大発表があるから、全員集合せよ」との伝達が来た。当時の部隊は、佐伊津村を中心に、近村の小学校に分駐していたので、全員は正午少し前に小学校の講堂に集つた。学童の姿は全然見えない。恐らく夏休みで休校していたのだろう。

部隊長以下、全員正装して講堂に整列した。八〇〇名足らずの小部隊だつたが、皆は講堂にはいりきれず、廊下にもぎつしり並んだ。正面の壁に日の丸の旗が吊され、その前の教壇にはラジオが一台載せてあつた。

正午の時報と共に、「捧げ銃!」の号令がかかり、銃を持たない兵隊は、氣を付けの姿勢をとり、将校はすべて抜刀して、日本刀を持った右腕を右斜前下方に突出し、最敬礼の姿勢をとつた。肩が触れ合うくらいぎつしりと並んでいるので、前方に振りおろす日本刀の先が、前に並んでいる将校の肩に触れそうであつた。

捧げ銃の姿勢のままで、ラジオから天皇陛下独特の「玉音」が流れ来た。ザアザアと雜音が入つて、中々聞きとりにくい。いや雜音のために、初めから終りまで、その内容は全然聞きとれなかつたと云つた方がよかつた。小学校の講堂だつたためか、祝日に行われる校長先生の教育勅語の朗誦を思い出しながら、聞いていた。二十分も過ぎたであろうか、ようやく玉音が終り、「なおれ!」の号令と共に、日本刀を鞘におさめたが、何の訓辞もなくそのまま解散させられたので、誰もその内容を知らなかつた。恐らく部隊長と副官だけが知つてゐたに違ひない。皆は、恐らく戦局不利の折から一層心を引き締めて敵にあたるようとの、天皇陛下じきじきの激励の御言葉であつたろうと話しあつた。私をはじめ全将校は、改めて心の引締る思いであつたと、後日語りあつたものである。

それから一二三日過ぎて、部隊内に「戦争に負けたそだ」という噂が流れはじめた。皆半信半疑であったが、村人が皆そのように話し合つてゐるというのである。間もなく敗戦を知らされていない部隊に、動搖が起つた。そのためかどうか判らない裸足のものも多かつた。交通の便が止絶えてるので、ここまで歩いて來たという。

ようやく一時間も過ぎたころ、ラジオの臨時ニュースが、長崎市内に新型爆弾の投下されたことを報じた。全市全滅だという。私は郷里の長崎に残してきた母や姉妹のことが気がかりであった。色々と考えた末、副官に事情を話して帰郷を願い出たが、詳細不明という理由で許可されなかつた。

一日、二日がむなしく過ぎた。三日目になつて、頭や手に包帯をした負傷者が、二人あるいは三人と連れだつて、船で天草へ渡つてくるようになった。彼等に長崎市の様子を尋ねても、誰もくわしく話してくれる人はいなかつた。皆ここまで逃げてくるのが精一杯だったという顔付であつた。ボロボロに破れたシャツをまとい、中には足のものも多かつた。交通の便が止絶えてるので、ここまで歩いて來たという。

それから二三日過ぎて、部隊内に「戦争に負けたそだ」という噂が流れはじめた。皆半信半疑であったが、村人が皆そのように話し合つてゐるというのである。間もなく敗戦を知らされていない部隊に、動搖が起つた。そのためかどうか判らない

が、放送のあった三日目に、突然部隊の移動命令が出て、その日のうちに隣村の鬼池部落に移動し、寺の本堂を借りてここに宿泊することになった。そして初めて終戦に関する訓辞があり、「軍法會議はまだ消滅していないので、帝国軍人として恥じない行動をとるよう」との布達があった。

その翌日、私は副官に呼ばれて、長崎行きの許可が与えられた。私はその日のうちに鬼池港から対岸の口ノ津に渡り、汽車で長崎に行つたのであるが、今では八月の何日だったか、記憶が薄れしまって覚えがない。新型爆弾が落された日から、十日も経っていたであろうか、負傷者が多く避難しているように聞いていたが、島原半島は思ったほど混雑してはいなかつた。

敗戦とともに、軍隊の威力も地に墜ちたもので、口ノ津駅の窓口に出した将校用の汽車割引票（現在の学割のようなもの）を示しても、中々に乗車券を売つてくれず、押問答の末、駅長にかけあつてやつと、ここには走つていない島原鉄道の二等乗車券を貰わされてしまった。当時将校は二等車（現在のグリーン車）の乗車割引票を持ち、下士官以下は三等車（現在の普通車）と決められていた。しかし島原鉄道には二等車がないので、結局三等よりもひどい寿司詰の貨物列車に立たされて、長崎まで行く羽目になつたのである。

口ノ津駅で汽車を待つてゐる間に、調外科に勤めていた看護学生のチヨちゃんに出会つた。今ではその正確な姓名も覚えていないが、十五才位の背の低い看護婦生徒で、教室ではいつもチヨちゃんと呼んでいた。彼女は長崎で被災したが、怪我もなく、親類と一緒に長崎から郷里の天草に避難する途中とかで、赤ん坊を背負つての子守役であった。「木田主任さんが、志岐に帰つていますよ。」とも云つた。

当時の島原鉄道は、十分間走つては二十分钟間停車するといったノロノロ運転で、長崎駅に着いたのは、もう夕暮であった。汽車の窓から眺めた浦上一帯は、一面の焼野が原で、緑色のところは一つもなく、茶褐色の下地に医大の付属病院が白く浮きあがつて、二本煙突の一本が半ば傾いて見えるのが、印象的だった。

駅を降りた私は、早速中小島町の我が家を訪れた。だが、家族は皆母の郷里の佐賀

に避難したとかで、家には誰もいなかつた。家中はきれいで整理はしてあつたが、稍稍高台にある私の家では、浦上に面した方の障子がすべて破れ、棧はふきとび、周囲の桟が残つているだけで、窓硝子はすっかり割れていた。近所の人に母の消息を尋ねた時、その人は、自宅の六畳の間の端に置いてあつた鏡台が、爆風に飛ばされて反対側の襖にとどいた程であつたという。約四メートルは飛ばされた計算で、爆風の強さがしのばれた。又どの家でも、朝の片付けが終り、空襲警報も解除されてのんびりしていた瞬間に、突然眼をくらますばかりの閃光を感じたという。音は何も聞えなかつたという人が多く、次の瞬間には嵐のような強い爆風が吹きまくり、すべてのものが飛び散つたと話してくれた。浦上の爆心地から数キロ離れた、中小島町でさえこの有様であるから、爆心地付近の惨状が偲ばれる。金比羅山が間に横たわっていたので、長崎の旧市街は災害をまぬがれた、とも話してくれる。

その夜は、荒木という近所の人の家に泊めて貰つた。もう二十八年も前のことであるから、当時五十才ぐらいだつた「荒木のおばさん」も、最早や他界されたことであろう。ここに慎んで御冥福をお祈りしたい。

翌朝は医大に行く予定であった。朝が早かつたせいか、浜ノ町通りにはまだ人通りもあまりなかつた。岡政（百貨店）を過ぎて、西浜ノ町の電車通りに抜けた所は、両側とも家が壊されて、瓦礫の山であった。戦災で焼けたのかどうかわからない。後日ここに闇市が出来たが、私はその瓦礫の中で、腰椎と思われる骨の一片を見つけた。恐らく人間のものであろう。犬のものとしては少し大きすぎるようであつた。焼けて転がっているものではなく、自然にばらばらになつて朽ちたもので、あるいは犬でもくわえて来たのかも知れない。その付近を見たが、ほかの骨は探し出せなかつた。被爆後十日以上も過ぎた繁華街で、この有様である。街の人々は戦災に疲れきつて、骨の一片など気にもしなくなつてゐたのであろうか。

その足で医大病院に行つたが、市電（戦災直後走つていたかどうか記憶がない）で行つたが、歩いて行つたが、今では全く記憶にのぼつて来ない。

付属病院のあの長い坂を登りつめて、外来本館の玄関を行つてみると、中では正面

の階段を利用して葬儀が行われていた。十人余りの少人数で、キリスト教式であったようだに覺えている。二、三人の軍人も参列していた。角尾学長の葬儀だと聞かされたので、私も隅にたたずんで、終りまで御冥福を祈っていた。淋しい葬儀であった。

その日のうちに、私は天草へ帰った。口ノ津駅についたのは真夜中で、特別に船を備つて、対岸の鬼池へ渡つたことを思い出す。

## 二、アメリカは何故に原爆を投下したか

昭和十六年（一九四一）十二月八日未明、日本海軍の真珠湾奇襲作戦によって、太平洋戦争の幕は切って落された。當時中学五年生だった私は、朝のラジオによる臨時ニュースを聞いて、思わず「やった」と叫んだものだった。最初の半年は、いわゆる連戦連勝の「かちいくさ」で、我々若人の皇国思想を、いやが上にも強固にする役目を果す結果となつた。たしかに、「御國のためには一身を投げうつて——」という考え方では、益々深くなる一方であった。今の若人のように、無責任な批判をするものは誰一人としてなかつた。まさに

### 海ゆかば草漬く屍

### 山ゆかば草むす屍

### 大君の辺にこそ死なめ

### かえりみはせじ

という歌そのままの心境であつた。

だが開戦間もなくある日、民友新聞社の社長だった故倉成氏（倉成正代議士の実兄）が、私の家に遊びに来られた時、「今度の戦争は必ず負ける。三年続けばよい方だ。」と云われた言葉は、今でも忘れずに私の耳の底に残つてゐる。

年が改まって昭和十七年一月二日には、日本軍はマニラを占領、統いて二月十五日にはシンガポールを占領した。三月になるとジャワ、ビルマ、ニューギニアへと戦域は拡大した。これから先は遠くインドに進攻して、西方から攻めてくるドイツと握手し、世界を日本とドイツの二国で、両分して制覇しようという夢想があつたといふ。

まさに無謀な、終末点を知らない決戦ではあった。日本政府は、連合軍の反撃が昭和十八年まではあるまいと判断していたという。だが、十七年六月五日のミッドウェー沖海戦は、日本海軍の完全な敗北に終り、形勢は逆転した。そしてアメリカ軍が日本本土を空襲するようになった。

敗戦の色が濃くなつてゆくなかで、昭和十八年十月に、「在学徵集延期臨時特例」なる緊急勅令が発せられ、これまで兵役の義務を延期されていた学生は、徵兵猶予が取消され、徵兵検査を受けて軍隊に入隊せねばならなくなつた。いわゆる学徒出陣がそれで、学生の戦力化が始まったのである。

しかし理工科系の学生だけは、僅かに入営延期が認められ、特に医科の学生に対しても、軍医不足のため、早急に医師を養成する必要上、寛大な措置がとられ、繰上卒業の日を待つて、入隊する制度になつていて。

私も四年の課程を三年間で仮卒業し、昭和二十年二月に徵兵検査を受けた後、当時新設された軍医候補生の試験に合格して、同年四月十五日に東京の戸山軍医学校に入隊したのである。この学校は、短期間に軍医を養成する学校で、入隊時にすでに軍曹であり、二ヵ月後に卒業して見習士官になるような、従来の短期現役の変形したものであつた。

当時の戦局は敗戦の色が益々濃く、上京したその夜も、翌日の夜も、また翌々日の夜も、連夜ボーリングB29五〇〇機の空襲が、東京の上空で行われた。毎晩東京のどこかで、焼夷弾による火災が続いていた。

四月に入つてからは、空襲も定期便となつて、昼は午前十時、夜は午後九時に、必ず東京の上空にボーリングが現われた。軍医候補生はそのために、相模原国立病院に疎開して教育を受けていた。

四月十二日に死亡したルーズベルト米大統領の訃報が校内にもたらされた時には、戦局の逆転が起るかと思ったのも束の間で、四月二十九日にはムッソリニーの銃殺が伝えられ、五月二日には、沖縄の日本軍全滅の報と、ドイツの首都ベルリンが陥落し、ヒットラーが自殺したとの報が伝えられた。

この日に、教官は全員を集めて云つた。「海軍はすでに終戦をうたつてゐるが、陸軍はあくまで本土決戦を決意しており、最後の一兵まで戦う」と。

六月十五日、我々は予定の教課を了えて見習士官となり、一八〇〇名の軍医候補生が、日本全国に散つて行つた。私は西部軍司令部に配属され、更に熊本の第五四部隊に転属を命ぜられた。その日の前夜に、福岡市が敵の空襲を受け、我々は大名町にあつた医務部の焼跡に立つて命令をうけたものだ。その時の訓辞によると、

「アメリカ軍は、昭和二十年十一月一日に、九州上陸作戦を行うという情報が入つてゐる。その場所は有明湾ということになつてゐるが、九州には有明湾が二つあるので、どちらに上陸するか不明である。従つて、一隊は島原半島にかこまれた有明湾の警備にあたり、他の一隊は、鹿児島県の志布志にある有明湾を警備して貰わねばならぬ。」といったような趣旨のもので、我々はそれぞれ七、八名づつに分れて、九州各地の部隊や病院に転属させられた。こうして我ら一行八名の軍医見習士官は、熊本の第五四部隊へ転属になったのである。

ここで更に独立混成第四二三四三部隊が編成され、私は天草島の警備軍の一員となつた。四二三四三部隊といふのは、野砲隊であったが、敗戦まぎわの内地部隊に野砲などある訳がなく、兵隊は銃を持たず、帶劍の代りに皆荒縄を巻いていた。部隊長にも馬がなく、武器といえば、将校個人が腰に下げていた日本刀ぐらいであった。こうして運命の八月九日がやって來た。

日本人の多くは、原爆に負けたと思つてゐる。原爆が落されなければ、ソ連の参戦などは満州国でいいとめられると信じていたからである。しかし、それは精神力の面からのみ見た判断で、実際には開戦当より四年も前から、少しづつ敗戦の糸車をたぐつてゐたのである。米英の大國に対する挑戦、国内資源の不足、十年來の日中戦争における消耗など、数えあげると切りがない程である。大和魂だけでは戦争に勝てないことが、はつきり反省させられたのである。

では何故に、アメリカは日本に原爆を投下したのだろうか。

三国同盟国であつたイタリヤとドイツが降伏して、日本だけが唯一の敵国として、

国際的に孤立していたので、どんな非人道的な制裁を加えてもよい、而も日本人は有色人種だから、悲劇の実験台に利用されたのだという説がないでもない。しかし問題はそんな簡単なことではあるまい。しばらく終戦当時の世界の情勢を文献によつて探つてみたい。

日本の軍部は、昭和十九年九月には既に本土決戦の構想を持つており、その為にはソ連の参戦防止、ソ連の好意的中立の取付け、終戦斡旋依頼の三方針を決めていた。

一方アメリカは、昭和二十年六月も引続き戦略爆撃の続行強化、同年十一月一日、九州上陸作戦、二十一年三月一日、関東上陸作戦、同年十一月十五日、対日戦終了などの予定を決めていたという。しかしながら、この計画をその通りに進めるには、背後から日本を攻めるソ連の参戦が重要な前提条件であった。ソ連の参戦がなく、アメリカ一国のみで日本上陸作戦を実施した場合、成功の可能性は充分にあつても、日本の軍事力はなお支那大陸に充分分配備されていて、これに対する時は、硫黄島、沖縄に見られるような、大量の米軍死者を出すことになる。ここでソ連が満州・支那の日本軍を牽制してくれたら、予定通りの対日戦終結に達することが出来るのである。そのためアメリカは、早くからソ連に對して参戦を要請していた。しかし独ソ戦で手一杯のソ連は、容易にそれに応じて来なかつた。

それでも、スターリングラード戦の勝利後、ドイツの敗北が明らかとなつた昭和十八年、ソ連はドイツ敗北後の参戦を約し、二十年二月のヤルタ会談で、ドイツ降伏したので、ソ連の参戦予定日は、八月八日と決つたのである。

一方アメリカでは、ルーズベルトの急逝により、反ソ的なトルーマン政権が成立すると、ソ連の軍事力に依存する必要性を感じなくなり、且つソ連の参戦がなくとも、日本は降伏する事態に立ち至つたので、アメリカはソ連の参戦をまたず、寧ろ日本の戦後処理の得策の面からも、ソ連抜きで日本攻略を実現したいと思うようになつて来た。

よつて、原爆実験成功的の僅か一週間後の七月二十四日に、既に原爆投下の命が出さ

れ、八月三日頃に実施の予定であったという。それが天候の都合で、第一回の投下が八月六日に広島で行われ、つづいて八月九日に長崎に投下されたのである。

「それは、第三次大戦最後の軍事行動であったというよりは、むしろ、目下進行しつつあるロシアとの冷たい外交戦争の最初の大作戦の一つであった。」という、イギリスのノーベル物理学賞受賞者である、プラッケット博士の発言によつても、裏付けられるのである。

しかしさう連は八月九日、遂に対日宣戦を布告した。日本の軍部はこのソ連参戦によつて、一挙に和平に傾いたのであつた。

終戦の詔勅が聞きとれなかつた軍人は、激励のお言葉と感違ひして、一層の決意を新たにしたことは先に記した。敗戦の報が流れた時、西部軍司令部では中央を抜きにして、九州帝国独立による本土決戦論を披瀝したほどであつた。しかし時の流れとともに、復員また復員と、部隊が解散するにつれて、戦争に対する情熱はうすれて行き、人々は皆貧困の生活へと足を踏み入れて行つたのである。

### 三、永井博士のこと

昭和二十年十月十日、残務整理を終えた私は、軍隊毛布一枚を貰つて復員した。

「速かに元学に復帰せよ」という命令であった。戦犯の汚名をまぬがれるために、軍人の階級を剝脱し、学生の身分としての復員であった。

家に帰つてみると、九月二十九日付の卒業証書が郵送されていた。軍服姿の写真こそ残つてゐるが、六ヵ月間の軍隊生活は、遠い過去の夢にすぎなくなってしまった。

復員して初めて、八月九日の新型爆弾が原子爆弾であったことを知つた。今後七十五年間は、広島及び長崎には草が一本も生えないといふ。多くの師が、友が、知人が原子爆弾の犠牲になつてゐた。同窓生の多くが軍隊にとられて生残つてゐるのに、徵

兵検査に落ちて大学に残つていた級友は、すべて犠牲者となつた。たまたま生残つてゐると聞いて訪ねた友は、白血病に侵されて瀕死の状態にあり、旬日を経ずして死んでいた。またある友は元氣ではあつたが、背中一面に硝子の破片がはいつてゐる

を見させてくれた。その友の話によると、原爆が落された時、向い合つて碁を打つていた二人のうち、壁に過ぎられて坐つていた者は助かり、硝子戸越しに閃光の直射を受けた者は即死したという。話を聞くだけでも、恐ろしい原子爆弾の威力である。

その後、私は福岡市内に就職し、そして結婚した。五年が空しく過ぎ、昭和二十五年の秋に久し振りで父の墓参に帰省した。すっかり変つてしまつた長崎がそこにあつ



た。被災地だった浦上は、道路の整備が出来あがり、医大に通ずる登り口が判らなくなつていて、遂に大学正面だった場所を、探し出すことが出来なかつた。

私は爆心地に行つてみることにした。そこには、「長崎の鐘」「この子を残して」「ロザリオの鎖」など、数々の著作を書き続けておられる、旧師永井隆先生が住んでおりれるのを知つてゐたからである。如己堂と名付けられた先生の住居は、昔と違つて広い舗装道路に面していた。昔は大学の運動場から純心女学院の側を通り、細い烟

の畦道を通つて、先生の家に行つたものだつた。今は観光バスが横付けになるのである。友人の家もこの付近にあつたが、すつかり地形が変つていて、見当もつかないようである。

先生は病臥の体を少し起して、何度も、「よく訪ねてくれた」と礼を云われた。狭い二畳の部屋には、多くの書籍が枕許につみあげられていた。小さい女の子が側にいた。カヤノちゃんである。まだ四つか五つではなかつたかと思う。余り長居してはと思い、暇乞いをすると、「あとでお札状を出します」と云われる。「御病中ですからそれは及びません」というと、「最近は訪ねてくれる人が多くて、札状を出さずにいると、色々と陰口をいう人が多くなりましてね」と、淋しい笑顔であった。そして旬日にしてお札状が届いた。その中に墨絵のカヤノちゃんの姿がはいつていだ。今でも私は大切に保存している。

明けて昭和二十六年五月一日、先生の訃報を新聞で知つた。

「われは無益のしもべなり。なすべきことをなしたるのみ」の言葉を残して――。

原子爆弾の名が残る限り、先生のお名前も又永遠に残るであろう。

(四八、四、二八)

## 黄色の熱線を見た

新居浜市星越町一五一一九  
昭和二十年付属医専卒業

日 高 健 博

長崎原爆の惨状については、すでに幾多の報道によつて明らかにされておりますが、このたび恩師調名譽教授から、「忘れな草」への投稿の依頼があり、生き残りの一人として、少しでもお仕事に協力したい一念から、当時の私の体験の記憶を、断片的に綴り合せながら、筆をとつた次第です。

私は昭和二十年三月に、付属医専を仮卒業した後、第一外科教室に残つて勉強する

ことになりました。多くの同窓生諸君は、軍医学校に入學したので、学内に残つたのは、青木（伸夫）、木田橋（良道）、清田（和之）、樋渡（俊夫）、野村（劉有德）の諸君だつたと思います。

皆それぞの教室で、元氣に臨床の勉強を勵んでおり、ときどき顔を合せては若き人生の希望を語りあつたのですが、悲運にも原爆に斃れて今は亡く、しかも野村君以外は最後の様子さえ判らない。無念というより外はない。当時の諸君の顔を瞼に描きながら、ただ涙するのみ、嗚呼。

当時第一外科では、医局の先生方が皆出征されて、残つていたのは調教授の下に、木戸（利二）助教授、学部仮卒業の佐藤（克巳）先生、京城大学卒の藤野（利夫）先生と私の五人だけで、目のまわるほど多忙を極め、特に教授と助教授は診療に、教育に、超人的な活動をされていましたが、何もわからぬ私達は、ただ右往左往するばかりでした。

戰局の不利と共に、長崎も空襲を受けるようになり、二十年四月には、長崎駅及び大波止の被爆負傷者が病室に溢れ、学生まで召集して徹夜の治療が続きました。八月一日には、二五〇キロ爆弾六個が付属病院に投下され、学徒隊員の中三名がその犠牲となり、中一名は股動脈をやられて、出血多量のため虫の息でかつぎ込まれましたが、懸命の治療も空しく、間もなく息を引きとりました。たしか医専三年の永見（幸夫）君だつたと思ひますが、あたら将来有為の青年学徒でありながら、國の為とはいえ、一瞬にしてあえない最後をとげたことが、私にはたまらなく可哀想でなりませんでした。と同時に、病院と知りながら爆撃を加えた敵の非道に対する憤りが、ふつぶつと胸に湧き上つてくるのを、どうすることも出来ませんでした。聞けば彼は病棟の屋上に立つて、防空監視中に被爆したこと、八月六日に行われた大学葬の際に、遺族に渡された賞詞にも、「名譽の戦死を遂げ、医学徒の龜鑑と認む」と書かれていましたが、全くその通りで、戦死以外の何物でもないと私は痛感しました。

さて八月八日の大詔奉戴日には、広島の原爆被害状況をつぶさに見て帰学された角尾学長から、身の毛もよだつようなお話を聞きましたが、それが原子爆弾とはつゆ知

らず、ましてやその翌九日に、長崎までが同じ運命に陥ろうとは、神ならぬ身の知る

由もありませんでした。

原爆の落ちた当日、私は午前十時半過ぎから、木戸助教授、看護婦の阿部（ヨシエ）君らと一緒に、外科病棟の地下室を改造した臨時病室に降りて行き、いつものように、包帯交換をやっていました。そこにいた患者は六名ぐらいだったと思います。

患者の処置もすんで、部屋を出ようとしましたが、ふと思つて、昨日虫垂炎の手術をした子供の容態が気にかかり、かがみこんで腹部に手をあてた途端に、異様な物音とともに、黄色の光線の雨が、あたかも夕立のように窓から降り込むを見ました。その色は今も尚あざやかに、私の網膜に焼きついております。後になつて考へると、それが何千度という高熱と、恐ろしい放射能をもつた原爆の閃光だったのです。

私はその瞬間、強烈な爆風に吹きとばされたのか、本能的に身を伏せたのか、はつきり覚えていませんが、誰かの叫び声で気がつくと、私は地下室の床の上に、うつ伏せになつていきました。部屋はぼこりでうす暗く、何が何だかさっぱり判らないままに茫然としていましたが、部屋が明るくなるにつれて、少しづつあたりの様子が解つて来ました。

見ると部屋は雑然としていて、前になかつた色々な物が散らばっています。患者はガラスの破片などで怪我をしていましたが、幸に大したことではなく、ただ看護婦の阿部君の頬に、口角から斜上方に、一〇センチにも及ぶ深い切創が、大きく口を開いていたのに驚きました。阿部君は怖かったのか大声だ泣いていましたが、消毒してやろうにも材料がどこかへ吹きとんで、どうすることも出来ません。それよりも驚いたことは、どこから飛んで来たのか私の後に、二抱えもある大きな手洗鉢がころがっています。これに直撃されたら勿論命はなかつたのでしようが、幸運にも右手の擦過傷だけですんで、ホッとしました。

私達が地下室に入る時、そとへ出て行つた人があります。その人は、庭園を散歩中にある光線にやられたのか、皮膚が真黒に焦げ、ふらふらと部屋に入つて来るなり、ブッ倒れました。名前は憶えていませんが、兵隊で、空襲の負傷で入院中の青年でし

た。多分そのまま死亡したのではないかと思います。

私達が地下室から脱出した頃には、既に木造の建物が燃えており、庭先にあつた放射線教室の解体材木にも、火がついていました。それを避けながら裏の丘へ駆け上つたのですが、途中で角尾学長が誰かに背負われて来られるの出会いました。見ると学長はぐつたりとなっておられ、背負っている人も、大変疲れているように見受けたので、私が代つて丘の中腹まで運びました。学長はいつも元気は全く無く、顔色は蒼白で、時々嘔吐を催された。しかしその時は、まさかお亡くなりになるとは思いもしませんでしたが、矢張り原爆の受け方がひどかったとみえて、滑石の仮救護所に移られてからも、次第に病状が悪化している由を耳にしました。

八月二十一日でしたか、学長が危篤に陥られた時、連絡のために夜の道ノ尾街道を古屋野教授宅まで必死に走りましたが、その時の不安な気持は、今も忘れることが出来ません。その翌二十二日午前十時に、学長は遂に鬼籍に入られました。私達は、目の前が急に真暗になつたような気がしました。学長の追悼式は二十三日の午後、大学病院の外来本館で行われましたが、私は学長の見事な白髪や、常日頃の温顔を瞼に思ひ浮べながら、謹んで御冥福をお祈り申し上げました。

話は又元に戻りますが、原爆当日の午後、私は丘の上で調教授の無事のお姿を見て、嬉しさの余り急に元気が出ました。学長を教授にお渡しし、学内の情況視察のため、丘を下つて基礎教室の方へ向いました。その途中で同級生の野村（仲徳）君が倒れているのを発見したので、診ると腹部がパンパンに膨脹し、無氣力で、脈も微弱、瀕死の状態を呈していました。恐らく院内へやられ、懸命に丘まで脱出して力尽き、倒れていたものと思います。同君は台湾出身で筋骨たくましく、堂々たる体格の持主で、病気などで死ぬような人ではなかつたのですが、原爆には勝てず、悲運に斃れたことは真に残念でした。

基礎教室を行つてみると、全域が猛火に包まれて近づくことが出来ず、避難していく人影も見えなかったので、恐らく全滅したに違いない、と考える外はありませんでした。調教授の御令息も基礎教室で受講中と聞いたので、その状況をありのままに報

告すると、そうかと一瞬眼を伏せられただけで、あとはまた毅然として、救助活動の指揮をとつておられた先生の御胸中を察すると、私は最早や何とも申し上げる言葉もありませんでした。

また、今は亡き永井（隆）先生が、頭に包帯を巻き、杖をつきながら、懸命に指揮しておられた悲壯なお姿も目に浮びます。どのくらい時間がたつたか、着ていた白衣もズボンもぼろぼろに破れ、時計もどこかへ吹きとんだので、正確な時間は判りませんが、病院の火事も下火になったので、医專三年の岩永（祐一）君と一緒に、病院内を検分に行きました。確か精神科の病室だつたと思いますが、看護婦が一人倒れて錯乱状態に陥り、大声に泣き叫んでいるのを見ました。別に外傷もないのに、「もう大丈夫だ、しつかりしなさい。」と励ました。だが、その人はその後どうなつたか、火災の必配はなかつたので、多分助かつたとは思いますが、名前が判らないので、その後の消息は知る由もありません。

屋内は余熱でまだ熱かつたので、全部は見ませんでしたが、見た範囲内では、死人も負傷者も見つからなかつた。第一外科の医局は完全に焼け落ち、同窓の西谷（孝）君の御母堂に作つて頂いた弁当箱が、私の身代りとなつて真黒に焦げていたのが、印象的でした。

かくて日没を迎える、悪夢のような夏の一日は終りましたが、朝から飲まず食わずにあつたにも拘らず、少しも空腹感は覚えませんでした。ただ激しい口渴と疲労で、ぐつたりとなつたことだけを憶えています。

暫らく休んだ後、下宿先の西谷君の家族が心配になつたので、岩永君と一緒に金比羅山を越えて、新中川町に帰りました。疲れた体を互に励ましながら越えた山中には、猛火に追われて犠牲となつた若人の死体が、多数横たわっていました。

西谷君の家は幸に焼けてはいなかつたが、瓦はとび、窓ガラスは破れて、惨憺たる有様でした。御両親は無事で防空壕に避難しておられたが、妹さんが学徒勤労隊で、朝から三菱の工場に行つたまま帰られぬこと、一晩中寝もやらず心配しておられたが、夜明方に下腿骨折の重傷を受けながら、九死に一生を得て帰宅されたので、皆

ホッとしました。

以上が二十八年前の原爆被爆の状況です。あの恐ろしかつた破壊と殺戮の一日を思い浮べながら、私は生き残りの一人として、世界の人類が二度とあのような過ちを繰り返さないよう、心から懇願しているものであります。

終りに、貴い犠牲となられた幾多の恩師、先輩、同窓、後輩の御靈安かれと、衷心より御冥福をお祈り致します。合掌

（四八、三、二六記）

## その時私は

長崎県南高来郡加津佐町  
昭和二十年付属医専仮卒業  
森 雅 彦

### 一

昭和二十年六月、軍医学校を卒えた私達は、九州の各部隊に配属されるべく、福岡の西部軍司令部に出頭したが、その日は申告だけで、別命を待つことになり、九大前の旅館に投宿した。その夜、B29の激しい空襲を受け、司令部はもとより、市の中心部が灰燼に帰した。こうなると別命も何もあつたものではない。どこからどうして出た命令なのか、兎に角私達は久留米の西部第百四十八部隊（通称ヨン・パチ）に落着くことになつた。この部隊でも正式の命令は受けていなかつたらしく、長時間待たされただけで、急遽、被服倉庫らしきものを空け、私達はそこに収容された。

私達を引受けるハメになつた中隊でも、厄介な居候をかかえ、ただ飢えない程度に食餌を運んでくれるだけで、全くの継子あつかいである。仕官口のない私達、所謂浪人軍医団は、こうして血に飢えた蚤や虱の大群と同居し、毎日無為徒食の生活を送るハメになつた。来る日も来る日も、何もすることがない。飼つてる虱の大きさを自慢したり、競走させたり、実にくだらぬ時を過すことで、三度のメシがいただけの結構な身分だと思ったが、次第にイライラするようになつて來た。何もしないということ

が、こんなにつらいものだとは思わなかつた。

その日（八月九日）も昼食後、全員ふんどし一つでゴロ寝していた。あわただしい足音が止まると同時に、「軍医殿!! 全員医務室前に集合とのことであります」。久々に聞く緊張した兵の大声で、私達はやおら起きあがつた。「何事か!!」誰かがどなたの動作に、私達は仕事にありつけることを直感した。

## 二

「ほんと俺みたいな婦人科が、軍隊に引張られたんや」と懸念をこぼしながらも、何となく将校達に調査がられている青白い隊付軍医中尉殿も、今日ばかりは、いつにない緊張の仕方である。整列した私達をひとわたり見廻すと、「この中に長崎出身の者——長崎生れのものは居らんか?」私は反射的に手をあげた。「お前は列外に出る」。列外に出たのは私だけだった。長崎出身は私だけではない。城谷士官も居る筈である。（現在長崎で開業中の城谷勝明氏——その時は長崎に帰つておられた）

「次に長崎の学校出身者、及び近郷の者は列外へ!!」山本、四位、横尾士官等々、五、六名が列外へ出た。列外へ出た私達の人数を、目で確かめるように頷いたあと、中尉は姿勢をあらため、おもむろに命令を伝えた。

「本日正午近く、長崎が新型爆弾の攻撃をうけた。損害の詳細は以下のところ不明であるが、相当の被害が出た模様である」。一同シーンとなる。中尉は全員を見渡して、「あと、節度ある動作で、私達列外者に対し声をあらためた。

「命令!!」列外に出た諸子は、速かに行動準備を完了した後、陸軍病院に到り、そこで長崎の救護に關する別命を待て——以上——御苦勞、解散。云い終ると中尉は、そそくさと医務室内に消えた。一瞬の緊張が過ぎると、私達はただ訳もなく顔を見合せてニコッとした。会心の笑と云えるのかも知れない。

「何かをしなければ」というあせりとイラ立ちの中に過して来た私達にとって、それは又とない仕事である。おまけに、帰ろうにも帰れなかつた懐かしい故郷に行ける

のである。

この百四十八部隊の裏門から道一つ隔てた陸軍病院も、すでに慌しい動きを見せていた。衛兵に来意を告げると、待つ程もなく、「広場の方へ来て下さい」と兵が案内に立つ。「広場」には梱包が山積され、衛生兵・看護婦がむらがあり、編成が進んでいる。私達は小郷中尉の指揮下に配属され、約八十名位の編成を終つた。久大線のところ小さな駅から貨車に乗り、鳥栖に着いた時は既に夜も更けていた。

長崎方面から来た汽車からは、被爆した人々が何人も降りて來た。勿論軽傷である。その人達の話では、一様に直撃弾を受けたという。受けた場所がまちまちで、その人達の話を綜合すると、相当広範囲に爆弾がバラまかれたことになる。しかし音は一発、「ピカッ」と光つたかと思うと、ドーンと大きな音がして、目の先が真暗になつて——あとは夢中でした。どうも爆弾の数と音が合わない。しかし直撃弾を受けたのでは、他に落ちる爆弾の音も聞えはしまいから——。

大学耳鼻科の外来で被爆したという人をとつつかまえて、私達は根掘り葉掘り聞いた。私達の矢継早の質問に、興奮が先に立ち、具体的な状況説明が出来ない。要するに、あの大学の外来に直撃弾を受けたことだけは、間違いないらしい。軽傷とは云え、被害者を直接見たことから、私達は次第に救護へのきびしい緊張感を、ひしひしこじはじめていた。

午前一時（十日）を過ぎた頃、私達はやつと車中の人にとなつた。「さつきの人達の話をどう思う?」お互にそれぞれの意見を出しが、被害の状況が想像つかない。「大牟田の時よりもひどいようだ」というのが、私達の一致した考え方である。

夜が白む頃、私達の汽車は山間を縫つて、やがて右手に海を見る海岸沿いを走る。なつかしい大村湾である。学生の頃、級友がヨットで遭難し、その遺体を求めて幾日も歩きまわった海岸線である。ほんの僅かの時間、私はその頃の自分に帰つた。

「森士官!! ちょっとこっちに来てくれ。」

小郷中尉の大声で、私の回想は中断された。兵と梱包をかき分け、中尉の前に直立

「お前は大村で降りて、陸軍病院に行つてくれ。——そこで兵と看護婦を若干名もらつて来い。」

「ハイ、そうします——しかし連絡はつけてあるんありますか？」

「こんな時、いちいち前もつて連絡がつけられるか。兎に角行つて貰つて来い。」  
中尉は何故か不機嫌である。私も馬鹿な質問をしたものである。大村で下車した私は、テクテクと陸軍病院まで歩いた。

### 三

大村陸軍病院の衛兵に来意を告げると、暫らくして某少佐殿の前につれて行かれた。久留米の陸軍病院から小郷中尉に引率されて来たのだが、私だけが当院から兵と看護婦を貰い受けて来いとの命令で來たことを告げると、「ここは大村病院だ。久留米に分けてやる兵隊などおらん」と大喝された。ここも少佐もイラ立つてゐる。

「ハッ——それでも小郷中尉殿から——」

「小郷中尉など知らん。又そんな連絡など受けとらん。」

と取りつくしまもない。小郷中尉が少々うらめしくなる。それでもどうしたものかと、そのまま立つていると、少佐殿は傍の兵に二言三言何か話しかけていたが、急に振り向いて、「お前はどこの出身か?」とかれた。

「長崎であります。」

「お前は長崎か。それは都合がいい。」

今までの固い表情をくずして、

「今こちらでも山口士官を長とした救護班を出すところだが、山口士官が長崎のことよく知らんのだ。お前も一緒に行け。」

私は少佐の勢に押しまくられた形である。私は兵の案内で、編制中の山口士官の所を行つた。それにしても浪人軍医はあちにやられ、こっちにまわされ、哀れなものである。

山口士官は小柄で、鼻下に白毛まじりのヒットラー髪をちょこんとつけた、五十が

らみのうとなしい人だった。数カ月前に召集された軍医予備員で、全く軍隊ずれのしない地方人そのものである。

「百四十八部隊の森士官です。今編入を命ぜられました。宜しくお願ひします。」

「山口士官です。助かりました。あなたは若いからお願ひしますよ。——私は血を見るのがいやでね。小児科なんです。」

あとの方は小声になりながら、地方人の言葉まるだしで、てれくさそろにニコソとする。大村は長崎に程近いので、何か詳しい情報がはいつているかも知れない。

「被害の状態はどうなんでしょう。」

「大きい声では云えないが、何でも長崎は全滅したらしいですよ。」

「全滅とは!! 急に不安が大きくなる。」

出動の準備万端は軍曹がしてくれる。この軍曹はまだ三十にはなつていまい。軍隊ずれのした男で、私達を屁とも思つていない。彼にしてみれば、私達はたかがヨーチン（軍医、衛生兵等）である。実際、軍隊経験の浅い私達が、頼り甲斐のないのは当然だし、逆に私達にとっては、いさきか瘤にさわるが、全く頼りになる男である。テキパキした彼の指図で、準備は出来た。兵二十名程で、その三分の一は私の希望を容れてもらつた。長崎出身の兵である。

「行軍するんか?」山口士官が軍曹に云う。指揮官が部下に尋ねるもの、おかしな話であるが——。「病院の車は使えんのか。」

「病院の車は出払つて居りませんが、ちょっと待つて下さい。何とかなると思います。」

軍曹は自信たっぷり。どこに出掛けたのか、暫らくして帰つて来ると、

「民間のトラックを徵発して来ました。すぐ来るでしょう。」

私は少佐の勢に押しまくられた形である。私は兵の案内で、編制中の山口士官の所を行つた。それにしても浪人軍医はあちにやられ、こっちにまわされ、哀れなものである。

謙早から長崎へ通ずる国道の両側は、見事な被災者の行列である。延々長蛇の列とはまさにこの事を云うのである。とぼとぼとした足どり、私は今までにこんな長い

惨めな行列を見たことがない。

「頑張れよ!!」「じつかりせエーよ」。兵達は車上から声をかける。その声援に全く反応を示さないもの、又反応を示しても、それは緩慢な動作で、うつろな感じである。ほんとうに疲れ切った姿である。

「軍曹!! 隊医笈は幾つ持つて来た?」

「一つです。」

「なに、たつた一つか?!」

「軍医殿、幾つ持つて来ても、大したことはないですよ。箱ばかり大きくて、中味

は大したもののははいつてないですよ。」

「何がはいつとる?!」

「ホータイ材料が少々と、ヨーチン位のもんです。」

「そつちにある袋は?」

「アー、これですか。食糧ですよ。米とか、カンパンとか——炊事で一寸さしくつ

て来た分です」。これは給与外のものらしい。

軍曹は手柄顔である。なるほど私達は食糧のことについては、全く気をつかつてい

なかつた。やはり馴れたものだと感心する。それでも救護に向う我々に、医療品

がないとは——。私が持つているものと云えば、手のひらに載る弁当箱などの軍医携帯袋一個だけである。ピンセット、メス、各一個、持針器兼ペアン一個等々、今あれ

ば、往診先で小切創の縫合ぐらいは出来そうなものばかりであった。

長崎に近づく程、被災者の列はその密度を増す。独力で歩けないものも沢山見受けられる。トラックも時には、そのため徐行を余儀なくされる状態である。

トラックはやがて日見トンネルにさしかかる。トンネルは片側通行みたいに、路幅がせまくなっている。トンネルの片側が、工場にされていたとのことである。

水源池を右手に見ながら螢茶屋にはいると、家がビッシリ建ち並んでいるではないか。全滅を覚悟していた私には、それが一瞬夢のような光景にうつった。この様子だと、爆弾は浦上方面に落されたに違いない。そうだとすると、私の家も無事な筈であ

る。ああ良かった、助かった——。

しかし、それも束の間の優い喜びでしかなかった。車が新興善小学後前に来ると、見渡す限り家がなくなっている。これでは恐らく、両親も兄弟たちも生きてはいない。——私の家のあつた所は跡かたもない。

トラックを県庁下の警察署に止めた。私達が警察に用事があった訳ではない。軍曹が止めさせたのである。軍曹は私達に一寸待つてくれ、という意味の合図を目でおくと、焼けて外郭だけになつた警察署に這入つて行つた。私は不審に思い、

「山口土官殿、ここで何かあるんですか。」

「いや別に——、とにかく軍曹が止めてくれと云つていたんで——。」

やがて出て来た軍曹に、「どうしたんだ!」山口土官と私は同時に声をかけた。

「ガソリンを貰うように交渉して来たんですよ」。ガソリンはどうにか確保出来るとのこと。軍曹のおかげで、トラックはその後充分に活躍出来た。

大波止を経て長崎駅前に出で、なつかしい電車通りを井樋ノ口に向う。アメのようになに曲つたガスタンクの鉄骨、倒れた電柱、路上は散乱する瓦礫と電線などで、車も思うように走れない。しかも向うところ建物らしい建物もなく、この分では駆から道ノ尾が直視出来るほど、視野をさえぎるものがない。

井樋ノ口の兵器製作所も、曲りくねつた鉄骨と、めくれたトタン板という残骸を残すだけであるが、この中に救護所が設けられ、兵隊と負傷者が右往左往している。私はここで車を一時停車させ、小郷中尉をさがした。私は山口土官と行動を共にするつもりであるが、一応そのことを報告しておかなければならない。

やつとのことで中尉を見つけ出し、大村からここまでの大村を告げると、中尉は聞いているのか、いないのか、「アー、そうか」という返事で、他の事に気をとられている様子である。私はいささかムツとして、「自分は大村の山口土官と行動を共にします」と大声で叫び、拳手の敬礼をして戻りかけた。一寸の間をおいて、私を大村陸軍にやつたことを思い出したのか、

「森士官!! 長崎にはあちこち救護所が開設されているらしいから、お前は時津と

かいう所に行け」という中尉の声が聞えた。「ハイ、そうします。」私は歩きながら返事をして、車に戻った。

「時津に行くことになりましたよ、山口土官」

「時津ってどこですか——いや何処でもいい。とにかく長崎は知らんから、よろしくやって下さい。」

動き出したトラックも、時々は止つて障害物を取り除かねばならない。障害物は瓦礫ばかりではない。大小の動物の死骸をはじめ、よろめく被爆者も亦そつである。

見渡す限り焼野原、赤茶けた山肌、畠、褐色の瓦礫の山、黒焦げの樹木、原形を止めないコンクリートの廃墟、それは実に素漠とした茶、黒、白の三色である。へし曲つたあの煙突、外郭を残して空洞になつた大学病院、片足の山王神社の鳥居、遠くに赤煉瓦の神学校も見える。西を見れば、私の出た中学校（今の西高）は跡形もない。よく張り合つた鎮西中学（今の活水女子高校）は、窓孔を残したコンクリートの塊である。

突然車が軋むような音をたてて急停車したので、私達は将棋倒しになつた。「どうしたんだ!!」起き上つてみると、ボロをまとつた女が髪をふり乱して、トラックの前に立つてニッと白い歯を見せていて。窓から身体を乗り出した運転手が、「どけ!! どけ!!」と手まねを混えて大声でとなるが、女はうつろな目をして笑うばかりである。被爆して気がふれたに違ひない。私は兵隊に脇へつれて行くよう命じて、「手荒にするな」と声をかけた。さすがに路上に人間の屍体はなかつたが、壊れた壁の陰とか、家の土台石の傍とかに残された幾つかの屍体を、車の上からでも見ることが出来た。

大橋では川の流れが、夥しい屍体で堰き止められているのを見た。又、木の枝で臀部を串さしにされて、ぶら下つてゐる子供を見た。兵に命じ枝を折つて降してみたが、すでに死んでいた。恐らく一階あたりに居て、爆風で吹き飛ばされたのである。時津に運び、荼毘に付した。

夕暮迫る頃、私達は時津小学校に着いた。被爆者はすでに各教室に溢れ、地元の

医師や婦人会の人達により、治療や看護を受けている。私達とその人達とはお互に、別し難い化物のような、全身火傷の女を診た。この学校の先生だそうで、二十二、三才だとのこと、着ていた衣服も殆んど焼け、僅かの布片が、焼けた肌にこびりついている。時々うめきが途切れると、誰かを呼ぶようでもあるが、私達には何を云つているのか解らない。今朝トラックで運ばれて來たとのことである。婦人会の人の話では、こうしてずっと生徒の名を呼んでいるとのことである。昨日男の子三人を連れて長崎に行き被爆したこと、その三人の男の子の行方はまだ不明である。激しい

表皮を失つた真紅の肌と、点在する巨大な水疱、全身が浮腫状にむくみ、人相も判三才だとのこと、着ていた衣服も殆んど焼け、僅かの布片が、焼けた肌にこびりついている。時々うめきが途切れると、誰かを呼ぶようでもあるが、私達には何を云つているのか解らない。今朝トラックで運ばれて來たとのことである。婦人会の人の話では、こうしてずっと生徒の名を呼んでいるとのことである。昨日男の子三人を連れて長崎に行き被爆したこと、その三人の男の子の行方はまだ不明である。激しい

苦痛の中、朦朧とした意識の底で、なお生徒の名を呼びつづける。

こぼりついた布片をとり、ぬるま湯で創面をふき、有り合せの種子油を塗つて、ガーゼと包帯をあてる。これが、この人が初めて受ける最上の手当である。我々は痛み止めなど氣のきいたものを持たない。哀れな救護班である。無残というより外はない。この女教師は数時間の後、息を引き取つた。

左額から右下顎角にかけて一直線に走る、深い切創を診た。眞白の骨と歯が露出し、左眼球がとび出したように見え、ローソクの光に照し出されるその顔は、何とも不気味である。民家から貴い受けた黒木綿糸で縫合する。勿論麻酔なしである。この男も二日程して破傷風を起し死亡した。創は膿だらけで、蛆がわいていた。

ガラスの小破片の剔出は、衛生兵にその要領を教え、手分けして作業に当たらせた。「取つても取つてもきりがないです」。兵隊はそう云う。本当に、一人の患者で十個や二十個はざらである。

導尿も亦一仕事だつた。「軍殿医!! 孔が解りません。来て下さい。苦しがつています」。行ってみると、女の火傷で腫脹変形が甚しく、なるほど尿道口がどこにあるやら見当がつかない。衛生兵は見てゐるし、ローソクの火は暗い上にチラチラする

し、患者は呻くし、私はあせるばかりで、脂汗<sup>あぶらあせ</sup>で眼がかすむ。結局導尿をあきらめ、穿刺によって排尿したが、「さすがに軍医殿」と衛生兵。褒められているのやら、冷やかされているのやら、何ともお粗末な話である。

膝から下がくだけて、ボロボロの皮膚片で僅かに繋がっている子供を診た。切斷には民家から借りた鉛<sup>のこぎり</sup>を使つた。変な切れ味だったことを思い出す。

#### 四

徹夜の眼に、十一日の朝日がまぶしかった。今日から、連れて来た長崎出身の兵隊を家に帰そう。家族がどうなつているか――。

この計画に山口士官も快く同意してくれた。「こちらの事は四位士官とやつていてから、心配しなくてもよい。君もゆつくり探して来なさい」。本当に有難いことである。

午前七時頃、衛生材料収集の為という名目で、軍曹と兵五名をつれてトラックを出す。軍曹が衛生材料を幾らかでも集めてくれるだろう。長崎駅前の片隅のガラクタの陰にトラックを置く。兵は本当に衛生材料収集と思つてゐる。

「家族の安否をしつかりと確かめて來い。憲兵に会つたら、薬品収集とか救護活動

中とか、要領よくやれ。十七時には必ずここに集合、よし、解散!!」兵は思ひぬ命令に一瞬キヨトンとした様子であったが、「〇〇一等兵、いつて参ります。」「××二等兵、行つて参ります」。――元気よく散つていった。

私は五島町・今町を経て、女子商業の石垣の上に立つ。賑町・紺屋町一帯は完全に焼失し、家々の基礎石か壊れた壁の一部が、点々とあるだけである。私の家は、この女子商業横の坂を下り切つた所にあった。確かに見覚えのある歯科治療台が、焼けただれて転がつてゐる。

さて、家族をどうやつて探せばよいのか、しばし途方にくれる。誰か知つた人に会うかも知れない。私は漠然と電車通りに向う。途中に町内会長宅の黒壁が残つていたので、何ということなく中を覗いてみたら、そこに三人の男が、テンデに瓦礫に腰を

おろしてしゃがみ込んでいた。話している風でもなく、銘々にうつむいて、非常に疲れた様子である。この人達に聞けば、或いは家族の行方が解るかも知れない。私はゆっくりとした足どりで、私に一番近い左端の男の前に立つ。その男は人が立ち止つた氣配を感じたのだろう。緩慢な動作で、私の足許の方から次第に上方に視線を移し、目と目が合うと、つぶやくように、ただ「兵隊さん――」とポツンと一言、あとはジッと下から見上げている。無気力な眼で――。他の二人の男も私をチラッと見たようだが、すぐにまた元の姿勢に戻り、無関心をよそおう。肉体的にもだが、よほど精神的に参つてゐるようである。

「チヨットとお尋ねしますが――」。私はやや遠慮がちに、家族のことを聞いてみた。前の男は、「サマー」と不案内のようにある。

「そうですか。失礼しました」。やっぱり駄目か。私は誰とともに三人に挙手の札をして、一步一歩戻りかかつたが、今札をした時、チラッと顔を上げた三人の中の左端の男の顔が、何となく父のような気がして、又ふり返つて見ると、その男は又もとのよううつむいていた。瞬時の間に、それが父であることを確信していた。私はその男の前に立ち、「お父さん!!」と叫んだ。あげられた顔は間違ひなく父であった。父はまだ半信半疑の表情である。

「雅彦です――雅彦ですよ」。私もやがみこんだ。長い時間のように思える。私の顔をマジマジと見つめていた父の顔が、急にゆがんだようになり、「オー、雅彦か?」ホッと吐息をつくような云い方で途切れた。子供子供した学生服の息子の顔しか知らない父親には、軍服を着た髭面の男が、息子とは思えなかつたのも無理はない。私達はどうちらともなく固く手を握り合い、ただ訳もなく、「よかつた!! よかつた!!」を連発した。

こんなに簡単に父に会えるとは、夢にも思わなかつた。この上もない幸運である。神信心のない私なのに――神の導き――という考えが、頭の中をよぎつた。本当にそうなのだろう。

「お父さん!! どうして此處に?」私の矢継早の質問に、父はポツリポツリと話し

出した。被爆から今までの、過ぎ去った長い長い時間を、噛みしめるように——。

いつも警戒警報と同時に、家族は風頭山の防空壕へ、父は新興善の救護所へ行くよう決めていたので、昨日もそうした。今日は雅彦が帰つて来るのでないかと思つて、救護の合間をみてはここで待つていたのだ、とのことである。

父には此處で休んでいるように云い残して、私は風頭山に急いだ。風頭山の壕と云

つても広い範囲に広がっているので、とにかく壕を見付け次第、風ふぶしに聞き歩いた。うんざりするほど壕から壕を廻り歩いたあげく、「森さん達は活水の防空壕に行くようなことを云つとられましたよ」という情報を得て、私は父の所に引返した。父は居なかつた。新興善を行つてみると、父は救護活動中であつた。「活水の壕に居るらしいよ。今から行つてみるから——皆元気らしいよ。」

「そうか、よかつた。ワシも行きたいが、この有様だから——。お前確かめて来てくれ」。少し元気が出たようである。一寸間をおいて、「輝彦はどうしたかな」とつぶやくように小さな声でいう。輝彦とは私のすぐ下の弟で、長崎商を行つてゐる。

「鳴滝方面は大丈夫だよ。殆んどやられていないから——。」「学校じゃないんだ。動員で兵器製作所を行つてゐる筈なんだ。」

私は直感的に、これは駄目だと思った。あの惨状ではとうてい生きてはいまい。  
「大丈夫だよ。僕が探してみる。」

(輝彦は兵器で被爆、片脚が梁の下敷となり、抜け出すことが出来なかつた。そのうち火がその脚にまで達し、ズックの靴が焼けてくるのをどうすることも出来ずいた時、通りかかった人から助けられ、焼けた素足で終戦まで家族を求め歩いたとのことである。幸い原爆症も出ず、現在元氣である。)

活水裏の崖につくられた壕は、数えるほどしかないので、すぐに見つかった。輝彦を除き全員無事で怪我もない。ここでも最初は私ということが解らなかつたようだ。母は茫然としていたが、急に私にしがみついて泣き出した。父も元氣で救護活動をつづけていることを告げ、私達は改めて助かつたことを喜び合つた。母や姉弟が昨日からのことを見舞した口調で話してくれるが、話が飛び飛びである。その都度、「よか

つた」「よかつた」と相槌を打つ。何はともあれ、私達一家は幸運に恵まれている。本当に何ものかに感謝したい気持である。

私は時津で救護活動中であることを話す。明日も必ず来ることを告げ、その時食糧も持つて来ることを約束して別れた。別れ際に、「初め憲兵さんかと思つて、怖かった」と云つて母が笑つた。

私はすべきことが沢山あるようで、そのくせ何にも手につかないへんな気持を味いながら、新興善に引返した。新興善もテンヤワソナヤの目まぐるしさである。校庭の片隅では既に屍体が焼かれていた。父との連絡もとれ、明日を約束して別れた。

駅に戻つたのは午後四時頃ではなかつたらうか。トラックがない。兵隊も一人も帰つて来ていない。五時が刻限だつたらまだ一時間ある。私のように運よく見つかなかつたのかも知れない。それにしてもトラックがないのはどうしたことか。少小心配である。さては軍曹かなと考えてみる。

私は瓦礫に腰をおろし、広場を行き交う人々をぼんやり見つめながら、今朝からのことを思い浮べ、又口に出して、「よかつた、よかつた」とつぶやいた。

やがて五時近くなり、四名の兵が次々に帰つて來た。明るい顔である。うまく家族とも会えたらしい。五時を少しまわつた頃、トラックが帰つて來た。やはり軍曹である。「軍曹!!」どこへ行つていたのか、心配したぞ。」やや詰問するような私の声に、「軍医殿、アレを見て下さい」と、荷台を指さす。見ると缶詰が小山のようになまっている。「どうしたんだ、これは?」

見物旁々<sup>かたがた</sup>という言葉はこの際語弊があるが、とにかく軍曹はあちこち歩いてみたところ——話の途中で、「ひどくやられたものですネ、これが一発の爆弾でしょうか」など感想を混えながら——五島町までやつて来ると、人だかりがしているので覗いてみた。扉のこわれた倉庫に缶詰がぎつりつまつてある。これはいいものを見付かたというので、トラックをまわして積んで来たとのことである。夥しい数量である。

「それはよかつた」と返事をしていいものかどうか。私はあいまいに、「そうか」という返事だけをした。

火事場泥棒という後ろめたさもあるし、又そんな非常の時、しかも私達だけ食べるのではなく、被災者にもやるんだから、という云い訳めいた考えもあった。

軍曹はちょっと私の返事に不満そうな顔をしたが、私は無視した。その腹いせか、「〇〇一等兵はまだか」と、四人の兵を咎めるような軍曹の声。「半まで待とう」。

私はとりなす。しかしどうとう五時半になつても帰つて来なかつた。歩いてでも時津まで帰つて来るだろ。私はそれを願いつつ、「出発!!」を命じた。軍隊で帰當時刻を切るということは、大変なことである。

八千代町附近まで来ると、トラックに向つて手を振りながら走つて来る一人の兵隊がある。私はトラックを止めた。〇〇一等兵である。汗でビショ濡れになつてゐる。

彼は窓際に走り寄ると、「乗せて下さい。時津へ行きたいんです。途中まででも――」と息を切らせる。トラックは丈が高いので、運転手しか見えないのだろう。私には気が付かない。私は運転手の方に顔を出して、「〇〇一等兵、早く乗れ」。やや不機嫌な顔をつくつた。兵はびっくりして、「軍医殿、遅れて申訳ありません!!」と氣を付けの姿勢をとり、肩で息をしている。やがて運転台の屋根がトントンと叩かれ発車した。あとで軍曹からコップドクしかられたらしい。気の毒なことに、あの時間では遂に家族の安否を尋ね出すことが出来なかつたといふ。

帰りつくと、一休みする間もなく仕事が待つてゐる。夜になると、「哀号!!」「哀号!!」の声が遠くからでも聞かれる。「朝鮮人をどうかして下さい。うるさくて、カニンにきわる」という日本人。あの「哀号」は患者だけでなく、いらだつた私達の耳にもりきれない。比較的多数の朝鮮人が居て、一人が云い出すと、次々に伝染して合唱になる。

苦痛に耐える一つの方法かも知れぬが、又同族を意識し合うための合図なのか、最初のうちには、「しんばうするんだ」とやさしく云つていた兵隊も、「お前達だけが苦しいんじゃない!! 見てみろ、みんな頑張つてゐるんだ」と、声を荒らげる。遂には、「やかましい。黙らん奴は校庭にたたき出すぞ!!」と本当に怒る。それで暫時は静かになるが、又同じことの繰返しである。

人種差別をすることの良くないことは知つてゐる。しかしその時の私達には、確かにその気持があつた。無言で苦しみに耐えている者を見ると、その「哀号」が無性に腹立たしくなつてくる。ましてや声を出そうにも出せない重傷者を見ては――。

## 五

私は毎日長崎に出た。その都度家族に会い、時には食糧を運んだことは云うまでもない。「この間もらつたあれは、誰々さんに別けてあげた」など、お互が寄つて食事をするらしい。

輝彦の方は探す手だてがなく、ただ歩きまわるだけで途方にくれた。動員であれば顔見知りもなく、どうすればよいのか。私は出来る限り広範囲に歩きまわつた。被災者を最寄りの救護所へ運んだり、食糧を持って行つてやつたり（お握りの炊出しがあちこちでされていたが、それを取りに行けない人が沢山いた）、簡単に出来る手当は、その場でした。水も何回か運んだ。

或る壕では、炭籠のように黒くなつた多くの屍体を見た。又、どうしてこんな所にと思えるような場所で、動けずいいる負傷者も発見した。

大学病院には毎日行つた。腫れあがつた馬の屍体を見た。頭に包帯を巻かれた古屋野先生にもお会いした。水筒の水をおいしそうに飲まれた。調理所と外科病棟の裏の土手に作られた壕では、角尾先生はじめ、高木、山根、石崎の諸先生にもお目にかけた。筑島先生の眼鏡のツルが曲つていたのを思い出す。

基礎の焼跡では、沢山の焼屍体が行儀よく並んでゐるのを見た。見渡す限り、焼け爛れた地肌と人々の呻き――荒寥として、すべてが無慚である。私は夢遊病者のように、ただ大学の構内を歩きまわつた。私は何をしようとしたのだろうか。今思うとその時はただ訳もなく、顔見知りの人々を探し求めていたようにも思える。探してどうする積りもないが、それは痴呆の行動だったに違ひない。あの人、この人に無性に廻り会いたい。またあの建物、この物陰と、「懷かしむ心」がそうさせたのだろう。時津での救護活動は、休む間もなく続けられた。衛生兵とは名ばかり、一般兵と同

様に未教育なので、大した役には立たず、その分だけ私達の負担が大きい。日がたつにつれて、死んでゆくもの、新しく運び込まれてくるもの、顔がかわるだけで、一向に減る気配はない。「あっちの部屋の患者の下痢が止まりません」、「こっちにも下痢するものがいます。」兵からの報告で、下痢患者が増加してゆくのが、心配になり出した。

「山口士官殿——下痢患者が出ていますが、何でしょうか」。災害に伝染病はつきものである。「血便も出るし、赤腫かも知れませんね」。とにかく隔離しなければならない。外傷患者を移動して一室をあけ、下痢患者を収容したが、下痢患者は増加する一方で、遂には隔離など考えられない状態になった。救護所の全員が下痢患者の様相を呈した。その時使用した下痢止めは、主として木炭である。急速に死亡者が殖え始めた。もうお手あげの状態である。

「何か下痢止めを見つけて来ます」。大学に行けば何かあるだろう。大学で目ぼしい教室を次から次にまわって、少々の薬品を手に入れた。これ位の量では焼け石に水のようなものだが、無いよりはましだ。尚構内をうろついていると、誰云うとなく、「重大放送があるから本部に集れ」という噂が流れて来た。

「今更放送なんて——まだまだ薬が不足だ。」探すのが私の仕事である。しかし何となくそわそわした雰囲気がある。人の流れについて吊られて、私もその方に行つてみた。私が着いた時には、すでに放送が終つていたらしく、古屋野先生の顔がチラチラ見えるだけで、何を話しておられるのか聞えない。

「どうしたんですか？ 何かあったんですか」。隣の人聞いてみたが、私も来たばかりで、と要領を得ない。——しかしやがて「終戦」とか「敗戦」とかいう言葉が、あちこちで囁やかれ始めた。

「戦いが終つた——負けた——」。私には何の感概もわいて来ない。暫らくして、「これは大変な事だ」と思った。一刻も早く、山口士官に知らせねば——。

帰りつくと、大急ぎで山口士官のもとに走つた。山口士官は珍らしく士官室にいた。(救護所開設の時、宿直室を士官室としていた)。机の前に坐つていた山口士官

は、私のあわただしい動作を、静かな目で見た。私は私の氣負いを恥かしく思いながら、

「山口士官殿——戦争に負けたらしいですヨ」。小声で云つた。

「そぞらしいですね。」

「知つておられたのですか？」

「確かにことは解りませんが、どうも本当らしいですよ。しかし、この事は兵隊には知らせない方が良いでしょう。今までのようく治療を続けて下さい。」

さすがは年の功で、落ちついていると思った。

私はいつものような手順で、治療を始めた。が時間が経つにつれて、「終戦」という事実は皆んなの間に拡がつていった。確かに情報がない限り、「終戦」を口にしてはいけないことを、私は兵に厳命した。

「終戦」という言葉が風にのつて流れると同時に、「終戦はデマだ。アメリカの謀略だ」という言葉も流れた。これが謀略だとすれば、「終戦」を口にする者は國賊といふことになる。「負け戦」は無念だが、「戦が終る」ということは、何となく待ち望んでいた事のような氣もする。「終戦」の声は次第に小さくなつたが、増えこそすれ消えはしない。何回となく、憲兵が馬で疾駆して行く。「デマだ」「謀略だ」

「哀号」の人達の喜び方が異常であり、又カンにさわる。夕方長崎から小郷中尉の命令を伝えて來た。

「西部軍は最後まで戦う。我々は救護所を開鎖し、直ちに原隊に復帰する。森、四

位の両士官は直ちに道ノ尾に到り、我が隊に合流せよ。」

私には整理する何物もないでの、すぐに山口士官の所に行く。

「山口士官殿、私達は久留米に帰ることになりました。後を宜しくお願いします。大変お世話になりました」。私と四位士官は、今までになく厳正な直立不動の敬礼をして、山口士官と別れた。

下痢と死亡の増加しつつある、一ぱん人手のいる時に、山口士官は二人の軍医を失うことになった。そして、山口士官に残されたものは、新米の衛生兵と、私が今日大

学から貢って来た少量の薬品と、苦痛にうめく夥しい患者だけである。

## 六

鳥栖からの行軍で、何とも云いようのない慘めな氣持を引きずりながら、久留米に辿り着いたのは、もう深更に近かった。兵舎には明りがついていた。各中隊の窓という窓から明りが漏れている。これはいつも見事な光景であった。

「終戦はデマだ!! 西部軍は戦う。直ちに原隊に復帰せよ。」という命令を受け、長崎の救護活動を俄かに中止し、私達は今やつとの思いで、その原隊にたどり着いた。目にしめる窓のあかりが私達を迎えてくれる。

その夜、私達は泥のように眠った。肉体的な疲労もさることながら、より以上に虚脱感と、ひそかに沁みこんで来る鬱々とした安堵感との交錯の中で、私達は眠りをむさぼった。より多くの人々の不幸を代償とした終戦ではあるけれど、「戦争が終つた」という事実から来る安堵感!! 確かに後ろめたさはある。がどうしようもない。死んだ方々には誠に申訳ないが。この安堵感は生理的なものなのだ。

「西部軍は戦う」という。ここ久留米は兵隊の街である。恐らく九州が戦場となつた場合、久留米はその中心地であり、戦闘司令所の置かれる街である。従つて「戦う」ということにも、空元氣ばかりではない或る緊迫感が伴う。しかし「戦うんだ」戦うんだと叫ばれれば叫ばれる程、それは空虚に響く。つい半日前まで、私達はあの惨状の中に居たのだ。原爆の毒気に魂をぬかれた私達にとっては、周囲の右往左往も感動を呼ばない。

「本当に負けたんだろうか」と、同僚はつぶやく。

「本当に負けたんだ」。私達にはそれがはつきり云える。長崎を見れば解るじやないか、と云いたい。

同僚をはじめ、私達はほんの数カ月前、大牟田市での赤痢防疫活動中に、焼夷弾攻撃をうけて散々な目にあったが、長崎の惨状はその比ではない。私達がどんなに説明しても、同僚は半信半疑である。それは映画を見ていない人に、その映画のすべてを

理解させることが困難であるように、私達の説明が足りないのかも知れない。もどかしい限りである。——しかしそれもその筈である。慘状そのものをじかに見て来た私達自身でさえも、「これがたつた一発の爆弾で?!」と、信じられないのだから——。

それをどう説明すればよいのか。又どんな言葉があるというのか。

当時は「新型爆弾」といわれた。それは今までにない、とてつもない大型の爆弾、という程度の概念しかなかつたのだから、無理もない話である。

### 追記

「不眠不休」という言葉がある。大きさでなく、私達は不眠不休で動きまわつた。本当によく身体がもつたものだと思う。若かつたからだろう。「若い」ということは、すばらしいことである。同時に倍する齢を迎え、今しみじみと思う。

しかし、ではその時、「私は何をしたか」と自問してみる。あれやこれや沢山したようにも思える。が「何を」の「何」が云えない。結局「何もしなかつた」のではないかろうか。ただやみくもに歩きまわつただけである。

あの時、時津に収容された人々の中で、果して今何人が生き残つていることだろう。ただ私に残つたものは、「戦いのおぞましさ」と、「負けた」という実感だけである。

後日、長崎に居たものは長生きしない、という風説におびえ、一時減少した白血球を心配したことと思い合せ、ソーッとしたことも、今は遠い夢のような思い出である。

(四八、四、二五)

## 生き残りの哀しみと責任

台灣省雲林縣北港鎮中正路五三号  
昭和二十年長崎医大付医專倅卒業

林 政 吉

去年十一月五日、長崎原爆台湾同学犠牲者追悼会が台北で行われた折、母校から調

遺族会長、佐藤医学部長を初め、五名の教授方が来台され、初めて「忘れな草」が第

四号まで出版されていることを知りました。故林中鳳氏（長崎医大四年生の時原爆にて死亡）の令弟林五桂さんから借りて読み、調会長に当時のことを話しましたら、第五号を出版するからそれに書くようにと云われました。

何分二十八年の歳月は余りにも長く、その間が人生の一番慌しい時期だったので、忘却を遙かに越えた思いがします。記憶にも大分間違いがあると思いますが、歳月に免じてお許し下さい。

終戦前の学生生活は、経験のない方には想像も及ばないものでした。下宿の飯を食つた途端に腹が減り、初めの頃は、何とか食堂のチャンポンにありついたが、段々とそれも困難になり、蜜柑、琵琶のある間は、それで飢を凌いだものでした。

苦心して神社の神主の家に住み込んで、神饌米にありつき、ホッとしたのも束の間で、井野農相になると間もなく神饌米が停止になり、背に腹は変えられず、長与へ疎開する仕儀と相成った。長与から駅までは徒步で三十分はかかる。雪の降る冬の朝の通学は、南国の男には骨身に應えた。靴が貴重品だった当時、藁草履をはくと足に霜焼けが出来て、夜は寝られずに痛んだ。大村湾の寒風を身に受けて、雪解けの道を歩きながら、

○ 長崎の港の色に見入るとき 遙けくも吾は来りけるかも  
という斎藤茂吉の歌を思い出し、南の島から遙々笈を負つて来た我が身を愛しく思ひ、涙したのも幾度か知らない。

どういう機会だったか忘れたが、道ノ尾の時水地の工事を見に行つた序に、有名な萬象園の日本を模した庭園を見ていたら、主人に会い、今は旅行者もなく旅館はガラ空きだから、住み込んでもよいとのこと。駅にも近いし、食事の量も大分ありそうで、下宿をここに移したが、何ヵ月もしない中に主人が三菱に売つてしまつた。実は主人と思つていた人は番頭で、本当の主人は別にあることが後でわかつた。

三菱では、ここを造船所の養成工の寮にするとのこと、接收に来た人が良い人で、大へん私に同情して、寮医として住み込んでもよいと云われたので、そのまま住むこ

とにした。

養成工は小学卒業後三菱に就職し、午前中は仕事をして午後授業を受け、三年後に中学卒業（三菱のみ）の待遇を受ける、いわゆる三菱子銅いの工員である。朝礼や夕食後に寮長が訓話をして、三菱精神をたたき込む。時々訓話をさせられたのには参つた。大部分が佐賀県の農村の子弟で、実に純真でよくなついてくれた。食前にはいつも三菱の社訓を朗誦するが、いつの間にか覚えてしまつて、一緒に朗誦していると、結構三菱の人間になつたような気になる。私は今でも殆んど三菱の製品を使つてゐるが、その頃の名残りでもあるうか？

毎月の朔日には幹部の集会があり、こつちは居候だから下宿代を払つた積りで、鶏を買つて素焼きにして出した。初めは五十円で二羽ぐらいだったが、二ヵ月後には五十円で一羽しか買えなかつた。もつとも同じ寮の板前夫婦から買うのだから、闇にはならない。板前は中々面白い人で、話がうまく、私から聞いた話を実に上手に寮生に訓話する。柄にもなく寮長より遙かにうまく寮生が喜ぶので、話の下手な私はその後いつも板前に頼むことにした。お礼に配給の煙草をやつたら、大へん喜んで時々茶碗蒸しを御馳走してくれた。あの頃の茶碗蒸しは實にありがたく、翌日は少なからず元気が出たようだ。今でも大好物で、よく考えるとたいてい配給の前日であった。

一度、外科の木戸先生が来られ、丁度中食時だったので、板前に「大学のえらい先生だ」と云つたら、井に一ぱい山盛りにしてくれ、先生が大感激して食べられたのも、今は懐かしい思い出だ。

昭和二十年八月一日、B29による爆撃で、レントゲン教室と婦人科の一部が炎上し、出勤しても警報の連続で、生きた気持がしなかつた。道ノ尾の寮に帰ると、谷合いなので先ず安全とホッとした。

運命の八月九日は木曜日で、影浦教授が諫早に出張されるので、いつも遅く出勤して早く帰ることになつてゐる。その日も十時頃に道ノ尾駅へ行つたら、汽車が出てしまつてゐた。その頃の汽車は時間通りでなく、いつもよく遅れるが、その日に限つて遅れなかつた。運命は不思議なもので、若しその日も汽車が遅れていたら、私は恐ら

く命を失つていただろう。

寮に引返し、サルマタ一つになつて、九大の石山外科にいる従兄に、八月一日の被爆見舞の返事を書いている最中に、ピカッとした稲光りがして、屋根瓦がガラガラと落ち、近所の竹藪が一部パチパチと燃え出した。びっくりして上衣を引掛け、ズボンを持って防空壕にとび込んだ。寮長は焼夷弾だと云う。防衛団の人が竹藪の消火に来たが、大したことはない。谷間なので長崎の方は皆目見えない。二時間ほどたつて長崎の方角から火傷の負傷者が一人やつて来た。聞いてみても、早く治療してくれと喚くのみ。

間もなく同じ方角から、亡者のような格好をした負傷者の群が来た。寮の前を通り過ぎて行くのを、寮長や幹事が助けて連れて来る。三十分もしない中に薬品——と云つても三百人の寮生の救急薬だから知っている——がなくなつてしまつた。食堂から食用油を持ち出し、綿花につけて塗つてやる。水を求める者、痛いと泣き叫ぶ者などで、六畳の事務室は溢れる。次の間の食堂にも押し込める。一体何をしたか思い出せない。お湯を配りながら脈を診て廻つたぐらいしか覚えていない。後日、テラピーの語源が、ラテン語でもギリシャ語でも、「付き添つて世話をする」ということが解つたが、実際あの時は原始的なことしかやれなかつた。しかし負傷者の方は幾らか安心したようである。

間もなく三菱の課長の方（負傷もなく元気であった）が来て、「裏の倉庫に薬品が疎開してある筈だから、この際それを使用するように」とのことと、課長と幹事が倉庫を開けてくれた。荷作りがしてある。薬品名を書いたのもあれば、書いてないものもある。何も書いてない箱を開けたら、ガーゼ、綿花、包帯が入つていた。課長立会いで必要なものを取り出し、何とか治療してやつた。マーキュロ末は目分量を、ヤカンで沸かしたお湯に溶かして使つた。

幸い夏でフトンの必要はなかつたが、蚊が大へんで、私は二人の蚊を追いながら、自分の方が先に寝てしまつた。翌朝二人とも帰られるところで、それぞれ適當の人をつけて送つた。松下先生は笑顔で何回も握手してお札を云われて、却つてこっちの方が恐縮した。林中鳳さんは疲労がひどいとみて、ただ頭を下げただけだった。

その翌日、八月十日の十時頃、林忠実先生がプレー（看護婦）らしい女性を一人連れて通るのを、窓越しに見たので呼び留めた。聞けば昨日から何も食べていないとのことで、板前に交渉したら、残飯だが握り飯を六個作つてくれた。二人はみんな平らげてしまい、林先生が寝させてくれと云うので、二階の部屋に連れて行つたら、爆風で足の踏み場もない程ちらかつてゐる。フレーラーの女性に片付けてくれと云つたら、どうにか寝られるようにしてくれたので、林先生はそのまま横になつて寝てしまつた。

の瞬間、学校や病院のことが気にかかり、「ではすぐ学校へ行きます。」と云うと、先生は「そのままここで救護に従事しなさい。私が證明します」と云われた。ピタミン注射を希望されたので、B<sub>1</sub>とCを何本も注射し、手拭で体の汚れを拭いてあげたら、何度も握手してお札を云われた。初め先生には、グルコースにB<sub>1</sub>とCを加えて静注すべく用意したが、副作用を恐れられたのか、皮下でよいからと云われたので、他の人に注射して大へん感謝された。

暗くなりかけた頃、同郷の林中鳳さんがみえた。火傷はないが、大分弱つて、水を所望するので与えたら、二、三口飲んで吐き出してしまつた。食事時なので、松

下先生と林中鳳さんには、握り飯とタクアンの外に、ラッキョウと福音漬をつけて貰つた。林中鳳さんは二、三口食べて吐いたが、松下先生は半分ぐらいい食べ、お茶を所望されるので寮長がついで出すと、さもうまそつと飲まれた。松下先生は林さんにもお茶を奨められたが、飲むと吐くからと云つて飲まなかつた。

松下先生は食事中私の家族の事を聞かれ、必々と、「戦争がすんだら早く帰るんだな。」と云われ、更に、「何日でもよいから此処で救護に努めるのが一番役に立つ。学校へ行く必要はない。」と申された。原子爆弾の被害を薄々知られての御配慮だつたと思う。

夕方近く一人は元気に帰つて行つたが、後日長崎駅で会つた時、その女性は奥さんだと紹介され、平身低頭して謝つた。ところが反対にお礼を云われて、赤面するやら恐縮するやら——。又先年台北で家に呼ばれ、その時飲んだビールの苦かったこと、苦かつたこと——。

収容した負傷者は十日に殆んど帰り、重傷者と大島の挺身隊だけがあとに残つた。その数は約二十名で、殆んどが三菱の方だつたので、三菱からも続けて治療するようになつた。重傷者には発熱、嘔吐、下痢などの症状が開始していた。

十日の夕方、森沢先生が影浦内科のプレを三人連れて来られた。先生は私が九日に欠勤したので、萬象園にいることを知つていた訳だ。大学が全焼したことや、職員、学生、看護婦の大多数が死亡したことは、先生から初めて知らされた。又大学には殆んど誰も残つていないので、行つても無駄であることを知つた。

森沢先生とプレが來たので、やつと病歴を作つた。それには三菱の印刷物の裏を利用した。三菱の片渕町寮の寮母の娘さんが、兵器に勤めていて被爆し、火傷はなつたが、嘔吐、下痢、発熱、口内炎等を併発し、重症で腹痛が加わり、夜半に何回も起され弱つた。禁品中に、当時としては珍らしくスルファグアニジンがあつたので、下痢症の人達に与えたが、殆んど効果はなかつた。今から考えると、却つて悪かつたのではないかと思う。

食糧の事情もあつて、森沢先生とプレは翌日それぞれ郷里に帰られた。ところがその後から患者の容態が悪化して困つた。口内炎には初めマーキュロを塗つたが、後でピオクタニンを探し出したのでそれをつけた。四分の一世紀経つた今でも、時々紫色の唇を持つた負傷者の夢を見る。寮母の娘さんもその通りで、後には髪が抜けて、実際に哀れな姿になつた。診てやる度にお札を云われ、出来るだけのことをしてやつたが、八日目に亡くなつた。

娘さんが亡くなつた後で、母親からガーベを一反くれと云われ、渋つていたが気魄に押されてやつたことを覚えている。

森沢先生がいなくなつてから病歴はつけていないが、この間に七名亡くなつた。私

自身も寮母の娘さんの死後、倦怠感がひどく食欲がなくなつた。矢張り放射能のためと思われる。お礼の積りか、例の寮母が大へん親切に色々と料理を作つてくれたが、さっぱり食べる気がしない。ふと茶碗蒸しのことを思い出し、板前に十円やつたら卵を五個くれ、好物の茶碗蒸しを作つてくれたので、少しづつ食欲が出てきた。

多分八月十九日だつたと思うが、あれから初めて学校へ行つてみた。山を越え、大学を見下してびっくりした。基礎の建物は消えてなくなり、病院だけが黒ずんで見えるだけだつた。

呆れてぼんやり眺めていると、四国から来たという学生の家族の方（父親）が、側に立つておられた。昨夜は佐賀の親戚の家に泊り、これから探しに行くとのこと、不案内ゆえ一緒に行つてやることにした。その人から初めて終戦になつたことを知られた。

私はそれを聞いて大へん複雑な気持に襲われ、そのままそこに坐り込んだ。自分はこれから中國籍に戻るだろう。そして台湾へ帰るようになるだろう。仮卒業の時、私は自分の立場を考えて軍医を志願せず、学校に残ることが決つたが、その時の級友の態度によって、友情にも国境のあることを知り、云い知れぬ悩みを感じさせられた。このことは生涯忘れられないだろう。

ふと我に戻つて側を見たら、四国人人はもういない。三十分以上坐つていたかも知れない。一生で最も複雑な感情にかられた一時であつた。恐らくこんな風景と感情を一時に味わうことは、二度ともうないであろう。

夏の暑い日ざしも忘れて、重い足を運んで行く。亡者のようであつたに違いない。学校に着かぬ中に、人伝てに学長が滑石太神宮に移されたと聞き、途中から引き返す。太神宮についたのは正午近くで、丁度成島先生が学長の診察をしておられた。何だか出勤しなかつたのが大へん悪いように思われて、鳥居のところに立つていたら、学長がこつちに顔を向けて、「元気でよかつたね」と云われ、大へん恐縮して外へ出た。お顔を知つている学長に会い、高木教授、池田教授、國房教授、清原教授、両内藤教授、山根教授が爆死されたことや、学生の大部分がなくなつたことを知らされ

た。それを聞いて全身の汗が一時に引いて寒くなり、気持が悪くなつて坐り込んでしまつた。暫らくして幾分良くなつたので、帰ろうと歩き出したら、腹が減つて道ノ尾駅まで大へん遠く思われた。駅で休んでいたら、寮生の一人（崎田君と覚えている）が近づいて、「先生ひどく顔色が悪いね」と云つてくれた。水筒を持っていたので、所望すると水を飲ませてくれた。その一口のうまかつたことは、はつきり覚えている。今までこんな美味しい飲み物を味わつたことはない。お湯を飲む度に、それを思い出してはもう一口飲む癖が、今でも残つてゐる。

人間は不思議なもので、日常の何氣ない行動にも、その人生の抜差しならぬ意味が含まれているものだ、と沢々思つてゐる。寮に帰りついたら一時に疲れが出て、二階へ上るのに階段の途中で休んだ。崎田君が見舞に来て食事を運んでくれたが、全然食欲がない。スルメを焼いてくれたので、それと汁を少し飲んだ。心身共に疲れたのか、それから幾日か寝込んでしまつた。夜は目が冴えて、故郷のこと、家族のこと、亡くなられた恩師のことなどが頭に浮んで、中々寝つかれなかつた。

娘を亡くした寮母は親切にしてくれたが、三菱の寮が解散になるというので、佐賀県北山村の蔡濟漂先生の所へ行くことにした。

大村海軍病院時代は、森沢先生と起居を共にし、大へん指導して頂いた。米軍のペニシリソの効能には驚異の目をみはつたが、当時は水溶性のペニシリソF二〇万単位を、分割して注射する方法を用いていた。

有鉤条虫の患者に、ザクロ根皮を西川さんの本の通りに調剤して与えたところ、二回目にきれいに頭部が排出され、森沢先生にはめられて臨床講義にも出して貰つた。余り嬉しかつたので、町の薬局からガラス瓶を自費で買って来て、標本を作つた。長崎医大の第一番目の標本の積りで、No.1と墨痕鮮かに書いて得意がつた。最早や残つていないのであるが、若し残つていたら一度見たいものだ。

以上のように現場にいかなかつたので、他の人達のような生々しいものは書けない。二十八年経つた今日、妙にはつきり覚えている部分と、全く記憶にない部分があつて、自分ながら大分怪しいものになつた。

いつしか私も五十の坂を越えた。何も成すことなく、亡くなつた恩師、先輩、学友に對して、真に慚愧に耐えない。帰国して中学後輩の故郭芳徵君の遺宅を訪れた時、私の手を握つてただ涙にくれておられた父君の姿は、今日も忘れられない。その父君も昨年逝去された。同級の青木伸夫君の母堂の手記を読んで、幾度涙を拭つたとか、若し生きいたら、良い家庭を持つただろうと思うと惜しまれてならない。同級の清田和之兄は實に心根のやさしい人で、仮卒業した後教室に残ると決つた時、「僕も残るよ」と握手してくれた手の温みは懐かしい。国境を越えた友情は、日本留学の思い出として、生ある限り忘れない。

当時学部四年の今村壽さんは、実にスケールの大きい方で、生きておられたら、社会的、いや國際的な仕事をされる人材だつたと思う。瀬戸口教授も書かれているよう（忘れた草、第四号）、実に惜しい方でした。

山本雅文君は同級でしたが、体を悪くして一年休学したために、原爆に遭つたのが、唯今健在の由、遙かに御健勝を祈つてやみません。

子供達も当時の私と同じ年令になり、実に楽しい学生生活を送つてゐるのを見つけても、「平和」はとても良いものだとつくづく思う。あの飢と原爆の青春時代も、今から思えば悽ましい。しかし若し平和であつたら、どんなに楽しかつたかと惜しまれてならない。灰色のベールの中のピカドンは、青春の惡夢として永久に胸から消え去ることはない。

アメリカは原子爆弾を投下し、更に餓死の一歩手前まで日本国民を追いつめた。だが四分の一世紀の中に、日本は經濟大国から更に政治大国へと發展している。異民族として、異国で具さに戰争の苦難を味わつた一人として、マルコソの言葉、「本質的に二つの人種間の争いに、最後に一方が勝ち、一方が負けるという鬪争的なものでなく、やがて世界における人種の異なるもの達が、その短所によつて争いを続けるのではなくしに、その長所によつて互に協力し合う日の来るこことを信ずる。」が一入身にし、生き残つたものだけが知る、哀しみと責任が去來する昨今である。

# 一、学部学生の手記

## 原爆悲歌と時の流れ

長崎市新大工町七一  
当時医大学部四年生

浅沼（旧姓大島）桂

一億一心となつて戦い、三百万人の尊い犠牲者を出して日本全土を灰燼とし、その終焉を遂げた大東亜戦争は、日本歴史のある限り、最も意義の大きい事件であります。

戦い敗れ、国亡びて残された大東亜戦の悲歌には、己が命を祖国に捧げた若人の雄々しい決意があり、また家を失い肉親を亡くした悲しい調べは、惻々として聴く人の心をうつてやみません。

日本最古の万葉集、明治・大正の大御代の歌集にも劣らぬ、実に三千数百年の日本歴史を伝承する日本精神の凝集に外ならないと、私は信じております。

調先生の御編集に成る「忘れな草」の第一巻から第四巻までに、御国に殉じた人々の、又その肉親の悲歌三百首余りを拝読致しまして、大東亜戦争悲歌集の一部として、長崎医大原爆悲歌の一部を、私意をもつて勝手に取捨選択したとの非礼を予めお詫びして、その一部を転載させていただき、御戦に殉じた人々の志を茲に偲びたいと思います。敬称は略させていただきます。

学部四年 梅原正幹の母 こいと（二号、二九・三〇頁）

- 小鳥さへ父母の懐家あるに 原爆の子ら父母なく悲し
- 立ち寄らん二本若木打ち枯れて 残る者の身何に頼らん
- 老いぬれば遠き筑紫路訪ねかね 母を待たずに祭りを受けよ
- 天国でよき人めとり楽しめよ 孫に逢ふ日を母はたのしむ

学部四年 梅原正幹の母 こいと（三号、六八頁）

- 児らはみなまづしきもの食い慘死しぬ 昭和元禄かなしき言葉
- 亡き人のお盆に帰り姿見せ 語りあいつ供物を召せよ

学部四年 清崎裕之の母 万代（一号、三一頁）

- 長崎の平和の鐘はひびくとも 心の痛手はいかに忘れじ

学部四年 服巻勝之の母 光子（一号、三三頁）

- めぐり来し今日の記念の鐘の音に 泣あらたに昔しのびて

学部四年 宮本精一 本人（一号、三五頁）

- とつ國の人に見せばや生地獄 筆にかかれず云いもつくせず

学部四年 片山道生の父 愛而（三号、八〇頁）

- 星こほる夜半の大地の静けさは 人の命の尊かりけり

学部四年 古賀洋一郎の母 ます（一号、四五頁）

- ひとすちに生くるいのちの尊さを 思いて我は堪え行かんとす

学部三年 片山道生の父 愛而（三号、八〇頁）

- 敷島の大和のくにの神つ代に かへりてをのこ国づくりせむ

学部三年 片山道生の父 愛而（三号、八〇頁）

- すめらぎとともに不滅と信念の 強きはいはず友は散りけり

学部三年 片山道生の父 愛而（三号、八〇頁）

- 生あらば希望はいつか成るものを メモのみ残ることの悲しさ

学部二年 林喜保の父 重雄、母キヌエ（三号、一〇三頁）

- 還りくる日のいづ方よりかあらんとて この二十年を夢みて過せり

学部二年 林喜保の父 重雄、母キヌエ（三号、一〇三頁）

- この秋は雨か嵐か知らねども 今日のつとめに種を蒔くなり（本人）

学部二年 三村寛の母 静子（一号、五二頁）

- 青雲の飛び立つ心はやりつゝ あはれ散りにし命かなしも（父）

学部二年 三村寛の母 静子（一号、五二頁）

- はるばるとなきがら抱き筑紫路の 旅の衣に秋風ぞふく（母）

学部一年 竹本文亮の母 春枝（二号、一三頁）

- 幾百の老いたる父のまた母の 思いは同じただ声もなく

学部一年 竹本文亮の母 春枝（二号、一三頁）

- 西の方ゲビロが丘に灯はもえて 吾子の名もとめ消え入りたくも

学部一年 竹本文亮の母 春枝（二号、一三頁）

- 道しるべ教へて咲きし若桜 手折らせもせで一人旅立つ

- この心誰やかは知ると思ひしも 今日の恵みに心おののく  
学部一年 宮地義信の母 ゆき（一号、六六頁）
- 朝な夕な香焚き飯を供へつゝ 吾子を拝みて二十年経ぬ  
○ 若き日を勉学一途に生きし吾子 セめて娶りて死なせたかりし  
○ 学友の二三は学位をとりしとふ 非命に果てし吾子の痛まし  
学部一年 米谷 裏の父 政（三号、一三七頁）
- 人の世のちゑは悲しも一瞬にして帰らざるなれよゆるせよ  
○ 桜さく靖国やしろ鎮まりて とはに眼れよいとし吾子よも  
医專二年 犬塚喬二の兄 幹人（三号、一四九頁）
- 父のみの父の手厚き看護うけ 息ひきとりし君がいとしき  
○ 香煙のやらぐかたへのパイン缶 見つつ悔ゆるあれもこれもと  
○ 明日の日の国の危難にさきがけて 若き命を君は奪はれぬ  
医專二年 橋口匠一の母 みと（一号、九五・九六頁）
- 制服の吾子の通ひし道ならん 夾竹桃の花は目に沁む  
○ 吾子が死を無駄にはすまじ万國の 平和運動なほもつづけよ  
医專二年 松元武紀の母 静子（四号、一五四頁）
- 爆心地平和の像を仰ぎ見れば 吾子果てし地なり慟哭のわれ  
○ 二十余年遺族がねがひかなへられ 合祀なりたりかたじけなけれ  
医專二年 松元武紀の母 静子（四号、一五四頁）
- 爆心地平和の像を仰ぎ見れば 吾子果てし地なり慟哭のわれ  
○ 病院の廊下に会ひし白衣の医師 吾子世にあらばとしばし佇ずむ  
医專二年 村田由之の父 四郎（一号、一〇〇頁）
- 今はにも父をかばひし一言は 泪なくして吾れ聞くべきや  
○ あとと呼び父と言はれて二十年 語り足らはぬことの多かり  
医專二年 村田由之の父 四郎（三号、一八一頁）
- 草は萌え木々は芽ぐめど人の世の 生命に春はめぐらざりけり  
○ 帰る人行く人乗せて日に幾度 汽車は上れど子は帰り来ず  
○ 泣けといふ人こそ吾れは嬉しけれ 泪のかぎり幾夜も泣きてん

- 吾が所有と汝が名を書きし水墨の 跡を見るだに涙なりけり  
○ 家を成さば迎へまつると母に言ひし わが末の子は先立ちにけり  
医專一年 関家雅俊の母 花子（一号、一一五頁）
  - よき名よとことさら選びし吾子の名も 名碑に深く刻まれにけり  
○ 明日消えん命も知らず吾子の出しし 八月八日のスタンプ淡し  
○ 爆死する前日出せし子の便り 魂となりて我家につきたり  
医專一年 西 大雲の義兄 大竹建三（三号、二二四頁）
  - 幕落ちし原爆の碑の君の名に 転ぶが如く駆けよりし母  
○ 爆心の鉄の扉に焦げつきし ズボンのきれに名のみ残して  
医專一年 山崎邦雄の姉 みち子（四号、一八九頁）
  - きみのため國のためぞと思ひける あたら若きを唯散らしたり  
○ 君はいまいづくの國におわすらむ みたまよ永久にねむりたまえ  
医專三年 小曾根邦弘 本人（一号、一三八頁）
  - たらちねの一枝つみて先立つ身 若葉散りゆく悲しさ残さじ  
薬專三年 村上直行 本人（三号、二五四頁）
  - 親を得て心の底を語らざる 人の心の浅ましきかも  
○ たらちねの母にむかひて淋しくも 微笑む心誰ぞ知らなむ  
× × ×
- 「忘れな草」第三号、巻頭の古屋野宏平先生の「夢漢々」に、
- 「誰かこの日、二十四年前の原爆下に惨禍の犠牲となりし肉親・知友の痛恨を想び、彼の日亦、今日の我が繁榮混亂を想いし者があらん。みな遙かなり、夢漢々とう他はない。」の一文ほど、適切に二十有八年の歳月が、真に時の流れも人の考えも一変せしめたものと、無量の感慨なき能わざる今日この頃の、吾々の思いを表現しているものはありません。

一世代に亘んとする時の流れが、人の心を変えたことは、或いは止むを得ないものがあるかも知れません。忍ぶべくしてしのぶべからざる一事があります。それはなべ

て原爆にみまかた九百に垂んとする当時の方々が、今日生存されていたとしたら、現代の繁栄と混乱とを見て、いかにその心の浅ましく移りゆく様に驚愕されるか、蓋し想像に難くないのです。

混乱の第一は、天と地ほど狂った価値観の驚くべき変化であります。あたかも、昔尊かつたものが悉く無価値となり、善なりしが悉く悪と化したかの如き感すら与える、今日この頃の世相であります。

曰く、家族制度の崩壊、曰く、大学紛争、曰く、師弟関係の信義感の喪失、曰く、当時の日本国民の等しく敬愛してやまなかつた皇室の尊崇に対する左翼人士の、誰はばかりぬ罵詈雑言、等々。

繁栄の主なるものは、非常な交通機関の発達、就中、飛行機や汽車などの驚くべきスピードアップ、曰く、新幹線、曰く、アポロ月衛星船の月面到着、曰く、日常の生活面の著しく華美便利になつたこと、等々。肥満児の講義などといふ不思議な特別講演が、医学会で堂々と行われるに至つては、到底当時のお医者さんや医学生には、理解し難い現象ではないでしようか。

数えあげれば切りがありません。繁栄の方はまあよろしいとして、当時の赤心一途に生きていた人々が、何としても理解出来ないのは、現代の世相の一面に見る人々の心の荒廃であり、引いては、当時の愛国的心に燃えて祖国に殉じた人々の、心を無視する言動の氾濫であり、私はこれを原点に還つてみたいのであります。

「忘れな草」編集の大業を思い立たれた調先生の御眞情も亦、長崎医大原爆遺族数百の方々の今日の運動の御心根も、皆大東亜戦争に散華された方々の心を無にしてたくない御眞情の発露であろうと、拝察する次第であります。それなのにどうして今日、かくも浅ましい人心の荒廃を采さしめたのでありますようか。

戦後横行跋扈をきわめた無国籍敗戦史観、又は唯物史観に従いますと、大東亜戦争

三百万の英靈の死は悉く無意義であり、第二次世界大戦の四年に垂んとする勇戦敢闘は、悉く侵略戦争の儀えであった由であります、これは事ある毎に私が強調しておりますように、一国が國家の総力を挙げて戦つた戦争に於いて、自らの戦を悉

く非なり悪なりとして大義名分を認めない、このような不思議な歴史観の横行しているのは、共産圏諸国は別としまして、自由主義国家群に於ては、日本国のみの珍現象であります。總ての混乱の原因がここに胚胎していることが、肯けるわけであります。

極東軍事裁判に於て、第二次大戦での日本の行為を、悉く侵略戦争なりと強引にきめつけようとした連合諸国の意図は、印度のパール判事の判決文で、東条首相はじめ日本の所謂A級戦犯二十五名は全員無罪と判決されたことによつて、完膚なきまでにその偽りを論破されたわけであります。

当時日本の新聞は、占領行政の圧力下にあつたので、「インドの判事のみが全被告の無罪を主張し、異色ある判決を下した。」といった程度の、ほんの数行の記事しか載せなかつたのであります。ヨーロッパ諸国に於ては、ビッグニュースとして紙面のトップを飾り、大々的にその内容の概要が發表されて、センセイションを巻き起したのであります。そしてこの論に共鳴する人が、欧米の有識者の間には多いのであります。日本が侵略ではなく、アメリカのルーズベルト一派が第二次世界大戦遂行の主役を演じたことは、著明のアメリカの学者、チャールス・A・ベアード博士、カラントンシル教授、セポルド海軍少将等の努力により、当のアメリカに於ては、有識の人々に認識されてゐた次第であります。

昭和二十年九月に、占領軍が吾国に進駐して來たわけであります、歴史教育が現代のように変りましたのは、結論的に云いますと、占領政策と、それに便乗した日本の唯物史観の徒輩の暗躍に基くものと云えると思います。

九月に占領を開始したGHQの対日対策は、所謂五D政策に集約することが出来ます。第一が武装解除、第二は非軍事化、第三は非産業化、第四は非集中化、第五は民主化であります。

昨日まで戦つていた相手国を弱体化し、復讐出来ないようにしてしまう政策、これは当然戦勝国としてとる政策であつて、この五D政策は、史上稀な非常に厳しい政策であつたことを、吾々は忘れてはなりません。

わが国に進駐軍と一緒にやつて来たイギリスのオーナートレッサーという女流記者に、「カケモノ」というイギリスでベストセラーになった著書があります。その中で

トレッサーは、「連合軍の政策は、被征服者の生活態度を改めて、征服者のそれに見習わせ、作り直すことであった。それはお手柔かな方法であると同時に、かつて一度も試みられなかつたほど殘忍な方法であつた。宗教、芸術、教育、法律等、何一つとしてそれから免れることはなかつた。」と云つています。

この彼女の批判は、決してオーバーではありません。昭和二十年八月二十四日、ニューヨークポスト紙はその社説に、「少數の日本人を戦争犯人として逮捕するだけではなく、日本の社会機構そのものを、戦争責任者として糾弾せよ。」と書いておりま

す。更に、「日本の社会の改革、並びに日本国民の根底をなす哲学的習慣及び伝統の刷新は、その政治的経済的改革と共に実施されなければならない。」とも述べているのです。日本の伝統や習慣や、日本人の物の考え方を改めろ、改めなければならぬといふのが、その当時のアメリカの与論であります。だからそれが占領政策に反映したのは、当然であります。このことは昭和二十五年にマッカーサーが、はつきりと日本の新聞記者に、「自分はそういう使命を帯びて来たのだ。」と明言している事実からしても、益々確実なことで、日本人は一日たりとも忘れてはならない事実なのであります。なべて大東亜戦争に散華した人々の仰天するような価値観の変化も、実は全くこれに基くものであつて、この五D政策の中の民主化政策の一環として、占領軍の教育政策が推進されたわけであります。

昭和二十年九月二十日、CIEの指導に従つた文部省の次官通達によつて、今までの教科書に墨を塗つて使うことが始まりました。特に国史と国語の教科書は削られる部分が多く、それが有名な「墨塗り教科書」と呼ばれた所以であります。当時高専校以上の、いわゆる専門教育を受けていた吾々大学生たちは、殆んど直接の被害影響はなく、又既に教育を終えた年輩の方々にはその経験がないので、殆んどこの重大な事実を知らない人の多いことは、誠に意外なほどであります。小学生達がそれをどんな気持で受けとめたか、その時の思い出を綴つたものが、教育大学の唐沢教授の著し

た「日本人の履歴書」に出でております。

その一例として、静岡県の三ヶ月小学校で終戦を迎えた小学生の作文を見ますと、「先生とアメリカ人の将校が教室に來た。そして墨を塗ることが始ました。どうして墨を塗るのかわからない。何度も何度も繰りかえし読んで覚えたところだ。おしくておしくてたまらないので、なぜ墨を塗るのか、と先生に質問した。答えは、進駐軍の命令です、というだけだった。家に帰つてお父さんやお母さんに尋ねたけれども、先生以上の説明は何もなかつた。」

現在のわが国では、戦前の教育は間違つていて、と頻りに教育界でも云いますが、その当時はそんな意識はまだなかつた。兎に角進駐軍の命令だから、墨で抹殺して教えた。そしてそこから新教育が始まったのだ、ということを記憶に止めなければなりません。

自ら戦前の教育を科学的に研究批判して、そこに新しい教育を打ち立てたのではなく、戦前の教育を他律的に抹殺しただけで、ただ占領政策に基いて、上からの命令で長所も短所も顧みず、全面的に否定したのが事実であります。

墨塗り式の滑稽な教育は、僅か数年だったので、比較的にその影響を受けた人の少いことと、これに同調する左翼分子及び所謂進歩的分子が、この事実をひたすら陰蔽していたので、この重要な事実が残念ながら現在でも、よく日本人全体に認識されていないのです。

神話の抹殺、明治天皇の御製——『いにしへのふみ見るたびに思ふかな、おのが治むる国はいかにと』、また大正天皇の御製——『年とともに我が日本のさかゆくも、いそしむ民のあればなりけり』 等々の抹殺、補正成、吉田松陰、東郷元帥の国語教科書よりの抹殺、等。

仮りに立場をかえて、アメリカ人の歴史、国語から、ワシントン、リンカーン等を削り、『人民の人民による人民のための民主主義』という言葉を全く禁止した教育が、アメリカ人に想像できるでしょうか。

またイギリス人から、イギリス王室の歴史やインドの歴史、シェクスピア、ネルソン

ンの伝記等を、悉く抹殺して御覧なさい。凡そ滑稽なイギリスの歴史やイギリスの国語になるでしよう。

このようないい戦後の抹殺教育で育てて来たのが、今日の日教組であり、育てられたのが四十才以下の人々なのであります。民青の隆々たる発展も、三派全学連の登場も、大学紛争も、みな宜なるかなと願えましょう。

昨年の正月、私はある学生さんばかりの席上で、今朝通つたばかりの新幹線の窓から見た富士山が、余りに美しかったので、『元日や一系の天子富士の山』の一句を引用したところ、すべての国立・私立の学生が、皆知らないと答えたのには、あいた口が塞がらず、暗然とした気持になつた記憶がありますが、これは悲しいことに事実なのであります。

イギリスの新聞記者ティトマンは、「くにのあゆみ」を読み、余りにも世界各国の教科書と違つているのに呆れて、「これを読んでも、祖国に対する誇りと敬愛の念は湧かないだろう。それはロバの歴史に等しい」と、侮辱しているのであります。ロバの歴史に等しい祖国の歴史を習つた青年が、祖国を軽視し、大学紛争を起し、大学を破壊して国家を顧みないのも、誠に当然と云わなければなりません。

このような状態を巧みに利用し、兼ねて吾が国の伝統を抹殺し、革命を目指し、それに便乗した所謂進歩的左翼分子等によつて、吾が国の教育は変質し、日本民族の精神構造が危機に瀕しているというのが、現実の姿であります。

ただ祖国日本の危難に敢然と赤手空拳で直面、散華された英靈に、全く理解し能わぬ現象の悉くは、實に此處に胚胎しているのであります。終戦以来これを憂ひる有識の人々は、一途に英靈の意図に応えるために努力しているのであります。時の流れは如何ともする能わざ、木の葉が沈み石が流れる御時勢で、誠に寒心に堪えない次第であります。

建国二千有余年、かくも私念の横行をみた時代ではなく、原爆悲歌に見る英靈の心と今日の浅ましい世相とを対照的に反省し、拙文を草した次第であります。

## 穴弘法丘での握り飯作り

佐賀県神埼郡三瀬村国保診療所  
当時長崎医大部四年生

安 東 保 人

私が被爆したのは、外来本館二階の内科予診室で、私は爆心に背を向け、窓近くに坐つて予診をとつておきました。熱い爆風を頸部に感じた後、真暗となり、暫らくして視界が明るくなつて初めて、その物凄さにびっくりしました。

至近爆弾にやられたと思い、後を恐れて防空壕にかけこんだ時には、既に数人の負傷した学生が入つており、ゲートルをといて包帯していたと思います。

その後裏山に避難するため、白布のかかった蒲團を病室から持ち出し、それを被つて山に登りました。途中、足を負傷した学部四年の森重修君に会い、彼を背負つて穴弘法の丘に避難しました。

山中の一軒家で、倒壊したまま焼けていないのがあり、その家の裏の防空壕に避難していた家人の許しを得て、米などを貰い、鍋で御飯を炊いている時、三菱の女子挺身隊の人が四、五人通り合せて、握り飯まで作ってくれました。丁度そこへ調教授が乾パンを配給しながら来られたので、一緒に握り飯を被爆者たちに配つて廻りました。（「忘れた草」第三号、一二頁参照）

私は当時、樋津町の弘法寮に居りましたので、二晩山で過した後、十一日に森重修君をつれて一旦寮に帰り、森重修君の紹介で、大波止の牟田葉局の小瀬戸の別荘へ、數人の負傷した寮生を連れて移りました。その間、小瀬戸の「とんちゃん」という婦人に、大変お世話になりました。

十一日から十五日まで小瀬戸にいる間に、次々と寮生が原子病で死亡しましたが、その都度「あなほこ島」とかいう無人島に船で運び、そこへ埋葬しました。学部一年の寮生で、大原健、桐山真克、溝口常一、古坂光毅の諸君だったと思います。

その後は終戦となり、私も頭髪などが抜け、八月末から入院など療養をして、どう

にか一命をとりとめました。

卒業後、昭和二十二年から佐賀県北部の山村に入り、現在まで僻地医療にたずさわり、今日に至つております。

(四九、一、一六)

## 原爆の想い出

福江市木場町四五〇五島中央病院公舎第一号  
当時長崎医学校四年生

石川武彦

「怪光一閃、浦上原頭瞬時にして火の海と化し、数万人が紅蓮の炎に焼かれ、友を尋ね子を探して、山頂は阿鼻叫喚の巷を化す。想い起せばあれから早や一年——」この文は昭和二十一年八月、原爆後満一周年の慰靈祭に、私が靈前で読んだ「慰靈の辞」の書き出しの一節である。

あの日から二十九年の歳月が流れて、再び平和な日が続いているが、当時の状況はまだつい一年前の如く、私の脳裏に浮び上がる。今度「原爆想い出の手記集、忘れな草」の第五号が出版されるに当たり、恩師調先生から何か書くようにとのお指示を戴いたので、駄文をも顧みずペンを執りました。思い出は昭和二十年八月八日の夜から始まる。

当時、私は医学部の四年生で、八日の夜は防空當番で病院内に泊っていた。丁度その日、角尾学長が東京出張からお帰りになり、現在の病院の玄関の左側にある学生課で、学長、影浦教授、学生課の職員、私の四人で、学長持参の葡萄酒を飲みながら、学長から広島被爆の状況をお聞きした。

「石川君、広島に投下された爆弾は、どうも新型の爆弾らしい。広島駅は汽車が不通だったので、市内を歩いて帰つて来たが、建物は殆んど倒れたり焼けたりしているのに、爆弾の落ちた跡は全然見られない。凄い破壊力だ。」と云われて、自分の目で見られた広島の被爆状況を、詳しくお話しになつた。

その翌日の九日に、同じ爆弾が長崎に投下されることは夢にも考えず、その夜は病院に一泊した。明くれば愈々あの運命の日、八月九日。

この日私は、角尾学長の内科ボリクリの卒業試験日であったが、朝から空襲警報のサイレンが鳴り出したので、防空班長であつた私は、友人にボリクリの試験を代つてもらい、班員の学生と共に配置についた。暫らくすると解除になつたので、ホッとしない朝食を抜きにした腹が急に鳴り出し、大波止近くの樺島町の下宿に食事に帰らうとすると、同じグループの相羽君が、「石川君、ジャガ芋を煮るから食べて行け」と云つてくれたが、食いしん坊の私は、それを断つて下宿に帰つた。結局、これが私の生きのびる縁につながり、芋を食べた相羽君たちは、その場で亡くなつてしまつた。人の運というものは不思議なものである。

帰りの電車が八千代町のガスタンクの近くに来た時、急に故障で止り、なかなか修理が出来そうにないので、一度は歩こうと車外に出たものの、余りの暑さに再び車中に入り込んだ。

その瞬間である。ピカッと光つて、轟音と共にあたりは真暗になつた。焼夷弾が落ちたと思い、咄嗟に車中で身を伏せた。暫らくしてふと我に返り、首を動かしてみたが痛みもなく、体のどこにも異常がない。助かったと思つて立ち上り、車内を見渡すと、私一人で乗客は誰もいない。窓ガラスは飛び散り、防空頭巾や下駄、靴などが一面に散乱し、鮮血が点々と落ちている。今一度注意して体中を点検したが、被つていた戦闘帽だけがどこかにふつ飛んでいた。救急カバンと防空頭巾が残つていたので、急いで頭巾を被り車外へとび出した。

真夏なのにあたりは薄暗く、人々が大声でわめきながら右往左往している。NHKの防空壕へ向つて走つていると、長崎駅の方から、両手の皮膚が焼け爛れてぶら下り、泣きながら「助けて——」と走り寄る数名の男女に出会つた。  
防空壕はすでに火傷や外傷を受けた避難者で一杯だつた。早速カバンから薬品を取り出して治療してみたが、僅かな薬品ではどうしようもない。かなり重傷の人もいたので、「大学病院に行きましょう」と、二、三人の負傷者と一緒に轍を出て大学病院

に向つた。裏通りの家は殆んどペシャンコになり、既に火が出て道が通れない。道端に外傷をうけた女学生が倒れていて、「学生さん、助けて——」と叫んでいる。避難中の人は沢山いたが、皆自分の事で精一杯のようである。

私はその女学生を助け起して肩に背負い、山越えて大学病院に行こうと登つて行くと、既に病院の窓からも火が出ていた。山道伝いに病院の近くの丘の上までのがれ、そこで一夜を明すことにした。続々と被爆者が集つて来る。火災の煙と爆風による塵埃とで、空は薄暗く、太陽が煉瓦色に見える。

連れのものをそこに残して、一人で大学病院のすぐ近くまで行つてみた。すると倒壊した家の下から女の声で、「助けて——」と呼んでいる。隣の家も倒れて燃えていた。放つておけばこの婦人は死んでしまう。それなのに誰も助けようとしない。仕方なく火が燃え移らないようにしておいて、柱をとり除き、二時間位かかつてやっと婦人を引出した。その下にはまだ娘さんがいたが、柱が重くてどうにもならなかつた。この人達は恐らく後で亡くなられたことであろう。

山の中腹で疲れた体を休めていると、大学病院前で開業中の用正薬局の御主人に、パツタリ出会つた。お互いの無事を喜び合い、私に金の持合せのないことを知ると、用正さんはカバンから一円札や五円札を一掴みつかんで下さつた。この金は後で友人に分けてやり、随分喜ばれた。

山の中腹には南瓜と芋が植えてあったので、食糧確保のために先ず芋を掘つて、救急カバンに一杯つめた。火の手は大分下火になつてゐたが、それでも浦上駅を中心としてまだ燃えていた。

山の中腹で岡野さん一家と知り合いになり、時津の親戚に避難することになったので、皆も一緒に行くことになり、その夜は芋畠でゴロ寝して一夜を過した。

一夜明くれば八月十日、大学病院に行くとまだ煙がくすぼつており、知人には誰にも会わなかつたが、病院の坂には、馬の死骸や、胎児のとび出した婦人の死体など、ゴロゴロ転がつていた。

急いで裏門を通り過ぎ、基礎へ通ずる石段へかかると、学生が一人石垣に寄りかか

つているので、「しつかりしろよ」と肩をたたくと、そのまま前に倒れた。死んでいたのである。そのほか死んだ死体が方々にあつたが、焼けただれていて、どれが誰だかさっぱり判らない。悲惨この上もない有様であつた。

時津へ行く途中、防空壕や電車の中で、黒焦げの死体が坐つたままの姿で並んでいた。正にこの世の地獄である。又軍隊や救護隊の人々が、続々として長崎に向つているのにも出会つた。ぼんやりとこの光景を見ながら、私はこれから長崎市や長崎医大はどうなるだろうと、日先き真暗な気持にならざるを得なかつた。

時津では岡野さんの親戚にお世話をなり、万行寺に収容されている負傷者の治療の手伝いをして、十五日まで過した。この間二回ほど大学病院に行き、防空壕に保管してあるアルコールや衛生材料を運んで来たが、病院では古屋野教授と影浦教授に、基礎では国房教授にお会いした。しかし同級生には誰にも会えなかつた。

時津では同級生の石神君に会つた。顔面に怪我をしていたが、大した怪我ではなくた。郷里に帰りたいというので、用正の御主人から戴いた金を半分ほど彼に渡して別れた。幸にして今日まで元氣でいるようで、これほど嬉しいことはない。

十五日に道ノ尾駅で終戦を知つた。この時憲兵が、「終戦はデマだ。信じてはいけない」と駅の構内でどなつてゐた。私は半信半疑であったが、一応下宿に帰つてみようと思い、世話になつた岡野さん一家にお礼を述べて帰つてみると、焼けたと思つていた家が壊れただけだったので、下宿で一、二日休養したが、同級生の宇本君に会い、郷里の岩国に帰るという彼を家まで送り届ける積りで、一緒に汽車に乗つたのが十七日頃だったような気がする。

以上、当時のことを思い出すままに書き綴つてみました。書き足りないことも大部分ありますが、今は亡き恩師や職員、学生の方々の冥福を祈りながら、拙いペンを擱きます。

(四九、一、七)

# 古い記憶のノートより

長崎県福江市末広町七一四  
当時長崎医大学部四年生

## 字 本 功

昭和二十年八月九日、この日も警戒警報によつて私の一日は始つた。続いてひびく空襲のサイレンに窓の暗幕を操り上げると、もう夏の太陽は正面の金比羅山の上空高く、輝く光を部屋の中に射し込んで来た。

「大型三梯団、天草南端を北上中!!」

人々は慌しく裏の防空壕に走り込んだ。瘤高いラジオの情報が、私達の尖った神経にピリピリ触れてゆく。もう大丈夫だ、今日も北九州か――。

私はいつものように煙草屋の角から曲つて、柿の青葉の茂りを通りぬけると、付属病院の裏門から小児科教室の予診室に入った。

「お早よう。」「お早よう。」グルッペの連中は、江上を除いて皆来ていた。私はこの四月から卒業試験中で、今小児科に廻つて来ているのだ。

「いよいよ明日はボリクリの試験だなあ」。私は救急袋と防空頭巾を長椅子の上に置きながら、誰へともなくつぶやいた。「いや、こんなに続けて警報警報では、何にも出来はしないよ」。梅原が診察台の上から上半身を起して云つた。隣で岩切が

盛んに瀬戸物の煙管を机の角に打ちつけている。私も配給の「朝日」に火をつけて腰をおろした。

実に殺風景な部屋である。西北が窓で、それに露台がついていて、その外は庭を隔てて街路である。虫の喰つた青桐の葉越しに、真夏の入道雲が岩屋山の上にもり上つてゐるのが見える。

「今泉はその後どうかなあ、また外科の看護婦に云つて、花を持って行かなくては

東南が廊下に面して入口だ。廊下は患者待合所になつていて、国民学校生徒の図画がズラリと壁に陳列されている。

「今泉はその後どうかなあ、また外科の看護婦に云つて、花を持って行かなくてはならなかつた。

「――、「全くなあ、アハハハハ。」梅原陸軍々医委託生が例の豪傑笑いをしながら、「昨日見舞に行つたら、もうすっかり元気だつたよ。」赤痢で一ヵ月近く高北病棟に入院している友の、神経質な顔を想像した。

「〇〇のように少しも学校へ顔を出さぬようでは、グルッペの気分を破るよ。防空當番にも泊らないし――。」今村海軍々医学生の少し興奮した声がした。

私の来る前に、防空當番の件が問題になつていていたらしい。私は黙つて本を開いた。

消化不良症、昨日からの読み続きである。向いの机には、眞面目な今西が本にかじりついている。暑い。上衣をぬぐ。皆明日に試験を控えて、頑張り始めた。十時をだいぶ過ぎた頃、江上がひょっこり入つて来る。皆一齊に彼の方へ向いたが、神経衰弱と云つていた彼の蒼白な顔を見て、誰も声をかけようとすると者はいなかつた。

暫らくして梅原は、江上と精神科へ甚学に行くんだと云つて、部屋を出て行つた。

後には又貢をめくる音が暫らく続く。廊下では赤ん坊の泣声や話し声がする。看護婦や医局員の忙しそうな足音も聞える。もう浜田助教授の診察が始つたらしい。

小児科は警報下でも相当の患者が来る。大多数が栄養失調と消化不良症である。生後一年二ヶ月というんだが、皺の多い老人の様な赤ん坊を見た時は思わず眼をそむけた。また赤ん坊を背に、両手に三才と五才の女の子を連れて、隔日に通つて来る若い母親もいた。三人とも百日咳のようだつたが、栄養の不充分なのが、治療を大変運らせていた。

戦争下、国民の栄養低下はある程度致し方ないとしても、乳児のミルクや牛乳を、乳児を持つ母親の栄養と共に、もう少し国家の強大な力で確保すべきだ――私は義憤に似たものを感じた。

十一時ごろ杉原（正通）が入つて來た。「杉原一杯飲めよ」。私は「九月二日入隊」の赤紙の来たことを知らせたくて堪らなかつたが、もう少し我慢して驚かしてやろうと思ひ返して、本から眼を放さなかつた。彼は隣の梅原に、三菱重工業の寮医の口の話をしていた。近頃は下宿食糧不足で、学生も勉強の傍ら、食べるということで大いに苦労しなくてはならなかつた。

「もう十一時だなあ、九時に空襲解除になつたんだが、警戒警報はまだ解けんのかなあ。」誰かが廊下を通りながら話して行つた。看護婦が一度ドアを開けたようだつたが、後は又本をめくる音だけで、廊下の隅ではまだ杉原が話を続けていた。

「爆音だ!!」何処からか微かに爆音が聞えて来る。一人が露台に出た。一機か二機だな。私は又本に眼を向けた。爆音は頭上まで来て一度遠のいたようだつたが、又近づいて来るようだ。しかし誰も待避したり防空頭巾を被つたりはしなかつた。警戒警報中だし、多分味方機だろう。敵機にしても一、二機の小型偵察機に違いない。私は一心に消化不良症の治療のところを読み続けた。

「爆音が近いぞ!!」誰かが立ち上つた時、一瞬の閃光が部屋に射し込んだ。私はハツとして立ち上ろうとしたが、次の瞬間には顔に何か熱いものを感じて、一大音響と共に、周囲のあらゆるもののが倒れ壊れる煙の中に、必死に逃れ出さうとする衝動を感じながら、その後の記憶を失つてしまつた。

「おい、宇本、かかえる。」我にかえつた私の前に、仁王のように顔を真赤にして、杉原が煙の中に立つてゐた。今西（章）だ！腰をやられている。かなりの出血だ。夢中で二人でかかえて外に出る。服を通してボタボタと真赤な血が土の上に落ちた。廊下の行き当りから十メートル先にある時水池の向うの横穴へ入れる。脈が既に微弱だつた。「杉原、どうしよう。ああ上衣が——。」

その時、「召集令状!!」電光のように私の頭を通りすぎた。「おい、杉原。俺は召集令状を取つて来る。」私は云ひすてて又小児科病棟に飛びこんで行つた。初めて部屋の中を見る。誰もいない。西南の壁がくずれ、隣の部屋の本棚が倒れ込んでる。机も椅子も判らない。一面破壊物の山積だ。俺は何処に坐つていたのか、いくら思い出そうとしても思い出せない。

「召集令状」「召集令状。」私は口の中でぶつぶつ云いながら、床の上を這い廻散して、いやに塵埃臭さかつた。

教授室の横から裏手へ出た時、顔一面血だらけになつた一人の女がいた。着物も所々破けている。女は動けずに籬の傍に立つてゐたが、私を見ると左手にぶら下つた二、三才の女をさして、「この子を連れて逃げて下さい。」と叫んだ。背中には赤ん坊を背負つてゐるようだ。「よし来た。」私は離れまいとする子供の手を取つたが、二、三歩も歩かないうちに、倒れたまま動かなくなつた。振りかえつた私の目に、絶望的な母の瞳がチラと映つた。

一色に灰色と化した籬の所々に、上半身裸の学生が倒れている。今西はどうしたらう。あつ焰が！ 行きかけて振り返つた私は驚いた。火焰が、煙が、だんだん小児科病棟を包んで来る。「山へ逃げるんだ!!」

私は灰色の道を、高北・高南病棟のある丘へと急いだ。本館は勿論、行く道の傍の皮膚科・外科の病棟にも火が廻つてゐる。まだ呻吟している学生も道端にいた。半身を起して、放心したように火を眺めている学生もいた。その道をヨロヨロよろめきながら急いだ。高南病棟の丘の裏から、穴弘法山への道は続いている筈だ。

「元気を出せ!! 元気を出せ!!」私は山の中腹の崖の上で叫んでいた。そこには力尽きたように腰を下したり、横になつてゐる一群の人々がいた。皆腫れぼつた、赤黒く焼けた顔をしている。着衣も満足なのは一人もいない。寝ころんでいる男の顔には、既に死の影があつた。「元気を出せ!!」私は又叫んだ。半分は自分に云つているのかも知れない。左脚が痛い。血が流れている。私は氣付いて、両方のゲートルを解いて大腿を固く締めつけた。

「宇本君、大丈夫か？」元気な調教授の声に、私は飛び上がるほど嬉しかつた。「先生、この救急袋の中に注射薬がござります。」「うーん。どうするかなあ。」教授は患者のことを心配されて、焰で包まれた病院へ又丘を降りて行かれた。

眼下の大字付属病院は、既に一陣の火炎に包まれてゐる。右に眼を向けると、山里一円の丘はすっかり焰に蔽われ、その焰は折からの風にあふられ、中天高く燃え上り、基礎の校舎から浦上天主堂のある丘へと流れて行く。

私は放心したように焰の火を見つめていた。松山町にも、城山にも、また井樋ノ口

の方にも火の手が上がっている。そしてこれらの火は、私の上空で一緒になつて、真赤に真赤に長崎の空を焦した。

山の稜線への道はかなり急峻で、一歩行つては立ち停つて息をついた。風が麓から吹き上げて来る。大粒の雨が降つて來た。寒い。私は身震いして頭巾を目深く被つたが、シャツは方々破れて肩も背中も露出している。唇は紫色になつて、烈しい嘔吐が起つた。そして胃の内容を全部吐出した。次の発作にはすっぽい胃液が出たのみだつた。少し登ると又嘔吐が起つたが、胃の中を搾られるような痛みだけで、何も出て来なかつた。

山の八分目まで來た時、私はもう一步も歩けなくなつて、道端の草の上に倒れてしまつた。冷い雨が私の頬をうち、私の上には真赤な空の下を黒雲が流れで行く。その向うに赤い赤い太陽があつた。

「おい、おい。」誰か自分の名前を呼んでいるようだつたが、私には遠い世界のようだつた。その男は暫らく様子を見ていたが、救急袋から強心剤を出して注射してくれた。男は更に私の肩をたたいた。私は物憂い眼を開いて見た。男は影浦内科医局長の森沢先生であった。

先生は患者と看護婦を五、六名連れて立つてゐた。竹の杖を心配して、「君一緒に行こう。」と云われたが、私は後から行きますと答えて動かなかつた。仕方なく先生は、患者や看護婦を励ましながら登つて行かれた。

私の傍を多くの人々が通りすぎて行つた。賀来（辰男）君と矢村（卓三）君が肩を組んで登つて行つた。補仁会の福島さんが、学生に担がれて行きすぎた。その中に同じクラスの鬼塚（正英）の元気な姿が見えたが、私を見つけると、「おい、一緒に行こ」と私をかかえ起し、肩に担いで一步一歩注意しながら登つて行つた。鬼塚君も立ち止つては嘔吐している。上半身が裸体で震えている。私は救急袋から用意のワイヤーチャツを出して渡した。

穴弘法から金比羅山への道では、傷ついた人々の群が、息せきながらトボトボと登つてゆく。私達もその中に混つて、一歩行つては休み、数歩行つては休みして進んだ

が、途中の民家が全部倒壊していたし、松や櫻の大木が沢山道に倒れていて、その度に這いながらその下をくぐつて向側へ出た。

所々に高射砲隊の横穴壕があつたが、顔面、上肢等に火傷を負つた兵隊が、大勢横になつていた。水が飲みたい。早く暖い所に行きたい。横になりたい。私の頭の中はもうそれ以上には考えられなかつた。鬼塚君と遅れてしまつたが、それほど山の上は寒く、私はすっかり疲れてしまつた。

金比羅山を越えて山の向側に出た時、畠の中に点在する百姓家は皆、倒壊したり、屋根瓦が飛んだりしていたが、青い樹木や緑の作物の色に、少しは元気が出て來た。樟の茂りの間から見える青空も気持ちよかつたし、それよりも嬉しかつたのは、街が見えたことだ。懐かしい街が――。

大波止方面に白煙が盛んに出ていたが、眼下の立山から螢茶屋の方は静かだつた。下の方でけたたましい待避の鐘が鳴る。又爆音だ。脚を傷ついた人も、今まで死んだように道の真中に臥していた人も、反射的に林の木陰や畠の作物の中に這つて行く。私も急いで傍の農家に走り込んだ。中は大変な乱雑だ。水はないか？ 家の中には誰も居なかつた。ふと見ると囮炉裏の傍に鉄瓶のころがつてゐるのが目についた。水がある！ 私は武者振りつくや、息もつかずに飲んだ。

立山の石脇道を下る時、両側の民家も大なり小なりの被害を受けている。「勝山国民学校へいらっしゃい。救護所が出来ています」と教えられて、真夏の太陽の下を喘ぎながら進んでゆく。避難の人々の群、警官を満載したトラック、家財を積んだ車、等々。街は騒然としている。

勝山国民学校では、救急手当をうけて出て來る人々の姿が見えた。ホッとして近づくと、「大波止から類焼の恐れがあるから、伊良林国民学校へ行け！」との指示があり、私はまた螢茶屋をさして歩いた。

向うから同クラスの小島（保隆）がやつて來た。彼はこの日下宿にて難をのがれただしだが、私を肩に担いで伊良林へ連れていつてくれた。「負けてたまるものか、頑張れ、頑張れ！」と、心に叫びながら、伊良林国民学校に着いたのは、午後五時を

過ぎていた。

受付の警防団員に職業と名前を告げて、講堂に入った。川棚から海軍医療隊が来て、応急手当をしている。その中に、頭に包帯をして活動されている古屋野教授の姿があった。私はここに収容されて、教授自らの手当を受けた。下肢、前腕、後頭部、背中等に数ヵ所の硝子破片創、それに左顔面の火傷であったが、左下腿の創面には、白い脛骨の骨膜が見えていた。左大腿の傷も深いようだ。

講堂のこの部屋の中は、既に収容患者で一杯であった。産婦人科の草場先生が、隣の蒲団に横たわっている。小島が天幕を持って来たかけてくれた。

次から次から負傷者が担ぎ込まれて来る。引取人のある者や軽傷の者は、治療をうけるそのまま帰つて行つたが、大部分はそこに収容された。クラスの西（憲治）は背中や腕に火傷を受けていたが、元気に歩き廻つている。杉原もちらよつとやつて来たが、元気だった。

日が暮れると灯がつかないので、軍医のいる中央の机に蠟燭が二本ともされ、歩く人の影が大きく壁に描れた。「水を下さい」、「早く診察して下さい。先生!!」あちこちに苦しそうな患者の声がする。隣の草場先生は身動き一つせずに、間断なく低い呻き声をあげている。

じつと天井を見つめていると、私の肩のところに誰かが何かを置いた。見ると古屋野教授だ。患者の一人一人に乾パンを配つておられるのだ。

薄暗い部屋の中に患者の叫び声がして、少しも眠れない。「いま西はどうしたかなあ、グルッペの連中は無事だったかなあ。」朝からの出来事を追想して行つたが、全く悪夢のようだ。

夜はだんだん更けて行つたが、患者の叫び声が絶えない。「水を下さい。」「痛いよう。痛いよう。」若い警官がその度に水を持つて行つた。しかし三分もたたない内に、又水を下さいと叫んでいる。

舗道を走るトラックの音に、敵機かと胸を騒がすこともあった。火が迫つて来る。右の窓が真赤だ。皆不安になった。重傷患者は運動場の中央へ運び出された。不安の

数刻がたつたが、火は大波止の疎開地で止つたとの報にホッとする。

曉近くになって、私は漸く眠りに入つた。少し眠つたと思つたら、朝日が射し込んでいる。明るくなつてみたら、室の中は目もあてられぬほどの惨憺たるものであつた。硝子の四散している中に、或いは長椅子の上に、或いは戸板の上に——。布団の上に寝ているのは良い方だつた。火傷で顔も手も腫れ上つて、何か白い軟膏がつけてあつたが、蒼白な顔、呻吟している顔、一様に腫れ上つて眼も見えない顔、等々があつた。臭氣が鼻をつく。真夏の暑さに室内ムツとしている。

朝食にむすびが配はられた。私は水を貰つて半分食べた。市内の医師が診に来た。床の上で時間が過ぎてゆく。十一時過ぎるといつとしておれなくなり、窓枠に手をかけて立ち上つた。杖にすがつて運動場に出ると、小島が驚いて近づいて來た。「それは駄目だよ、その脚では——。もう少し安静にしなくては——」

友の心配を振り切つて、喫茶屋の舗道へ出た。そのうち門の前にトラックが二台停つて、患者がまた運び込まれて來た。患者の一人に急ぎ近寄つて尋ねた。「どちらから來たんだすか」「浦上からですよ」。浦上？私は勇気を得て自動車の警官に頼んだ。警官と私を乗せたトラックは、勝山国民学校から大波止への道路を走つてゆく。市役所裏一面の家屋は焼け破壊されて、处处に半焼けの土蔵が残つてゐる。県庁の歴史的な建物も内部がすっかり焼けている。長崎駅付近から、灰燼の跡が烈しくなつて來た。駅の建物も、ツーリストビューローの建物も、廣場の前の家々も、焼き尽されてまだブツブツ燃つてゐる。廣場に電車が一台、置き忘れたように坐つてゐる。瓦斯会社の石炭が盛んに燃えている。通りの右側は見渡す限りの灰燼だ。倒壊した煉瓦の山積、焼けただれた瓦、鉄類、いつまでも続いている。左の工場地帶は鉄骨群が黒光りに露出して、まるで怒濤が押し寄せるよう、一つの方向に大きく曲つてゐる。

工場の中は鉄製の機械類が重積して、何が何だか分らない。

井樋ノ口から更に大橋方面の間に、一軒の家もない。井樋ノ口の泥川の傍には、警察署のコンクリートの小さい建物が一つ残つていて、大勢の患者がトラックを待つていた。私はここから山添いの道を歩いて行つた。道と云つても焼跡と区別がつかな

い。瓦、鉄、煉瓦などが四散し、電柱が倒れて電線が地を這っている。瓦は真赤に燃えている。道々の横穴には九死に一生を得た人々が避難していたが、負傷者も死人も、その中にいるようだった。

髪をふり乱した女が、流出するがままになつて水道で、鍋を洗つてゐる。一人ぼつちになつた女の足が、倒れた電柱に腰をおろして、道行く人に、「水を下さい、水を下さい」と、力ない声で叫んでゐる。死人が!! 焼けただれた幾つもの死体が横たわつてゐる。山の端を曲ると、何の遮る物もなく、大学病院の懐かしい建物が見える。碧い空を後に、焼き尽された灰色の丘の上に、病院の建物群が巍然として立つてゐるではないか。

長崎の丘の広大な一角にある美しい森に囲まれた、白亜の殿堂長崎医科大学も、今は昔日の影を見る由もない。正門から大学裏のグビロが丘が一望され、本館を初め、学生集合所、病理、生理、解剖、薬理等の教室が一つも残っていない。各教室のコンクリートの土台だけが、画然として夏の陽に照し出されているのみだ。遙か向うに図書館、生化学、衛生の筋筋建築だけが、ポツンと立つてゐる。正門入口の築山の樟木の林も、路上に幹だけになつて倒れていて、その傍に学生が一人、まるで昼寝でもしているように死んでゐるが、彼の周囲には、彼の夢を暖めるべき緑の芝もなかつた。門衛裏の外客を泊めるコンクリート建の一棟が、外郭だけ残つており、ここでも入口の階段に、白いワイシャツの学生が腰を下したまま死んでいた。

進むにつれて、なお處々に死体があつた。衛生教室前広場の大きな水槽は、すっかり水がひからびて、立木が沢山落ち込んでいる。解剖教室跡には、国友名醫教授のコンクリートの部屋が、伽藍洞になつて残つてゐる。病理教室と思われる跡には、沢山の死体があつた。解剖教室跡にも五、六人死んでいた。半分炭化して焼けただれたものや、骨と炭になつてゐるものもある。衣類は皆焼けて顔も判らない。運動靴だけ焼けないで、骨にくついてゐるのもあつたが、どの死体も上を向いて、両手で虚空をつかんで倒れている。断末魔の苦悶する声が聞えてくるようだ。私は頭巾をとつて掌を合せながら進んだ。

運動場の上の樟木の並木も倒れ尽していたし、グラウンドのあの美しいクローバー原も、灰色に化して荒涼たる姿となり、すぐ後に聳え立つ東洋一の浦上天主堂は、煉瓦壁が中央から崩れ落ちて、十字架の塔尖もどこかへふつ飛んでいる。

引き返して、裏門の門衛所がまだ燃えている付属病院に入つた。各病棟を連絡する木造の廊下も焼け失せて、各病棟が裸になつて薄黒く建つてゐる。小児科の横の溜池の処に、三、四人の人が動いてゐる。近づくと後の横穴壕に学生や看護婦達が十数人、横になつたり坐つたりしてゐる。小児科婦長の元気な顔が見え、二、三人の学生が治療に当つてゐる。

「やあ、岩切君、元気だつたですか。」岩切は顔から頭へ油紙を巻いていたが、眼も唇も腫れ上つて相当な重傷だ。「グルッペの連中はどうしたでしようか。」と尋ねると、「それがあの時の事を少しも思い出せないのでよ。」と、入口に坐つて苦笑しそうに云つた。「今西さんがその横穴の一番奥で亡くなつておられます。」といふ三年生の言葉に、今西の最後を考え暗然となる。生前の純情に輝いた彼の顔を追想起して、堪らない氣持になつた。

眼科の地下室に四年生がいるというので、半分壊れた處から地下室に入ると、原田（清巳）、大津（昇久）、服巻（勝之）が席の上に横になつてゐる。沢田（稔）が注射器を持って傍に立つてゐる。「原田君、痛いだろう。」「うん、三人とも背中や脚、腕にひどい目に合つた。今、沢田君から注射を打つて貰つて、少しは楽になつたが——誰だい。戦争なんか始めやがつた連中は——。」皆元気に話し合つてゐる。

頭の上には、水の入つたブリキ缶が置いてあつた。三年生が粥を持つて来る。梅原（正幹）が外科の三階で即死した由。江上（毅）は歩いて下宿に帰つたそうだ。眼科の教授が横穴に寝ておられるとか。翌日、原田はこの地下室で死亡した。

すぐ前の小児科の教室へ入つてみると、私達の居た予診室まで燃えている。穴のあいた壁や壊れた椅子の間に、ボロボロになつた上衣があつた。手にとつて見ると、「今村」と名前が縫いつけてある。彼はどうしただらうか。露台には私のノートの一冊が、吹き飛ばされている。半焼けになつた鞄がある。今西のだ。中に書きかけの

葉書、お父さんからの便り、メモ、戸籍抄本が入っていたので、遺族へ送るべくポケットに入れる。短期軍医を志願すると張切っていたことを、戸籍抄本を見ながら思い浮べた。

仮本部が本館の方に出来て行つてみた。古屋野外科手術場の前に調

教授、木戸助教授、篠島助教授が、消毒器の傍に居られる姿がみえた。仮本部は調外科東病棟の一階に出来ていて、古屋野教授と高瀬教授の顔が見える。古屋野教授が学長代理として、指揮をとつておられるとか。調教授は道ノ尾に救護所を造ると云つておられた。角尾学長は付近の壕におられ、相当にひどい硝子傷を受けておられると聞いた。

病棟の室や地下室には、薬を敷いて大勢の学生や看護婦達が臥していた。高木教授

と山根教授が危篤だそうだ。生存者名簿に学年と名前を書き入れた。佐野教授の元気な姿が見え、数名の学生と一緒に、薬理の祖父江教授を螢茶屋の自宅に運んで行かれることであった。その中にクラス総代の尾立（源和）君や三年生の中野君の顔が見えた。運動場まで来ると、天主堂が赤々と燃えていて、壊れた煉瓦の一つ一つが、焰に照らし出されていた。その夜は三組河内の知人の家に泊る。

敗戦の日、八月十五日の夜、私は同級の石川（武彦）と一緒に、汽車で郷里の山口県岩国へ帰った。一週間ばかりして発熱、歯齦出血、所謂原爆症の症状が起つたが、輸血により助かることが出来た。その当時記録していた古いノートを読みながら、恩師、先輩、級友、その他学部の学生、職員を初め、長崎市で被爆され亡くなられた方々のことを想い、その御冥福をお祈りしながら、右手首の創跡をさわってみた。

#### 合掌

【調 附記】 宇本君は、原爆直後にこの手記を書いておられたとみえて、大変詳しく述べ、私の記憶からみても、少しの間違いもないようである。立派な長崎医大の原爆被災記録として、永久にその名を止めるであろう。

## あの時を追想して（「追憶」より転載）

鹿児島市中央町三一十九  
当時長崎医大学部四年生

### 尾 立 源 和

もうあれから十年にもなるかと、今更ながら驚かれる。当時、七十五年間は青いものは生えない、と云われた浦上の畠には、麦も実り、野菜も青々としている。又全くの廃墟と化した長崎医大も、十年後の今日、病院はほぼ以前の形態に復帰し、基礎教室の建物二棟が浜口の丘に聳え立っている。その中で昔のように研究にいそしみ、学業に励んでいる助手や学生の姿を見る時、よくもまあここまで復興したものだと、感慨深いものがある。

丁度あの日の前日は、八日の大詔奉戴日であった。運動場に集つた全学の職員、学生たちに、東京から帰られたばかりの角尾学長が、広島の爆撃の模様を話されたのだった。その言語に絶する惨状と、新型爆弾の驚異的な破壊力について――。

まさか その翌日、我が長崎が第二発目のお見舞を受けようとは、夢想だにしなかった。八日の夜は、我々の級が防空当番に当つていたので、蚊に刺されながら、各自受持の教室に寝たのであった。

明ければ運命の日、八月九日である。この日の朝は、七時頃に空襲警報が発令されたが、九時頃に解除されて、引き緊急警戒警報に入った。頻回の警報発令で、大切な講義がさっぱり出来ないというので、警戒警報中は講義を続け、空襲警報発令と同時に部署につくように、制度が改正されたばかりであった。

従つて我々は九時からの角尾教授の内科臨床講義を聴いた後、殆んどがボリクリに出ていた。私自身は、医療隊の本部（当時の本館患者係）に残つて、電話の番をしていた。暑い盛りではあつたが、黒の制服にゲートルを着けていた。机の上に貴重な弁当箱を置いて、その上に制帽をかぶせていた。確かに岩波文庫の「恋愛と結婚」を読んで、ひとり殺風景な心を慰めていたと思う。十時半頃だったか、本部にまだ警報は解

除されないかと聞いてみたが、継続中という返事で、その後何の音沙汰もなかった。

十一時頃だったろう。突然ピカッと稻妻のように、少し青味がかった強烈な閃光が走ったかと思うと、物凄い音響が怒濤のように轟いた。本能的に机の下に潜った。

八月一日に同じ場所で爆弾攻撃の洗礼を受けていたので、直撃だと直観した。こわごわ眼をあけてみると、あたりは真暗闇だ。すつかり観念してジッとしていると、やがて霧がはれるようにスッと明るくなつた。眼前には、天井の梁やら、何処にこんな物があつたのだろうと思われるような、沢山の大きな材木が、めちゃくちやに積み重なつて落ちている。それをかき分けて這い出す。隣に坐つて事務を執っていた老人が倒れているので、抱き起したが元気がない。引き扱いで窓から玄関の方に降したが、ぐんなりしてそれきりだったように思う。

ハッと大事な食糧を忘れたことに気がついたので、部屋にとつて返したが、何処へ吹き飛んだのか跡形もない。同窓の他の人達は、幸に出口から逃げ出したらしい。

本部と連絡をとろうと思つて、受話器をはずしたが交換手が出ない——この時は既に、交換嬢はレバーを握つたまま絶命していたのであるが——これは大変な事になつたぞと予感した。

外来の廊下に出る。右往左往する人の姿はあまりない。廊下の真中に白衣を着た学生が、血だらけになつてうずくまっている。かけ寄つてみると、専門部総代の北郷君(ほんごう)だ。「大したことはないぞ。元気を出せ」と云つたが、弱々しい声で「もう駄目です」と云う。そのままにして、玄関の外に飛び出づ。西森君ほか二、三人が、呆然と突つ立つてゐる。「オー」と声をかけただけ。ふと眼下の街の方を見ると、これはどうしたことだろう。全くの火の海だ。家の形が見えない。人影も人声もない。不気味な一種の静けさの中で、ただ猛々と燃え続ける火、火。この光景を見て初めて、これは例の新型爆弾に違いないと思つた。

とにかく本部に連絡をとる積りで、本館から内科、耳鼻科の建物の横を通つて走つた。どの病棟だったか、一部に火がついていた程度で、大部分の病棟には、まだ火の手が上つていなかつたようだ。八月一日の爆撃の際は、見事に消火に成功したの

で、人手さえあつたら、病院の方は焼けずにすんだだろ、と残念に思う。

基礎教室のある浜口の丘も、同様に火の海。もうこれは駄目だと思った。不思議なことに、火の中から逃げ出す筈の人の姿が、全く見られない。後になつて思えば、一瞬にして建物の下敷になり、その上を火でなめられた訳だから、当然のことだつたらう。下級生は丁度講義中の筈だから、とても助かる見込はあるまい。

後日、焼跡に行つてみたら、講堂の中に何十人もの整然と並んだままの、黒焦げの死体が発見された。これほど無残な光景が又とあるうか。勃然たる憤怒を覚えた。

幸に極く少数の人は、運よく逃げ出したらしいが、結局、基礎教室にいたものは全員死亡した。一応危地を脱した者は、「自分は助かった」と思つていただろうから、益々哀れである。眼科教室の横に牛が倒れていた。そこで正君(しょうきみ)に会つた。彼が「誰とか先生が倒れているから助けに行くんだ」と怒鳴つたようだが、後日彼に聞いてみたら、さつぱり分らんといふ。あの際は、皆が無意識の状態で行動していただらしい。血だらけの人達が、三々五々、お互に肩を組み手をとり合つて、裏の山の方に避難して行く。白衣の上に血を浴びてゐるので、一層凄惨な感じがする。看護婦らしい人をおぶつたり、手を引いたりして、精神科裏の崖を数回上つたようだ。顔も、名前も、助かつたかどうか知らない。

僕等のグルッペは卒業試験で精神科を廻つていたので、気になつて駆けつけたが、学生の本拠地である木造の別館は、ベシャンコに潰れてしまつてゐる。人声もないのでも皆んな逃げたらしと安堵したが、よく見ると人が一人下敷になつてゐる、動かない。木片を払いのけて見ると、級友の久保哲雄君だ。鼻や口から血が——既にこ書きされている。彼には妻子があつて、卒業試験のすむのをあんなんに楽しみにしていたのに、可哀想に思う。

実は前日の八日の夜、我々のグルッペは、調教授の外科の卒業試験を受けたのだが、とにかく本部に連絡をとる積りで、本館から内科、耳鼻科の建物の横を通つて走つた。主に頭部の外傷について訊かれたが、途中で空襲警報が発令されたので、試験は一応合格したことになつた。その翌日当の久保君が、頭蓋底骨折で死亡するとは、運命もあまりにいたずら過ぎる。この精神科の建物には、専門部の学生も数人いたらし

いが、後で殆んど死亡した。

上の畠で総代の久野文次郎君に会った。手を怪我しているし、顔も血だらけだ。

「俺は山の上で死ぬよ、遺言を書きたいのだが、何か持たんか」という。「あくそ

うか」と云つて万年筆を渡した。覚悟のよかつた彼が助かつたと聞いて、遺言はどうなつたろうかと後で気になった。

誰かが包帯をしてくれというので、ゲートルを解いてそれをグルグル巻いてやつた。又夏というのにガタガタふるえている学生がいたので、上衣を貸してやつたら、

自分も半裸体になってしまった。

畠の中にはゴロゴロ寝転んで呻いている人々、坐り込んで放心したように下界の地獄絵を眺めている人々、あちこちで、「水をくれ!! 水をくれ!!」という悲痛な叫び声が聞える。一口の水を求めて、穴弘法の方へ這い上る人の行列が続く。中には一糸まとわぬ女性のあらわな姿もある。恐らく衣類は引きちぎられたか、或いは火がついたので引きちぎったに相違ない。風は穴弘法の山の方に吹いていたので、火の手はここまで届きそうにない。しかしその夜をこの場所で明かした大勢の人達は、燃え盛る猛火を前にして、どんなに恐怖と不安におびえたことであろうか。

僕自身は更に山に登る。途中俄雨に遭つたようである。青かった畠もすっかり灰色に変つていて。葉っぱという葉っぱは吹きちぎられ、南瓜などがブスブスくすぶつている。ひもじきのあまりこんなものを食べて、唇にブツブツを生じて死んだ人もあつた、という話である。

山中の大きな松の木が、あちこちで、地上一間位の高さでボッキリ折れている。物凄い爆風に驚嘆したが、それにしても、こんな高い山の上までやられようとは、思ひもかけぬことだつた。このあたりから下を見ると、一面火炎に包まれて何処が何処だか、さっぱり見当がつかない。全くこの世の地獄と云おうか、世界の破滅を思わせるような光景である。

ペシャンコになつた兵舎の横を通つて峠に出た。西山方面には火の気が全くない。山一つ隔てた反対側は、全くと云つていゝ程の平静さだ。ホッとしたと同時に、一種

翌日、伊良林小学校にも収容所が出来ていると聞いたので、行ってみた。今村喜人、西憲治の両君は、既に諫早の海軍病院に運ばれたとのことだつた。恐らく依託生になつてゐた関係だろう。今村君はひどい外傷を受けていたそうだ。彼がカメラをいつも後生大事に、腰にくくりつけていたのを思い出す。ファイトのある男だったのに惜しいことをした。肥後実君はやつとここまで辿りつきはしたもの、運動場の片隅で死んでいたということである。

こちらでは窓ガラスが吹き飛んだ程度なので、そう大事とは思わなかつたらしい。早速握り飯を戴いた。情報を知らせるために無理な山越えをしたせいか、そのおいしさ。後できっと、殆んどの人が飯を食えなかつたらしくから、すぐに食べられた僕などは、さしづめ助かる方の組であつたのだろう。

救助の本部が勝山小学校にあると聞いたので、出かけたら大島（現在は浅沼）桂君に会つた。古屋野教授が頭に包帯をしながら、担架を持っておられる。「金比羅山上に大和田野講師がいるそだから、連れに行くのだ」とのこと、「それじゃ我々が参りましょう」と、山上の小屋まで駆け登る。ここには大学関係の人達が、大勢収容されている。調理所の裏から逃げた人達だ。大和田野先生は地面に寝ておられたの

で、古屋野先生の言葉を伝えたが、「体がきついからこのままでいい」と云われた、止むなく学童らしい全身火傷の患者を担架にのせて山を下りた。これが大和田野先生にお会いした最後であった。

帰つてから小母さんに、「同宿の三人の学生のうち、一人位は駄目だらう」と話したが、三年の安日晋君は、その日のうちに無事に帰つて來た。級友の日高和郎君は翌日やつと帰つて來たが、咽に穴があいていて息が息しそうだつた。数日後郷里へ向われたが、いまわの際には、周囲の人達にお礼の言葉を述べて、從容として死に就かれたそうである。

翌日、伊良林小学校にも収容所が出来ていると聞いたので、行ってみた。今村喜人、西憲治の両君は、既に諫早の海軍病院に運ばれたとのことだつた。恐らく依託生になつてゐた関係だろう。今村君はひどい外傷を受けていたそうだ。彼がカメラをいつも後生大事に、腰にくくりつけていたのを思い出す。ファイトのある男だったのに惜しいことをした。肥後実君はやつとここまで辿りつきはしたもの、運動場の片隅で死んでいたということである。

まだ所々燃え焼つて、火災を通つて、大学に出掛けた。然し内部は殆んど焼けてしまつて、防空壕の中に角尾学長、高木教授、山根教授の方々が収容されていると聞いた。屋頃には調理所の佐藤主任が握り飯とタクアンを沢山作つてくれたが、食べられる人が少ないので、大分余って腐らせたようだつた。

家族の人達が氣遣つて探しに来はじめたので、先ず学生の生死を調べることに着手した。生存者は数える程しかいない。情報に入るにつれて殖えはしたが、同時に死者の数も増して行つた。夕方頃だつたか、汽車が開通したので、軽傷者は郷里に帰り始めた。従つて元気で働く人の数は、更に少くなってしまった。

その頃久留米の衛生隊が救援に来てくれたので、多少皆の顔に安堵の色が浮んだ。何しろ病院がやられたので、救急道具さえ何一つないのだ。実際は放射能の障害に対しては、全く手のつけようもなかつたろうと思うが——。

そのうちに高木教授が死なれたという報せが伝わつた。重傷者が次々に死んで行く。何とも云いようのない悲痛な氣持だつた。藤原昌君がひどい骨折で参りそつたので、その夜は彼の呻き声を聞きながら防空壕に泊つた。

三日目頃になると、山の上にいる人達を焼跡の建物に収容することになった。奥和夫君が夢遊病者のようにフランフランしながら下りて来たが、後で死亡した。原田清巳君が眼科の地下室に収容されたと聞いたので行つてみたが、既に冷くなつていた。殆んど傷はないようだつたが——。

「新名清隆君が会いたがつていたよ」と誰か知らせてくれたが、生存中は遂に会えなかつた。その後本館の二階で死んだと聞いたので、せめて死顔でも見たいと思つて駆けつけた。結婚したばかりの奥さんが、傍で放心したように坐つていて。煙草を欲しがつて死んだそうだ。それで毎年の原爆記念日には、煙草を供えることにしている。玄関前の広場に木材を寄せ集めて来て、その上に彼の亡骸をのせ、奥さんと二人で火葬したが、あまりのこととに泪も出なかつた。今思ひ出してもゾッとする。彼は常常、自分は一人息子なので後継者をつくるために結婚したのだ、と語つていたが、確か奥さんは妊娠していた筈である。今、彼の妻君と子供はどうしているであろうか。

永井隆先生は顔に包帯姿で活躍しておられた。さすが金鶴勲章組だけあって、テキパキ仕事を進めておられた。先生の云いつけて、防空壕から薬品類を引き出し、一箇所に保管した。

山根先生はお酒好きだと聞いていた。木戸先生から云われて、消毒用のアルコールを薄め、それに注射用のブドウ糖液を加えて持つて行つた。先生は包帯だらけで、顔もよく分らない程だつた。「有難う。あとで戴くよ」と云われたが、あのやかましい先生が、大変元気がなさそうに見えた。恐らくはこの即製飲料も召上れずに、昇天されたのではないかと思う。

命によつて薬理の祖父江教授を、本河内にある佐野教授の宅まで担架で運んだ。途中で降りて小便もされたのに、後で死なれたと聞いて、いまいよ誰が死ぬのか生きるのか分らなくなつた。

時日が経つにつれて、救助体制も幾らか整つては来たが、死亡者は殖える一方だつた。調教授が滑石に仮救護所を開設されたので、大学関係者も多数その方に送られた。二人の息子さんを失いながら、医療に従事された先生の胸中は、如何だつたであろうか。

毎朝蟹茶屋から歩いて大学に行き、夜は燐光の燃える道を、死骸につまづきながら帰る日々が続いた。片瀬に級友の園田哲郎君を訪ねた。色々心残りがある様子だつたが、遂に最愛の新妻を残して死んだ。

これでもう一発來たら愈々最後だな、と覚悟はきめていたが、終戦となり、遂に里心がついてしまつた。愛刀を肩にかついで、四日三晩かかつて鹿児島の我が家に辿り着いた。母は、死んだものと諦めて、僕の写真を仏壇にかざついていた。父は、遺骨拾いに長崎に旅立つていた。

友達のこと、学校のことなど気にはなつていたが、心身ともに虚脱状態だつたので、家にじつとしていた。やつと十月、大村での授業開始に出頭して、級友の動向が分つたような次第である。

死亡者三十六名、生存者は僅かに三十二名となつてしまつた。今西章君はあとにな

つてから、防空壕の中で発見されたそうである。岩切達君は五島和夫君の世話をなつて、八月末に時津で死んだとのこと、彼は大の野球好きだった。戦時中禁止された野球をこっそりやつて、当時の学生主事松下助教授から、大目玉を頂戴した話がある。今運動場に出てみると、所狭しと野球が盛んであるが、その度に岩切君の黒い顔を思い浮べる。もし生存していたら、どんなに喜んで野球をやるだろうかと思うと、可哀想な気がしてならない。

こうして丁度十年前の惨事を、記憶を辿りながら綴つてみたが、時間的な点で多少正確を欠いているかも知れない。若しあの爆発が何秒か早かつたら、生死が全く立場をかえているだろうと思うと、生き残っている自分が、未だに不思議な気がしてならない。死亡者の御冥福を心から祈らずにはいられない。

(昭和三十年記)

【調 附記】この原爆体験記は、昭和三十年に出版された「追憶」に掲載されたものであるが、大変詳細に多くの罹災者の消息が記述されており、「而も「追憶」は五百部出版されたのみで、「忘れな草」の読者の大多数はこれを御覧になつておられたことと思つたので、著者にお願いして転載させて頂くことにした。尾立君には心から感謝申し上げたい。

## 思 い 出 の 断 片

福岡市博多区住吉四丁目二八一三  
当時長崎医大学部四年生

小 島 隆 保

永見敏樹君のこと

### 角尾学長の御逝去

人の記憶ははかないもので、あんな凄惨な体験も、三十年近く経てば曖昧模糊として、ただ断片的に思い出すのみです。角尾先生御逝去の事情もそうです。

被爆後三日目だったかと思います。どこから来たのか、外来本館の前にバスが一台とまり、負傷された先生を連れ出そうとしておりました。私も同乗するよう命ぜられましたが、同乗者は内科の先生が二、三人(その中に巣島先生もおられたようです)、

看護婦数人、その他学生等、皆で二十人位でした。

車窓より見る途中の惨状は、筆舌につくせません。途中で死亡した人もありました。バスは道ノ尾あたりで止まりました。日はとつぶり暮れて、隧道のような所を、トボトボと一語も発せず、学長の担架を畳んで進んで行きます。それはまさに野辺の世界であつた。

送りそのままでした。

このあたりはさすがに爆心地から遠く、蛙が鳴いたりしておりました。それでも屍臭がブンブンと漂つて来ることがありました。

ふと道端にうごめくものがあるので、近寄ると、何と裸の少年がうずくまり、全身に蛆がぞろりとたかっています。まだ生きている間に――。

一行は役場のような所に着きました。三十畳程の板敷に、裸電灯(或いはローソク?)が一つ灯つていました。

そこで先生は、色々と口走つておられました。学校の事、病院の事、患者の事、そして自分の亡き後は、古屋野先生にあとを頼む――そのようなことでした。そして翌朝は、そこから他廻へお移りになりました。

私は二晩ほど居て、付添つていた友人(学部三年野口修君)が死亡しましたので、私もここを去りました。間もなく角尾先生も御他界されたと聞きました。

同行された方で、今生存している方がある筈です。一度集つて交々語り合えば、先生の御臨終の様子が、もっとと明確になることと想います。

○かなぶんが飛びかひ学長逝かんとす

うららかな春の日ざしであった。僕は付属病院前の坂を登つて行った。腕時計を見ると、ポリクリにおくれること十分、どうせ欠席になるのならと、病院の前の芝生に寝ころんで、ポケットから文庫本を取り出して読みふける。近松門左衛門作「女殺油地獄」である。次第に巣林子の世界に沈潜してゆく。私の頭の中は、油まみれの血の世界であった。

「やあ、小島君」という声で、淨瑠璃の世界から、スープと昭和二十年の現世にひ

きもどされた。「何を読んでるんですか」「ああ永見さん」。彼は病弱のため、何級

か上から我々のクラスに降りて来た人である。だから敬称を使つた。

「あなたも遅れたんですね」。それには答えず、彼は「今日は静かですね。爆音も聞えず——」と云つて、僕の横に寝ころんだ。そして僕の本をとつて、「ああ、近松ですか。僕も芝居が好きなんです。君もですか。」「いや、特に好きと云うんではないですが、然しいですね、近松は——」。ごろりと二人は横になり、春の空を仰いだ。こうして短く深く、はかない交友が始つた。大学に来て初めて友を得た、という喜びをおぼえた。彼もそうであつたろう（と思う）。

そして原爆が落ちた。

僕は恋人を求め、又永見君を求め、長崎の脊稜山脈を登りつ下りつ、一路爆心地へと急いだ。穴弘法に立つた時、慘たる母校の姿を見て、息を呑んだ。山を下りてまつしへらに、永見君の入院している筈の結核病棟に走つた。

彼は死んでいた。全身無傷であった。結核独特の透けるように白い肌は、生ける時と全く変わらない。微笑すら浮べてゐるではないか。

生残りの学友と共に、遺体を裏山に運び上げた。明日再来を約して私は去つた。然し翌日は既に墓碑に付されてゐた。

このようにして、幾千幾万の友情、又愛情が、原爆一閃によつて引き裂かれたのである。嗚呼!!

(四九、一、八)

## 原子雲の直下を彷徨<sup>さまよ</sup>いて

長崎市岡町二一一五  
当時長崎医大部四年生

五 島 和 夫

丁度二十年前の今日、私はこの大学付属病院の一隅に立つていました。そして明日、私の運命を大きく変化させたあの空爆事件が起らうとは、夢想だにしませんでした。

た。

当時私は医学部の四年生でした。原爆の年の九月に卒業業を予定され、既に卒業試験期に入つて、各臨床教室を一周回づつ廻っていました。

八月初め、私共のグルッペは耳鼻科教室に割当てられ、原爆の当日は、耳鼻科の二階にある長崎港に面した図書室内で被爆しました。現場に居合せたグルッペ四名は、幸にして生残つて、唯元気に活躍しておりますが、僅か教分前に室から出て行つた一人の友人（古賀典志君）は、不帰の人となつて遺体さえも確認されおりません。

このような悲惨な原爆が、長崎に落されようと想像もしなかつたのは、長崎市はそれまで軽い散発的な爆撃を二、三回受けただけで、他の戦災都市と違い、殆んど無傷のまま温存されていたからであります。

敵のボーリングB29の編隊は、屢々市の上空に現われましたが、目的は大村にある第二十一航空廠で、いつも通過するだけでしたので、私共も段々横着に構え、双眼鏡など持ち出して、B29の美しい銀線を描く編隊に見とれてゐるうちに、誰云うともなく、長崎は古い由緒のある都市だから、米軍も爆撃を手控えしているのだろう等と、思い込むようになりました。

昭和二十年八月九日、幾らか夏雲を浮べた快晴の日和でした。戸外は真夏の太陽が、燐々と輝いておりました。私共は、外来診察室にも患者が疎らでしたので、仕方なく耳鼻科教室の図書室にたむろして、互いに雑談をかわしておりました。

その頃は最早や外来を訪れる患者も殆んどなく、また入院患者も減少しており、特に八月一日に二五〇キロの爆弾攻撃を受けてからは、先を争つて退院しましたので、病院はむしろ閑散とした有様でした。

丁度午前十一時頃、誰が云いだしたか、試験準備のノートにも飽きたため、早めに昼食の弁当を食べようということになり、グルッペの四名は一つの机に向い、各自的弁当箱を開いて、雑談のうちにつづいておりました。

その時、耳鼻科病棟とその南側に隣接した放射線科の建物との間の空地で、数人の看護婦らしい女性の声がしました。「ほらほら、飛行機よ」「あれB29ね」などと、

彼女等は空を仰いで話していたのです。

私のうち何人かが、図書室のベランダに出て空を見上げた時、高度約七、八千メートル位の上空に、一機のB29らしい飛行機が、丁度大学病院の頭上を通過して、北方へ遁走しようとする姿が見られたのです。今にして思えば、そのB29の一機こそ、この長崎市に原爆を投下し、今将に自らの安全圏内に逃がれようと、フルスピードで脱出したつあった惨劇の張本人だったのです。

ここで私は、運命の皮肉というものを、つくづく感じさせられました。その朝原爆投下の任務を帯びた米軍機は、実は北九州工業地帯を一挙に壊滅させる目的で、マリヤナ諸島の基地を飛び立つたのですが、北九州上空の視界が悪く、無電連絡により、命令は急遽一変して、長崎上空で投下されることになったのです。云うなれば、長崎市は身代りの役をつとめることになったのであります。

更に爆弾は長崎港の中心部に投下する予定で、落下傘に装置し、徐々に降下させて、海面上五〇〇メートルに達した時爆発させることになっていたのですが、当日は南風が海上から陸地に向って吹いており、この風に乗って落下傘は長崎港から浦上方面へ、更に松山町へと運ばれて、現在の原爆中心地の上空で炸裂したのであります。

若しこの風がなく、爆弾が予定通りの地点で炸裂していたとすれば、私は今この壇上でお話するようにはならなかつたかも知れません。又今は亡き多くの方々も、死なずに現存されていたかも知れません。と申しますのは、原爆は大学よりも更に北方で爆発したため、北側の室と南側の室とで生死を異にするほど、安全度に相違があつたのであります。

扱て、話を前に戻しますが、私共は飛び去ったB29を見送ると、別に気にもとめず室内に戻り、又再び食べつづけおりました。

B29が通り過ぎてどれだけ経つたか、私は一瞬、雷が轟き始める時のようなゴロゴロという音にも似た、又沢山の爆弾が雨のように降りかかる時に発するヒュード音にも似た、一種奇怪な音を耳にしました。次の瞬間、私は全身に身の危険を感じる体の反射を自覚しました。それは四名の仲間のうち私が最も早かつたと思ひます。

咄嗟に私は大声で、「伏せろ!!」と叫びました。そして大机の下に変り身を早く伏せ、眼を閉じ、両耳を手で覆いました。他の三名も素早く一斉に伏せました。

それと同時に、大地をゆさぶる大鳴動が二回ほど起り、それより少し小規模の鳴動が二、三回続いたようでした。そしてその間、私の伏せている身体が数回上方に持ちあげられ、沢山な物が体の上に落ちかかって来ました。然し恐怖の一瞬であつたためか、別に痛みはどこにも覚えませんでした。

瞑目の二、三十秒が過ぎ、私の耳に入る音は静まりました。と同時に今まで止めていた呼吸を開始しましたところ、物凄い刺激臭を感じ、次いで咽を刺すような痛みを覚えて、呼吸が苦しくなりました。一瞬、私は毒ガスだと思いました。そして伏せたまま眼を開いてみましたが。ところが何も見えません。唯暗黒な闇があるばかりです。そんな筈はないと更に眼を見開いても、やはりあたりは眞の闇でした。たつた今まで眩しいように輝いていた筈の夏空はどうしたのだろう。私は次第に、自分は失明したのではないかという不安に迫られて来ました。然し呼吸が苦しい。早く逃げねば毒ガスにやられると思い、手探りで立ち上りました。

先ず部屋から廊下へ出ようと考えました。図書室を出るにはドアが一つで、そのドアの把り手を探さねばならぬと思い、手探りで壁に辿りつき、ドアの把り手を探しましたが、さっぱりわかりません。気が焦るのと死に直面した悲壮感とで、頭の中は狂わんばかりでした。

何回か壁を往復しているうちに、私と同様に出口を探している同僚にぶつかりました。私が「おい、ドアはないぞ」と呼びかけると、向うも暗黒の中から、「いや、俺の方にないぞ」と、悲痛な返事でした。闇の中で顔は見えませんでしたが、声の主は確かに正義之君でした。

それから二人で出口を探しているうちに、私の手にまぎれもないドアの把り手が触れました。その時の私の歓喜は忘れられません。私は力委せにドアを押しました。ドアは間違いなく、幾分の重みを感じさせながら、外側へ押し開かれました。二人は相次いで廊下へ出ました。然し依然として、暗黒と呼吸を苦しめる刺激臭は一向に変わり

がありませんでした。

その時、二階の廊下を真直ぐに辿れば、浦上の街を見下すバルコニーに出る筈だと気付きました。そして私達は、二階の一番端に突き出ているバルコニーに辿りつきました。そこは外界に接しているだけに、幾分明るくなつてきましたが、暫らく経つうちに、靄が舞れる時のように視界が次第にはつきりして来ました。

私達が視野を奪われ、呼吸に苦しんだのは、実は厚い原子雲の真中に閉じ込められ、太陽から遮断されたのと同時に、刺激の強いガスを吸わされた為だったのです。

私達四人（小杉正義、小島隆保、正義之と私）は、肩を叩き合つて無事を喜びました。然し、薄れた原子雲の合間から現われ出た浦上の市街は、実に驚天動地の光景を呈して居りました。先ず目に映つた物は、土色をした荒廃の街でした。マッチ箱を敷き始めたような密集していた筈の瓦屋根は、どこにも無く、棟木みたいな骨組みだけが潰れて倒れ、その上に一面泥をぶっかけたような姿でした。そして青々とした樹木は一本もなく、葉っぱや小枝はすべて飛び去り、裂けた幹だけがそそり立っていました。

私達は思わず身震いしました。次に考えたことは、一刻も早くこの危険地域から脱出することでした。廊下を後戻りして階段を駆け降りましたが、二階の北側の室は既に僅かに燃えておりました。

私は階段を降りると外へ出て、病院の外周りの道を駆けて逃げました。飛び散った建物の一部や、蒸氣の配管が破れて吹き出している所を除けながら、病院の裏門につきましたが、途中、生き延びた人々が三々五々、痛ましい姿で逃げるのに出会いました。

私もその集団に混じって、裏門から穴弘法に登る道へ逃げましたが、その集中に、数人の級友や後輩の学生を見付けました。彼等は大なり小なりの傷を受けており、元気に声をかけ合つて励ましながら逃避しましたが、その中の多くの学友が亡くなりました。

中でも忘れられないのは、中学、高校、大学まで私の後輩だった飛沢寛治君で、顔面を負傷し、片腕を骨折しておりました。私はシャツを裂きゲートルを外して、彼の

腕を肩に固定してやりました。然しおける途中で姿を見失い、どうなつたかと気遣つていましたが、彼もとうとう後日不帰の客となりました。今でもお母さんが来られて、あの時の思い出話をしております。

穴弘法に着くまでに、途中で二人ほど応急処置を施し、壁の下敷きになつた人を、数人で協力して救出しました。この人達はあとでどうなつたか分りませんが、元気に入穴弘法に登つた学友も、あとで次々に亡くなつたそうで、本当に信じられないことでした。

穴弘法への途中から見て、所々火を発していた大学の基礎教室一帯は、頂上に辿りついた頃は一面火の海となっていましたが、病院の方はまだ、此處かしこに散発的に火災が起きている程度でした。

その後私は、金比羅山の高射砲陣地を過ぎてハタ揚げ広場に辿りつき、そこから西山・片瀬方面を見下し、初めて健在であることを知つてホッと胸を撫で下しました。

話が少しですが、私は学生時代に、或る画伯の描いた東京大震災の絵を見たことがあります。それは二人の裸婦が壊れた廢墟の一隅に佇んでいる絵でしたが、当時の私には、少しオーバーに悲惨を表現し過ぎていると思われました。然し当時の私自身のことを考えてみると、家に戻った時の私の姿は、上半身は裸になつており、穿いているズボンの下半部は焼けちぎれおりました。背中と腕には深い硝子傷が数ヵ所にあり、長崎市は一晩中燃えつづけておりました。云い換えますと、原爆の際の慘さは、大震災の時のそれよりも、遙かに勝つていたのであります。それは次の事が明らかに解ると思います。

私は八月十日の朝、西山を越えて浦上天主堂附近にさしかかりましたが、そのあたり一帯はまだ余燐がくすぶつており、見渡す限り累々たる死体の連続で、屍を踏み越えなければ一步も進めないような有様でした。その殆んどが痛々しい小学生ぐらいの年令で、その数は何百であったか、私には数え切れない程ありました。

私は法医学で焼死体のことを学んだ時、火傷の程度が進むにつれ、脳の膨化、骨質の変化を来し、遂には頭蓋縫合が離開するように聞きましたが、その時までまさかあ

の強固な頭蓋縫合がはずれようなどとは思いもせず、半信半疑でおりましたが、実際にその通りのものが目撃されたのであります。

私は今でも、あの場所の惨状は是非写真に撮つておいて、全世界の人々に知らせる必要があつたのにと、残念に思つております。それはかかる人道上の不祥事が、地球上のどの一角に於ても再び起つてはならないという、最も良い教材になると思うからであります。

(昭和四四、八、八)

【調 附記】 この文は、昭和四十年八月八日に行なわれた長崎大学医学部眼科教室の原爆二十周年慰靈祭の折に、五島博士が追憶談話会で講演された時の原稿で、まだ誌上には一度も発表されたことがないとのことであります。「忘れた草」の最終編を飾つていただき、心から感謝申し上げます。

広島県賀茂郡福富町久芳  
当時長崎医学校四年生

杉 原 正 通

二十八年の歳月は、あれほど強烈だった原爆の体験を、少しづつ噛りとつて、忘却の胃袋に嚙み下してしまいました。今はただ、ときれときれの記憶の葉脈を残すにすぎませんが、ほつれた葉脈をたどつてみましょう。

猛烈と共に襲つた暗闇の中を、手さぐりで小児科教室からとび出し、次第に明るさをとりもどした頃、基礎教室は紅蓮の炎に包まれていました。穴弘法の烟には、山手方面に避難する無数の人々が、蟻のように見えました。

眼科教室から、前腕の動脈出血をそのままに出て来た級友があり、私の着ていた白衣を引き裂いて包帯してあげましたが、その級友は誰だったでしょうか。田中隆彦君だつたような気もしますが、違うかも知れません。

誰かが、小児科教室に今西君が怪我して倒れているというので、又とび込んで連れ

出し、近くの横穴壕に運び込みましたが、その夜には既に亡くなっていたそうです。今西君救出のため一緒にとび込んだ二人は、誰だったでしょう。

烟を病院玄関方面に行く途中、精神科教室あたりで、柱を挺子にして引出してあげた四十才位の男性がありました。病院関係の方と思いつたが、その後どうなつたでしようか。

高南病棟近くの、例の「く」の字型に曲った煙突の下で、古屋野外科の石崎先生と、教室員の方とが倒れておられました。大変お元気そうでしたが、頻りに「寒い、寒い」と云われました。高南病棟にとび込んで持ち出した、派手な娘さんのものらしい布団を掛けてあげましたが、石崎先生とはその後、お会いしないままになりました。

病院玄関では、永井隆先生が、これまでの病気はどこかに吹き飛んだもののように、元気に周囲の者を指揮されている姿を見ました。永井先生から、角尾学長救出を手伝つてくれと云われたので、先生の指揮下に入りましたが、その時学長は、すでに多くの人から救出されていましたので、私は影浦内科の菊野先生を救い出しました。菊野先生と記憶しますが、確信はありません。

その時レントゲンのフィルムに火がつき、窓から火炎が吹き出るのを見ました。永井先生から、危険だから各自負傷者をつれて、山に避難せよと云われました。

その時私の足もとに倒れていた一級下の古川一郎君から、担いで逃げてくれと頼まれ、背負つて烟に登りましたが、随分重かったことを記憶しています。又彼は私の背中で脱糞して、大変喰かつたことも忘れられません。

烟の中で古川君をおろしてホッとした時、調先生が烟の隧道を、両手を腰に頭をふりぶり、沈痛な足どりで右に左に歩いておられました。

穴弘法の下の烟の中で、倒れていた数人の七高出身の同級生に会いました。その中に今村喜人君がいましたが、その他は誰であったか思い出せません。又すぐその近くで平井達也君に会いましたが、既に随分憔悴していました。

穴弘法で水を飲みましたところ、みな吐いてしまいました。それを見て其処にいた

看護婦さんが、横になつて休みなさいと云つてくれましたが、横になる気になれませんでした。そこで何人かの級友に会いましたが、誰だったでしょう。原田清巳君がいたように思いますが——。

伊良林小学校で炊き出しの握り飯をもらつても、嘔吐のため遂に一口も食べられなかつたことを思い出します。

西山町を通つて大学に帰る途中、呼びとめられ、招き入れられた家がありました。服巻勝之君の消息を尋ねておられました。話の途中で、細菌の青木先生の御母堂と弟さんということがわかりました。

その夜は山の上で寝ましたが、異様な臭氣と寒さで、殆んど眠れませんでした。数名の看護婦さんが一緒でしたが、何科の何という看護婦さんだったでしょうか。

第二日目。穴弘法下の畑の中で薬理の祖父江先生に会いましたが、「サルファ剤の注射をうけたが嘔吐がひどい。サルファ剤の副作用は強いもんだね」と云つてされました。

又その近くで、顔が真黒に膨れて人相の変った岩切達君に会いましたが、「杉原さんは大したことがなくてよかつたですね。僕はこんなになつても駄目です」と云つていました。彼はその後時津で淋しく亡くなつたと聞きましたが、今でも彼の言葉を思い出すと胸がつまります。

そのあとの記憶はブツリと切れています。

病院玄関前に、陸軍か海軍かの救援隊のテントが張られていたこと、病院への登り坂に馬が焼死していたこと、その坂道の両側に真黒に脹れあがつた屍体がゴロゴロしていましたこと、尾立君が元気に働いていたこと、その頭部長が重傷を負われたと耳にしたこと、などがとぎれとぎれに残つてゐるだけです。

タクシードラiversの話を聞きました。正君、脇川君と共に、「死なば祖先の墳墓の地で」と語らい、道ノ尾の知人の家で一泊して、第三日目の朝、帰郷の途につきました。

諫早で佐世保に帰る脇川君と訣れましたが、それが彼との永遠の別離となりました。

た。鳥栖で久大線に乗る正君と別れ、以後独り旅でしたが、帰宅まで随分いろいろなことを経験しました。私の計算では十二日に帰宅した筈ですが、父の日記では十三日帰宅となっています。この一日の差はどこで消えたのでしょうか。

帰宅後約六ヵ月間、いわゆる原爆症で生死の境を彷徨し、辛うじて生きのびることが出来ましたが、それ以後の私的人生はおまけだと思うことにしています。

一発で大量殺戮という非常に悲惨な体験をしましたが、各地の第一線の戦闘に参加した方々に較べて、まだ瞬間的であったという点で、その悲惨さは、その人たちの方がひどかつたかも知れません。

然し原爆は、その後も更に強力な核兵器として、人類滅亡に向つて登場しつつあります。神をおそれざる人類は、個人のエゴ、国家のエゴから脱却できそくにあります。こんな人類が、兵器としてこれに勝るもののない核兵器を、自分のエゴを通すために使用しないで済ませる筈がありません。「必ずや近い将来に、歴史を二千年逆戻りさせる愚挙をしてかすに違いない」と思うのは、私の考え過ぎでしょうか。

(四八、一二、三一)

## 被爆体験略記

北九州市若松区浜町二丁目一二一八  
当時長崎医大学部四年生

田中敏夫

眼科の卒業試験準備中で、眼科教室の検眼実習室で田中隆彦君、谷本博玄君と共に読書していく際に被爆、突然強い光を感じ、爆発音と同時に後頭部に衝撃を受けて失神した。その後どれだけ経過したか分らないが、谷本君に救出されて裏山に避難しました。

【調附記】田中敏夫君及び田中隆彦君の被爆状況は、谷本君の手記に詳しく書かれているので、それを参照されたい。

# 原爆の日記より

広島市尾長町片河五九二  
当時長崎医大学部四年生

谷本博玄

昭和二十年八月九日（木曜日）

午前六時起床、午前六時半朝食、カボチャ主食、午前七時登校、天氣は晴、今日も暑くなりそうだ。病院本館に集合、調教授の訓辞あり。

早朝より警戒警報、七時に空襲警報発令となり、八時より三十分間、調外科の上の煙突の側で屋上監視をなす。私の監視中は何等異常はなかった。上空に敵機を見た時は、金盤のような物を叩いて合図することになっていた。午前九時頃空襲警報解除となる。暫らくして山根教授が眼科実習室に来られ、「空襲警報が解除になつたようだよ。土曜日にはテストがあるから、しっかりと勉強したまえ、諸君。」と云われた。我々のグループはE組で、蘇百齡、戴懷德、田中隆彦、田中敏之、谷口誠、谷本博、

徳山達人（羅時達）の七名で、八月十一日には眼科の卒業試験がある予定であった。九日前十時半頃、久し振りに握り飯が炊き出され、我々の組には直径十五センチ位のが一個だけ配給された。その時実習室にいたのは日本人四名で、台灣人三名は下宿に帰つたらしく、姿は見えなかつた。実はこの握り飯は七人の分け前であつたが、三人居なかつたので四人で分けることとなつた。所が十時四十分頃、谷口君が、「自分は寮に帰れば薩摩芋が充分食べられるから、握り飯は三人に譲るよ。」と云つて実習室を出て行つた。この温情が逆に死につながるうとは——氣の毒の至りと云わねばならない。残つた三名は土曜日のテストに備えて、眼科のノートを調べながら勉強していた。

午前十一時と思う頃、突然飛行機の爆音が聞え、間もなくピカッと光つたので、ソレッと立ち上り、机の前に置いてあつた防空頭巾を取りうとしたが、その瞬間物凄い爆風が起り、恰かも頭上に爆弾の直撃を受けたような衝撃を受け、同時に天井に張つ

てあったコンクリートが落下し、窓のガラスが割れて飛び散り、同時にあたりが真暗になつた。私はこれで最後だと思った。

それから何分たつたか判らないが、暗闇の中から化薬のような臭いがして、ふと我に返つた。夜明けのように少しづつ明るくなるにつれ、机や椅子がペシャンコに潰れていることや、自分の体が壁の側まで吹き飛ばされて、破壊した天井や材木に埋まっていることが判つて來た。頭を負傷したとみえ、鮮血がボタボタと顔面を伝つて流れている。這い出そうとしたが身動きが出来ない。

田中隆彦君はどうしたかと気になつたが、バタバタと鳥の羽ばたきのような音をさせて、急に立ち上つた。私はすぐ、「田中君!! 僕はまだ生きておるぞ、助けてくれ!!」と大声で呼んだが、田中君は僕の方をじっと見つめながら、「僕一人では助けられないから、誰か呼んで来る。それまで暫らく待つておれよ。」と云つたまま外へとび出し、何分たつても帰つて来ない。

田中敏之君は頭でも打つたのか、ウーン、ウーンと呻き声をあげており、起き上がる事も出来ない様子、そのうち基礎教室の方から物の燃えるような音が聞え、黒い煙が舞い込んで來たので、眼科が火事になつては大変と、自力で体を压えつけていた物を少しづつ取り除き、腰のあたりまでは楽になつたが、両足がどうしても抜けない。

頭からは相変らず血が流れ出る。このままだと貧血を起して意識不明に陥るかも知れない。自分はこのまま死ぬかも知れない、という悲壮な考えが頭にひらめき、最後の力をふり絞つて、やつと右足を引抜くことが出来た。でもまだ左足は駄目だ。これではならぬと必死にもがいているうちに、靴がとれて漸く出て來た。靴はどうしても見つからない。時計はガラスがとれて、十一時十分の所で止つてゐる。

田中敏之君は窓際に倒れたまま、眼鏡は無くなり、意識不明で鼻血を出している。「田中、しっかりしろ!!」と云つても、全然気がつかない。

愚図々々しておれないでの、兎に角外へ出てみようと部屋を出たが、各部屋も廊下も、落ちた天井のコンクリートや張り板、割れた窓ガラスの破片で埋まつてゐる。左足は素足のまま、おそるおそる外へ出た。

眼科教室のすぐ側に横穴の防空壕があつたので、入つてみると何れも怪我人ばかり、奥の方で山根教授と思われる声がした。「おい、誰かガーゼか包帯はないか。頭をやられて出血がひどい。誰か救護隊に連絡してくれ。」と云われるが、誰も壕から出て行くものはなかつた。壕の中には同級の宮本精一君も、大腿骨々折で寝ているとのこと。私の前にいた看護婦が、頭から出血しているのを見てハンカチを当ててくれた。お蔭で出血は止つた。その看護婦さんの顔も忘れてしまつたが、頭髪がちらじりて、顔が火傷したように赤かつたのを覚えている。

暫らくして同級の古賀典志君が横穴へ入つて來た。私の顔を見て、「君の親友の中尾守男君は、皮膚科の所でやられたぞ。もう駄目だろう。君の傷は頭だけか。頑張れよ!!」それから又、「ソ連が参戦したらしいニュースがあったぞ。いよいよ本土決戦だな!!」と云いながら、懸垂頭に鏡鉢巻をして、「一寸外へ出てみる」と云つて出たきり、その後元気な古賀君の姿は見られなかつた。

頭の出血が止つて少し元気をとり戻すと、私は横穴壕から出であたりの様子を見廻した。負傷者たちは学校の裏山を登つて、穴弘法の方へ避難している。山の上に救護隊がいるらしい。私は眼科教室で倒れている田中敏之君のことが心配になり、又元いた部屋に入つてみた。田中君は目を開いたまま、まだ意識がないらしい。私は彼のほつべたを力一杯叩いてみた。するとハッと気がついたように起き上つた。「おい田中!! 兎に角わしについて来い。ここに寝ていたら死ぬぞ」と云うと、彼は私の背中にしがみついて來た。無我夢中で田中を背負い、救護隊の所まで連れて行くと、そこには怪我人達がゴロゴロ横たわつており、救護隊の人達も転手占舞の有様だったので、元氣そうに働いている学部三年の海江田芳春君に田中君のことを頼み、自分の怪我はそのままに穴弘法へ向つて急いだ。

すると天候が悪くなり、大粒の雨が降つて來た。その時同級の杉原正通君が目の前にいたが、咽が渴くとみえて、その雨を両手で受けて飲んでいた。そこにいた数名の学生達も、これを真似て咽を潤していた。

山の上から見おろすと、基礎教室は全滅したらしく、煙にまかれて黒々としてお

り、病院の方も所々に火の手をあげて燃えていた。浜口町から浦上駅のあたりは、火の海となつて燃え盛り、今にも病院に延焼しそうになつていて。  
そこへ田中隆彦君がやつて來たが、見たところ元気そうだった。私は頭の出血も止り、全身の擦過傷も大したことなく元氣だったが、シャツは背中からちぎれ、ズボンは脇部のあたりに穴があいて、左足は相変わらず素足のままだった。このままでは歩くのも不自由なので、田中君と一緒に靴を探してまわり、どうやらボロ靴を見付けたので、それを穿くことにした。右と左と違つて氣持が悪かつたが、この際止むを得ないことであつた。

丘の上にまで火の手が及びそうになり、不安になつて來たので田中隆彦君と一緒に山伝いに道ノ尾駅へ向つて逃避した。途中の山腹で、百姓らしい爺さんから胡瓜を貰い、田中君と一本づつ食べたが、飲み水がなかつたので大変美味しかつた。浦上へ下りると、鉄道線路伝いに道ノ尾駅まで歩き、駅の近くの野口という知人の家に辿りついたのは、夕暮れの七時頃だつた。この野口さんは、二十年六月にアッペで調外科に入院し、私が受持だつたのでよく知つていた。家の被害も少く、二階のガラス窓が破損した程度だつた。

二人はこの家で夕食を御馳走になり、九時頃ボツとした氣持で床についたが、敵機がしばしば爆音を轟ろかせるので、恐怖のため熟睡出来なかつた。

#### 八月十日（金）

午前七時起床、朝食をいただいた後、九時頃から滑石に疎開中の調教教授宅を訪問した。教授はまだ帰宅されず、奥さんが大変心配しておられた。御長男は幸に助かつて帰宅されたが、火傷がひどいとのことであつた。

調先生のお宅では救急薬をいただいて、二人で互に傷の手当をし、シャツや水筒まで貸して頂いた。それから二人は近くの田平という農家を訪れた。ここには私が医書や薬品を疎開していたので、その中のアクチゾール五ccを互に静注し合い、もう一つの時計も無事だったので、壊れたのと取り替えた。これで時間が判るようになつて、とても嬉しかつた。中食は田平さんに頂いたムスピニですませた。

午後暫らく寝をして、二時頃田平さん宅から帰る途中、調先生に会った。先生はお元氣で殆んど無傷のようだつたが、御次男の安否を大変心配しておられた。

それから私が下宿していた橋口町の鶴さんの娘さんと、西崎エイさんにも会つたが、元気なので夢のような気がした。二人は昨日朝九時頃から、時津方面に食糧の買出しに出掛け、原爆の落ちた時は農家の庭先にいたそうで、そのため難を免れたらしい。橋口町は爆心地に近いので、全滅したに違いない。

午後七時頃、再び道ノ尾の野口さん宅へ行き、夕食を御馳走になり、九時頃から就床したが、蚤が多くて体中が痒く、安眠出来なかつた。田中君も同じだつたらしい。

#### 八月十一日（土）

六時起床、田中君と一緒に滑石町内会長の片岡さん宅に行き、戦災証明書を貰う。九時頃から下宿の小母さん、娘さん、田中君と四人で、歩いて橋口町の下宿を見に行つたが、大橋付近から疹状がひどく、小母さんは氣分が悪くて先へは行けないというので別れ、田中君と二人で視察に行つた。

案の上、下宿の付近は全滅で、すぐ下の家の柿本さん親娘は、煙にまかれて窒息したものか、並んで仰臥したまま黒焦げに焼死していた。私の下宿の屋根瓦は爆風で吹き飛び、地面に掘つて作った壠の中には、皿等が入れてあつたが、上方方二、三枚が割れた程度で、下の方は残つていた。私の旅行鞄は八〇メートルほど下の方に飛んで破れ、中に入っていた衣類は跡形もなかつた。

十一時ごろ大学病院に行き、被爆時にいた眼科実習室に入つてみると、雑然となつ

た元のままで、漸く学生服とかabanを探し出しが、穴だらけで形をとどめる程度であつた。abanの中には手帳が二冊あり、それに書き残した日記を、今ここに記録として書き記している次第である。

十一時半頃に眼科東側の広場で、田中敏之君、倪衍元君、昇雅夫君、尾立源和君、服善勝之君らに会つた。眼巻君は腹部に大きなヤケドを受けていたが、他の者は大して負傷もなかつたようだ。後になつて、この中の昇君と眼巻君が死亡したことを知つた。

精神科の医局のところで、久保哲雄君の即死らしい死体を発見したが、服、靴、財布等を遺品として届けてやろうと、田中君と一緒に帰途に山口県の彼の郷里に立寄ることにした。それから宮崎弘之君にも会つたが、彼は元氣のようだつた。

午後三時頃から道ノ尾へ行つたが、四時頃岩屋クラブで調教授に会い、クラブを仮

救護所にするための整頓を依頼され、田中君と夕方までやつて、七時頃道ノ尾の野口さん宅へ辿りついた。夕食、九時就寝、この晩は蚤にもさされず、久し振りによく眠つた。

#### 八月十二日（日）

七時起床、久し振りに御飯を食べ、九時から野口さんの自転車を借りて、平田さん宅、次いで岩屋クラブに行く。途中で太戸助教授に会つたが、午後から診療を開始するとのことであつた。

岩屋クラブからの帰途、広島県出身の石川武彦君に会う。私の母は広島市で原爆を受けていたので、同君に母のことを宣教く頼んだ。十一時半中食（ジャガ芋茶碗一杯、野菜汁二杯）。午後一時ごろ岩屋クラブに行つたが、誰もいなかつたので昼寝をした。二時半頃調教授が看護婦を連れて来られ、警防団の人達も来てクラブ内を清掃した。五時終了。ここで石神正文君にも会つた。顔に外傷を受けていたが、元気そうだった。西浦上分教場で握り飯一個づつ貰う。七時に食べ（夕食）、九時野口さん方で就寝。

#### 八月十三日（月）

八時半より岩屋クラブに行く、途中木戸先生に会う。今日から愈々診療開始。クラブには角尾学長初め、大勢収容されていたが、学長と山根教授は滑石太神官に移られた。高木教授は大学で死亡とのニュースを聞く。山根教授はかなり重傷であった。

十一時頃から時津小学校へ高尾のお婆さんを見舞に行く。帰途石川君に会つたので、今晚一緒に広島へ帰ることを約束した。六時野口さん宅に帰り、田中隆彦君と一緒に帰郷の準備にかかつた。

午後十時三十分道ノ尾駅発の門司行列車に乗ることにした。駅の待合室で浅野市郎

君に会う。彼は次の列車で東京へ帰ることであった。

石川君を待ったが、とうとう発車までに来なかつたので、田中君と二人で乗車、客車は中原駅までしか行かなかつたが、我々は小荷物車だったので、午前六時半に鳥栖についた。

### 八月十四日（火）

鳥栖で朝食、カンコロの油揚と豆を一人で分け合つて食べた。

鳥栖を出て門司についたのが午前十時、ここで午後〇時五十九分発の広島行に乗る。二時半頃小野田駅で田中君下車、彼と別れた。さてそれからが大変だつた。

車掌から岩国駅付近の空襲のため、列車が藤生駅までしか行かないことを聞き、午後九時藤生下車、乗客の皆と一緒に夜道を徒步で約四時間歩き、午前二時頃やつとの思いで大竹駅についた。そのまま暫らく仮眠をとる。

### 八月十五日（水）

午前五時半に目が覚め、六時五十九分発の広島行に乗る。車内で富山県の川南さんという四十才位の男の人から食パン一個を貰い、十時頃広島駅に無事に到着した。

広島も六日に投下された原爆で、一面の焼野原に變っていた。駅から尾長町の我が家まで帰る途中、三本松までは家が一軒もなく、自宅は爆風で傾き瓦は飛んでいたが、幸に焼けずに残つていた。家に母が居なかつたので、向い隣の石木さんに尋ねると、府中町字沖の伯母の家に行つているとのこと、自転車で駆けつけると、皆ラジオの前に坐つて放送を聞いていた。それは天皇陛下の玉音放送であつた。

放送がすんで母と劇的対面をやつた訳であるが、私は母が無傷で元気だつたのに安心し、母は私の頭の負傷を見て、よくも無事に帰つてくれたと嬉し泣きに泣いた。伯母の家は原爆被災者でごつたがえしていた。爆心地から五キロ位の所は、どこも被災者で一杯のことであった。

それから母と二人で尾長町の自宅に帰つたが、夜は停電で真暗であった。天井板が破れ落ち、その破れ目から空の星が見える有様であった。それでも雨も降らず、暑い

のでそのまま自宅の畳の上に、久し振りに休むことが出来て嬉しかつた。

（四九、一、一七）

## 憶うことみなはるか（原爆被爆記）

長崎市伊良林町二一一六三  
当時長崎医大学部四年生

久野文次郎

### 一、原爆投下まで

昭和十六年十二月八日、当時私は旧制佐賀高校の二年生であったが、その日学校にはいかずに、佐賀県知事公舎のあたりを歩いていた。その時耳に入つて来たのは、ラジオの臨時ニュース、「大日本帝国は今晚未明、西太平洋において、米英両国と戦闘状態に入れり」の声であつた。この時、全身を貫くような衝撃が走つたのを憶えてゐる。これは大変なことになつた。電撃のようなものが、全身を走つた。

その後、戦は順境にあつたが、昭和十九年頃からは、誰の目にも悲境に転じつつあることが感ぜられた。しかし神州の民の殆んどは、どんなことがあっても祖国は敗れない、と心に期しているようであつた。私とても例外ではなかつた。

しかし、昭和二十年五月にナチスドイツが潰滅し、次いで沖縄が攻略されてからは、敗戦の匂いは隠すべくもなかつた。この頃、日本の大都市、中都市の殆どが、B29のじゅうたん爆撃のため灰燼に帰しつつあつたにも拘らず、長崎は不思議にも、殆んど空襲をうけることなく、静かなたたずまいを見せていた。中国の基地から飛来して、大村の海軍空廠爆撃の行きかえりに、稻佐岳のはるか上空を飛ぶ銀翼をつらねたB29の編隊を、緊張しながらも眺めていたのである。

昭和二十年八月一日、グラマンの数機が突然、長大病院をはじめ浦上の数カ所に、二五〇キロの爆弾を投下した。病院は六個の爆弾に見舞われ、古屋野外科、婦人科、耳鼻科、高南病棟周辺等が被爆した。高南病棟の南側には、直径三〇メートル位の穴

があき、婦人科からは火災を発した。この時の被爆で医専の生徒三名の犠牲者が出て、この方々の葬儀は高木教授が委員長となられて、基礎の大講堂で八月六日に厳粛な葬儀が行なわれた。

そして同じ八月六日の朝、広島に新型爆弾投下。角尾学長は当時上京中で、帰途つぶさに広島の惨状を見て帰嶋され、八月八日朝、運動場で行なわれた大詔奉戴日の式典で、そのお話をされたが、その要旨は次の如きものであった。

「自分は先日来緊急の用件があつて上京していた。帰途広島の手前の海田市あたりで、汽車が不通となつたので、トラックに乗つたり、歩いたりして広島を通過して來た。広島に近づくにつれて、民家や樹木は爆風のため殆んど破壊されていた。

広島中心部の惨状は、言語に絶するものであつた。今回広島に投下された爆弾は、所謂新型爆弾であつて、普通の爆弾とは明らかに異なる強力なものである。戦局はまことに重大である。しかし我々は、祖国のために最後まで、真剣に各自の職責を遂行していかねばならない。」

角尾学長のお話を聞いた時は、大東亜戦争開始の臨時ニュースを聞いた時と同じよう、いやもつと悲痛な直感が、脳裏をうずかせた。「大変なことになつたな、日本はどうなるのか。」 そのような思いにかられた。

## 二、原爆炸裂

昭和二十年八月九日、この日私は防空當直にあたつていて、大學本部のソファ

で眼をさました。そして午前十時頃に調外科の四年生の詰所に赴いた。

当時は戦争中であり、医大では四年間の課程を三年間で消化するように、ハーダスケジュールが組まれ、日曜も夏休みもなく、講義や実習が行なわれていた。

我々は昭和二十年四月から、内科、外科、その他各科にグループ毎に配属され、臨床実習をしながら、その科の期間が終るまでに、卒業試験を受ける仕組になつていだ。そして二十年九月には仮卒業して、軍医学校に行くことに予定されていた。

各科の医局は、教室員の医師が多数軍医として召集をうけ、医師不足の状態であつ

た。故に我々は準医局員みなのが取扱いをうけ、患者も受持たされていた。

調外科に行つたら平井達也君と会つて、弁当を受取つた。彼とは桜馬場の当時、瓊浦高等女学校校長であった佐藤三善先生の家に、一緒に下宿していたが、私が前日から防空當直で大学に泊つていたので、彼が弁当を持つて来てくれたわけである。口数の少い実直な男で、弁当を渡す時も、殆んど何も云わなかつたようと思う。

その時同じ部屋で、久し振りに肥後実君と会つた。というのは、肥後君の実家は鹿児島で、空襲のためにお父さんと母さんが亡くなられ、彼は約一ヶ月間、郷里に帰つていたからである。その時肥後君とのような話をかわしたか、はつきり覚えていない。彼の家の様子を聞き、彼がそれに対しても短かに返答したようである。

それから私は、当日午後に手術予定になつてゐた受持の筋炎の患者のことを思い出し、白血球の検査をやるために、調外科の病室に赴いた。一階の看護婦詰所に行つて患者のカルテを見、小切刀、メランジュール、チルク氏液を携えて患者のベットの傍まで行つた。その時、木戸助教授が数人の学生をつれて廻診に来られたので、私が、「白血球の検査をしようと思つています。」 といふと、先生は、「今日午後手術をしよう。」 と云つて、地下室の方へ赴かれた。地下室には八月一日の空襲以来、危険を避けるために多数の患者を収容していたのである。

この時私は、白血球の検査をあとまわしにして、廻診について行こうかなとヒヨイと思ったが、やはり検査をしておこうと思つて直した。耳朵に小切刀で傷をつけ、にじみ出る血液をメランジュールに吸いとり、チュルク氏液を目盛のところまで吸つて、右手で混和していた時、白昼といふのに、病室の内外がまばゆいくらいに光つた。この異常な光に接した瞬間、「ハテ何だろう。」 という疑問が脳裏をよぎつた。間髪をいはず、ゴーッというような、百雷が一時に迫つてくるような、すさまじい音がしたと思つた時、何かで全身を強烈になぐられたような感覚の後は、完全な記憶の空白がある。

ふと気がつくと、部屋の内部はメチャクチャ、天井は落ち、窓硝子は割れ、紙、板切れ、ベット、衣類などがあたりに散乱していた。左手をみると、手背がくだけて骨

が露出し、第Ⅲ、Ⅳ指が辛うじてぶら下っている。傷口からは止めどなく出血する。また後頭からの出血もひどい。患者はどこにとばされたか見当らない。窓の外を見ると、どこもかしこも破壊されている。この時、昨日の角尾学長の話を想起し、「これには広島と同じ新型爆弾だな。」と思った。周囲を見廻わし、又自分を見る。

こう出血がひどくては、最早これまでと、足が余りやられていなかつたので、そこに正座した。紙片が無数に右手の届くところに散らばっていたので、死ぬまでに遺書を書いておきたいと思い、左手から流出している血液を右手の示指につけて、「天皇陛下萬歳、お父さん、お母さん、このような姿で死ぬのはまことに申訳ありません。残念です。」ここらあたりまで書いた時に、多量の出血のためか、気が遠くなつた。そして異臭が鼻をつく。何とも表現できないような、カビくさいのない、所謂悪臭でもない異臭である。今考えると、この異臭は原爆の熱線によって、空中の塵埃などが焼けた臭いであったのかとも思う。

私はこの惨状と異臭の中、咄嗟に両眼を右手でえぐり出すことを試みた。仲々抜き出せぬ。このような行動をどうしてとつたか、今思うとゾッとする。しかしあのようない状況下におかれられた時、人間は普通の心理状態では考えられない行動をするのではないか。左手、左腕、後頭部から背中にかけて無数の外傷があつたのに、痛覚は殆んど記憶していない。痛覚というものは、或る閾値を越えると、あまり感じなくなるものかとも思う。

かれこれするうちに、隣の病棟が燃えだした。私はここで黒焦げになつて死にたくないと思った。その時脳裡に、若松城の燃えるのを見ながら自刃した白虎隊のイメージが浮んだ。私は白虎隊のように、裏の山に登つて、大学が燃えるのを見ながら死にたいといふ衝動にかられた。

左手の出血をいくらかでも少くしようと、右手で左手首を押え、とにかく立ち上つた。破壊、乱雑の極みであったが、何とか調外科病棟の建物の外に出た。大学病院の建物を連結していた廊下は、当時はすべて木造だったので、跡形もないほど吹きとばされている。精神科の手前では、廊下が破壊されて、高南や高北に行く通路のところ

は、コンクリートの狭い二本の橋のようになつていた。うまく渡れるかなと思つたが、案外スムースに渡れた。

精神科の横の狭い路上で、尾立君と会つた。彼は外傷がなく元氣である。私は今夜も生きていたら、もし遣書の続きを書きたいと思って、「万年筆を持たないか。」と聞くと、「もつている。」という。「じゃ、借りるよ。」と云つて万年筆を受取つた。そして尾立に或る人への伝言を頼んだ。その時背の高い一年下の海江田芳春君と会つたが、会話はかわきなかつた。ここでは沢山の人が、山へ山へと火を避けて登つていた。山路を登りながら、死んだら何だか澄んだ清い良い所へいくような気がして、浦上の家々が殆んど火を発しているので、熱気を感じる。時刻はすでに夕刻になつていた。

### 三、その夜（八月九日の夜）

穴弘法の方へ段々烟の中を歩きつけた。薩摩芋の烟が多いが、みな焼けただれている。茄子なども吹ききがられて散在している。空を見あげると、夕焼雲が浮んでいる。ああこれが空の見おさめかと思つたりする。

ふと烟の片隅に横穴壕があつたので、中に入った。何人かの人が奥の方にいた。そこに坐る。先程尾立君から借りた万年筆で、遺書のつづきを書き始めた。仲々うまく書けぬ。そのうち日が暮れて、暗闇となつた。グラマンであろうか、爆音がしていく。すると横穴壕に、人々が入り込んでくる。そして傷者の私に倒れかかるつて来る。「おい、いい加減にしてくれ」といった心情になるが、勿論言葉には出せぬ。「オッ」と口から漏れ出る。暗闇の中で、色々な声が聞えてくる。子供が死んだのである。泣き悲しむ声、祈りの声なども鼓膜を打つ。

私は出血がひどいためであろうか、無上に咽が渴いてきた。表現できないほど水が欲しい。「水！ 水！」と絶叫した。根源的な生命の欲求なのである。自然に水！ 水！ と叫ぶのだ。理性の抑制など全くない叫びだ。すると水を持って来てくれる人がいた。どこから汲んで来たのであるか。女人の声である。「ハイ、水」。むしゃ

ぶりついて飲む。しかし仲々渴はおさまらぬ。又水！ 水！と叫ぶ。今にして思うと、彼女は地獄の中の觀音様だ。若しお目にかかれたらと思うが、暗闇の中の出来事だ。判るすべもない。あのような状況の中で、傷者に水を飲ませて廻った人が居たということは、私にとって大変な心の支えになる。人間は決して悪念の人だけではないということを、信じさせてくれる。

かれこれするうちに、出血が止つてきた。そして完全に死を予期していた私の心中に、生への執着が光してきた。生きるかも知れないと思いはじめた。

長い長い一夜、勿論一睡もせぬ。夜が白みはじめた。横穴壕の入口の輪郭が、はつきり見えはじめた。

#### 四、八月十日

夜がすっかり明けた。ここでこの儘いとも仕様がない、と思い始めた。午前八時頃であつたろうか。兎に角横穴壕を出た。太陽はギラギラ輝いていて、まぶしいくらいだ。畠も森もすっかり焼けただれ、夏の風景ではない。

まるで夢遊病者のように、一人トボトボと大学病院の方へ足を運ぶ。どれくらい歩いたか、勿論明確な記憶はないが、角尾学長が篠島助教授や高橋博講師に囲まれておられる姿を見たので、そこへ行つた。角尾先生は、割にお元気だった。「久野君に何か注射してやつたら」と申して下さった。そして何かの注射をしてもらった。どのような挨拶をしたか憶えていないが、それから病院の汽缶場の所に下りていつた。そこ

の横穴壕に入つたら、青木武君、宮城美津次君たちが横になつていた。

青木君は相当な火傷を受けていた。言葉を一言でも云つたかどうか、憶えていな

い。彼は瀕死の状態と見受けた。私は彼を明確に認識したが、彼が私を認識したかどうか、明らかでない。

調査先生にお会いしたのは、この時である。先生は私を診て下さった。木戸助教授は、頭につきささっていたガラス片をとつたり、その時まで辛うじて皮膚一枚でぶら下つていた左手の第III・IV指を切りとつて、応急処置をして下さつた。

この時、誰の口からともなく、今度のは原子爆弾だときかされた。ソ連の参戦もこの時間いたようと思う。汽缶場の構は、かなりの人々でゴッタ返していた。

私は桜馬場の下宿に帰る気を起していた。昨日から着ていた白衣は、血だらけになつていたので、誰にともなく「上衣を借して下さい」と云つたら、誰か上衣を借りて下さつた。私はこれから桜馬場に帰ると云いだしたら、多くの人が止めた方がよいと云つたが、何としてもそうしたかったので、一人で病院の正門前の坂を下り、井樋ノ口の方に向つた。木造家屋は殆んど灰燼に帰し、白っぽく路は光つていた。ところどころ水道管が破れて水を吹き出していたので、立ち止つては水を飲みながら、歩いていつた。

井樋ノ口から長崎駅前にさしかかったところで、空襲警報が鳴り、NHKの下の防空壕に入つた。

一ぱいの人がいた。やがてそこを出て、上町の聖福寺の前に辿りつき、そこの石段に坐つていたら、人々が私の側に寄つて来た。この辺から家はちゃんと建つていてるのである。「まあ、ひどくやられて」とか、「可哀想に」という声が聞える。「どこまで行くんですか」ときかれたので、「桜馬場まで」と答えると、何人かの人がリヤカーを持つて来て、「これにお乗りなさい。下宿まで連れていきます」という、私は辞退したが、好意を断わるわけにいかなかつた。リヤカーはタイヤがついてないので、路面の凹凸がじかに体に反響する。

やがて桜馬場の佐藤先生宅についた。奥様はビックリされた。食事は殆んど咽を通らない。その夜も空襲警報があり、佐藤家の小さな防空壕に入つたりした。

#### 五、八月十一日

前夜の空襲警報の騒ぎのためか、私は近くの善光寺というお寺の防空壕に移された。深い防空壕で、昼も暗い。背中を下にして横たわると、まだ背部には無数のガラス片がささっているので、丁度針の薙に寝たあんばいになる。なるべく背中を下しないようにしているが、疲れるので遂に背中を下にすると、又針の薙だ。ほんとうに地獄そのもの。この苦痛にいつまで耐えていかねばならないと云うのだ。

しかし八月九日の夜半、生への執着が始まつてからは、一刻も早く死にたいという思いは起らない。極度の苦痛にさいなまれている時、人間は現存する苦痛を、その時に耐えて生きている以外に、すべはないようである。

## 六 八月十二日

この日、大島桂君が善光寺の防空壕に来てくれた。そして調先生が滑石に仮救護所を開設されたから、そこに連れて行くという。ひとまず佐藤先生のところに行つた。縁側で左手の処置をしてくれたが、見ると骨がとび出したり折れたりして、グロテスクだ。いつの間に湧いたか、蛆がうじが没している。蛆が神經にあたると、衝撃的な痛みが脳天につきぬける。いくつかの蛆をピンセットで取り出し、マークリオをふりかけて包帯をしてくれた。傷の奥深くに逃げていった蛆はそのままだ。

「浦上まで歩けるか」と大島が云う。「何んとか歩いてみよう。」と答えた。「では行こうか」。こんな遣り取りの後、彼と一緒に諏訪神社前、長崎駅のコースで、浦上に向つた。駅前で佐野保先生と会つた。どのような会話をしたか覚えていない。大学病院につき、眼科の地下室に入る。そこには母上と一緒の服巻勝之君や原田清巳君がいた。原田君はすでに死亡していた。服巻君は非常に弱つていて、一語も会話はしなかつた。彼は矢ノ平の親類の家につれていかれたが、別れしなに私は「では又」とだけ云つたように思う。夕刻になつて、私はトラックに乗せられて、滑石の仮救護所に向つた。途中、山里小学校の建物がほんのりと見えた。

## 七、滑石救護所（八月十二日夜から八月十八日まで）

滑石救護所というのは、調先生が滑石の青年集会所を臨時の救護所として開設されたもので、まさに野戦病院そのものであり、多数の原爆負傷者が収容されていた。

角尾先生も当初はここに収容されておられた。同級の藤原昌君や医専三年の北郷武徳君も一緒にいた。藤原君は前腕の複雑骨折で、激痛の毎日であった。奥さんが介抱されていた。私は毎日ガラス片の抜き取り、左手の処置をしてもらつた。北郷君は後

頭部の皮膚に大きな傷を受けていた。

収容されて何日目ぐらいからであつたろうか、血便を出す患者が続出して、赤痢ではないかということで大騒ぎになつた。原爆放射能による消化管出血などとは、誰も推測出来よう筈もなかつたのである。隔離するといつても、狭い救護所のこととて、どうする訳にもいかない。血便をしたものは、かためて片隅におかれたように思う。その後死者が続々と出た。朝鮮人もかなり収容されていて、彼等のうちから死者が出ると、「あいごう、あいごう」と大声を出して泣いた。

角尾先生は近くの滑石太神宮に、十三日朝からお移りになつた。

八月十四日であつたろうか、佐賀から母が来てくれた。桜馬場の佐藤先生を訪ね、大学病院に行き、私がここにいることを聞いて來たという。このような姿になって母に会うのはつらかった。十六日には母が、終戦の詔勅が掲載されている新聞を持つて来てくれた。私は一部始終を拝読した。十七日に父が佐賀から来てくれた。そして十八日、私は両親につれられて、道ノ尾駅のホームに立つた。ホームは原爆負傷者でいっぱいであった。

## 八、郷里へ

汽車は佐賀に向つた。満員の上に、原爆傷者が一ぱいだ。ノロノロ運転の上、駅でもない所に長時間停つたりする。夜になつて鍋島駅につく、親類の者がリヤカーをもつて迎えに来てくれていた。

その夜は鍋島村の親類の家に泊り、翌日生家に着いた。姉は、「このような姿で生きて帰るよりも、一そのこと死んだ方がよかつたのでは——」とつぶやいた。高熱が出てはじめ、しきりにうわ言を云つてゐたという。

村の医者のところへ入院したが、左手の傷が余りにひどいので、医者ももであましていた。佐賀市の県立病院好生館は、米軍が上陸したらどんなひどいことをするか分らぬというニュースが流れ、暫らく閉鎖されていたが、又再開されたというので、八月二十一日に入院した。ここでも同室に原爆患者が数名いて、次々に死亡していく

たが、私は不思議に生きのびた。

ここでも毎日のように、ガラス片の抜き取りが続いた。特に後頭部が多かった。ピンセットを傷口から数センチ入れて、ガラス片を取り出すのである。勿論麻酔なし。そして鮮紅色をしたアクチゾールの注射をする。尿は毎度アクチゾールの紅い色素を排出した。

多数の旧友や先輩の方が見舞に来て下さった。その中には既に故人になられた方もいる。左手の小指は残っていたが、手背の傷の瘢痕収縮に伴って、邪魔になりそうだったので、こちらから希望して切断して貰った。それは九月中旬だったようだ。クーレンカンプの麻酔があまり効かず、切断する時は電撃的疼痛を感じた。だんだん体力が恢復して県立病院を退院したのは、十月二十五日であった。左手にはまだ肉芽が露出していた。

## 九、それから

昭和二十年八月十五日、大日本帝国は米国に降伏した。マッカーサー将軍は厚木飛行場に、パイプをくわえながら着地した。

GHQは日本を改造し始めた。先ず天皇陛下の人間宣言、サンフランシスコ条約締結、学制改革。旧制高校はその歴史を閉じてしまった。生残った私達は、一年間卒業が延期され、昭和二十一年九月に長崎医科大学を卒業した。卒業式は、諫早の元紡績工場（片倉製糸）を改造した俄造りの大学病院の講堂で行なわれた。式の後に恩師の先生方を囲んでパーティーが行なわれたが、その時テーブルの上に並んだのは、薩摩芋二つとお茶ぐらいであった。何しろ七十数名のクラスメートのうち、卒業出来たのは三十名ぐらいであった。

パーティーの後、揃つて諫早公園を散歩した。そのあとGHQの嚴命によつて、日本に初めて作られたインターン制度の実習に、私達は散つていった。私は郷里の佐賀県立病院好生館で実習をした。その時のインターンは特例の半年であった。そして昭和二十二年四月、医師国家試験という新しい制度の試験を受けた。これもGHQの産物

である。

この頃の国家試験は、基礎と臨床と全科目に亘つて問題が並べられていた。到底合格する筈はないと思っていたが、合格発表は八月ということだったので、大学に戻りたいと思った。何科にしようかなと思い始めた。左手の三本の指がなくなっているので、手術ザイテにはむかない。すると内科か、精神科か、小児科。基礎の教室は実験の頃から子供が好きではなかったのか、と私の心がきさやいた。私は二十二年七月十六日に、佐野先生の小児科教室に入れていただいた。

その頃の長大小児科教室は、まことに寥々たるものであった。佐野教授、森重孝助教授（佐世保市民病院小児科兼務）、安井講師、平野医局長、須山さん、吉田忠人さん、井上哲ちゃん位であった。

昭和二十二年八月、佐野先生が東京出張から帰られ、「久野君、おめでとう。国家試験に合格していたよ。厚生省で見て来ました。」と申された。あのような答案でよかつたのかなと思った。それは新興善小学校を俄かに改造した大学病院の、小児科の医局であった。

昭和二十二年十月頃、左手の傷跡に出来た瘢痕が萎縮はじめ、示指が瘢痕の方に引つ張られてきた。この頃新興善の大学病院で、調先生に植皮をしていただいた。左腕の上の皮膚を少しばかりとつて、示指の根元に縫いつけて下さった。表皮は少時の後黒ずんで剥離したが、真皮の方はいまだに生きている。

その後、私は昭和二十三年三月から一年間、国立佐賀病院小児科に派遣され、二十四五年四月から長大小児科に復帰した。この時は佐野保先生が東北大学に転任された後で、和泉成之先生が赴任されていた。そして三十年九月からは長崎市民病院小児科医長となつた。それから絵を習つたり、ダンスの稽古や、酒の飲み方などを覚えたりした。昭和三十九年七月からはまた、古巣の長大小児科に助教授として戻つた。そして四十四年四月から、重症心身障害児施設みさかえの園に赴任した。顧みればすべて夢のようであり、現実のようでもある。

不具になった左手の瘢痕を見ていると、色々のことが愈頭を去来する。三本の指がないと、何とも云えぬ欠如感と瘢痕の萎縮感を感ずる。特に不具になった左手を見てみると、何とも云えない感覚が全身を走る。この感覚は独特のものだ。しかし戦争はあまたの死者と戦傷者をつくった。私など軽い部類かも知れぬ。

第二次大戦後、世界の政局は様々にゆれ動いた。原爆の後、水爆という恐るべき核兵器が出現した。そしてこのすさまじい破壊力をもつた水爆が、最大の世界大戦に対する抑制となっている。歴史の皮肉とでも表現出来ようか。

世界平和と一口に云うが、これは非常にむずかしいことだ。どうすれば本当の世界平和が実現できるか。カントは夙に、「永久平和論」を書いて、この問題を考察し、またヨハネ二十三世は、「地上の平和」という勅令を発表して、世界的反響をまき上げた。

人類は今までに経験したことのない事態に直面し、その進路をどうするか、決断を迫られていると云えよう。私は人間の最高の英知を結集するならば、世界の平和は実現出来ると思う。この問題について私の考えを詳しく述べるのは後日を期して、この辺で私の原爆体験記を終ることにしたい。

稿を終るにあたり、このような体験記を述べる機会を与えて下さった調先生に対しても、感謝の言葉を述べようとしても、言葉は見つからない。

(四九、一、一三)

## 偶然の幸運

長崎県西彼杵郡大島町閻瀬  
当時長崎医大学部四年生

本多（旧姓今泉）三代彦

私は当時鉄道省の依託学生で、長崎鉄道診療所とも関係がありましたが、昭和二十一年六月二十九日の佐世保の焼夷弾空襲の際には、長崎医大の報国隊員として、被爆罹災者の診療に出かけました。その時赤痢に罹患しましたので、長崎に帰つてから大学

の高北病棟に入院し、八月八日の夕方退院して、中川町の下宿に引揚げました。

翌九日には、長崎駅の隣にある鉄道診療所に挨拶に行き、所長に面会している時に、怪光一閃、長崎市は全市をあげて騒乱の巷と化しました。

私は当時病後で、体重も三十八キロまで減少していた程でしたから、大学へ行く元気はなく、そのまま中川町の下宿に引き返しました。

若し私が八日の夕方に退院せず、そのまま高南に入院していたら、間違なく死亡したと思います。また赤痢にかららず、元気に登校していたら、矢張り三十数名にのぼる同級犠牲者の中の一人になっていたかも知れません。それを思うと、偶然とは云え、八月八日の夕方に退院したのは、全く神仏の加護のような気がします。幸運だったというより外はありません。

(四八、一二、一四)

## 思い出の断片

大阪市阿倍野区相生通一丁目五一—二五  
当時長崎医大学部四年生

吉田弘之

卒業試験中で、同グルッペの宮本、山尾、安倉、屋久、山田の諸君と一緒に、古屋野外科の外来処置室で雑談中でした。

空襲警報解除中なのに、飛行機のキーンという金属音が直線的に聞え、次で爆弾の風を切る落下音が聞えたので、「それっ、伏せろ!」と云った途端に、目の底を焼きえぐる閃光、そして鼓膜を突き破る爆音、と同時に全身が強打されて、涼しい奈落の底に落ちて行きました。

山田幹雄君が僕の股倉に頭を突込んでいたので、その頭が僕の睾丸を保護してくれました。というのは、彼の頭に大変な傷が出来ていましたから――。

(四八、一二、二八)

# 原爆時の行動及びその後の状況

福岡県筑紫野市大字永岡四〇〇—四三  
当時長崎医学校三年生

## 井 本 满 德

原爆と云えば三十年近くも前のことなので、記憶に誤りがあるかも知れないが、思い出すままに書いてみたいと思う。

八月九日は、午前七時から九時まで空襲警報が出たので、各自受持の防空配置についたが、解除後は十時過ぎまで、中講堂で角尾学長の臨床講義を聞いた。

当時私は精神科の所属で、警報の際は学友二名と共に同科に駆けつけ、患者と一緒に防空壕に避難していた。中講堂での講義が終ると、すぐに外来へ行つてみたが、受付の看護婦が、「新築の学生控室は四年生が卒業試験の勉強で使用している」といふので、行く所もなく、外来受付に鞄を置いて、患者の来るのを待つていた。

その頃は、当番には昼食に握り飯が配給されていたが、夏場は腐敗するので中止されていた。親切な看護婦がいて、昼飯なら作つてあげると言つたが、それを断つて、「少し早いが飯でも炊くか」と、三人で炊事場の方へ行つた。

精神科の炊事場は、教室と廊下を隔てた六畳位の部屋で、三方はコンクリートの壁に囲まれ、北側に病院の裏山に面した窓があり、爆心地は北西の方向に当つていた。一人は一寸外出すると云つて、出て行つたまま行方不明となり、私と野口恭一君と二人が窓の方を向いて立つていた。ピカッと光つたのはその時である。

私は瞬間に閃光を感じただけで、爆音にも気付かなかつた。そのまま失神したようにならなくなり、気がついた時は、床の上に色々な器具がちらり、壁板も落ちていて、その中に私は横倒しに倒れていた。咄嗟に頭上から直撃弾を受けたと思つた。立ち上つたが目がくらんで、何も見えない。大声を出して助けを呼んだ。手探りで逃げ出そうとして手掌を切つた。何で切つたか分らない。

やっと視力が出て來たので、窓から跳び出し、裏山の方へ避難した。足は自由

に動いたが、左手掌と左前腕から出血し、左腕は直角に曲つたまま動かない。手拭で出血部を縛り、山の畠を這い登つた。

この頃には病院のあちらこちらから、体一つでシャツは破れ、顔や手足に負傷した人達がゾロゾロと出て来て、太陽に照らされながら、我々と一緒に穴弘法の方へ避難していった。途中で北村教授、長谷川教授、学友、看護婦たちに会つたが、お互に、「無事だったか」「俺の体はどうもなつていなか」と、恐怖に満ちた顔で問い合わせていた。

芋畠や草むらで休みながら、穴弘法へ通ずる道まで辿りついた。下を見ると、病院のコンクリートの建物以外は皆ペシャンコで、一面灰色の平原と化していた。

爆弾が落ちてから二、三十分もたつていたであろうか。先ずレントゲン教室と思われる方向から火の手があがり、火の塊が方々へ飛んで、次々に延焼していく。又この頃から市内の各所でも煙が出始めた。暫らくすると、晴れていた空が一面にかき爨つて、大粒の雨が降り出した。真夏というのに、午後三、四時頃からあたりは薄暗く、陰惨の氣がたちこめて、火事の火の色が異常に赤く見える。

私は丘の上で来し方行く末を思い廻しながら、何をする勇気もなく二、三時間を過したが、あたりには顔が青ぶくれ、力なく地面に横たわつて、「水をくれ!」「助けてくれ!」とかすかな声で叫ぶ者、氣力だけでやつとここまで辿りついたと思われる者など、悲惨な姿の被爆者たちが群がつていて、比較的元気だった私も、片手を吊つて、動くのがやつとだつた。

兎に角、片瀬町の下宿まで帰ろうと、山沿いの小径を辿り、我とわが身を励ましながら歩いて行つたが、諏訪神社の近くまで行つたところで暗くなり、そのまま近くの防空壕に入り込んで、市民の人達と共に不安と恐怖の一夜を過した。

翌朝、再び昨日来た道を逆戻りして病院に行き、自分の持物、鞄等を持って下宿に帰つたが、途中の光景はどんなだつたか、あまり記憶には残っていない。

下宿に帰ると、同級の滝口薰君が元気な姿を見せ、「怪我をしたか」と云つて、救急箱から消毒薬を出して手当をしてくれた。「君はどこにいたのか。無傷でよかつた

なあ」と云うと、「病院の玄関の所にいたので助かった」と云つていたが、同君は福岡に帰省後、死亡されたそうだ。

翌十一日は、「このまま長崎に居ても仕方がない。郷里へ帰ろう」と、片手を首から吊り、リュックサックを背負つて片瀬町の下宿を出発し、大学病院の中を通つて、汽車が出るという浦上駅を行つた。

この頃には病院でも、重傷者は動くことが出来ず、死人同様の姿で手当を受けていた。病院前の坂道には、腹がふくれて横倒しになつている馬の死骸があつたが、今でも脳裏に焼付いている。人間の屍体は片付けられていたのか、殆んど見つからなかつた。

謙早を過ぎた頃から、一般の乗客も車内に入つて来たが、私の姿を見ると氣味悪がつて、傍に寄りつかない。ジロジロ見ては通りすぎる。本人は顔も洗わず、鏡も見ていないので分らないが、片方の顔面には凝血がこびりついて黒く、シャツはボロボロで手は汚れ、きだない手拭で片手を吊つている。きっとみすぼらしく見えたのだろう。

佐賀県の中原駅まで来たら、これから先は爆撃されたので汽車は通らないといふ。仕方なく中原から鳥栖を経て歩き、夜半に基山駅についた。そこで一泊し、翌十二日の汽車で甘木市の自宅に辿りついた。

この頃から三十八度前後の発熱があり、下痢も十日ほど続いたので床についたが、この時は原子爆弾による症状とは気付かず、熱は傷の化膿によつて出たもので、下痢は食当りのためだらう位にしか考えていなかつた。腕の傷三カ所から、小さな硝子片が數十個出てからは、症状も少し軽くなつたようである。

約一ヵ月後には体も調子を取り戻したので、十月の授業開始に間に合うように、大村海軍病院へ出かけた。

その後は何ら身体の障害もなく、子供も三人出来、普通の生活を送つてゐる。人々は原爆を忘れるなといふが、私は過去の原爆の悲惨な状態を、一刻も早く忘れてしまいたいといふのが、現在の心境です。

(四九、一、八)

## 片山道生君の死

千葉県市川市菅野五一〇一八 星市川莊  
当時長崎医大学部三年生

賀來辰男

昭和二十年八月九日、私たち学部三年生は、故角尾学長の内科講義が終つて、ボリクリに出席のため、外來のそれぞれの科に散つて行きました。

私達のグループは、片山、海江田、大島、梶原、賀来、今一人の六人で、科は古屋野外科でした。部屋は玄関から入つて、左へ行った廊下の右側でした。

片山君は私の右隣り約一メートルの所で、予診取りに熱中しており、私は窓際にいました。午前十一時！ 運命の一瞬が訪れました。巨大な何物かに叩きのめされた感じと共に、視覚が奪われ、眼の前が真暗となつて、指の数さえ数えられない程の眞の闇でした。

初めは生埋めになつたかと思いましたが、手足は自由、それでは部屋全体が埋まつたのかと、闇の中を埃を吸いながら、何とかして逃げねばと、ウロウロしている中に、二、三分後でしたらうか、視覚が恢復し、ボンヤリ見えるようになりました。

何か重大な事態が発生したのだと直感し、一先ず玄関脇の横穴に逃げ込もうと、お互に励まし合いました。ひよいと右隣を見るとき、片山君がうすくまつています。

「片山君！ どうした？」と声をかけましたが、返事がないので助け起して見ます

と、腹部が裂けて、腸が露出していました。

これは大変なことになつた。兎に角横穴に行こうと、肩にかついで待合室を横切り、窓際に立つて下を見ますと、そこは地面ではなく、玄関から薬品倉庫に通するコンクリート階段の最下部でした。窓から約三メートルあります。「危い！ 止めよう！」と引きとめようとしたが、一瞬おそく、片山君はワーッとした感じで、うつぶせに落ちて行き、コンクリートに叩きつけられました。玄関を廻つて駆けつけましたが、既に息絶えていました。惜しい秀才を失つたものだと、チラと頭をかすめま

した。

当時貴重品だった煙草と、自家製ウイスキーの入った救急袋を取りに予診室に戻り、アツと驚きました。あの大机も椅子もこなごなに碎かれ、北の窓際に叩きつけられていきました。

そうだ、この破片の大きいので、片山君は腹部をもうにえぐられたんだ、と感じとり、ゾッとしたことでした。それにしても一メートルと離れていたのに、片山君は死に、私は十数カ所の外傷で生きていたとは、本当に宿命ということを考えさせられました。

一先ず横穴に入るべく、本館の玄関を出た時前方一面の街の火の海を見て、アツ！

これが昨日学長が話しておられた広島と同じ新型爆弾だな、と直感しました。

横穴でチラと調教授のお顔を拝見し、御無事でよかったです。

その日は大島正治君と山越しに街へ逃げ、茂木の山林に野宿しました。翌日、坂本

町の下宿を訪ねましたら、片山君を探し求める親友の安日晋君に会い、片山君の死と遺体の所在を知らせたことでした。

当時私は、片山君を危険な窓際に誘導しなかつたら、或いは助かつていたのではないか、片山君を殺したようなものではないか、という自責の念と、いやあれだけの重傷とあの混乱の中では、到底生きる望みはなかつたろうと、自らを慰める心とが交錯して、苦しんだものでした。ただひとつ救われましたのは、私の証言により、片山君の遺体はあの混乱の中、無事に御遺族の方に引取られて行つた、と安日君から聞かされたことでした。

何はともあれ、今となつては、片山君の御冥福を心からお祈り申し上げるのみです。合掌

(四九、一、一〇)

熊本大学体质研究所教授  
当時長崎医大学部三年生

## 佐々木

隆

原爆十周年を記念して編集された「追憶」に、ベンをとるにあたつて取り出した名刺大の粗末な手帖、汗とほこりにまみれ、しかも昭和二十八年六月の熊本の大洪水で水びたになり、字もうすれた手帖ではあるが、一日に一行か二行の記載を柱に、年を経ても消えることのない数々の憶い出がわきあがつてくる。

【四月二十日、金】 入管延期ノ書類ヲ書留ニテ発送。

【四月二十二日、日】 茂木デノ五高会、警報発令ノタメ延期。

【四月二十三日、月】 天井外シ作業。

【四月二十六日、木】 十一時、長崎駅ニ爆弾。

【五月九日、水】 今日一日一回モ警報ナシ。

【六月二十二日、金】 職員、学生ニヨル当直制度開始。

【七月一日、日】 学徒隊結成式（九時）。医専入学式。

【七月四日、水】 渡り廊下ノ屋根コワシ作業。

【七月十二日、木】 本日ヨリ警報中デモ講義続行。

【八月一日、水】 十一時四十分、婦人科、耳鼻科、古屋野外科、高南病棟ニ爆

弾。

【八月六日、月】 今日ヨリ電車動ク。本日ヨリ講義再開。午後医専ノ殉職者三名

ノ学徒隊葬。

毎日毎日を過している時にはそれ程感じなかつたが、このように読み返してみると、日ましに切迫した状勢の中に落ち込んでゆく様子が、ひしひしと感じられる。

【八月八日、水】 学長東京ヨリ帰学。広島ノ奇妙ナ爆弾ノ話ヲ、金学一同校庭デ

聞ク。

しかしこの校庭が、そしてここから見渡せる限りのところが、二十二時間後に同じ運命にさらされようとは、一体誰が予測しただろうか？

【八月九日、木】十一時過ぎニ新型爆弾（？）。西山ヲマワシテ夕方帰り着ク。角尾教授ノ内科臨床講義のあと、大島正治、海江田芳春、賀来辰男、梶原章、片山道生のグルッペは外科のポリクリニで予診室へ、神木暁次郎（台灣人、本名李釣光）、川野正七、熊谷静真（後田中と改姓）、佐々木隆、菅原至誠のグルッペは外科のプラスの週だった。

病棟では格別に仕事もなさそうだったので、正午過ぎまで街に出かけようかとも考えたが、結局外科のポリクリニにとび入りすることにして、診察が始まるまでの時間を、散歩がてらに崖の上に出て、稻佐山、竹之久保、三菱の工場と、毎日見なれた景色を眺めながら、先日の空襲でお母さんを亡くした熊谷君のことを考えたりして、時間がつぶしながら外来診察室へと向った。もう少しこんなにして愚図々々していたらと思うと、これも一つの運命の岐れ目だったことになる。

古屋野先生の診察がはじまつた。室にいたのは教授、患者、看護婦、それに学生は正規のグループがまだ予診をとっている最中だったため、診察室にいたのは川野君と小生の二人だけで、総勢は五人。医局員はまだ誰も来ていないので、川野君が記載を引受けた。二人目の患者は包帯で、診察が終り、これから型の如く、診断、解説、処置の指示があるという、その時があの瞬間となつた。

三十年たつた今、あの朝の内科の講義の内容も、最初の外科の患者の病名も、全然想い起せないが、瞬間の直のことだけは、不思議に脳裏に生きしく残付いている。

閃光、爆鳴、熱風、暗黒、数秒或いは数十秒？ 記憶に残る最初の状態が、立つていたところから始まることから考えると、吹きとばされたり、気を失つたりしてはいなかつたようだが、どれ位時間がたつたのか、今考えても全然見当がつかない。

目をこすつても何も見えない。失明したと思つたが、何の感情もわかない。やがて視界がひらけて来た。壁や天井の漆喰が崩れおちて、土煙が充満したためと分つたのは、ずっとのことだった。

誰がどうなつたかを考えることさえ忘れて、夢遊病者のように廊下に出ると、無言の人の流れがぞろぞろと西へ向つている。どこへ行つて何をしようという考え方もまともらぬままに、羊のようにその群について行くと、流れはしずしずと階段を下り、地下の倉庫の横からドライ・エリアに出た。目を射る強烈な日ざしで、ハツと我にかえつてみると、今まで一列か二列だった人の流れは、地上への階段を上つたところから、ちりぢりばらばらになつて、調理所の横を通つて山の方へ、人々と違ひ上つてゆく。

後から駆け上つてきた女学生に、額から血が出ていると云われて、あの瞬間以来、初めて言葉を口にした。挺身隊で三菱の工場にいたのこと、驚くべきスピードだ。家が穴弘法にあつて母が一人でいるから、兎に角一眼していらつしやいと云われて、息をきらしながら後について坂道をかけ上つた。穴弘法の茶店の娘さんらしい。

「この井戸はうちの井戸なのだが」と云いながら、彼女は立ち止つたが、家らしいものは何もない。狐に化かされたような感じで、あたりを見廻しても褐色の丘が続くばかりである。はるか向うの城山から山里町にかけて、火の手があがつている。病院はと見下すと、何事もない。あよよかつた。基礎はと目をこらしたが、4Dの近眼鏡をふきとばされたので、はつきりとは位置が分らない。今にして思えば、木造の基礎教室は瓦解して、見える筈はなかつたのである。時計は動いている。十二時十分だ。

片渕に下宿している者四、五人が一団となり、浦上の神学校の裏に出ると、黒い雨が降りだした。ハンカチ、シャツ、ゲートルは、救いを求める人々の止血を使ってしまつた。看護婦が吾々一行にモンペをくれたので、それで包帯や三角布を作りながら、西山の水源池へ通ずる本道に出ると、家族の安否を気遣つて、「城山は？」、「大橋は？」と叫びづけながら、坂道を裸足でかけ降りてくる長中、瓊浦、商業などの生徒に出会う。「西山は？」、「片渕は？」と同じ思いで問い合わせ返す。咽がたまらなく渴いてくるが、お互に水を飲むなど励ましながら、夕刻に下宿に辿りついた。

下宿の小母さんに、伊良林校に救護所が開かれているから、傷の手当をして貰うがいい、と教えられて出かけた。目をそむけたくなるような怪我人が多いことを知り、

その後の浦上が並々ならぬことを感じとった。

夜に高木教授、国房教授、四年生の藤原昌君を訪ねたが、何れも消息不明。硝子の破片がさきつているので、仰臥することも枕をあてることも出来ぬ。室の隅にもたれて寝た。

【八月十日、金】 三十七度八分。朝高木夫人、続イテ藤原夫人來訪。藤原君ヲ探し出ス。県下ノ警防団ガ大学ニ援助ニ来ル。

目を覚ますと、少し熱があるので、一日寝ていようと思つてゐるところに、藤原君の奥さんから、主人を探しに行くから連れていつてくれと頼まれ、水筒一つ持つて、昨日通つた山道を再び大学へ行つた。

八月の激しい日照りの下、「医專の森猛さんを御存知の方はありますか。」などと、知人の行方を求める連呼の声が、山に木靈する以外は、蟬の声もなく全く静寂。昨日まで活氣を呈していた工場の沈黙は、その巨体と共に、更に一層の無気味さを加える。

突然、「見よ東海の空あけて」と調子外れの歌声が、精神科の裏の山手から聞えた。恐らく生残つた患者だろう。耳をすますと、あちこちで低い呻き声。露出した背中には白い膏薬が一面に塗られている。それらの人々を励ましつつ、「藤原さーん!! 藤原君!!」と連呼すること數十回、やつと下の谷間から応答があつた。奥さんが何か叫んで、転がるように駆け降りて行つた。鹿児島弁なので全然わからない。

一人とり残されて、先き程からることを考えてみる。姉弟の絆と夫婦の愛ということが、彼女の弟は学部の二年生で、小生と同じ下宿にいたが、昨夜はどうとう帰つて来なかつた。ここに来る前に、道順からいつても基礎の教室を通ることになるので、弟さんを探してから御主人を、と提案したのだが、「弟はどうせ駄目でしようから」というのが返事だつた。

早速病院に引き返し、そこに居あわせた乗馬部の石川さんと、担架を持って迎えに行つた。手と目の不自由な藤原君を、昨夜から世話をしていた影浦内科の岩永という看護婦が、足をやられてゐるので、その方を先にと藤原君は云つたが、重傷の方を先に

ということで、彼女を残して、藤原君を奥さんと二人で担いだ。倒れた家や崩れた石垣で足場が悪いとは云うものの、腰がふらつき、握力がなくなつてゐるのに、我ながら驚いた。

暇をみつけて、昨日の場所を行つてみた。内部がすっかり焼けているのにおどろく。外科の診察室の西南の隅に、焼け爛れた死体が一体あるだけ。腹筋の三層の筋層が、ささくれたベニヤ板のように見えたのが、今でも忘れない。

予診室に行つてみる。誰もいない。何もない。カバンも本もーー。犯行現場に引返すという心理、それと似た衝動にかられたのかも知れない。何となしに安堵をおぼえる。

【八月十一日、土】 角尾、高木、国房ノ三天人ト午後カラ大学ヘ。軍隊ガ後片付ノ応援ニ来テイル。疲労困憊ス。

角尾先生と高木先生は、外科の東側崖下の防空壕に、国房先生は皮膚科の地下室に、藤原君も崖下の防空壕に、それぞれ収容されていた。

患者の苦しみは益々強く、看護する方も多忙と疲労とで、神經がとがつてくる。水を飲ませてくれと執拗にせがむ患者がいて、うるさくて他の患者は甚だ迷惑。どこに隔離しようかとの案も出たが、難然と詰めこんだ防空壕の一一番奥なので、どうにも手のつけようがない。

「皆さん、喧しいでしようが今暫らく辛抱して下さい。あの人も今夜までには静かになるでしようから。」と、医者が云わざるを得ないほど、どちらもどうにもならない情況が、あちこちに繰りひろげられていた。

死と闘うこの一帯に、元気な蚊が現れはじめた。蠅はまだ見当らない。

【八月十二日、日】 一日休息スル。

熊本のうちに連絡しようとしたが、通信の見込が全くないことがわかつた。

【八月十三日、月】 高木先生宅ヲ訪ネル。先生死去（十一日夜七時）トノコト。

道ノ尾ノ大学救護所へ。夜十二時スギニ帰ル。

滑石に大学の患者収容所が開設されており、夕方からそちらへ出かけ、吾々も今夜

はそこに泊めて貰うつもりだったが、患者だけでもすでに収容しきれぬほどなので、

情勢判断の甘さを後悔しつつ、仕方なく夜道を片渕までトボトボと帰る。大橋から小川町にかけて、沿道にはあちこちに死体を焼く火が見えるが、もうその臭氣にも馴れてしまった。

【八月十四日、火】 朝三十九度二分、夜七度四分。市役所ニ高木先生ノ死亡届ヲ出ス。

市役所で、変死届を出せと云われて、この上もなく情ない思いをした。

【八月十五日、水】 無条件降伏？ 国房先生重篤、川野君ノウチニ寄ル。元気デ

治療ニアタッティル由。

重大放送があるとは聞いていたが、患者の世話でそれどころではなかつた。下宿に帰つてはじめて知る。友達の安否をたずねる余裕ができた。

【八月十六日、木】 午前四時、国房先生死去。大音寺ニ葬儀ヲ頼ミニ行ク。園田哲郎君、午後六時四十分死去。終列車デ出発。

消毒、軟膏塗布、ズルフォンアミド剤、解熱、強心、鎮痛、ビタミン——といった平凡な治療で看護していた先生方や友人が、続々と死亡。小生は昨日から熱はなくなつたが、今朝から下痢気味で、あれほど生水は飲まないよう注意してきた積りなのに、やはり赤痢になつたかと、ただできえ少い人手をとるようなことになつては相濟まぬと思い、熊本に帰る決心をした。

国房先生のことは、遺言にある弁護士に一切をたのみ、大音寺に葬儀を依頼した。

駅に向う途中、熊本出身で、妹の友人の主人である学部四年の園田哲郎君を訪ねた。先ほど亡くなつたとのこと。ああ、また一人。まだ心残りの多い長崎ではあったが、急遽十一時発の終列車に乗りこんだ。

(四九、一、一〇記)

## 被爆体験略記

東京都杉並区西荻北三一二二一六  
当時長崎医大学部三年生

田 中 稔

八月九日は、角尾学長の講義が十時過ぎに終り、次の放射線の講義が休講になつたので、五、六人の級友と一緒に、南講堂で雑談をしていました。

突然、閃光と共に轟音がしたので伏せました。気がついた時は真暗になつていて、一時何も見ることが出来ませんでした。早く脱出しないと焼け死ぬと直感したので、屋外に出ようと思いましたが、左足を何か物に挟まれて抜くことが出来ず、止むなく靴を脱ぎすぎて立ち上り、外へ出ようとしたら釘を刺してしまいました。

頭部、顔面、左前腕はガラス傷のため血だらけでした。外へ出たら黄塵の中に調先生の姿が見えました。負傷した医専の学生に肩を貸して、裏山に逃げ上りました。下を見たら間もなく火の手が上つて来ました。 (四九、一、一〇)

【調附記】 アンケートの葉書に、初めて医大の焼跡を見たのは八月十日と書かれているから、九日は金比羅山を越えて一旦下宿に帰り、翌日再び大学を訪れられたものと思う。尚当日の詳細な記事は、昭和三十年出版の「追憶」一四七頁に書かれてるので、それを参照されたい。

## その日お会いした方々

山口県防府市東三田尻一丁目一一二六  
当時長崎医大学部三年生

高 橋 敬 郎

昭和二十年八月九日、第一时限は故角尾先生の臨床講義で、これが先生の最後の御講義となりました。その後脛までの時間、私のグルーブは皮膚科北村包彦先生の外来

であつたのが、丁度その日は専門部学生の試験のため、我々は半ば自由の状態となり、午後二時までの時間を利用して、食糧や夏蜜柑の買出しに長与へ出かけたのが、偶然の逃避となつた。

十時三十七分長崎発の列車に乗り、今少しで長与駅にさしかかる時であつた。日を射た閃光から約一秒後の爆風で、日除けは飛び、便所の戸は吹き倒れ、座席は傾き、その中で人が床の上を這い廻つていたのを記憶する。人々は原爆を知らず、すべて汽車が爆撃されたものと思つた。

現在では万人承知の原子雲は、真夏の昼近くの晴れ渡つた上空へ、ギラギラと輝きながら、物凄い速さでグングン上昇して行つた。人々はポカンとして見ている。ただそれだけで何事もなかつた。三、四分後に、天日を覆う黄昏のよう、火の粉を混じた黒煙が、東南にあたる山の端から押し寄せて来るまでは——。

この時ははじめて、攻撃されたのが長崎で、どうやら新型爆弾らしいという声を聞いたが、実感としてはさっぱり分りようがなかつた。

殆んど小一時間も過ぎた頃、第一の避難者が三菱のトラックに乗つて街道に現われたが、乗つていたのは四、五名で、何れも動員学徒の焼けただれた姿、恐らくその運転手が救つて脱出したのである。彼自身も同じように大きな火傷を負つてゐた。皆口をきくのも大儀らしく見えたが、この人達によつて大凡の事が判り、一散に長崎へと走つた。

その地点からは鉄道を通るより、山を越えた方が大分近いというので、山へ入つて迷いこみ困却したが、その山道で初めて大学関係の人に会つた。それは病理教室でよく面白い話をしてくれた画工さんで、途中で折つたらしい青竹を杖にして、蓬髪に灰を被り、肩から頬へかけて負傷し、衣服の一部はボロボロになつて、「何もかも滅茶苦茶にやられた。きつうしてたまらん。」と云つて、トボトボ行かれた姿を思い出す。その頃から、傷ついた避難者が続々とつづき、長崎の大半が一瞬にして潰れたことを知つた。

峠を越えて漸く川平に着いたのは、すでに午後二時をまわつた頃で、それから先ど

んな経路を通つたか、はつきり判らないが、あたりはさながらの地獄絵であつた。

次に会つた学内の人人は、付属医專の学生二人で、一人は比較的元気だったが、もう一人の方はすでに立つことが出来なかつた。会つた場所は本原三丁目の少し北側であった。その人達は蟹茶屋の人で、特に悪い方の人は、「どうしても死ぬまで帰り着きたい。」と云つてゐたが、その後は、「もうこれ以上頑張れない。」という言葉に変つた。ゲートルを解いてしつかり背中に縛り、一人を支えて、その人達が今まで逃げて來た道を逆戻りしたが、まるで虫の這うようにもどかしい速度だつた。畠の中でのまま焼けた南瓜を腹につめ込み、懸命に歩いたけれども、浦上天主堂の後の丘に辿りついた時は、すでに夕陽が落ちかかっていた。そこでその人は、背中に縛られていることの努力が尽きてしまつたので、降ろした。

丁度その時、近くで赤ん坊が泣いてゐるのに気がついた。場所はすぐ傍の畠の中で、畠仕事の最中に被爆したらしい母児であつた。お母さんは既にこときれ、赤ん坊はそのおっぱいにすがつて泣いていた。沢山な死体の中を通つて來た我々であつたが、ここで何とも云えない氣持になり、皆も同じ氣持であつたのだろう、どちらからともなく、其廻へ坐り込んでしまつた。

しかしその頃には、あちこちに担架を持つた無傷の救護班が働いてゐる姿も見えたので、お互に安堵してその人達と別れたが、別れ際に握つたその人の脈は、恐らく蟹茶屋への念いを叶えさせなかつたのではなかろうか。

それから私は、暮色の漸く濃くなつた丘の斜面を降りて行つたが、大学の運動場の向う側に七、八人の人がいて、頻りに誰かを呼んでいた。少しづつ近づくにつれて、それは高木純五郎先生を探してゐることが分つた。更に降りると、「オーケイ、此処だ、高木はここだ。」という先生のお声が聞えた。然し丘の私には聞えるが、運動場の人達には聞えない。先生は天主堂の南側の崖下を流れる小川の岸に倒れておられた。私はその場から声を限りに運動場に呼ばわつた。それがやつと通じて、先生がその中の一人の背中に負われるのを見たので、穴弘法へ向つた。

その後、外人墓地から西坂の山手を経て東へ迂廻し、お諏訪の山から市内へ入つた

のは九時過ぎで、県庁から発した火が、中島川を挿んで、必死に防がれている最中だ

った。そしてその後一ヶ月間、その焼跡では毎日毎日、焼け残りの材木を積んで、原子病の犠牲者を焼いたのである。

【調 附記】 昨年、高橋君に当時の体験手記をお願いしたところ、昭和三十年に

「追憶」に書いた手記の方が生々しいので、それを適当に抜萃してほしいとの御返事

を頂いた。これはそれから約三分の一程書きぬいたものである。

## あの日のことども

長崎市樟島町三一三

当時長崎医大学部三年生

築城士郎

八月九日朝は、登校のため長与駅まで来たが、空襲警報が発令されたので、尾崎俊行君と共に、長与村三根郷の自宅に引返す。

初めて医大の焼跡を見たのは八月十二日で、自宅から川平を経て浦上に至り、医大の焼跡を見て呆然となる。途中敵機の飛来する中で、九大救護班の福重悟君（佐賀高校の同窓、現在若葉町で外科開業）と偶然出会つたが、何を語り合つたか覚えていない。

（四八、一二、一七）

授業は日曜日にも行なわれていたが、それで思い出すのは、古屋野教授の外科各論の時間で、教室で小声で話したり、ウトウト居眠りする者がいると、「こらッ、寝るとは何事だ。ノドを突いて自決せよ」、「戦線では君等の同胞が時々刻々、お国の為に死んでいるんだぞ」。教室は静まり返つた。先生は又いつもの通り、あの甲高い声を時々交えながら、講義を続けられた。我々はホッと胸をなで下したが、自責の念にかられながら、国家の為に勉強していることを、改めて強く自覺したのだつた。

また、こんなこともあつた。レントゲン科の永井助教授が、フィルムを手にして、肺浸潤の講義をしておられたが、「多くの肺浸潤患者を観察していると、全く戦争の末期的徵候である。ドイツも大戦の末期には、このような患者が増加した。」と話された。私はこの末期的徵候という先生の言葉に、強く締めつけられた。

當時の医大学生生活あれこれ

京都市南区八条通大宮西入  
当時長崎医大学部三年生

授業がすんで私は、大島さん、菅原君、大浦君たちと、この言葉について話し合つた。「戦争がもう末期で、やがて終るというのは、どういう形で終るのか。勝つか、負けるのか」ということだった。その時大島さんが、「ドイツは前大戦で降伏した。日本も負けるかも知れない。そして戦争は終るだろう」と云つたのは驚いた。

「月月火水木金金」とは、当時土曜も日曜もない、海軍の艦隊勤務の生活を唱つた歌の文句である。これは当時の長崎医大の学生生活でもあり、従つて教職員にも実行

されていた言葉であった。我々はこんな時代を過していたのである。

学生の徴兵延期の特權も年令が下げられ、一般学生は有名な「学徒動員令」により、戦線へと馳せ参じ、勇敢に戦っていた。又徴兵年令に達していない学生生徒も、工場や農山村で、徴用学徒として授業を中止し、働いていた。

全国の学生のうち、大学で学業が行なわれたのは、医学生の約三千名以外にはなかつた。それは云うまでもなく、政府の決戦教育措置によるものであつた。昭和十八年十月に入学した我々は、二十年四月には学部の三年生になつてゐた。当時は本土決戦が叫ばれ、医大にも防衛隊が組織され、三年生と四年生は各臨床講座に分れ、報国隊として配属されて、昼夜の別なく、空襲警報と同時に各受持部署に駆けつけねばならなかつた。

先生を先頭に、医局員、看護婦、学生たちが、国旗掲揚と君が代奉唱と共に、その日の日課が始められていた。報国隊員としての我々学生も、この病棟の廊下を通る時は、全く緊張してビクビクものだった。

こんな時、五月上旬頃に二度目の召集令状が来て、一人淋しく長崎を去り、戦車隊員として京都の聯隊に入隊したが、下旬には自宅待機となつて家へ戻った。「医学を修め、軍医となって御奉公せよ」とのことだったのである。六月には再び長崎の地をふむ喜びを得たが、この時母は、「九州はきっと独立して決戦するだろう。お前が軍医になつた時の軍刀にせよ」と云つて、我が家伝来の日本刀を一振りくれた。

長崎に帰ると、夏期休暇が今年から廃止されるとのことだつたが、代表の者が交渉して、「七月中旬から約十日間、授業を中止する」という特別休暇が出された。私は再び関門海峡を渡つて京都へ急いだ。当時妹は嫁ぎ、男兄弟三人はすべて軍隊、父は一年前に死亡し、母一人だつたので喜んで迎えてくれた。

十日間はすぐに終つたが、母が急に肝臓の痛みを訴えて床に伏し、帰るにも帰れなくなつた。八月になると少々痛みも軽くなつた様子で、「お国の為だ、早く長崎へ帰れ」と云い出したので、京都駅へ行つてみたが、「広島大空襲のため当分開通の見込みなし」と掲示が出ていた。二、三日後、広島開通というので列車に乗つた。

唇頃に広島に着いたので、水筒に水を入れようとプラットホームに降りたが、駅舎も眼前にある筈の広島市も全く消えて、瓦礫の平原と化している。一体どうなつたのか想像もつかない。給水バルブの所に集つてゐる人の話では、「大型特殊爆弾で、広島市は一瞬にして火の海となつた」という。全く信じられない話であった。

空襲警報で何度も列車外に待避させられながら、鳥栖駅についた時は既に日が暮れていた。燈下管制で列車内はうす暗く、乗客も諱早駅では一箱に三、四人になつた。

車掌が「この列車は道ノ尾駅まで」と知らせた。理由を尋ねると、「長崎は大型爆弾で市内半分が壊滅している」という。「医大的学生だが、大学は?」下宿は城山だが、どうだらうとの問い合わせに、「その辺が中心地で、全部燃えた」との答が返り、広島市のあの状況がふと臉に浮んだ。

二十人ばかりの乗客が、線路づたいに歩き始めた。燃えている火が目に入った。あれは駅の石炭貯蔵所の火のこと、向うに見える一段大きい火柱は、製鋼所の石炭の山が燃えているのだ、と教えられた。八月十一日の夜半のことである。

何処をどう歩いたのかとにかく病院正門の坂道を登つて、玄関車廻しの所へ辿りついた。一階の受付あたりに灯りが見えたが、様子はさっぱり解らない。呻き声のよな音が建物にこもつて、グワーンという不調和な音律が響いて來るのみである。心細い感じだが、車廻しの縁の高い所を枕にして、二三十人の人々の仲間入りして横になる。時にはギャーという泣声も混つてゐる。

すっかり気持よく寝た。夜が明けると十一日の朝である。病院の窓という窓は破れ、側壁も飛んでなくなつてゐるのが目に入った。

病院の玄関を入つて驚いた。数十人の被爆者が落下物の散乱するコンクリートの床で、死の苦しみでノタ打ち廻つてゐる。正気の人は坐りこんだり、フラフラしながら救助を求めてゐる。此處は病院だから何とかなるだろと、必死の力で辿りついたといふ。昨夜車廻しで眠つてゐると思つた人達は、皆死んでいたのである。死体の間で一夜を過したのだつた。

陽がのぼると異臭が鼻につき、正門前の空地に力なくしゃがみこんだ。軍隊が来て付近の死体を集め、二、三十体づつ汽缶室の焼跡に重ねて、燃やし始めた。

それから私は城山町の下宿を見に行つたが、途中言語に絶する腐敗した死体、壕内で折り重なつた死体を所々で見た。捜し求めてゐる人、泣き叫んでゐる人、無言で立つてゐる人、坐りこんでいる人々を見つつ、浦上川の橋を渡つた。家は一軒もなく全焼している。午後の陽をさけ、川岸へ下りて休む。

夕暮れ時、「私はこの辺にあつた宮永さんに下宿してゐた学生です」と、持つていった食糧を五、六人で平げた。喜んで泣いてゐる人もいた。その夜は川岸の草の上で寝た。今日見たすべてが、まるで夢のようである。

十三日の朝は空腹で目がさめた。たまらず病院へ向うと、正門近くでクラスの者と会つた。「大学の救護班が外科病棟の所に出来た。握り飯が出てゐる」と教えられ、

行つて二、三個食べた。それから一人で病院の廃墟を通り抜け、基礎教室へ行つてみたが、全部瓦礫と化し、方々に鶴の群が見える。よく見ると死体の腐肉を食べている。

石を投げると数十羽の鶴が一齊に飛び立った。

救護班の所に引返すと、死者の名が貼り出されている。自分の名が行方不明の所に書かれていたので、消して貰つた。「自分は死なず、鶴に喰べられず、この廃墟の長崎に生きている」と急に力強く感じた。西本君に会つた。下宿へ来いというので、二、三日居候生活をした。

十五日正午、ラジオの前に集つた。戦争は終つたらしい。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び——」。玉音放送だつた。目に涙がじみ出た。戦災証明書がないと無籍者になるといふので、坂本町で列に並ぶ。「戦争が終つたというデマ放送を信じてはならない。九州は最後の一人まで戦うんだ」。係らしい人がメガホンで叫んで廻つていた。私は十六日の夕方、数人の仲間と長崎を発つた。貨物列車で無蓋車が多かつたが、有蓋車を見つけて飛び乗つた。馬の輸送車で、臭気がただよつてゐた。

明けがた八幡市を通過した。數十本の煙突からは、煙が全く出でていない。何だか変だと話し合つていたら、乗つて來た人の話で、「戦争はほんとに終つたのだ」と教えられた。

その夜自宅へ戻つたら、母は私を叱りつけるように見つめた。急いで長崎の様子を話したら、「生きて帰れてよかつたね」。母の両眼からは、急に大粒の涙が流れ出た。

(四九、五、一〇)

## 原爆被爆の前後

長崎市弥生町一〇一五  
当時長崎医学校三年生

野 恭 一

師や看護婦さんたちと、色々な話をした。

翌九日は、朝から角尾学長の内科臨床講義があり、それがすむとボリクリは小児科で、同じ班の野口修君と一緒に外来本館に行ってみたが、当日は医学生徒のボリクリ日だった。そこで、昼食をとるために精神科病棟に行き、そこで井本君と落ち合つた。

丁度その時に、強烈な閃光が走り、次の瞬間、ゴーという音と共に投げ出され、あたりが真暗となり、上から何か落ちて来た。至近弾のために生埋めになつたのかと思ひ、夢中でもがいた。

暫らくして段々明るくなつたので、立ち上つてあたりを見ると、井本君も同様であつたらしく、隈の方から姿をあらわして來た。全身血だらけで、腕が折れたと云う。見ると大きなガラス片が前腕部に刺さつてゐる。それを抜きとり、窓からとび出し、穴弘法の山へ逃げ出した。途中で精神科の看護婦達と一緒にになつたが、皆負傷して血だらけになつていていた。

丘の上の畠では、緑色の葉が一枚もなく、赤茶色の土が露出し、カボチャがごろごろ転がつてゐる。山の頂上まで行つて向う側を見たら、こゝも赤茶色一色、所々に煙が出てゐる。この頃になつて初めて、これは普通の爆弾ではない。昨日角尾学長からお話をあつた新型爆弾ではないかと思つた。

どうしたらよいのか、さっぱり見当がつかない。暫らく呆然となつて様子を見ていふと、下の畠の中に日の丸の旗を立て、「集まれ!」と叫んでいる学生の姿が認められたので、再び下りて行つたが、近くまで來た時、急に嘔氣を催し、二、三回嘔吐した。寒氣を感じ、悪寒があり、口渴がひどく、倦怠感が強いので、そのまま畠で横になつていた。

何時間経つたか分らないが、夜に入り、やつと元気が少し恢復したので、起き上つた。街は火の海だ。向うに人が大勢一団となつてゐたので、近づいたらそこに角尾学長が寝ておられた。傍に調先生も居られた。

原爆投下の前夜は、付属薬専以来の級友井本滿徳君と共に防空當番で、受持の精神科病棟で宿直をしていた。その夜は、綺麗な星空を眺めながら、宿直の若い精神科医

た。口を動かすと右の顎関節が痛いので、乾パンは食べられなかつた。

薬専の防空壕で学生が死にかけているとの報が入る。報道の主は薬専時代の先生清水教授であった。少しピッコを引いておられる。壕に行つてみると、五、六人の学生の死体があつた。その中に中学時代の同級生石田憲敬君も、すでに冷くなつていた。

壕内で一夜を過し、翌朝壕を出て大学構内を通つたが、死者があちこちに横たわつたまま動かず、負傷者や火傷の人達が、大声で水を欲しがつていた。

その中に私の名を呼ぶ者がいたので、行って見たが、顔中火傷のため誰だか分らぬ。話をして初めて、昨日小兒科で別れた野口修君であることが分つた。一緒に帰ろうと勧めたが、上野町の自宅が燃けており、両親の行方がわからないから探すとのことで別れた。これが彼を見た最後であった。

病院調理所裏の防空壕で木戸先生の治療を受け、井本君が元気な姿で迎えに来たので、一緒に自宅に帰つた。

尚、野口修君には、四、五日後に今福博明君が滑石で会つたそうで、その場所で死亡したとの話を聞いた。今福君は、野口君の家族が全滅したらしいことや、遺族の住所などを書き残した遺書と共に、懷中時計と爪を持ち帰り、私は彼から遺族に連絡するよう依頼されたが、その後放射能症状に悩まされて、暫らくは動くことが出来ず、数週後に漸く浦上木場の親族の家を訪ね、遺書や遺品をお渡しすることが出来た。その時の話では、野口君の死体は、とうとう分らぬままのことであった。

(四八、一二、三四)

## 被爆体験記

横浜市港北区太尾町一一三八  
当長崎医大学部三年生

原 輝 夫

当日は角尾教授の講義終了後、早々に弁当を食べ、外来本館の内科予診室（角尾教授の居られた斜め前の部屋）で読書中でした。閃光、爆発音、強烈な爆風と同時に、

三階に来て間もなく、キーンという弾丸が迫つて来るような音がすると同時に、ピカッと光る閃光、そして大音響を聞いた時は、身体は既に床に伏せていました。

視界が真暗となり、加えて強度近眼の眼鏡を飛ばされたので、手探りで漸う中央階段から降りて、薄暮のような屋外に脱出しました。

既に火の手が上つており、皆黙々と裏手の山へ登つていたので、私もついて登りました。その前後に古屋野教授の声を聞いたように思います。

それから、私は山伝いに片瀬町の方へ行きましたが、途中、穴弘法の丘では青い生の胡瓜をむさぼるように食べ、その夜は星加秀雄君の下宿に泊りました。

(四九、一、一〇)

## 原爆被爆の記録

愛媛県西条市神拝甲五九一  
当時長崎医大学部三年生

星 加 秀 雄

「去る者は日々に疎し」と申しますが、被爆当時の惨状だけは、年を経ると共に鮮明に、思い浮べることが出来ます。

あの日、私たちの授業担当は角尾学長の内科ボリクリで、病院本館一階で学友数名と共に先生を囲み、いろいろ説明を受けていましたが、私は途中で抜けて、三階の皮膚科北村教授の、外来見学者グループの中にまぎれ込みました。その訳は、私は入学前外地で現地医師をしておりましたので、卒業後もまた外地に戻る積りで、浅く広く臨床を学びたかった為でした。

十一時頃、敵機侵入のサインが鳴り、あたりは騒然となりました。私は直観的に、三階に来たことは非常に危険だと思ったのですが、結果的には、一階から三階に移つたことが、却つて死を免れることにもなつたのです。幸運というより外はありません。

眼を開いてみると周囲は真暗で、一時は失明したのではないかと思いましたが、暫らくしてほのかに光が入り、漸次明るくなったので周囲を見廻すと、北村先生や他の学友たちの姿はなく、天井や壁が崩壊して、濛々たる塵埃です。

横倒しの机や梁板などの障害物を乗り越え、正面玄関に出て見ると、庭前の大木が地面から一メートル位の所でへし折れたり、根元から横倒しになっています。破れたワイシャツを着た人や、髪を蓬々と乱した人々が、慌しく裏山に向って走って行きました。私も皆の後を追つて逃げましたが、上を見ると山の中腹では、恰かも白蟻が匍う

よう、多数の人が列をなして馳せ登っています。

空には暗雲が立ちこめ、敵機は見えないが轟音が響いて、いつ爆弾が投下されるかも知れないという恐怖で、もどかしくも足が運びません。途中、窪地にうずくまっている負傷した婦人を、肩に腕かけて山頂まで辿りつき、眼下を見ると市街では既に方々から猛火が立ち昇り、凄まじい光景を呈していました。

そのうち、空の暗雲から俄かに油のような雨がしつこと降り始め、私は暫らく茫然と眺めていましたが、下山する人も多くなったので、その一団に加わり、漸く諫訪神社近くの下宿に辿りつきました。

帰宅後初めて、右耳前部と頸部に、硝子破片で裂創を受けていることに気付きました。滲み出る血が中々止りません。手拭を圧迫包帯代りに巻きつけ、休養することにしました。

翌日は幾分元気が出来ましたので、山越えで学校に行きましたが、運動場の諸所に棒状のものが立っているのが見受けられました。近づいてみると、それは焼死体の強直した手や足が、空間に直立していたものでした。また敵機が散布した降伏文書も、方々で見られました。

基礎教室のあった所では、白骨死体が一定間隔をおいて、列をなして残っていましたが、これは授業中の学生の遺体と思われ、全く悲痛な気持ちがしました。外来本館は焼けただれ、内部は瓦礫となっていました。その他の状況は、既に沢山な記録が発表され、全くそれと同様でした。

私の傷は圧迫を緩めると出血しますので、方々の治療所を探しましたが、適當な岡で下車し、市内の路上で開設していたテント張りの海軍救護所で、動脈結紮手術を受け、五日目に無事に帰りつることが出来ました。

郷里では、学部二年生の池西清君と、学部一年生の近石哲夫君の二人が死亡しましたが、平素交流がなかったので、当時連絡やその他のお世話が出来なかつたことを、残念に思っています。

現在、私は小診療所を経営していますが、当時の偶然的な移動で死をまぬかれたことが運命的に考えられ、医療も宗医一体的なものでなければとの信念であります。

(四九、一、二)

## 被爆体験略記

長崎市若屋町五一三一二  
当時長崎医大学部三年生

安　　日　　晋

当日は外来本館の内科予診室で被爆、一時調理所裏の横穴壕に逃れ、次いで穴弘法の丘に避難、その後夕刻山伝いに鳴瀬の下宿に帰る。

眼及び四肢にガラス創があつたので、伊良林小学校（救護所）で治療を受け、数日後に道ノ尾まで歩いて汽車に乗り、長崎を去る。  
(四八、一二、二五)

## 被爆体験略記

沖縄県嘉手納村二八六  
当時長崎医大学部三年生

山　　本　　達　　人

内科外来患者の予診を終り、用があつたので下宿に帰ろうと、三階から二階へ降り

る階段の踊り場で被爆しました。

踊り場だったので、右半身に数十カ所のガラス破片創を受け、全治するまでに約三ヶ月かかりました。尚直後には、血便、皮下溢血斑、脱毛、白血球減少などがひどくて、一時は駄目かと思いました。

(四九、一、七)

## 原爆の思い出

長崎市桜馬場四七  
当時長崎医大学部三年生

吉田光治

忘れられない人々

昭和二十年八月九日、原爆一発で我が師、我が友、合せて八百八十一名の尊い生命を失ってしまった。その中で故角尾学長先生と、故荒木宗雄君（当時学部二年生）とは、私にとって忘れられない方々であった。

角尾先生は、私が医者になることを決めて下さった先生であった。昭和十八年度の長崎医大の入学試験では、私達薬専卒の者には、筆記試験と口頭試問があった。そして角尾先生は、その時の口頭試問の試験官であった。

私が試問室に入ると色々のことを聞かれたが、やがて一冊の原書を出して、「これをここからここまで読んで訳してごらん」と云われた。それは約半頁の文章であったが、あがつてしまつて、「すぐに訳せないが、紀行文のようです。」と答えたたら、「君は数学はよいが、物理はダメだね。よし。」と云われたので、その日は不安と焦躁に駆られた一日であったが、発表の日に学校へ行って掲示板を見たら、合格だったのホッとした。若しく不合格だったら、大阪へ帰つて又サラリーマンの生活を続けるしかばならなかつたのである。

私の被爆の場所が角尾内科の予診室であつたことも、不思議な因縁のように思われた。それは角尾先生の診察室（北側で爆心地に面していた）のすぐ向いの部屋であつ

たが、爆心の反対側だったせいか、予診室にいた者は全員助かっている。

それから荒木宗雄君は、私を死から生へ方向転換させてくれた学友であった。入学当時下宿の食事が悪く、大学裏に適当な借家があると聞き、急いで交渉に行つたが、もう他人の予約済ということで断わられ、がつかりしていた丁度その時に、荒木君から矢の平町にある借家を紹介して頂いた。若し大学裏の借家を借りていたら、私も家族も、全員が原爆の犠牲になつていただろう。

また日々生活必需品を持つて来て頂いた御厚情は、私の終生忘れる事の出来ないところである。しかも原爆の当日も、一緒に電車に乗つて登校したが、学校に着いてから眼科教室附近でしばらく雑談をし、午前九時に空襲警報が解除になつて警戒警報に入つたので、荒木君は実習のため病理学教室へ、私は角尾先生の講義を聴くために中講堂へ急いだ。これが永遠の別れにならうとは、神ならぬ身の知る由もなかつたのである。

## 原爆の体験

忘れもない昭和二十年八月九日の朝は、まことによい天気であった。午前七時に空襲警報が発令されたが、九時には解除になり、引き続き警戒警報に入ったので、講義や外来実習が再開された。

私は中講堂で角尾先生の臨床講義を聴いたが、十時二十分で終了、その後私達（安日晋、山本達人、矢村卓三の諸兄と私）は、外来実習のため、角尾内科の予診室に入つた。

私の患者は六十才位の老婦人で、しきりに胃腸症状を訴えていた。十時四十分頃、内科の参考書を取りに北講堂前の個人ボックスに行つたが、その時北講堂を覗いて見たら、外来実習が休みになつたのか、学友二人が読書をしていた。不思議なことに廊下はとても静かであった。嵐の前の静けさとは違い、無気味な静けさであった。そのように考えながら、私は十時五十五分頃再び予診室に入った。

患者と暫らく話していると、突然ピカッと光り、間もなくドン（物凄い稲光と落雷

の音に似ていた)が聞えた。同時に今まで明るかつた室内が一瞬の内に真暗になつた。私は本能的に机の下にもぐり込み、もう駄目だと観念していた。

暫らくして我に返り、まだ生きているな、と覺つた。「このまま此処にいたら、又波状攻撃を受けるだらう。早く脱出せねば」と立ち上つた時、闇の中で患者の声

がして、「先生、どこから出るのですか」という。「私の白衣にしつかり捉まりなさい。一緒に出ましよう」と云いながら、ドアを開けて廊下に出た。

あたりはまだ真暗で、どこから来たのか、廊下には煙が充満していた。手さぐりで階段の所まで来た時、大勢の人々が押し寄せて來た。皆早く脱出ししようと闇の中で揉み合つているうちに、白衣を掴んでいた患者が手を離したのか、最早やついて来ていないことがわかつた。

私は身軽になつたので、手さぐりで階段を下りて行く積りであつたが、どうしたとか逆に上へあがつて、屋上へ出でしまつた。この時ははじめて夜明けのように周囲がだんだん明るくなり、多量の鼻出血で白衣が真赤に染つてゐるのを知つた。それから急いで階段を下り、玄関から外へ出て丘の上へ登つて行つた。そこで古屋野先生が鉢巻をされ、燃え続けてゐる病院をじつと見ておられた姿は、実に感無量であつた。

救護隊が来るというので待つてゐたが、午後二時になつても、三時になつても来なかつた。仕方なく山を越えて西山方面から下り、矢の平町の自宅に帰つた。帰宅した時は鼻出血も止まり、ガラス破片で出来た裂傷が、首に二カ所あるだけであつた。

その後は何の症状もなかつたので、近所の被爆者を治療して廻つた。一週間後に脱力感が出て來たが、患者からもらった饅頭を水炊きにして食べたためか、脱力感は消えてしまつた。しかし精神的の打撃は大きく、今でも落雷の音を聞く度に、いやな気持になる。

やはり原爆は恐ろしいものである。原爆の犠牲者となられた亡き師、亡き学友の御冥福を祈りつつ擱筆する。

## 学内で被爆した当時の模様

神戸市兵庫区下沢通三丁目二

当时長崎医大学部三年生

飯塚 博志

昭和二十年八月一日、長崎に米軍機数機による小爆撃があり、婦人科手術室が破壊されたので、九日十時からの婦人科ボリクリは中止となり、手術室の跡片付をして約一時間で作業は終つた。食事でもしようとは級友の岩崎良司君を誘つたが、まだ十一時前だったので、何処かで休んで行こうと、外来本館一階のほぼ中央にあつた空部屋に入り、ベッドに横たわつて本棚から取り出した本を読んでいた。

丁度その時、不意にスルスルという音がした途端、突然窓の方に「ピカッ」と鋭い閃光がひらめき、同時に眼前が真暗になつて、「ドカン」という大音響と共に、熱い爆風を肌に感じた。前日(八月八日の大詔奉戴日)、角屋学長から広島の新型爆弾の話を聞いていたので、てっきりそれにやられたと直感した。

約二十秒ぐらいで眼前が次第に明るくなりだし、薄暗い部屋の中は一面木つ葉みじん。手探りで出口を見つけ、やつと本館の前に出ると周囲は火の海、空は漆々とした煙で覆われていた。

仕方なく裏の金比羅山へ避難しようと、皆の後について丘の上へあがつて行つた。樹木は中程から折れ、芋蔓はちぎれ飛んで、茶色の地面が露出していた。

不安におびえながら、金比羅山を越えて螢茶屋の方へ逃げて行つた。右背中、右耳後、右手、右足に傷を負いながら――。

(四八、一二、一八記)



# 原爆で失った友のこと

長崎大学医学部原研治療部門教授  
当時長崎医大一年生

## 市丸道人

ビワが出廻るシーズンは長くない。今年も茂木ビワが果物屋の店先を賑わし、やがて梅雨に入る。昭和二十年は割合に茂木や矢上のビワがよく穫った年であった。

私達、その四月に長崎医大に入学した一年生にとって、初めてふんだんにビワを口にすることが出来た年であった。戦時下の長崎は食糧事情が悪く、ろくに食物がなかった。私達は講義に出るのを適当に切上げて、茂木や矢上の方に出かけた。人手不足で木になつたままのビワの実を、食べ放題に食べ、驚くほどの安価であった。明るい漸く強くなり始めた陽射しの下でビワを口にし、厳しくなり始めた戦況について語り合つた同級の誰や彼の顔が、このビワのシーズンになると、目前に浮んでくる。彼等の多くは、それから僅か二ヵ月過ぎた八月九日、原子爆弾の瓦礫の中に死んでいった。

それは余りにも多くの貴重な生命の喪失であった。いま、医学部の正門からはいると、右側に白亜の記念講堂が建つてゐる。周囲の緑に映えるガラス張りの広間の壁には、学内の原爆犠牲者の名前を刻んだ銅板があり、その中段位の所に、当時の学部一年生の名が並んでいる。青山、浅井、浅山……から始まるその順序は、当時の出席簿のままである。初めからその名前を逐つてゆくと、当時十番目に呼ばれた私の名が抜けてゐるのである。それ程多くのクラスメートが死んでいた。そしてその日からいつの間にか、二十八年の年月が流れていつたのである。

昭和二十年四月に入学した一年生は、約一二〇名であり、そのうち凡そ八〇名が原子爆弾のために死亡したと思う。

戦争が日に日に我国に不利になってゆくのは、掩うべくもなく、私共は運動場の木立の陰などで、よくそのことを話し合つた。教練の時間に對戦車攻撃の訓練を受けた

り、池田教授（解剖学教授、当時一年生の主任）に引率されて、茂木街道の見える丘の上に壕を掘りに行つたり、また防火の目的で、病院の木造中央廊下を壊したりしたもの、その頃であった。後から思えば、余りにも強力な原子爆弾の前には、すべてが無駄であったのに――。

その日の朝、電車の故障のために私が登學するのをやめ、直爆を免れたいきさつに就ては、「忘れな草」四号に牟田広公君が書いている。人間の生命には何か運命的なものが関係する場合があることを、これほど身近かに体験したことはない。

私の下宿には牟田君の他に、同学年としては福岡高校から來た石橋忠君と、私と同じ佐賀高校から來た中村清一君がいた。

石橋君は堂々たる体躯の持主であり、柔道二段とかで、いつも顎のあたりにボヤボヤと髭を生やし、旧制高校生臭がなお身邊に漂つてゐた。運の悪いことに八月八日の夜は、防空當番で大学に泊つていていた。従つて下宿に帰ることもなく、九日の授業に出ていた。清原教授の生理学の講義中に原爆に遭つたのである。

木造の生理学教室が一瞬のうちに潰れ、そのまま死んだと推定される学友も少くなかった。石橋君は倒壊した講堂の下から抜け出し、その日の夕刻に自力で私共の所に帰つて來た。上半身ホコリにまみれ、裸で自転車に乗り、燃えさかる原子野に横たわる障害を突破して、浦上から片瀬まで帰つて來たのである、

「自転車を途中で失敬した。」彼は私に向つてそう云つた。

頑健そのものに見えた彼の身体も、放射能に弱い細胞から出来てゐることに変りはなかつた。彼は次第に弱つていつた。その夜、更に敵機再襲の報に接した私達は、近くの長崎高商のグラウンドに避難した。石橋君はだるそうで、常にその大きな体を横にしていなければならなかつた。真暗な運動場で聞いた敵機の爆音は、すごく無気味であった。

翌日、彼は勇氣をふるい、千綿の自宅に帰ると云つた。私は私の洋服の一つを彼に着せ、大きな不安とともに送り出した。私の洋服を着た彼の後姿は、大きいながら、ひどく頼りない感じであった。その後姿が彼を見た最後である。

石橋君と同じように講堂から脱出した学友はかなりあつたようで、原爆の翌日だつたが、私共が大学に行つてみると、まだ生きていた多くの学友に出会つた。鹿児島の七高から来ていた石井一徳君、同じ下宿の中村清一君、彼等は大学病院の玄関あたりに坐つていた。また穴弘法に登つてみると、中学の後輩である大塚喬二君などが横になつていて、何人かを背負つて下におろし、リヤカーに乗せて片瀬町まで連れて帰つた。

また黒いモンペ姿で、御主人をさがしていた美しい若い婦人の姿が、悲しくも印象的であった。

人間の運命は僅かな所で変るものである。もう一人の同宿の中村清一君は、やはり大体私達と同じ条件で登学が遅れた。しかし彼は、遅刻しながら大学に辿りついたのである。結局彼は生理の講義には間に合わず、病理学教室で遭難したらしい。私が十日に大学へ行つた時、彼は病院の玄関付近に坐つていた。

「少し落着いたら、色々お話しする」。そのような意味のことを私に云つた。比較的元気であった彼も、下宿に連れて帰つた後、空しくなつた。

医学部一年生であつた私は、大学で生き残つていた人達と、下宿先や或いは家族への連絡にあたり、又は同宿の人々を助け出して、連れて帰る仕事に専念した。

当時の浦上の凄惨な有様は、既に多くの人が書いている通りである。黒焦げ、真白の四肢骨が見えている死体、ふくれあがつた馬の死体、コンクリートの防火用水桶の中で死亡している人、原子野にひびく女の人の泣き声、等々。まさに地獄絵とも云えようか。

川口賢一君は特になつかしい。私が佐世保の中学に入学した時、同じ組に彼はいた。校庭の桜の花が散るころ親しくなつた。その交友は相ノ浦の海水浴場で更に進んだ。だが何時頃だったか、彼は転校して私の前から姿を消した。その後、旧制広島高校の帽子をかぶつた彼の姿を見かけたことがあつたが、長崎の医大でまた彼と再会したのである。

戦争のために、医大では医書もロクに手にはいらなかつた。川口君は、布製ではあ

つたが生理学の分厚い医書を、余分に手に入れて私に手渡した。そのことはとても嬉しかつたし、今から思つても大変懐かしいことである。

原爆後、同じ下宿や付近の人々のために走り廻つてゐる時、誰からか、「川口君は逃げ出したが、体温が三十五度に下つてゐる。」ということを聞いた。心に残りながら、遂に会うことが出来なかつた。

下宿に連れ帰つた数人の学友は、一人残らず高熱と下痢に悩まされた。赤色の便を出し、うわごとを云いながら次々に死んでいった。急性放射線障害の中で、消化管粘膜が損なわれるのは高度の障害であることは、後になつて知つたことである。牟田君と一緒に、亡くなつた友人の何人かを、材木を集めて焼いた悲しい思い出がある。場所は、現県立東高の校門の前あたりにあつた広場であつた。

(四八、五、二〇記)

## 一日後に見た大学の廃墟

鹿児島県鹿屋市西大手町一四一二  
当時長崎医大学部一年生

吉 永 一 敏

原爆の年、学部一年生だった私共は、百十名の同級生がいましたが、昭和二十四年三月に卒業した時は、二十八名でした。この中には、終戦後に他の大学から転校した人が十名ほどいますので、原爆生残りは二十名足らずとなります。

八月九日 学校に出て授業を受けていた人は、勿論全員助かつていません。生き残つて卒業した私共は、学校をさぼつていた訳で、自ら「サボリ組」と自称していますが、みんなが不真面目な学生だった訳ではありません。例年なら夏休みである時期であり、当時は敵の本土上陸の噂がもっぱらで、私共学生は、郷里に日本刀を取りに帰るという名目で、大学に届出をだし、交代に暫らくの休みを貰つっていました。

私自身について云いますと、四、五日前から悪性の下痢に悩まされ、当時の下宿の

大豆粕の飯では、いつまでも癒りそうにないので、佐賀県伊万里の農家に嫁入つてゐる姉のところに、食養生の意味で行つていきました。それも原爆投下の八月九日朝午前

七時、空襲警報下の長崎を発つたのでした。下宿を出る時すでに警報が出ていたのか、或いは駅に向う途中で出たのか、今では憶えておりませんが、兎に角ためらいながらも敢えて出発したことが、生死の別れ道になつた訳です。

私ども生き残つた同級生達も、すべて、劇的な経験を経てきたものと思います。死と隣り合せていたことを思い出す時、三十年近くたつた現在でも、背筋の寒くなる思いで、あまり追想したくない気持もあり、また記憶も既に薄れかかっていますが、覚えていることだけを、簡単に書くことにします。

伊万里の姉の家で、長崎に新型爆弾が落ちた旨の、簡単な記事の載つた、当時のベージ数の極端に少い新聞を見た私は、不安にかられ、直ちに長崎へ引き返しました。たしか八月十一日と記憶しています。

汽車は道ノ尾止りで、そこから大学まで、焼野が原をトボトボと歩きました。通る人も、ごく僅かであつたように思います。大学の正門から本館に通ずる坂道には、焼けてふくれた馬の屍しかばねが横たわって、道をふさいでいました。

先に基礎教室のあつた所に行ってみると、校庭には、同じように焼けてふくれ上つた学生の死体もありました。顔見知りでなかつたので、恐らく専門部の学生たちではなかつたかと思います。

同級生が講義を受けていた生理学の教室では、学生が席についたまま、その場で、列をなして白骨になつていきました。恐らく原爆投下と共に、一瞬にして木造の教室は燃え上り、脱出することが出来ず、その場で焼け死んだものと思われます。若しそこから逃げ出したものがあるとすれば、それは奇跡的だと見られました。

しかし病院に行つてみると、多くの罹災者に交つて、数名の顔見知りの同級生がまだ生き残っていました。「君はよかつたね」と力のない声で話しかけられ、返事のしようもなく、申し訳ないような気もしました。しかし当時は、どうせ自分もいつまで生き残れるか、という気持もあり、たとえようもない複雑な心境でした。

学生や職員の罹災者たちは、「水をくれ」とか、「リングルを打つてくれ」とか、悲痛な叫び声をあげており、「救助隊や病院の人達は何をしているのだろうか」と、もどかしく思いましたが、罹災者があまりに多く、生き残っている者は少い数ですし、薬もなく、当時は何をしてやれないのが、実情だったと思います。

私は、七高からの友人で同級生だった石井一徳君、高橋浩二君を探しましたが、見当りませんでした。それまで生きていた数人の同級生も、結局は死んで行つたのでした。

私の下宿は中町にあつたので、幸に焼け残つていました。然し土壁は落ちて、押入れの中や部屋中が、剝げ落ちた漆喰の土だらけでした。八月十五日の終戦の日まで、そのまま下宿から大学に通いましたが、この間大学の焼跡で何をしたか、はつきり覚えていません、あちこちで茶毬の煙が立ち昇る焼跡を、ただうろついていたようです。

大学へ行く途中、度々空襲警報に会つて、防空壕に避難したこと、炊き出しの握り飯を食べることなどを、記憶しています。

終戦の詔勅の時は、頭に鉢巻きのようなく帶をされた古屋野先生が、病院の焼跡で、十数名の学生や医局員を集められ、今後の覚悟等について訓話をされました。その時居合せた先生方はどなたであったか、まだ一年生だった私には分りません。同級生は他に誰もいなかつたと思います。

その時古屋野先生のお話で、学生は引き続き登校するようにとのことでしたが、私の郷里の鹿児島県鹿屋市は、特攻隊の基地で、米軍が真先に進駐して来る所ですの

で、家族のことが気になり、長崎を離れて郷里に帰つた次第でした。  
思えば、原爆から三十年近くの歳月が流れ、既に自分の子供達が、その当時の私の年頃になつてゐるのに気付き、亡くなられた友の親のお気持が、漸く分るような年になつてゐるのを思い、まことに感無量のものがあり、改めて、亡くなられた友の御冥福を祈るものであります。

### 三、付属専門部生徒の手記

#### 一十世紀梨

長崎市恵美須町七一二三  
当時付属医専三年生

岩永祐一

その日は、夏雲のぼっかりと浮んだ暖かい日だった。朝から発令された空襲警報で、病院裏の藪に覆われた溝の中に避難したが、暫らくして解除された。

今日の空襲は何事もなくよかつた、と胸をなでおろしながら、学生食堂の前田嬢や川口嬢と一緒に病院へ帰つて来だが、これがあの忌わしい運命の前触れとは、お互に知るよしもなかつた。

私は高北病棟に帰り、ベッドに横になつて新聞を開き、広島に落された新型爆弾の記事を読み始めた。その時、何とも知れず全身を圧迫するような鬼気を感じると同時に、窓の外が橙色に光つた。その瞬間私はベッドの下にもぐり込んだが、周囲は真暗で何も見えない。これはてっきり光のために目を悪くしたな、と思っていたところ、

暫らくしてベルが剝げるよう、ぼんやりとあたりが明るくなつた。よかつた！  
私は何ともなかつたんだ！ 静かに体を動かしてみる。手も動く、足も動く。どこにも異常はないようだ。そろそろとベッドの下から這い出して、驚いたことには、ベッドの上に天井のコンクリート板が一面に覆いかぶさり、鉄製のベッドが背中すれすれの所まで曲つていた。

何はともあれ、続いての攻撃があることを予想し、窓から外へ飛び出そうとしたが、またまた自分の目を疑つたのは、先程まで建つていた二階建の看護婦寄宿舎が、跡形もなく消えてなくなつてゐることだつた。

寄宿舎の裏から崖を登つたところで初めて逢つたのが、調先生だった。先生は私の顔を見るなり、「そこに石崎君が倒れているから、水をやってくれ」と云い残して、

基礎教室の方へ行かれた。私は水を探したが見つからず、仕方なくそこらに転がっていた大きな胡瓜を持つて、調先生が指示された所に行つてみると、躰つきは石崎先生にそつくりだが、お顔は皮膚が剝げてしまつてるので判然とせず、側によつて、「石崎先生ですか。」と声をかけると、かすかに頷かれたので、「水を探したがありませんから、胡瓜を持って来ました。」と云つて差し出すと、さも美味しいように食べられたのを見て、「先生！ 暫らくそこにいて下さい。すぐに来ますから」と云い残してその場を去つた。

それから少し中央講堂の方へ行つたところで、角尾学長が婦長さんの膝を枕にして横になつておられたが、頻りに水を欲しがつておられる由を聞き、何とかして探さねば、と思い、穴弘法まで登つて穴の中に入つたところ、誰かが供物をしたと思われる重箱が一つあり、奥の方でちよろちよると水の音がするので、重箱に水を充たし、こぼさぬように用心しながら、引返して先生に差上げた。

美味しそうに飲まれる様子に満足して、また穴弘法へ引返すと、途中で傷だらけで丘を登つて行く学友や看護婦達と一緒になつたが、手当を施そうにも材料は何一つない。ただ「頑張れ！」と声をかけるしか出来なかつたのは、何とも情ないことであつた。

やつとの思いで穴弘法に辿りつくと、そこで調外科の日高先生に逢つたが、二人とも元気なので、何か薬品材料を探して負傷者の手当をしてやろうではないか、と互に励まし合い、丘を下つて病院へ向つた。ところが、私も日高先生も素足だったので、足の裏が熱くてどうにもならない。その時ふと私の靴が二足高北病棟にあつたことを思い出し、一足を日高先生に差上げて薬品搜索に出かけたが、どの病棟も火に包まれて近寄ることすら出来ない。既に太陽は西に傾いてあたりが薄暗くなりかけた。仕方なく一応引揚げることにし、日の暮れぬうちにと山路をたどり、諏訪神社の裏から炮町の横に出ることにした。

万感を胸に抱きながら山を下つて行くと、途中に近所の婦人会の人達が総出で、路上に机を置き、沢山な二十世紀梨の皮をむいて、接待しておられた。その梨を一口戴

いた時のあの味は、今も尚私の脳裏に焼きついていて、恐らく生涯消え去ることはないであろう。それはただ単に渴いた咽にしみこむ梨の甘さだけでなく、町内の婦人会の方々の接待に対する感謝の気持が、あの梨を何ものにも優る妙薬に変じさせたのだと思った。感激の余り三個までは食べたのを覚えているが、そのあとは幾つ戴ったか、はつきりとは憶えていない。あの時のあの二十世紀梨で、生きていた喜びをかみしめた方が、市内には相当多数居られることと思う。

鳴瀧の自宅に帰った私は、二日後に喜々津に疎開し、駅前の中村医院に手伝に行つたが、ここにも毎日数十名の被爆患者がおしかけ、薬局では薬品の在庫が底をついて来た。約二週間後、これではどうにもならぬと、中村先生の意を含んで、大学病院に薬品の応援を頼みに行つたが、大学でも薬品不足で困っているとのことだつたので、止むなく又トボトボ歩いて、喜々津へ引返した。

そうしてゐるうちに、学生は大村海軍病院で授業を行ふから集まれ、との指令を受け、十月初めに大村に行つたが、ここに留つたのは八ヵ月間で、その後は諫早、新興善、廃校と、私達の運命は奔流に押し流された。今日曲りなりにも開業医としての今日を迎えることが出来たが、その間の長かった断腸の日々は、到底筆舌に尽すことは出来ない。又原爆投下の日の浦上の丘の惨状については、今日まで色々の手記が出されているが、あの地獄図は文章になれば虚飾となり、如何なる名文を以しても、眞実の表現は不可能と思うので、詳細は他に譲ることとする。

ただ私は、あのような非常の場合に、人間の善意と醜さが赤裸々に現われることを知られ、又平和に馴れた今日は、被爆者をイデオロギーの具にするもの、被爆者であることを売りものにして世に出んとするもの等、人間をめぐつての人間像に吐き気を覚えるが故に、今まで自分が被爆者であることを忘れようと努め、それ故に又体験記を書くこともしないで過して來た。

この度筆を執つたのは、自分の信念を枉げたのではなく、自分が生きていること、そして生きて何かをなすべき希望を与えてくれた二十世紀梨と、炉泊町婦人会の方々に、誌上で感謝の気持を表わし、このような隠れた善意のあつたことを、知つて戴き

たかつただけに外ならない。

重ねて炉泊町婦人会の方々に、感謝の意を表して筆を擱くこととする。

(四八、三、二〇)

## 原子野で会つた思い出の人々

鹿児島県薩摩郡宮之城町虎居一二一一五  
当時付属医専三年生

鶴 狩 淳 一

確かあの日は、空襲警報が解除になつて、ホッとした氣持で耳鼻科のポリクリニに駆けつけ、三十才位のマスクを掛けた和服姿の患者の予診をとり終えて、丁度額帶鏡をかけて耳鏡検査を開始した時だつた。

今まで経験したことのない物凄い閃光、同時に強烈な爆風。予診室は一瞬のうちに何とも表現できない地獄図とかわり、5ディオプトリーの私の眼鏡はふつ飛び、濛々と立ち上る塵埃で方角が全く分らなくなつた。数メートル先の看護婦の白衣の背中を目に、無我夢中で一階まで駆け降りると、小走りに突きぬける見覚えのある人が額をおさえながら、「私はどこを怪我していますか?」と性急な声、見るとそれは皮膚科の北村教授のお声だつた。それにつられて我が身をぶりかえると、白衣は左上肢から背中、左下肢にかけて、真赤な血で染まつてゐる。しかし不思議に痛みは感じない。恐らくこれは、耳鏡検査の際ガラス窓が左側にあつたから、その破片で受けた切創に違ひない。

それは兎に角、懸念はして居られない。居合わせた数人の人達にうながされ、裏山に登ることになつた。途中足が痛むので、みると裸足でいることに気がついた。また頭が何だか変なので触つてみると、ガラスの破片が立つていて、これで又手掌に傷を負つた。大きな破片を右手で引き抜きながら、一散に丘の上へ逃げ上つた。

あとから続々と白衣が続いて登つて来る。暫らくして「長崎医大報告隊」の腕章を

つけた学生が、私の白衣を鉄で切り裂いて、マーキロクロームを塗ってくれた。

丘の上から見おろすと、眼鏡なしの私にも、大学病院の煙突が曲っていることが分った。街の家がなくなっている。所々で「新型爆弾だ」とささやく声が聞える。

一体これから先どうなるだろうか、虚脱状態とはこのことか、など考えながら丘のあたりを彷徨い歩いたが、夜までの行動はよく覚えていない。ただその夜は大学関係の人何人かと一緒に、防空壕で寝たことだけをおぼろげに覚えている。

翌朝、防空壕の入口で一人が死んでいた。私は丘を降りて大学の救急班の屯所に行き、木戸助教授からガラス片を次々に引抜いていた。

その後また山に登り、とある民家の庭先でウトウトしていたら、疲労のためか何時の間にか睡気を覚え、ふと担架に揺られているような気がして目が覚めたら、蟹屋方面の小学校（伊良林小学校）の講堂に、多数の負傷者と一緒に収容されていた。

その時近視の眼鏡を見知らぬ人から戴いた。また大学病院に結核で入院していて、前夜は所用で外泊したために難を免れたという三十七、八才の婦人が、物資難の折にウドンをゆがいて持つて来られ、それを救護所で戴いたことを覚えている。

それから何日だったか、少し気分も落着いたので、再び山伝いに大学病院に行つて焼跡を見て歩いた。丁度その時解剖の佐藤講師（現医学部長）が、防空籠を下げゲートル姿で焼跡に来られ、「空襲で汽車が大変だった。私は幸に被爆を免れたが、池田教授はどうだったでしょうか」と云われると、側にいた人が、「グランドは全滅と聞きました。」私はこの問答を虚脱状態で聞いていた。

いつの間にか、大学病院の門前には屍体が山のように積まれ、兵隊達がそれを処理している作業を、私は気の抜けたような恰好でぼんやり眺めていた。

母親の屍体を席で包み、背中におんぶしながらトボトボと歩いている子供、いつの間にかその子供も地面にパツタリ倒れて、誰もそれを構う人もいない。屍体があちこちにあつて、それを眺めても何の感情も起らない。平和な時代には、全く想像も出来ないことであった。

婦人会の人たちから救急食を貰いて、その日は一応、山里町中央部の下宿焼跡に行

つてみることにした。通学の時の守医院を目指して、国友名譽教授のお宅の前の石段を登る時、足の痛みのひどかったことは、今もはつきり覚えている。勿論我々の居た下宿地帯も全滅、警報の度に避難していた防空壕も、何か一杯つまつて、中に疎開していた基礎医学の本など、見る影もない。兎に角全部が丸焼けで、残っているものは、私のこの負傷した体、クロームの腕時計、破れたシャツとズボン、それに婦人会の人が、「白い包帯が空襲の目標になつてはいけない」と云つて、頭に載せて下さった座布団、焼跡で拾つた古いズック靴、これが私の全財産であった。

大学では、事務の人と一緒に小児科病棟に近い門から入り、眼科病棟の中庭にあつた馬の死体の側で休息していると、同級の大浦治君がヒヨッコリやつて来て、被爆以来の状況や、友人の消息など知らせてくれた。

大浦君の父上は当時大学病院の看護学校長であったが、被爆後下痢がひどく、どこかの地下室で受療中のことだったので、探してそこを訪ねたが、ここも負傷者が一杯であった。下痢の原因は被爆後口渴がひどいので、汚水を飲んだ為だと云われていたが、あとで原爆症によることが判明した。

又精神科の高瀬教授から赤痢だと云われ、治療を受けていた医専二年の某君も、やはり実際は原爆症で、あとで死亡したことである。この学生は死後に、松下助教授の大学時代の帽子を被せられて写真を撮られており、それを母堂から見せて貰つたが、余りに無残で見るに忍びなかつた。

大浦君は初めのうちは大変元氣で、学部の学生二人と婦人科病棟へ行つて、内藤教授の屍体を運んだり、弱っていた私にブドウ糖のアンプレを切つて飲ませてくれたり、角尾学長や、菊野助教授、国房教授、池田教授がたに關する情報を逐一知らせてくれたり、大変な活躍ぶりであったが、余り動き廻つたためか、あとで原爆症が出て死亡したとのことである。

その頃同じ鹿児島県人である小児科の森助教授が、額部を負傷しながら、「一応郷里に帰りませんか?」と私に聞かれたが、先の事を考えると頭が混乱するばかりなので、帰郷する前に傷の手当を充分したいことや、小長井の知人を訪ねたい旨を告げて

お別れした。

私は大学病院を出ると、罹災者の群に混つて、炎天下の瓦礫の道を、道ノ尾駅に向つて歩いた。途中で見た物凄い悲惨な光景は、一度見られた方なら充分想像出来ると思う。

道ノ尾駅で罹災切符を手に入れ、小長井駅まで汽車に乗つて、知人の宮崎末次さん宅を訪れた。この方は私が大変お世話になつた方で、若しチャンスがあつてこの文集がお目に触れることがあつたら、是非名乗つて出て貰いたいと思う。宮崎さんのお宅にいた頃、陛下の終戦のラジオ放送を聞いたが、郷里までの道中のことや、アメリカ軍の占領のことを思うと、前途甚だ暗澹たるものであつた。

帰りは鳥栖で一泊し、宇土と川尻の間を歩き、八代駅前に野宿して、幾日がかりかで、やつとの思いで郷里に辿りついた。この時の苦労は、とても筆舌では尽し難い。

機会があつて一度皆で座談会でも催したら、思い出を新たにして、もっと色々なことが判明するのではないかと思うが、この度はこの辺でペンを擱きたいと思う。

× × ×

先日調教授からお葉書を頂いた時は、懐しさが一杯で、胸がつまる思いが致しました。あの特徴のあるバンド付きの白衣で歩かれる姿。或いは北講堂、或いは中講堂で、我々は「外科臨床の為に」をノートの横に置き、一生懸命に教授の臨床講義を聴いたものでした。また内野教授（生化学）の御遺骨を抱いて駅から出て来られ、我々が並んで出迎えたこともありました。

その他学校時代の思い出は限りがなく、厳格だった高木教授（解剖）、ノートのとりにくい内藤教授（細菌）、格調の高い角尾学長のお講義、落着いた瞬んで碎くような明快な古屋野教授の講義、日本語で縦書きの楠井講師（現和歌山医大名誉教授）、温厚な影浦教授、スマートな長谷川教授、北村（包彦）教授、等々。

多感な青年時代に学んだ長崎!! 原爆!! これは一生忘されることの出来ないことです。今夜は一晩中長崎時代のことを夢に見そうな気がして、精神安定剤でも服用しないと、眠れそうもありません。

(四九、一、五)

## 長崎市空襲体験記

福岡県行橋市行事町  
当時医専三年生

蛭 崎 武 德

昭和二十年四月二十六日（木）

この日、今年初めて長崎市に鉄製爆弾が投下された。

午前十時頃、私が小児科ボリクリで外来診察室に居た時、警報なしに突然ドカンという大きな音が二回聞え、天井を大いに震わした。初めは何だか判らなかつたが、先生や同僚、患者たちが、「爆弾が落ちた」と云ふと同時に、B29一機が七千メートルぐらいの高度で、稻佐山の方へ飛んで行くのが見えた。

それから十分ぐらいいして、警戒警報が鳴り、続いて空襲警報が発せられた。

我々は後続を恐れて、直ちに白衣を制服に着替え、ゲートルを巻いて、自分の持場である看護婦寄宿舎に行き、何処に落ちたかななどといろいろ話していると、「第二医療隊は救護のため大波止に出動せよ」との命令を受けた。聞けば長崎駅と大波止棧橋に落されたとのことである。直ちに病院玄関前に集合すると、すでに負傷者が担架に乘せられて病院にやって来ている。

私達はトラックに乗つて長崎駅に急行した。市民は恐怖に充ちた顔で、右往左往しながら逃げまどつてゐる。それだけでもかなりの被害が予想された。トラックの上から駅を見ると、汽車はひっくり返り、プラットホームの大井が目茶苦茶に裂けている。どれだけの死傷者が出了か想像もつかない。

駅前広場は、まだ不発弾があるので、繩を張つて通行禁止になつてゐたが、その中を突切つて、先ず鉄道診療所を行つてみた。負傷者は大波止の被済会病院に収容されているという。我々は更にトラックを大波止へ走らせた。病院に着いてみると、殆んどの負傷者は北村教授指揮の下に、既に応急処置がすんで、トラックで大学病院に運ばれている。被済会病院内には、血に染つた死体が八ツほど転がつてゐた。

私達も負傷者をトラックに乗せて大学病院に急いだが、途中痛みのためか呻き通しあつた。大学でも既に死亡している人があり、外科病棟に運ぶ暇もなく、外来の空部屋で医者、学生、看護婦達が、総出で治療に当つていた。負傷者達の怒号、呻き声が院内に充ちて、凄惨この上もない。

負傷者の中に夫婦連れのものがいたが、二才くらいの子供を浜町の親戚の家まで連れて行つてくれと頼むので、同級の大浦治君と二人で、その家を捜して渡してやつた。それが丁度午後三時だつた。

病院に帰つて暫らくすると、「今日はもう帰つてもよろしい」という命令が出たが、多数の負傷者たちを見つては、直ぐ帰る訳にもいかぬので、外科病棟に行つて負傷者収容の手伝いをし、それが一段落すると、今度は手術室を行つて手術の見学をしたが、調教授は医師、学生、看護婦達を督励しながら、手術の真最中であった。いつ果てるとも知れない急救手術の連続、この人たちは果して生命を全うすることが出来るであろうかと、或いは憂え、或いは神に念じながら、夕闇せまる頃、重い足を引摺りながら病院を後にした。思えば今日はまるで夢のような一日であつた。

#### 七月二十九日（日）

四月以来影をひそめていた空襲が、七月に入つてから稍々本格化して來た。二十九

日は日曜なので、どうして過そかと一日の計画を心に描いていた七時半頃、今田さんが道ノ尾へ行く途中と云つて立寄つた。暫らく話して帰つたあと、八時半ごろ空襲警報が鳴つたので、すぐに服装を整えて病院に駆けつけた。受持の部署は角尾内科だったが、今のところ敵機の影も見えないので、廊下で同級の大浦治君が木戸先生と一緒に病室廻診に行くのに出会つたのを幸い、私も同行することにした。病室では、肋骨々折で気腫を起している患者の胸部を触診しながら、ガス壊疽の時もこれと同じ触感だと教えて頂いた。

十二時近くになつたので、服装を整えて帰る仕度をしていると、急に敵機の爆音が聞え、統いて爆弾の爆発音が地響きを立て、爆風が病院をゆるがした。見ると南方に当つて黒煙が濛々と空に立ち昇つている。幸い病院には何らの被害もない。恐怖感もなく、むしろ映画でも見ている氣持だつた。爆撃は三菱造船所付近だけで、そのまま敵機は退散した。

#### 七月三十一日（火）

今日も午前十時半頃から、B29の五機編隊が次々に長崎市の上空に現われ、友軍戦闘機との間にすさまじい空中戦が展開された。青空の中に銀翼、大小の飛行機が乱舞する光景は、戦時中でなければ又と見ることの出来ないスリルに充ちたものであった。高射砲も間断なく発射されたが、射程が短かい為か、青空の中に白い斑点を残すのみで、敵機にはなかなか的中しない。ついに撃墜えた飛行機は一機もなく、波状的に攻撃して来る敵機に対し、徒らに乱闘を繰り返すこと約一時間、敵機は浪ノ平方面に数弾を投じたのみで、大した被害も与えず南方に向つて退去した。

#### 八月一日（水）

私達は精神科の卒業試験だったので、白衣を着て実習していたところ、午前十一時半頃、けたたましい空襲警報が鳴り響いた。すわとばかり防空頭巾を手にして受持の角尾内科に駆けつける。既に敵機は三菱造船所方面に攻撃を加えている。地上の砲火も火を吹き出した。しかし一発もあたらない。敵機は悠々と獲物を見つけては急下降、或は水平爆撃を行なっている。

私達は内科の屋上で防空監視をやつていたが、高射砲が鳴り出すと、破片がこわいので屋内にかけこんだ。丁度その頃、B24六機が突然金比羅山方面から病院に向つて飛来して來たので、私達は直ちに待避信号を出して、四階屋上から地下室に向つて駆け降りた。

丁度影浦内科のある一階に届く寸前、一弾が耳鼻科二階の化学実験室に命中、破裂して爆風が内科側に來た。私は右後方から真赤な火柱がぶつつかつたかと思つた瞬間、吹き飛ばされて地下室に落ちた。室内は土煙が濛々と立ち、硝煙臭く、硝子は滅茶苦茶に割れて、破片で怪我したものが大勢いる。私も防空頭巾、帽子、メガネ、腕時計が吹き飛び、背中、手、足に硝子傷を受けた。

暫らくして地下室の階段上に誰か重傷の人があるというので、急いで上つてみる

と、医専二年の大野明君が下腹部を破片でやられて、瀕死の重傷を負っていた。その

近くに医専三年の永見幸夫君も、右大腿骨の開放骨折を受けて苦しんでいる。

負傷者を運んで地下室に来ると、同級生の片山和男君も破片を背中に受け、担架に乗せられてやつて来た。永井隆先生と一緒に治療する。その時また突然高射砲が聞え、ザー、スルスルという落下音、続いて爆音があり、その度毎に私達は身体を床にくつづけ動けずにいると、唯一一人永井先生が立つて、「今のは遠い」とか、「近い」とか云つておられる。幸に至近弾の投下はなく、飛行機は去つた。

その隙をみて片山君を担いで本館地下室に行つたが、大野君は既に死亡し、永見君が調・木戸両先生の治療を受けて、輸血が行われていた。その時また爆音あり、地下室の壁にびつたりと身体をつけて、岩永達雄君と話をしていると、古屋野先生から古屋野外科に連絡に行くように云われたので、一緒に行く。そこで村島秀雄君が負傷したことを聞いた。

かくして今日の空襲は終つた。午後一時頃である。内科から精神科へ向う途中で、医専二年の小出石行夫君、同じく一年の西大雲君に出会つた。二人は私が負傷したと聞いて、見舞いに来てくれたらしい。元気なのを見て安心していた。

昼食をたべ終つたころ、角尾内科医療班は市内に応援に行くかも知れないというので、本館に行くと間もなく出勤命令が出た。直ちにトラックに乗つて稻佐国民学校、次で警察署を行つたが、何も仕事がないので帰りは徒歩で竹ノ久保を通つて帰つた。途中到る處に不発弾があり、通行止めをくいながら進んだが、ある所では、横穴壕が崩れて下敷になつた被爆者を、大勢で発掘している所もあつた。帰学したのは三時半頃であつたろう。

その夜私は当直だったので、早目に来て村島君を見舞つた。割合に元気なので安心した。午後九時二十九分、永見君は遂に死亡。私達の同級生では、最初の犠牲者である。ただ呆然と見つめるばかり――。

その夜は、村島君の病室に泊つた。

## 原爆被爆体験記（その一）

福岡県行橋市行事乙一六八〇  
当時長崎医大附属医専三年生

蛭崎武徳

昭和二十年八月九日、原子爆弾が長崎に投下され、浦上を中心にして街も潰滅に帰したが、私は僕等にも九死に一生を得たので、その後八月十八日まで、調教授と一緒に滑石の臨時救護所で、被爆者の診療に従事した。

救護所の開鎖と共に一旦郷里に帰つたが、医大が大村海軍病院で再開されたので、十月に再び長崎に来て、忘れない中にと思い、昭和二十一年二月に書いたのがこの体験記である。

× × ×

前日の雨雲も晴れて、雲一つないカラリとした日本晴の上天氣。

八月一日の空襲以来、敵機が飛来すると一人の通行人もいない。山里町の三浦の下宿に帰るたびに、「おばさん、今日も死にそなつた。」などと冗談を云つていたのも、つい昨日のような気がする。

九日は午前六時半ごろ警戒警報が鳴る。パッと飛び起き、直ちに仕度をして朝食をとる。七時ごろ突然けたましい爆音を聞き、空を見るとB29一機が、高々度で東から西に白線を引きながら通過する。脚絆をはいて同宿の野上君（医専三年）と一緒に家を出た。戸口の所で六、七才ぐらいの、あまり服装のよくない子供が、「兄ちゃん、薬店に行つたら閉つてしまつたから、これを買って来て――」と、紙きれを私に渡した。見ると、「大人ののむ風邪薬を一、二服下さい」と書いてある。あまり可哀想だったので、救急袋の中のアスピリンを四錠与えた。

下宿を十歩ほど出たとき、空襲警報が鳴つた。今日は何だか悪い予感がする。野上君に防空頭巾を取りに行こうと云つて、家に帰り頭巾を持って登校した。

九時ごろ空襲警報が解除されたので、戦闘服を白衣に着替え、急いで外来の耳鼻

科へ行く。丁度医専三年は卒業試験の最中で、各グルッペに分れてポリクリに行つていた。グルッペの者が大勢来ていたら、八月一日の空襲の際に失くした眼鏡を買いに行く予定にしていたが、四人も欠席していたのでやめた。

患者は警報のためか一人も来ていない。用事を思い出して同郷の片山道生君（学部三年生）に会いに行つたが、あいにく中講堂で角尾教授の講義の最中だった。

外来に引返すと、患者が五名ほど来ていた。私は中学生の患者の予診を済ませ、教授診察室で聴力検査を行つていた。その時爆音が耳に入った。低空飛行であろう、割に大きな音である。「敵機だ！」と思った瞬間、パッと閃光が光り、爆風で硝子が飛び散る。「爆弾だ」と思ったので、すぐさま診察台の下に伏せる。同時に第二波の爆風が来た。赤か朱色に似た火柱が前方にふり注ぐ。ニュース映画のタイトルにある太平洋の荒波が、岩壁に当つて砕けるように、「ドドウ」と鳴る。私は頭をかかえてびたと伏し、思い出したように、目・鼻・耳を手で覆う。

暫時の後、目を少し開けて見ると、真暗で一寸先が見えぬ。弾片が頭にあたつて視力を失つたのだろうか、何処かに吹き飛ばされて氣絶したのだろうか。頭に手をやつて探つてみたが、負傷はしていない。大丈夫だ、生きている。あたりが少し薄らいでので、誰だかさっぱり判らない。私も一緒に階段を下つて無我夢中で逃げたが、階段には沢山な木が倒れかかっている。コンクリート造りの建物で、木など見たこともなかつたのに——。私は降りる途中、これらの木にスリップが引掛つて素足になつた。怖いのでそのまま棄てて逃げようかと思つたが、素足では危いので、引返してスリップを取り戻した。

一階の玄関に来て外を見ると、大半の家は倒れて、木材がうず高く積まれている。その木材から既に火を発して、火災が起きていた。私は広島と同じ新型爆弾だと直感したので、地下室に降りるのをやめて、山に逃げようと思い、耳鼻科病棟へ服をとりに行くために、玄関を出た。ほこりが濛々と立ちこめ、十メートル先も見えない。外

來の外科治療室の下の方で、「助けてくれ！」という声がする。助けたいと思つたが、自分が逃げるのが精一杯だ。救助どころではない。

耳鼻科の中には何処から入つたか判らない。ここも木片で一杯だ。ボックスが見えない。少し掘つてみたが、服も靴も出て来ない。そうしている間に木が燃え出した。

諦めて山へ逃げる途中、両外科の中間あたりで、学部四年の宮城美津次さんに会つた。顔面血だらけになつて、「助けてくれ！」、「一人で逃げるな！」と叫ぶ。私は、「これくらいのことで弱氣を吐くな、元気を出せ。」と叱りながら、背負つたり手を引いたりして、外科病棟の所まで辿りつく。医専三年の村島秀治君が、裸一つの真裸で立つてゐる。あちこちを負傷してゐたが、いやに落着いている。彼は八月一日の空襲で頭部を負傷し、入院して睡眠中に爆風にあおられ、ベットから落ちて目をさまし、何が何だか判らずに下まで逃げて來たらしい。「村島！ 広島と同じ新型だ。早く一緒に逃げんか」と怒鳴つたが、一向に逃げる気配がない。「早く来いよ」と促がすと、「裸では逃げられない。何か着物を見付けて逃げる」と云つて立つてゐる。仕方がないので宮城さんと二人で行くことにした。

産科病棟を廻つて前方を見ると、基礎教室が一面に燃えている。汽罐室の煙突は折れ、汽罐が破れて轟々と湯気を吹き出している。途中の木々は皆地上一メートルぐらいでボッキリ折れ、地面には木片が一杯で、足をとられて倒れそうだ。

眼科と小児科の間では、馬車と一緒に馬が倒れて死んでいた。この所で宮城さんと同級の土肥達一さんが、「宮城君、俺も一緒に連れて行つてくれ」と云いながらついて來た。彼は顔面が血だらけになり、また左上腕部にも挫傷があつて、ひどく出血している。その上からしっかり縛つて、臨時の止血を行い、二人を連れて山へ行こうと精神科裏へ行つたが、登るところがない。搜してみると電柱が一本倒れていたので、それを伝つて登つた。下の方を見ると、頭に包帯して医局員と一緒に登つて来られる古屋野教授の姿も見えた。

病院の裏山に来てみると、芋畠のツルは全部切れ飛んで、一面に赤土の地面が露出し、所々にカボチャが転がつてゐる。その間を二人を連れて歩く。緊張感が一杯で、

苦痛は感じない。中腹の溝地に来ると、急に土肥さんが、「きつい。休もう」というので、皆腰を下して一休みした。

ここで防空頭巾を拾つた。それを宮城さんにかぶせてやり、白衣では銃撃が怖いので、土肥さんの左上腕を縛り直して泥を塗つた。土肥さんは如何にも辛ううなでの、「あなたは暫らくここで休んで居なさい」と云つたが、彼は、「逃げるなら俺も一緒に連れて行つてくれ」と云つてきかない。仕方なく又二人を連れて登る。なるだけ上空から見えないように、木陰を伝つて登つた。鞄が転つている。それを拾つて行く。

五〇〇cc入りのアルコール瓶があつたので、それも拾つた。

穴弘法山の中腹に来た時、下から医專三年の高木恒信君がやつて來た。左前腕を軽く火傷している程度、私は一人で二人を連れて行くのが不可能と思ったので、「高木君待つてくれ、一緒に行こうや」と云つたが、彼は見向きもせずに行つてしまつた。穴弘法に上ると、御堂は倒壊しており、下界を見ると一面の火の海。下の方からは血まみれになつた人達が、続々と上つて来る。まるで火の海から亡者が山に登つて来るようにだ。地獄絵図とは、正にこのことを云うのだろう。

此処では上空から丸見えなので、蔭に行こうと小径伝い歩いていくと、赤痢で入院中の医專三年の岩永祐一君が、同級生の高木邦憲君を背負つて來るのに出会つた。道には大きな岩が転げ落ちている。山の裏の木の間を更に登つて、山頂に辿りつく。咽が渇いてならぬので、清水を飲もうと湧水の所を行つたが、塵が一杯入つていて飲む気になれない。拾つた鞄には、乾パンが三十個ぐらい入つていた。それを三人で分けて食べ、包帯は大切だから取つたが、下にあつた金らしいものは、不要だと捨てた。丁度腕時計は一時を指している。

暫らく横になつていると、段々と人が集つて來た。裸の人で全身に火傷を負つた人がおり、皮膚がベラベラ剝げていて、氣持が悪かつた。爆音が聞える。あちこちで、「白いシャツは脱げ」とか、「じつとしておれ」という声がする。私は白シャツに泥を塗つてみたが、白さを隠せないので、岩の間に身体をびつたりくつけたりした。爆音が聞えなくなつてから、急に空が曇り風が起つて、パラパラ雨が降り出した。

黒みがかった雨だ。寒さが身にしみて来る。全身火傷の者はブルブル震えている。私達の休んでいる所に、医專三年の田尻健次君が、同級の深山隆君を背負つてやって來た。互に喜び合う。田尻君は無傷で、服装も整つており、至極元気だ。深山君は顔面絡をとつてくれ。一緒に行動する」と云う。しかしそれは無茶だ。影浦内科は何処に行つたか見当がつかない。「自分は今まで情報を探してはいけない。早く探してそれ」という。実際困つた。よく事情を話して納得させ、休ませた。

下からバケツに水をくんだ人が登つて來た。無心して皆で少しづつ飲む。これで生き返つたような気がする。近くにいた火傷の人に飲ませたら、大変喜んだ。土肥さんが又弱氣を出す。「ああ、手が冷たくなつて來た。」「こんなに出血して俺はもう死ぬ。」などと云い出す。私は叱つて元氣をつけた。そこへ眼科の林先生が、看護婦と一緒にやつて來た。耳の付近に負傷している。田尻君が包帯をしてやる。深山君が嘔氣を催して吐く。私も氣分が悪くなつて、嘔気ががあるので横になる。横になつたり起きたりしながら、火が山に燃え移るのを、田尻君と一緒に監視する。やがて医專三年の福島五郎君と西村純一君が、立山の方へ去つて行つた。

こんな状態では、到底治療も出来ないので、田尻君と一緒に西山の方へ行くことにし、後のことを行つた。私は氣分が悪いが頑張る。

顔を負傷している海軍将校が、「一、二日食糧は来ないから、近くにあるカボチャでもとつて食べなさい。自分もこの通りナスビをとつて來た。これから長与へ連絡に行くが、それまで頑張つていなさい。」と云つて立ち去つた。

穴弘法から金比羅山へ駆足で登る。氣分は幾分よくなつた。しかしスリッパでは自由がきかない。田尻君に連れ勝ちについて行く。途中の松など、木はすべて折れている。あちこちに負傷者がいたので、「あとで薬を持って来るから——」と云つて励ます。鵜狩淳一君も白衣一枚で歩いていた。同級の松本克君は、以前に鎖骨々折をやつて癒つていたのに、横倒しになつたので又折れたとこぼしていた。しかし元気だ。

山頂の高射砲陣地にある壕には、半身火傷の兵隊達が入つていたが、彼等はB29が

一機来たので、照準を決めて撃つばかりにしていたところ、先にピカッと光ってやらされたと云う。

我々は小児科の小川看護婦と一緒に、薬品を調達するために急いだ。西山町へ下る所に民家があつたので、水を貰つたがとてもおいしかつた。おばさんが、「貴方たちは医大の人でしょ」というので、「そうです。薬を貰いに高商まで行く途中です。」と答えると、「私の息子も医大に行っているのですが——」と心配そうに云う。「おばさん、スリッパでは駆けられないから、靴を貸して下さい」と頼み、布靴に履き替えて高商への道を急いだ。

高商も窓硝子が全部割れていた。ここにも医薬品は置いていなかつたので、伊良林小学校を訪ねてみると云々とした。途中に聯隊司令部があつたので、立ち寄つて救急医療品を所望したが、兵隊に使うほどしかないのでやれぬ、と断わられた。

この頃からボツボツ、負傷者が背負われて運ばれて運ばれて行くのに出会う。こんな白シャツ一枚では物騒だと気付き、田尻君の下宿に行つて、作業服と戦闘帽を借りた。その上握り飯の馳走になる。一休みしていると、「ブーン」という音がするので、又敵機かと家を飛び出して川辺に走る。だが自動車の音とわかつて安心した。神経が興奮していたので、爆音と間違えたのだろう。

煙草を一服して伊良林小学校に来てみると、火傷や負傷の患者が、既に五十名ほどつめかけており、佐世保海兵团の救護隊が治療に当つていた。救護の手がくも早く届いたのに感心しながら、軍医に交渉して、救急医療品一袋とヨードチンキを分けて貰い、帰途につく。小学校には同級の中島直人君が収容されていたので、田尻君が強心剤を一本打つてやつた。

諏訪神社から金比羅山へ登つて行くと、影浦内科の森沢先生と調外科の宮崎婦長はか一人がいた。そこで一服していると、又爆音が聞えたので横穴壕へ入る。既に沢山人が待避していた。皆恐ろしきで顔がゆがんでいる。

医大関係者が六人になつたので、すぐに大学に向つた。市民運動場についた時、又

明るい。金比羅山の頂上付近で、同級の執行政善君に会つた。「飯をとりに行く」と云いながら、山を下ろうとしている。「下に行つても何もないだろう」というと、思ひ止つて一緒に来た。

古屋野教授や負傷者たちが、山頂にいること、穴弘法に行く積りだが、暗闇になつたので止めて山頂へ向つた。そこへ着くと、十二、三名の大学の先生や、学生、看護婦たちが、暗い家中に寝ている。皆負傷者ばかりだ。村島君もそこにいた。割合に元気がよい。皆を治療したあと、田尻・執行両君と一緒に、水を汲んで来て与えた。

こうしているうちに、「皆が山に逃げ込んでいるので、今晚山を焼く。」というビルが撒かれたというデマが、どこからともなく伝わつて來た。森沢先生と我々三名は、それを意とせず、芋畑に壕を掘りに行く。間もなく影浦内科の婦長達が近くの農家の横穴壕に居るという報らせがあり、急いで迎えに行つた。壕内には十人ぐらい居て一杯だ。やつと身体を入れて中をみると、調外科の婦長や看護婦数名の姿が見え、暫らくすると、眼科の婦長もやつて來た。負傷はないがボーッとしている。

暑いのを我慢して暫時壕の中にいたが、たまらないので外へ出てウトウトしていると、また爆音が聞えたので壕に入る。このようなことを二、三回繰り返している中に、腹はへるし、眠くはある。ついウトウトしている時に「ピカッ」と一閃。新型爆弾と思ったので壕に飛び込む。田尻君の上にのし上つて苦笑する。敵機の照明弾らしい。四、五回爆音を聞き、とうとう一睡もせずに明かす、思えば長い一夜だった。

長崎の街は一晩中焼けつづけ、空は真赤だつた。

## 原爆被爆体験記（その二）

蛭崎武徳

子供が、「こんなどらが落ちていた。」と云つて持つて來た。それには

八月十日朝

「米国は強力な原子爆弾を発明した。国民は無益な抗戦を止めて、天皇に降伏するよう懇請せよ。そうでないと、原子爆弾を落して国土を強力に焼き払う。原子爆弾の威力は、B29二千機が一回に持ち得る爆弾量と同じだ。非戦闘員は早く都市より待避せよ。」

という意味が書いてあつた。我々は腹が立つたので破り棄てた。こんな馬鹿なことがあるものか。二、三日前の新聞に九大教授の談話があり、「広島の爆弾は大型のもので、原子爆弾ではない。原子爆弾は理論は解つてゐるが、実施は今後も出来ないであろう。」という記事を、私は信頼している。

暫らくして下から飯を持って來た。大変おいしい。空腹が幾分満たされたので、田尻君と一緒に山頂の家を行つてみた。負傷者は割に元気になつてゐる。高射砲陣地からは、負傷兵が続々と下へ運ばれている。我々は負傷者たちに、「下へ行けば町内会の横穴壕があるから、そこへ行くように」と伝えながら、穴弘法の方が気になつたので、看護婦十数名を連れて急いで。

金比羅山を越え、穴弘法に来て下界を見ると、昨日まで立ち並んでいた人家は一軒もなく、赤土をむき出しにして、大広場が出来ている。穴弘法の頂上付近で、学部四年の土肥さんの死体を発見した。西山へ行こうと此処まで来て、斃れたのではなかろうか。苦しんだ様子が見える。昨日は一緒に連れ立つて歩いていたのに、大変済まなかつた、と心中でお詫びした。

昨日大勢いた避難者や負傷者は誰もいない。林先生も、宮城さんも、深山君も姿が見えない。多分山を越えて逃げたものと思う。私達も逃げおくれては大変と、急いで丘を駆け降りたが、途中で産婦人科の本多有隣先生に会つた。先生は意識は明瞭だが、大分身体が弱つてゐる。互に生きのびた喜びを語り合ひながら、「先生、逃げませんか」と誘つたが、「自分は負傷した産婦人科の看護婦を連れているから、君達は先に行つてくれ」とのこと。この時下方から、「蛭崎！」と田尻君の呼ぶ声が耳に入つた。行ってみると耳鼻科の江上助教授が被爆者の治療中で、「蛭崎君、君は元気でしよう？」と聞かれるので、「はい。疲れてはいません。」と答えると、「では下

に大学の医療隊本部があるから、一寸連絡に行つてくれ。」とのこと、早速角尾内科の川下看護婦と二人で丘を下つた。

下山して探したが、何處にあるのか本部らしいものは見つからない。川下看護婦は「高橋（博）先生！」「中村（匡邦）先生！」としきりに先生の名を呼んでいた。

暫らくして返答があり、彼女は声を頼りに駆けて行つた。私は本部が見つからないので、再び江上先生の所に引返す。途中で同級の渡辺雄三君と和田政太郎君に会つた。和田君は割に元気だが、渡辺君は大変弱つていて、少し行つては休み休みしている。

これで山越えるとは感心だと思つていると、そこへ田尻君が来て、「俺も一緒に帰る」という。私も田尻君が帰つたのでは心細いので、「俺も一段落ついたら帰るから待て」と云つたが、「大村に行こうや」としきりにすすめる。然し今度こそはどうしても無責任なことが出来ないので、彼に留まることを奨め、江上先生の所へ行つてそのことを報告した。

先生は、「では僕が行つて話して来る。君は此処にいて負傷者を治療し、若し敵機が来たら皆を待避させてくれ。」と云つて、田尻君と数名の看護婦を連れ下山。そこへ折よく森沢先生と婦長が来られたので、私の役を先生にして貰い、江上先生のあとを追つて一緒に山を下る。

そこには同級の高木邦憲君、伊東國光君、山口文作君の三人がいた。高木君は全身火傷で、瀕死の重傷である。更に進んで御堂（浦上天主堂）の所に来ると、医專二年の学生がいたので、小出石行夫君のことを尋ねたが不明だつた。その側には、医專二年の田中祥生君（？）の死体が横たわつており、また同級の浅田勝孝君にも会つたが、顔が茶褐色になつて大変弱つてゐた。

江上先生は、「大学関係の人は治療してあげるから、谷にいる人は早く上つて来なさい。」と大声に叫ばれたが、身体が弱つて誰も上つて来るのはいない。仕方なく谷に下つて治療することにした。

一緒に来た看護婦たちは、先生や婦長、同僚の負傷者を見付けては、「先生、元気を出して下さい。」「婦長さん、しっかりしてね。」としきりに励ましながら看護し

ている。私も古屋野外科助教授、当時医専三年の主任だった石崎先生らしい姿を発見

したので、すぐに近寄って見た。顔一面と両側前腕にひどい火傷があつて、一寸見ただけでは誰だか判らない。同級の吉田武郎君に教えられて初めて確認し、「石崎先生！」と云つたが、ただ手を動かすだけで何の返事もない。不審に思つていると、吉田

君が、「先生は口が動かないで云えないのだ。」と教えてくれた。先生がなおも右手を振られるので、手掌を出すと、その上に何か書いておられるようだ。よく見ると、「ダ、レ、デ、ス、カ」と判読出来たので、「医専三年の蛭崎です。先生、元気を出してしつかりして下さい。」と云うと、わかつたのか首を縦に振つておられた。炎天に照らされてさぞ暑いだろうと、木片を拾つて来て日陰を造つていると、江上先生が来られて強心剤の注射をやられた。この分ではとても駄目だらうと思ひながら、他の負傷者の治療にかかっていると、突然けたましい爆音がした。田尻君と一緒に急いで簡易防空壕に入る。暫らくして爆音が去つたので、壕から出て治療にかかっていると、又敵機がやつて来る。壕に逃げ込む。このようなことを二、三度繰り返している中に、壕に行くのが面倒になつたので、側にある溝の中に伏して、敵機の去るのを待つた。

午後何時頃だつたか、同級の大浦治君が握り飯を持って來たので、貰つて食べたが、とてもおいしかつた。近くで小児科の佐野教授も、同級の碇光喜君と一緒に治療に従事しておられた。敵機が去つたので、碇君と一緒に、脛骨々折で弱つている医専二年の学生のために、副木を作つたりして治療を続けた。

そこには耳鼻科の婦長もいた。眼科の増田婦長もいたが、髪が乱れ、顔も一変して、名前を聞くまでは誰だか判らなかつた。弱々しい声で、「私の家は西浦上よ。あらか知ら、早く帰りたい。」と呟いている。どうすることも出来ないので、ただ元気を出すように励ます。

そこへ同級の川原省三君と広瀬看護婦が來たので、一緒に大学本部（調理所裏の横穴壕）に行く。途中、一つの谷に角尾内科の先生や看護婦が集つていたので、治療しがたが、皆顔が變つてゐるので、誰が誰だかさっぱり判らない。その中に内尾・福田両

看護婦もいたようだ。

甘藷畠のところに来ると、奥さんの死体を発見した主人らしい人が、泣きながら警察官らしい人に、「この死体をここに埋めていいですか。」と云いながら、畑を掘つていた。

更に下つて高南横のテニスコートのところに来ると、同級の北郷武照、野上義雄、浜崎喜則の三君が、四、五人の負傷者と一緒に寝かされていた。何かかぶさつてるので除けようとすると、「こんな暑い所に、四、五時間も寝かされたら、日射病になる。早く日陰に連れて行つてくれ。」と云う。警防団の人たちも初めてわかつたらしく、急いで連れて行く様子だったので、再会を約して別れた。

本部に来てみると、横穴壕の中に調外科の木戸助教授がいて治療しておられた。眼科の地下室にアルコール、その他の医薬品、ゴム手袋などがあるというので、取りに行つた。アルコールが飲みたかつたが、氣分がすぐれないで止めにした。そこには昨日別れたまま姿を見せなかつた宮城さんがいたので、安心した。

アルコール、沃度丁幾、強心剤などを持つて、再び丘の上に登ろうとしているところに、江上先生が来られて、私と川原君を認め、「石崎君をここに下して来るから手伝つてくれ」と云われる。担架に握り飯二箱と医療品を載せ、丘を登ろうとしたが、大変重くて二人では担げないので、眼科の所で握り飯一箱をそこにいる人達に与えたら、その中に村島君の顔が見えた。あれから丘を下つてここまで来たらしい。又同級の麻生弘君が裸で寝ていた。少し頭が痺になつていて、妙なことばかり云う。薬専の川原君はしきりに「きつい。きつい。」と云う。

石崎先生の所に着き、ブドウ糖を割つて飲ませると、「うまい。うまい。」と喜んでおられた。先生を担架にのせて運ぶ。川原君が用事のため居なくなつたので、同級の吉田君と、学部三年の秦野さんと、私及び外一名の四人で運んだ。ところが吉田君が途中で足をすべらせ、先生を担架から落したのには驚きもし、申訳けなく、又可哀想でもつた。下に降りてからは、古屋野外科裏の横穴壕に収容した。

終つて本部に来てみると、調理所の米俵が燃えている。大急ぎで川原君と二人で消火した。

夕暮が迫るとあたりは火の気もなく、人の姿もまばらとなつて、何となく鬼気迫る

思いがした。初めは焼跡に沿る予定にしていたが、急に人里が恋しくなつて、網場の養國寺に厄介になることに決め、片山君、川原君、川崎君と一緒に、江上先生に挨拶して大学を後にした。

正門を出ると、到る處に死体が転がつてゐる。白骨になつたもの、黒焦げのもの、或いは女体の横に黒くなつた赤兎がいる。見るたびにゾッとする。  
付近の村から警防団の応援が大勢来つていて、井種之口で焚出しの握り飯を貰つて食べる。錢座国民学校はまだくすぶつっていた。往来は人の行き帰りで、ごつた返してい

稻佐電停付近で海軍の自動車に乗せてもらい、伊良林国民学校からは片山君と二人で、真暗な夜道を日見トンネルを越えて歩いて行く。トンネルは半分が疎開した工場となつてゐるが、操業はしてない。街から田舎に避難する人々が列をなしてゐる。

十一時頃に漸く養國寺に着く。寝るときも裸にはなり得ず、暑いのに服を着たまま横になる。

十一日は朝四時頃目を覚した。大変きつい。何だか身体がだるくて、身の置き所がない。腕の負傷の治療をして、終日休養をとる。この日も二、三回P-38双胴の敵機が来たが、爆弾の投下はなかつた。家人人は暑いのに冬物を着て待避している。

十二日、今日も大変きつい。この日、ソ連が対日戦に参加したことを見たが、腹立たしいことこの上もない。夜に入り、厚く礼を述べて養國寺を去る。夜半、本河内に着き、町内の防空壕で一夜を明かす。自動車の音を爆音と間違えて、苦笑すること屢々である。ここで日本機のワシントン大爆撃、及び沖縄に増援部隊上陸激戦中のニュースを聞き、心おどる氣持がした。

十三日、朝方は大変冷えた。片山君と別れ、靴がボロボロになつたので、夫婦川町の大庭さん宅に寄つて靴を借りた。娘の恵子さんがまだ帰つて来ないと云つて、皆さ

んがオロオロしながら悲しんでおられる。

勝山国民学校のところで警戒警報が鳴り、浦上駅付近で空襲警報となる。急いで大學病院に着く。

本部は調理所裏から調外科の焼跡に移つてゐる。兵隊が来て病院内の清掃に従事している。皆軍服の上から外套を着てゐた。病院について急に空腹を覚えたので、調理所から米をとつて来て炊く。おかげは南瓜と塩、久し振りに白米の御飯を食べた。その間に二回敵機が来た。その度に急いで飯を持って横穴壕に入る。

飯を持って野上、浜崎兩君のいる高南に行つたが、割に元気だ。同級の山本雅文君が治療している。ここで村島君と会う。元気になつてゐる。

産婦人科の内藤教授が病棟の廊下で死んでおられるとのことで、担架を持って行く。先生は国防服にゲートルをはき、崩れるようになつて死んでおられた。先生を担架にのせて本部に来てみると、石崎先生は既に死亡しておられた。高瀬教授や古屋野教授と一緒に先生たちを焼く。

私は、耳鼻科病棟に何か残したものはないかと行つて見たが、屋内はすつかり焼けで何一つない。一個の黒焦げ死体が転がつてゐた。江上先生は地下室からいろいろな薬や資材を出しておられる。それを手伝つてると、村島君がやつて来て、「貴様が二、三日何処かへ行つて帰らないので、多分帰省したのだろうと木戸先生と話していた。」と云う。

本部では同級の長井道郎君が頑張つて、薬品集めや人員調べをやつてゐた。私の名が生存者の欄に記載されていなかつたので、すぐ書き込んで貰つた。

外来本館では、九大医学部の学生と軍隊が一緒になって、負傷者の治療をやつていた。私たちは治療を彼等に委せ、木戸先生と一緒に宮城さんや、野上君、浜崎君達をトラックに乗せて、調教授が開設されている岩屋クラブの臨時救護所へ行つた。上野謙吉君、村島君、片山君等もついて来て、負傷者の治療に従事した。救護所には既に三十人余りの負傷者が収容されていて、足の踏み場もない。

この日私は、調先生が足の黒くなつた負傷者の大腿を切断されるのを手伝つたが、

大工道具の鋸を使われたので、本当にびっくりした。

夕方皆と別れて、村島君と一緒に西浦上の同君の叔母さんの家に行く。飯を炊いて貰っている間に、前的小川で体を洗い、久し振りに汗を流して、清々した気持になった。身も心もさっぱりして、腹一杯戴いた米の飯は、殊のほか美味しかった。あたりを見ると、家は爆風のために梁が落ち、敷居も落ちている。畳は黒焦げになって、今にも家が潰れそうだ。面白いことに、鶏までがB29の爆音を聞くと、藪の中に逃げこむと云う。

夜は外で寝たが、蚊が多くてなかなか寝つかれなかつた。

十四日、よく晴れて暑さも厳しい。岩屋クラブに行き負傷者の治療をすませて、思案橋の方に用事があるという村島君と一緒に、線路伝いに病院へ出かけた。途中ところどころに黒く腫れあがつた死体が転つていて、臭気が鼻をつく。

下宿先が気になり、大橋で村島君と別れて、先ず永井先生宅に寄つてみた。きれいに燃えて何もない。それからいつも通つていた大学への道を辿つたが、以前の面影は一つとして残つていない。ただ道が残つてゐるだけである。三浦さん宅に行つてみると、小母さんらしい黒焦げの死体があつた。礼拝して暫したたずむ。私のいた部屋、台所等々、一つ一つが記憶に残るものばかりで、感無量であつた。

ここを去つて山里町二九〇番地の杉坂さん宅に行く。下の川のほとりで、私がこれまで二年間下宿していた所だ。後輩の小出石君も下宿していた。ここも全焼して何一つ残つていない。

病院に着いてみると、村島君は思案橋には行かないで、先にここに来ていた。一緒に死体を焼く。もはや一人前の隣坊おんぼうと云つてもよいようだが、しかし臭くてやりきれない。

暇を見て製鋼所の今田さんを訪ねた。顔を真黒にして指揮している。再会を喜び合つた。ここも大変やられているが、本部は焼けていない。針尾海兵团から救護隊が来て治療していた。今田さんと一緒に工場内を歩いてみると、鉄柱やトタン屋根は折れたり曲つたりして、惨めな有様を呈している。鉄材の下から死体を引出してやつた

が、腐敗臭が甚だしい。

中食をご馳走になり、竹ノ久保の三菱兵器の大庭恵子さんを訪ねたが、未だ行方不明とのこと。煙草の配給があつていたので、私も一、三本分けて貰つて吸つたが、大きむと云う。

大學へ引返して基礎教室を見てまわつたが、焼けて何もない。白骨や黒焦げの死体が方々に散乱している。また沢山集つてある所もある。多分講義中だつたのだろう。

運動場に行つて見ると、甘藷畑の中に看護婦らしい黒焦げの死体が六、七体転がつており、強い太陽の照り返しで、目もあけておられぬほどだつた。

運動場をぬけて山里国民学校へ行つてみた。こちも救護所になつていて、九大の人達が治療に当つており、あちこちに死体を二〇、三〇集めては焼いていた。夕方になり、今日も村島君宅に行つたが、同君は遂に帰つて来なかつた。

十五日、朝早く岩屋クラブに行く、同級の青木茂君も収容されている。下痢患者が一〇名ほどいて、赤痢ではないかと氣持が悪かつた。負傷者を治療した後、昨夜死亡した二人を焼く。木を積み重ね、四人で手足一本づつを持って、その上に抛りあげるのであるが、皮膚がズルズルと剝げ、青い液が出るのには閉口した。

今日は不思議に敵機が姿を見せない。

胸を打つた患者がいるので往診してくれと頼まれ、心細かつたが約半里の田舎道を一人で歩いて行つた。着いてみると既に死亡している。ホッとした氣持で、そのまま急いで引返した。

夕方、村島君と井上君が帰つて来て、「今日、日本は降伏した。」といふ。私はどうしても信じられないで、上野君達と相談して大学病院に行つてみることにした。道行く人も降伏したらしいことを云う。病院につく直前に先輩に会うと、「憲兵が今日の降伏はデマだと云つた。」といふ。我々は大喜びで軍歌をうたつた。しかし病院に着いてみると、軍隊が引揚げつゝあり、何となく不審な感じがした。この夜は滑石に帰らず、病院に泊る。

十六日、朝早く起きて飯を炊くべく、長井・村島両君と一緒に米をといでいるところ

今田さんが来た。敗戦かどうかを尋ねると、今田さんはデマだと云う。しかし後から来た國友先生のお嬢さんが、今日の新聞に終戦の勅語が出ていたという。何もかもさっぱり不明だ。そこへ本多先生が来て、「それは眞実だ。」と云われる。いよいよ以て不明だ。

朝食をすまして負傷者を治療し、午後は村島君と一緒に、石油缶一杯に米をつめ、そのほか味噌、梅干など持つて滑石に行く。皆大変喜んだ。宮城さんは山の家に行つたらしく、姿が見えないので、木戸先生と一緒に山の家へ往診に行く。

夜は上野君の横に寝たが、蚊が多くて困った。

十七日、朝起きてみると、四名の下痢患者が死んでいた。夜中に死んだらしく、苦しそうな顔はしていない。死体はまた木を積み上げて焼く。

午後、同級の森君の自転車を借りて、終戦の真相を確かめたがたが、患者の罹災証明書を貰いに大学病院に行く。途中で新聞を買つて見ると、終戦は眞実だ。勅語も出ている。一度に力が抜けたような気がした。病院に着くと佐藤先生に見つかって、また死体焼きをさせられた。

十八日、早朝木戸先生と一緒に宮城さんを往診し、治療をすまして朝食をとつてみると、父が郷里からやって來た。大学に行ってここにいることが判つたらしい。

滑石の診療所も今日閉鎖するそうなので、父と一緒に皆に別れをつけた。製鋼所に今田さんを訪ね、昼食を戴き、勝山国民学校に小出石君を訪ねたが姿が見えない。続いて伊良林国民学校にも行つてみたが、ここにも居なかつた。多分帰省したのだろうと思って、長崎駅に行くと、駅前のガスタンクは燃えただれ、石炭が真赤になつて燃えていた。

長崎駅には避難民が溢れ、皆不安そうな暗い顔をして、汽車の来るのを待つていた。私達親子はその日の夜行で郷里に帰つたのである。

帰省後、私は身体がだるく、食欲もなく、三十八度ぐらいの発熱が、約一週間続いた。多分暑い日中を、方々動き過ぎたためだらうと思つていた。

その後新聞などで原爆症のことが報ぜられるようになつたので、当時の小倉医専で

診察を受けたところ、白血球が二四〇〇に減少していく、私も原爆症になつたのではないと心配した。早速家に帰つて寝たり起きたりしていたが、幸に血便様の下痢や症など原爆傷害の調査を行つたのである。

脱毛は起らなかつた。

やがて体力も次第に回復したので、昭和二十年十月十日、角尾内科の高橋先生と共に大村海軍病院に行き、以後調教授の指揮の下に、毎日汽車で長崎市に通い、放射能驗記を読みかえしながら、瘢痕化した左前腕の硝子傷の跡を眺めつつ、当時の事など想ひ浮べるのである。

(四七、六、二〇記)

## 被爆体験略記

佐世保市今福町五一一一  
当時付属医専三年生

緒 方(元山口)文作

私はあの日、調外科病棟地下室入口への踊り場で被爆しました。顔面、背部、手、足等にガラス破片で多数の傷を負い、熱線でも二ヵ所に火傷を受けました。出血するに委せ、既に発生していた火の中をくぐつて、精神科から穴弘法へ通ずる坂道を登つて逃げましたが、途中で動けなくなり、一夜を道路ですごし、翌日やつと水のある所まで辿りつきました。

(四八、一二、二〇)

## 被爆体験略記

香川県丸亀市六番丁二八  
当時付属医専三年生

片山和男

八月一日の爆弾で負傷したので調外科に入院し、二階の病室で被爆しました。爆風

でコンクリートの天井が崩れ落ちましたが、幸いベットの間に挟まれたため、大した怪我もなく、すぐに脱出しましたが、その時は既に街は火の海でした。

(四八、一二、一八)

## 原爆の日の思い出

福岡市西区田島折敷八六三  
当時付属医専三年生

執 行 政 善

## 被爆体験略記

長崎県北高来郡飯盛町開名一九三四

当時付属医専三年生

香 田 金 朝

卒業試験のため、付属病院の外来婦人科にて被爆、一緒にいたのは今諫早で開業している川原省三君たちでした。硝子片で頭部、その他右半身に刺創を受けて脱出、一時間後に山中に離脱しました。

(四八、一二、三〇)

二十八年前のこととて、若干記憶に間違があるかも知れませんが、当時の生々しい記憶をたどって書いてみます。

昭和二十年八月九日は、晴天で雲一つない暑い日、その日は小児科のボリクリの卒業試験に当つていきました。午前九時に空襲警報が解除になり、引き続き警戒警報に入りましたが、十時から試験というので、小児科外来に行きました。

十一時少し前に患者も来たので、予診をとるため白衣を取りに、地下室へ下りて行きましたが、階段を下りようとしたら、B29らしい爆音が聞え、窓から北方の空を見ましたが、機影は認められませんでした。それでそのまま階段を下り、地下室にいた途端、物凄い爆風と共に眼前が真暗になり、私は木製の衣桁箱の下敷きになりました。すると熱風が私の身体を刺すが如く這い廻り、熱くて熱くて耐えられない気持でした。私は咄嗟に、すぐ側のボイラー室に直撃弾が落ちたのかと思いました。音は全く聞えず、確かに桃色みたいな閃光を感じたようでした。

地下室にいたのは私一人で、数分間は真暗だったので、テッキリ眼をやられたと思いましたが、そうでもないと判ると俄然、「これは大変！早く脱出せねば」ともがき、暗黒の中を一階へ駆け上り、どこをどう走ったのか判らないが、小児科と眼科病棟の間の通路に来た時は、視界がボンヤリと見えるようになりました。ところがあたりは異様な風景で、木は倒れ、電柱まで倒れて、何が何だか判らない。人の顔は煤けたように黒くなつて、誰が誰やら判断もつかない有様。私は心せかれるままに、一人で裏の山に登り始めました。幸い外傷はなく、至つて元氣でしたが、頬は第一度の火傷でヒリヒリし、右前腕に大豆大的水疱が一個出来てしました。

八月九日は、午後一時から内科の口頭試験がある予定になつていたので、内科病棟二階の控室で勉強していました。被爆の瞬間は、極めて至近距離に大型の普通爆弾が落ちたのだと思いました。

闪光の直後、漆喰の天井が落下しましたが、机の下に伏せて、外傷は殆んどありませんでした。建物の外に出てみると、浦上一帯が吹き飛び、街が消失しているのを見

(四九、一、二)

ると、すでに火災がおきていて、坂本町、山里町の方では、倒壊した家屋から火を吹き、製鋼所方面でも黒煙をあげて、火災が発生していました。

「爆撃で火災の起るのは当たり前、それよりも我が身が大事」と、懸命に山路を駆け上りましたが、「栄養失調で痩せた私にも、こんなに元気があるのか」と驚くほどでした。途中には既に息の切れた者、死亡寸前の者、力尽きて助けを求める者など大勢いたが、それが誰だかさっぱり判らなかつた。

私は学生らしい二人の男に、肩を貸したり、手を引つ張つたり、倒れては起し、少し休んでは励ましの声をかけ、恐怖感と正義感に包まれながら、心身に鞭打つて山頂まで連れて行きました。穴弘法下の畠では、南瓜の葉が吹き飛び、丸裸の南瓜がゴロゴロしていたのが印象的でした。

もうその頃は、街は猛煙、猛火に包まれ、凄惨そのもので、「凄い爆撃だなあ」と思うと同時に、「もうどうにでもなれ」といった焼け糞の心理状態でした。そのためか、死の怖さも余り感じませんでした。

山頂につくと方々に、負傷している者、発狂状態の者、ゲーゲー吐く者、ぐつたりと死んだように寝ている者など、悲惨な被爆者の群で一杯で、元気な者は殆んど居ないようでした。私も吐気が強くなり、咽が渴いてたまらず、道端の泥水を飲んでは元氣をつけながら、夜の明けるのを待ちました。

このようにして山頂で一夜を過しましたが、翌朝はすでに数人の死者が出ていて、何とも云えぬ恐ろしい一夜でした。山頂には何人かの級友もいたでしょうが、今もつて記憶にないのが残念です。

× × ×

私は翌十日、道ノ尾駅から汽車で佐世保に帰り、そこで発病、全身倦怠、皮下出血、赤痢様下痢などで全く食欲がなく、衰弱の一途を辿り、一時は殆んど死を覚悟していましたが、幸に全快し、九月からは大村国立病院で実習に従事、その頃、白血球数が一、二〇〇だったと記憶しています。

終りに臨み、亡くなられた方々に深く哀悼の意を表します。

## 運命の日前後

長崎大学医学部教授（病理学）  
当時付属医専三年生

土 山 秀 夫

私は当時、医学専門部の三年生であった。予てかなり重症の糖尿病を持病としていたが、それが急激に悪化しかけていると云う。インシュリンが入手困難なために、効率の悪い代用薬を使用していたこともあって、以前起したような半昏睡状態にあるらしかった。

直ぐにでも長崎を発ちたが、当時は汽車の切符が簡単には得られなかつた。軍関係者が優先していて、一般的の者は前からの予約が必要だつた。やむなく、本学の第一内科に勤務していた兄と二人分を、顔見知りの看護婦に頼んでみた。彼女の兄さんが、浦上駅に勤務していたからである。

幸いにも、切符を手に入れて貰うことが出来、八月九日の早朝、私たち二人は佐賀へ向けて出発した。空の青さが、その日も酷暑の訪れを告げていた。

背振山麓の村に着いてみると、意外にも母の病状は持ち直していた。私たちの幸運を喜び合う暇もなく、長崎に新型爆弾が投下され、若干の損害を受けた旨のラジオ放送を耳にした。つい前日まで母の病床に詰めていた長兄は、勤めの関係から、やむなく前日の晩おそく、私たちと一緒に長崎へ帰つた後だつた。

ラジオを聞いた時、母は真先にこの長兄の身を案じた。それと云うのも、当日の出勤は午後からで、被爆時は山里町の自宅にいる予定になつていていたからである。

私たちは、自分の病状は大丈夫だから、という母の言葉もあって、当日の夕刻には、とんぼ返りの形で、長崎行きの列車に乗った。だが、長崎方面の交通が混雑しているらしく、その夜は肥前浜までしか列車が行かないとのこと、やむを得ず、駅前の旅館で一泊すると、翌日の朝ふたたび長崎へ向けて出発した。しかし、長与まで辿りつくのがやっとで、後は歩くしかないとのことであった。

長与からの埃っぽい道を歩きはじめた時、私たちが眼にした光景は、まさに信じられないような、この世の地獄図であった。担架に乗せられ、呻吟しながら運びこまれてくる人たちは、皆一様に裸に近く、そして皮膚のいたる所が焼けただれていた。男か女かさえ定かではなかった。汚れた包帯を血染めにした人たちも、幽鬼のような足取りで、杖にすがりながら通り過ぎて行く。真夏の太陽は、その間も容赦なしに、これらの人々を真上から照りつけていた。

市内に近づくにつれて、焦げ臭い空氣と共に、屍臭を思わせるムツとした熱気が、鼻を衝いた。

大橋の鉄橋下の川べりには、折り重なるようにして、力尽きた人々の群が見下ろされた。その中の何人かは、体をくの字に折つて、未だうごめいでいるように見えた。スクランプを思わせる兵器製作所の鉄骨や、飴のようにヘシ曲つた製鋼所の残骸——それらの間に、つい昨日まで浦上という街並があつたことが嘘のように、吹きちぎられ、根こそぎ掘り起されて、廃墟と化していた。

目指す大学病院も、外形だけはどうにかとどめていたものの、内部は骸骨の眼窓を思わせるように、がらんどうに近い模様だった。

正門から上つて行く病院の坂には、腹部のふくれ上つた大きい馬の死骸が横たわり、早くも腐敗臭を放っていた。病院の本館は迷彩も剝げ落ち、他の建物と連絡していた渡り廊下は、跡形もなく吹き飛んでいた。焼却炉の巨大な二本の煙突のうち、一本はピサの斜塔を思わせるように、倒れかかっていた。

漸く救護班の人たちと会うことが出来た私は、足の踏み場もない瓦礫に足を取りながら、級友の一部が収容されているという高南病棟の地下室へ向つた。壁や天井が

落ちて、洞窟のように薄暗い地下室には、浜崎喜則君や片山和男君、野上義雄君たちの姿があった。骨折や外傷を受けてはいたが、幸い生命には別条がなさそうで、お互に再会を喜び合つた。

その日から、そのまま負傷者の看病に当ることにした。しかし看病とは云つても、薬品らしい薬品もなく、包帯さえも欠乏していた。生存者で結成された救護班は、古屋野、調査教授を中心として、それぞれ任務についていた。死亡者や行方不明の確認も、重要なことであった。また負傷者のために、薬学専門部跡の貯水槽まで水汲みに行くのも、日課の一つだった。

病院の裏門近くにある汽罐場跡では、頭を強打して発狂状態になつた若い男性が、シャツを着せても直ぐに破り棄て、裸になりながら悶えていた。基礎の教室に至つては、根こそぎもぎ取られたように姿を消し、礎石の縁取りで、辛うじて建物のあつたことが推測されるに過ぎなかつた。

そしてあちらの日暮、こちらの建物の隅で、一晩のうちに次々と人々は生命を失つて行つた。永井隆博士が、頭に包帯を巻き、耳の傍の出血部を押えながら、杖を突いて来られるのにも出会つた。私は防空當番として、放射線科に割り当てられていたため、博士もよく私を覚えておられ、声をかけて下さつた。疲れた表情ではあつたが、未だその時はお元気だつた。

何日間かのうちに、級友のある程度の消息は掴めたが、山越えで西山その他の方面へ逃れた人たちのことは、被爆直後に目撃した人たちの証言以外は分らなかつた。次々と家族の安否を気遣つて訪ねて来られる方々との応待には、常に云いようのないもどかしさがつきまとつた。それは、一瞬の打撃がもたらしたにしては、余りに大きい混乱の果てに、誰が、何時、何處でどうなつたか——という正確な情報の決め手を欠いていたことによる。

こうした合間を縫つて、山里町の廃墟の中を、辛抱強く長兄一家の姿を求めて探し廻るのも、私の日課だつた。そして漸く何日目かに、下半身が染の下敷となり、顔こそ黒焦げとなつてゐたが、見憶えのある上衣の焼け残つた遺骸を、発見することが出

來た。上衣の裏にあるネームが、まちがいなく、長兄の変り果てた姿であることを証明した。義姉も二人の子供たちも全滅であった。

長崎医科大学も、附属医学専門部も、歯学専門部も壊滅した。そして八月十五日、神州不滅を信じた日本も敗れ去った。これから私たちの国は、歴史は、どう動いて行こうとしているのだろうか——夜になると、暗闇のあちらこちらで、鬼火のような火と共に、死体を焼く薄紫色の煙が立ち昇るのを見つめながら、私は暗然と佇むばかりであった。

(四九、一、一二)

## 長崎医科大学被爆の記録

大阪府門真市本町二三一六  
当時付属医専三年生

### 堤 一 真

メモ帳一つとてない二十八年前のことと、多少誤りがあると思われますが、當時私は学生防空班でレントゲン科配属、且つ海軍の軍医依託生だったので、それが行動の基準となっています。それを念頭においてお読み下さい。

#### 原爆の前

昭和二十年七月三十一日、大学病院では、各病棟の屋上にペンキで大きな赤十字のマークが書かれたので、これで安泰と思われた矢先、八月一日は日本晴の快晴で、見誤る筈もないのに、艦載機による爆撃を受け、同級の永見幸夫君の爆死、田島耕吉君の負傷という悲惨な事件が起つた。

実はこの日、田島、永田（鑑藏）、永見、堤の四人は、学生防空當番で、元気な私と田島君が病院、運動苦手の永見君と長老の永田君が、学校を受持つことになっていた。この防空當番は、いつ頃から始めたか不詳であるが、空襲警報が出たら屋上に上って、敵機の動行を監視しつつ、大声で皆に知らせる役目であった。

たまたまその日、私が風邪気味で学校を休んだため、永田君一人が学校、田島君と永見君が病院を受持つ、内科病棟の屋上で看護をしていて、金比羅山方面から急降下した敵機が、黒いものをバラバラと落すのを見て、「爆弾だ!!」と叫ぶなり、全速力で階段を駆け降りる途中、耳鼻科に落ちた爆弾の破片に打たれ、永見君は死亡、少し足の速い田島君は地下まで降り得たため、背面から破片をあびて負傷した。

翌日、かくとは知らぬ私は、学校に行ってその事を知つたが、数名の者から、「お前がさぼつたので、こんなことになつたのだぞ。」と痛責された。

当番が嫌で休んだ訳ではないが、身代りの形となつた永見君には、何とも申し上げる言葉もない。田島君は逆に、負傷したお蔭で故郷に帰り、幸せにも後日の原爆を免れることとなつた。

八月六日には、広島市に新型爆弾（実は原爆）が落ち、七日だったか八日だったかには、敵機からビラが撒かれた。

「東京・大阪灰の町、坂の長崎灰の町、市民の皆さん、一刻も早く田舎に逃げなさい、云々」。このビラについては殆んど発表されていないが、私は二、三枚を家に持ち帰り、家族と共に読んだので、父も「それでは矢上にでも疎開しようか」と話していた。このことからでも、原爆の前にビラのまかれたことは事実である。

日本晴の上天気、午前七時空襲警報、九時解除、引き続き警戒警報發令。

この日の午後は影浦内科の卒業試験予定で、私達のグループは影浦内科病棟看護婦詰所（通称サロン影浦）の前に集り、中島直人君が、「警報のため試験を延期してほしい」と、四階の菊野助教授まで交渉に行き、私は「少し早いが弁当でも食べよう」と、地下室にあるボックスまで行くこと、エレベーターの所まで行ったところで例のピカドン。

パツと明るくなつた一瞬、体が浮き、斜めに叩きつけられた。真の闇。熱波は感じなかつた。ゴーという音と共に、何やら落ちて来る。左半身が段々重くなり、動かし

にくくなつてきた。「直撃にやられたな。こんなことぐらいで俺は死はないぞ!」と思ひながらも、「火が見えたら何が何でも逃げ出さねば」と考へていた。

突然、闇の中から「オーケー!」と大きな叫び声、長井君の声だ。「長井君か?」

「おー堤か、どこに居る?」「何も見えんが、左の手足がよく動かん。やられたらしい。火も見えないし、このまま少し様子をみよう。」

少し明るくなつた。何か載つてゐる物を除けると、急に体が軽くなつて立てた。手足も動く! どこも痛くない! しかし左半身が濡れている、血だ!! 薄明りで眼をこらすと、すぐ側に子供が背中を割られ、即死していた。床一面に鮮血が流れ、その上に私が倒れたらしい。

天井や壁の漆喰が先に落ちて、体を保護してくれたため、色々の破片創も受けずに無傷で助かった。近くで動いているのは長井君だけ。二人で地下に降りてみると、いた、いた、血まみれの連中が五、六名。永田君もいた。顔から出血している。「堤君、止血剤は持つていなか。」「こんな状態だ、ある訳がない。しかし救急袋がボックスの中にある筈だ」と探したが、並んでいた筈のボックスは、影も形もない。

そうこうしている中に、数名いた負傷者が一人も居なくなり、又長井君と二人だけになつてしまつた。「どうする」。二人は顔を見合せて、又二階に行つてみた。無残な姿、窓枠も梁も倒れ、廊下は通れそうにもない。偶然、影浦内科の西の端の特別室に、基礎の〇〇先生が入院して居られるのを思い出し、救出を行つたところ、やはり負傷しておられた。動けない先生を悪戦苦闘の末、階段の所まで連れ出し、ここからは一人で逃げて下さい、と云つて別れた。

ふと見ると、隣のレントゲン教室の疎開跡の材木が、火を吹き始めていた。私は防火水槽を頼りにこの火を消しに行き、長井君は街の様子を見てくると云つて屋上に登つた。さて火を消そうとしてもバケツがない。あちこちくすぶつついて、木を叩いたり搔つたりしたが、到底消えそうにもない。

長井君が降りて來た。「大変だ、市街全部燃え始めている。小兒科の方にも、看護婦寄宿舎の方にも、煙が見える。学校の方は一面に火が出ている。人間は誰も見え

ん。二人だけになつてしまつたぞ。」「そんなら先ず、腹が空つては戦が出来ん、弁当を食べながら考へよう」と云つて、二人で地下室へ行き、ボックスのあたりをかきませたが、弁当は出て来ない。私のカバンは出て来たが、救急袋は駄目だった。

八角廊下にも火がついた。もう仕方がない、裏の山にでも逃げようと、外来本館の西側を廻つて玄関に来てみると、そこで永井先生とパッタリ出会つた。「おー、二人とも生きていたか。何処へ行く?」見ると頭から血が流れている。「先生、大丈夫ですか。外の人たちは?」「うん、レントゲンは皆元気だ。俺は側頭動脈をやられたようだが、手で押えていれば何とかなる。それよりも、負傷者を見つけ次第運び出せ。グズグズしていると火が廻るぞ。」

さあ忙しくなつた。玄関に飛び込むと、いる、いる、蹲まつてゐる者、寝転んでゐる者。誰彼の別なく、生きている者は片つ端から、肩をかして連れ出す。薬局長の眞野先生も引つ張り出した。そのうち遂に火が廻つた。

突然、二階の窓から血まみれの中山幹雄君が、「助けてくれ!!」とどなり出した。それまで氣絶していたらしい。そこには浜崎喜則君や野上義雄君等も倒れており、彼等を助けて脱出するのと、玄関口に寝かせていた北郷武照君を担ぎ出したのが、最後だった。

遂に階下にも火が廻つた。救助活動の際、事務室の金庫が開いていて、中にお金が沢山あるのを見ていたので、あとで一段落ついたら東を持ち出そうと思つていたが、それは果せなかつた。

この頃からボソボソ雨が降つて來たが、体が濡れる程ではなかつた。例の黒い雨である。永井先生の指揮で、調理所に食糧を取りに行く。誰かが乾パンやトマトサージンを相当に持ち出して來た。米は地階に六十俵ほどあったが、出せなかつた。そんな中で調理所のある男が、一生懸命に自転車を窓から出そうと苦心していたが、声をかけたら一目散に、山の上へ駆け上つて行つた。

爆発直前に、八角廊下と内科病棟との間にあった電柱の上で、二人の電工が八月一日の爆弾でやられたランスの取替え作業をしていたが、直後は何もなかつたので、

恐らく電柱もろとも吹き飛ばされたものであろう。今も気にかかっている。

反対に私は爆発五分ほど前には、外来と内科との間の渡り廊下で、長崎中学時代の同級生岡部君（岡政デパートの息子）と会い、暫らく立ち話をしていたが、ほんの五分程ずれいたら、二人とも死亡の運命にあったであろう。岡部君も現在健在とのことである。

さて、病院横の丘の中腹に集めた重症者約五十名、苦しそうだが何もしてやれない。ただ頑張れよ、と励ますだけ。翌朝は既に半数以上が死んでいた。到底助かるまいと思われた北郷君、大腿骨折の浜崎君らが生きていてくれたのは、僅かの救いであった。

丘の畠で調先生の一団と合流。先生は畠の中で、永井先生の創を手際よく結紮縫合された。その間に学生から、学長先生が上の畠に居られることを聞き、駆け上ると布切をつけた棒が立っていて（本部を示す旗）、その傍に角尾学長が横たわっておられた。「先生!!」とかけ寄ると、「おお、堤君か、無事でよかつたね。しっかり頑張つてくれよ」との一言、これが先生との最後の会話になってしまった。（学長の御子息とも長中時代の同窓）

永井先生は傷の手当が終り、一息入れた後、私と技術員の施（焜山）君に、「君たち、戦争は日本の負けだよ。この爆弾はウラニウム爆弾だ。火薬の臭いがしないだろう。木の倒れ方から、爆心地がどの辺か考えてみたまえ」と云われた。マッチ箱一杯のウランの分裂時のエネルギーで、戦艦が大西洋を往復出来るという先生の講義を想い出しながら、荒涼とした丘の中腹を、犬のように鼻をクンクンさせ、木や草が一様に東南東に向って倒れているのを確認した。

六弘法との中腹では人の姿が見当らず、丁度ツンドラ地帯のような光景を呈していたのが、今も瞼に焼きついて離れない。

突然修羅場の中に、裸の大男二人、角材を杖にして現われた。今まで血まみれの姿ばかり見ていた目には、裸の傷一つない真白の体が異様に映つた。薬専の清木先生と三年生の富田（恒夫）君だ。「永井君、元気か。向うは全滅だ。俺達二人は壕の一番

奥を掘っていたので助かったが、他は皆やられてどうにもならん。何とか元気な人に加勢に来て貰えんだろうか、頼む。」とのことに、咄嗟に私が行きますと云つて立ち上つた。薬専には幼稚園からの無二の親友小曾根邦弘君（父親同志も長中時代からの交際、姉同志も友達の間柄、私達もお互に泊つたり泊られたりの仲）や、その他多数の友人が居る。途中燃えている民家の間を縫いつつ、二人について壕の跡に行く。木造建築のため一面に何もなく、あちこちで基礎教室が燃えている。壕の近くには、皮膚が一面にベラリと剝げた全裸の死体が、何人となく転がっている。皆薬専の三年生だ。壕の中にも三、四人。彼等はまだ生きていて、「水!! 水!!」と云つて呻いでいる。水をやつたら駄目と分つていても仕方がない。壊れた水道から水を鉄兜に入れ来て、飲ませる以外に何の手助けも出来ない。三人で死者・生存者の区別なく、壕の中に運んで寝かせてやるだけだった。目指す小曾根君は、確かに作業をしていたそなが、遂に見当らなかつた。（遺体は後日発見された。「忘れな草」第一号二三八頁参照）

帰路上野（謙吉）君に会い、二言三言話ををして永井先生の許に帰る。永井先生、久松婦長等を中心に、それに私達元気な学生数名（小林栄一、琴尾誠弥、長井道郎、渡辺雄三、大浦治、その他）が集り、畠の小さい芋を掘り、転んでいる南瓜を拾い、鉄兜の鍋で野戦食、味付は婦長の救急袋にあった塩、持ち出したトマトサーション、乾パンと大御馳走、全く美味しかった。

ところが吐気がする云つて畠に食べなかつて渡辺、大浦両君は、既に放射能障害が現われていたのだろうか、後日バタバタと不幸な転帰を遂げてしまった。逆にガソガソ食べていていた者からは、一名の死者も出なかつた。その席で永井先生は、「これは確かにウラニウム爆弾と思われる。致死量以上の放射線を皆あびていいので、恐らく私のように放射線障害で駄目になるだろう。助かりたい者は今からすぐに田舎に行き、新鮮な野菜を食べて、造血機能が恢復するまでじつと寝ていなさい。死ぬまで働きたい者は私と同行してほしい」と云われたが、私は元来放射線科配属の防火班員であり、帰るべき家もどうなつているか判らず、軍艦の上で死ぬのも此処で死ぬのも同

じことだと考え、同行する決心をした。

夜になつた。丘の上から見る浦上の夜景の美しいこと、長い間毎晩の灯火管制で闇に馴れた吾々には、これがこの世の地獄であるべき劫火の筈なのに、見渡す限りの火の海に、「美しいなあ」と、唯うつとり眺めたものであつた。

夜は次第に更ける。時折り師を探す声、肉親を呼ぶ声、友を呼ぶ声々が、遠く近くにする中で、「眼科の林センセーイ、眼科の林センセーイ」と、恐らく看護婦だったのだろう、若い女の哀調を帯びた美しい呼声が、何回も何回も夜空に流れていったのを、記憶されている方も多いことと思う。

何時頃だつたか、突然小型機の爆音、そして機銃音がした。六月末の佐世保空襲の折、山手に逃げた人々を艦載機が機銃掃射した話を思い出し、皆溝にとび込み、腹這いになって隠れた。二、三回頭上を飛んだようである。その頃誰からともなく、「海行かば」の歌が唱い出され、やがてそれは元氣な者も負傷者も、丘全体の大合唱となり、何十分もの間、低く高く、繰り返し繰り返し合唱された。海軍に身を捧げる積りであった私は、今も最も好きなメロディーの一つであり、夜中、星空、劫火、生死の境と、舞台は最高で、当時の気持がこの歌一つに結晶したような感じであつた。翌朝までに丘の上で息絶えた数百名の大部分の人が、唱いつつ、或いは心に念じつつ、安らかに永久の眠りについたのであるまいか。

### 八月十日

夜が明け初めた。とても助かるまいと思われた北郷君が生きていた。浜崎君も、然あちこちに新しい紙片が落ちている。昨夜の敵機が撒いたのだろう。アメリカの宣伝ビラだ。「吾々は遂に原子爆弾の製造に成功した。これは原子爆弾である。TNT火薬二千屯に相当する。日本人民は軍閥と手を切り、速かに天皇陛下に戦争をやめさせよう、働きかけなさい。急ぎなさい」というような内容であつた。前日のビラと云い、今度のビラと云い、今まで保存していればよかつたなど後悔しているが、何

せ死ぬことばかり教え込まれていた若者、これ位で負けるものかとの氣概があつたので、何枚も拾つたが破つて捨ててしまった。

六時ごろ永井先生から、「このままでは患者の食糧も治療材料もなく、どうにもならん。県でも市でも警察でもいい。本部まで行って、大学が全滅して機能を喪失しているから、救援隊を頼むと連絡に行つてくれんか」との頼みがあり、小林、長井、私の三人がその任に当つた。

歩いて行くにも裸足ではどうにもならず、北郷君の自慢の長靴を思い出し、虫の息の彼に靴を貸してくれと頼んだ。かすかに領いたのを見て脱がせにかかったところ、「こらッ！」と大喝する男がいる。「息子の靴を取るな」。探しに来られた北郷君のお父さんだつた。訳を云つたが、「息子は死ぬかも知れん。一番大事にしている靴だから、それだけは止めにしてくれ」と哀願されたので、遂に裸足のまま、未だ方々纏つてゐる街の中へ降りて行つた。

途中落ちていた靴を拾い（勿論左右ちぐはぐ）、瓦礫の中を一直線に市内へ向つた。井樋ノ口まで来たところ、警察や警防団の救助隊が来ていて、「来たのは君等が最初だ。どこから来たのか」と、ワッと取り囲まれた。「ここでは話にならん。自分達は大学から来たのだ。本部に至急連絡せねばならぬ用事があるから、車を出してほしい」と強硬に頼み、トラックを出してもらつた。

トラックの荷台に乗り、立山に向う。井樋ノ口では市電が全焼し、黒焦げの死体がそのまま並んで乗つてゐるのを見た。武徳殿裏の壕が本部らしい。そこで浦上、特に医大の現状を報告し、至急医療品、食糧を送つてくれるよう要請した。本部では井樋ノ口から先はまだ分らず、浦上駅あたりが爆心で、それから先は、医大が救援活動をしてくれてゐるものとばかり思つてゐた。「それは大変だ、すぐ手を打つ」と返事してくれたので、任を果したとホッとし、炊き出しの握り飯（銀めし）を頬張つた。

私は浦上に帰る前に、家族の安否を気遣い、且つ自分の無事を知らせるために、八坂町の自宅に向つた。浦上の惨状に較べて、旧市内は家々が残つてゐる。夜は明けたし、もう一発同じ爆弾を落されたら今度は終りだ、と急に怖くなり、身を守るには水

中以外にはないと考え、防火用水槽から水槽へと氣を配りながら、ガランとした町々を走り抜けた。

「唯今!!」玄関を開けると、父が、母が、姉が、飛び出して來た。昨日から大勢の負傷者が、慘い姿でヨロヨロと逃げて來たのを見ていたし、人々の噂で浦上は全滅と聞いたので、私もつまづき死んだものと諦めていたらしい。父は私に抱きつき、涙を流していた。「皆元気?」「いや、さよ子(十九才)と清(十四才、長中四年生)がまだ帰らない。二人は朝早くから道ノ尾の女学校時代の友達の所に賣出しに行き、午後から幸町工場出勤には、間に合うように帰ると云つて出かけたままだ。それでは道ノ尾まで探しに行つてみよう」と今にも出かけようとするので、「若しそれが本当なら完全に絶望だ。浦上あたりでは、皆猿ぐらの小さな黒焦げ死体になつてゐる。絶対に探せないよ。それより一刻も早く矢上の疎開先に逃げておくれ。市内は家が残つてゐるから又爆撃されるよ。私は患者がいるから浦上に戻る。あちらは家も木もないから大丈夫だろう。一段落したら私も矢上に行く、そして妹や弟を探してみるから、早く、早く」と、有無を云わせずその場で皆を追い出した。これで安心。さあ浦上へ。

町中はいささか怖いので、今度は金比羅山越えで行くことにし、市民運動場まで登つたところで一休み。ああ美しい。長崎はまだ半分以上残つているぞ、と何かホッとした氣持で、暫らく眺めていた。

頂上近くの林の中で、小曾根君の御両親にパッタリ出遭う。「邦弘が帰らないので、今探しに行って来ましたが、あの現状ではスッパリと諦らめました。堤さんはよくも無事で」と如何にも淋しそう。私は昨日のことと手短かに説明し、今から焼跡に戻るから、手掛けりがあり次第お知らせします、と云つて別れた。

頂上の直ぐ下で、穴弘法のすぐ上有る陸軍高射砲隊の所に寄つたところ、新たな事実を聞かされた。そこには、上半身裸体の兵士の熱傷死体がズラリと並べてあり、その傍に無傷の兵隊が一人、茫然と立つていた。その兵隊の話によると、「丁度その時刻、民間では空襲警報が解除されていたが、軍ではB29接近中という特別空襲警報が出されており、自分は一人壕の中で電話連絡をしていたので助かつたが、他の兵隊

は皆、飛来するB29に高射砲の照準を合せており、その時白い落下傘が落ちて来たので、あわててそれに照準を切替えていた途端に、あの爆発が起つた。夏で皆上半身裸体だったので、御覧のような結果になりました。自分もちらつと白い落下傘を確かに見ました。電話も不通ですし、持場を離れることも出来ずに、これからどうしたらよいか分りません」と、泣かんばかりの表情であつた。その後の消息が気掛かりである。

正午に永井先生一行と合流。レントゲン科は全員が無事ではなかつた。非番の山下秀子看護婦が行方不明。運動場に雇用仕事に行つていたらしい。運動場には五、六体の女の死体が転がつていて、皆全裸で、放射線科の看護婦及び看護婦生徒だったそうだ。真夏の陽を浴び、既に全身がふくれ、眼球は溶け始めていた。薬専の壕の前に安置し、その夜は全員壕の中に寝た。壕内には十数名の薬専三年生の遺体が並べられ、一、二名は未だかすかに脈があつたが、翌朝は全員が絶命していた。

テニスコートから運動場に下る石段の上で、ボロボロの白衣を着た一人の女医さん(細菌教室の山田英子さん?)が、完全に発狂して大声で何か叫んでいた。声をかけ肩を叩いたが、何の反応もなかつた。この女医さんもあとで死なれたそうだ。

壕の近くの配属将校室裏に、水道の貯水槽のような大きなタンクがあつたが、そこで中山幹雄君のお父さんに会つた。中山君の弟さん(中山三郎君、医専一年、原爆死)を探しに来られ、確か虫の息ではあつたが生きていて、水を飲ませて居られたよう記憶している。

#### 八月十一日

永井先生、施先生、久松婦長等レントゲン一行に、長井と私の両名が同行し、なげなしの医療器具を持つて大学を出発。永井先生宅からほんの五〇メートルほど手前、左側の家の庭の小さい池の中で、金魚が一匹泳いでいるのを見た。熱風、爆風、飛散物、放射線等、水の中だつたら避け得ることを確信した。これは後日、大学病院から井樋ノ口に至る間に、当時鰻や鯉を養殖してあつた池があつたが、その中で泳いでい

て助かった子供のあつたことでも判る。

先生宅跡に到着。焼跡を見ると、座敷の跡と台所のコンクリートタイル張り流し台の前に、黒焦の遺体がある。座敷の方が保野先生、流し台前の方が奥様だろうと推定して、それぞれの骨を拾ってバケツに収容した。永井先生の著書中に「ロザリオの鎖云々」という項があるが、あの鎖は當時外科四階にあつた先生の部屋から出たもので、遺体には残念ながらついていなかつた。後日先生にそのことを話したら、あれが小説さと笑つておられた。その晩は先生宅の小さな壁に重なり合つて眠つた。

#### 八月十二日

純心女学校前を通り、三山にある先生のお母様の所へ向う。途中、路々に苦しんでいる負傷者を、手当り次第に治療しながら——。純心女学校でも、記念碑の上に乗つていつまでも歌い踊っている裸の狂女や、運動場をかけ廻つて狂つたような馬を見た。三山に近づくにつれ、農家の庭先は負傷者で溢れ、だんだん忙しくなつて来た。

#### 八月十三日、十四日

先生宅を基地として、なげなしの材料で申し訳程度の応急処置しか出来なかつたが、皆それぞれに飛び廻つた。詳細は先生の著書にあるが、八十数個のガラス破片を全身から摘出した或る上品な婦人、この人は一回も痛いとも苦しいとも洟らさずに、じつと我慢して私の下手な処置に耐えていたので、よく記憶に残つているが、数年後に純心女学校の有明な先生だということを知つた。

#### 八月十五日

終戦の噂を聞く。私と先生との行動はこの日の夕方まで。終戦の報はどうも本當らしい。家族のことも気になって来た頃だし、衣類も血まみれ、汗まみれ、埃まみれの破れたままだったので、先生に眼を戴き一行と別れた。三ツ山越えて夕暮れに、矢上

の現川に疎開している父母と再会した。途中、三ツ山の山頂付近で、木々の葉の先が焼けているのに驚いた。親戚の人達から、「よう帰つて来なさった」と大歓迎を受け、久々に風呂につかり、ゆっくりと撮つた夕食の味も亦格別。ここの人達も、ピカドンの一瞬は至近弾が落ちたかと、皆物陰にかくれたという話だつた。又飛んで来たと云つて、医大の印のついた用紙を、何枚も拾つてあつたのにも吃驚した。

#### 八月十六日

家族揃つて八坂町の自宅に帰り、とにかく寝る場所だけでもと掃除した。憲兵隊が「終戦はデマだ」と徹底的抗戦を叫んで、何回も通り過ぎたが、誰も放心状態で反応しない。却つて「アメリカ兵が上陸して来たら殺されるかもわからん」など、心配しながら休んだ。

#### 八月十七日—二十四日

田島耕吉君來訪。元氣を出し、救護・復興が大事だと思い、大学の焼跡に野宿する覚悟で家を出た。父はこれから妹と弟の捜索開始。

九月に入り、弟の遺骨が判明した。諫早の海軍病院に搬ばれ、八月十日午後二時死亡。収容場所は推測通り、大橋電停付近。パンツに縫いついた「長中ツツミ」で氏名が判つたとのこと、妹も一緒に死んだ筈だが、今日も尚不明である。

大学病院では、調外科病棟の一部に本部を設け、二、三名の学生が働いていた。二十四日まで死体処理作業、面会者や捜索に来られた家族の方との応待に日を過した。何分夏で腐り易いので、探し出した遺体は片端から焼かざるを得なかつた。学生、看護婦、従業員、患者ぐらいの区別しかつかなかつたが、地方から来られた遺族の方々は、皆当時の惨状を目の前にしては、誰の骨か判らないのも無理はないと納得され、「この中に私の子供の骨も混つてゐるかも分りません。子供の骨と思つて大事にします。」と涙ながらに、ほんの一握りの骨を持って帰られる有様だつた。

ただ基礎教室、例えば病理、衛生の講堂では、丁度授業中だつたので、焼跡に十

五、六名の遺体が整然と並び、一人離れて教壇の方に、先生と思われる遺体があったので、誰と確認出来ないまでも、学年までは分類出来た。

何日だったか忘れたが、病院裏門近くの水タンクの所に、青木茂、浅倉多計久、麻生弘君等が十名ほど収容され、破傷風でも併発したのか、ウォー、ウォーと苦しげな呻き声を上げていたが、これらの人達は皆亡くなってしまった。

この間の食糧は、病院の調理所に焼け残りの米が大量にあり、病院食堂跡には焼き塙が山ほどあり、水は裏門の近くの折れた水道管から四六時中噴出していたので、不自由はしなかった。放射能で汚染されていることは判っていたが、死体を焼く火の傍で炊く凸凹バケツの飯の味も、仲々乙なものであった。

毎日入れ替り立ち替り、元気な学生や看護婦が何人も立寄るので、色々の情報があり、生存者の氏名が次第にはつきりして来たのも、この頃である。

或る日、田島君と二人で、解剖の池田教授を探索に出かけた。城山にあつた家は全壊していたが、幸い焼けてはいなかった。材木を色々動かして探したが、発見出来なかつた。収穫は、台所らしい所から出て来た馬鈴薯一袋と砂糖、これは失敬して皆の胃袋に入ってしまった。

二十日頃からは、放射線科の大石、橋本両看護婦が永井先生と別れ、一緒に寝泊りして活躍してくれた。

八月二十二日、滑石の調先生の所に収容中の角尾学長が、放射線障害で亡くなられたとの訃報が入った。同日午後だったと思うが、学長の遺体を長崎に搬び、外来本館の玄関から二階へ上の階段の踊場に安置して、二十名ぐらいの職員学生が集りお通夜をした。物音一つしないガランとした廃墟に、裸ローソクが、四、五本立っている。何とも物悲しいと云うより怖い感じがする。真黒に焼けたコンクリートの壁にゆれる人の影、だんだん夜も更けるにつれ、一人去り二人去り、とうとう最後は奥様と二人きりになってしまった。ローソクの揺れる影を見ていると、寒くはない季節なのにゾクゾクする。恐怖感に精一杯耐えて、遂に奥様は枕許に、私は足許に坐つたまま、夜の明けるのを待つたが、実に長い長い夜であった。

夜が明けた。葬式の用意だ。奥様の意を受けて、諏訪神社と勝山国民学校との間にある教会に、牧師さんを頼みに走り、同行して頂いた。病院横の上で式は始まったが、火葬の段になって材木に火をつける人がいない。仕方なく上野君と私がマッチをすつて付け木の火をかざした。

それまで私は百体ほどの遺体を処理して來たが、この時ばかりは涙が出て、仲々火をつけきれなかつた。学長としてよりも、角尾君の親父としてよりも、自分の親父とこれが永遠の別れか、と思う感じが強かつたようだ。合掌

### 新興善救護所時代

八月二十五日、新興善国民学校には針尾海兵团の特設救護所が開設されていたが、そこで四期生（一年先輩）の沖（賢治）見習尉官に会つた時、「君も海軍依託生なら一緒に働くか」と勧説された。丁度学内の残存死体もほぼなくなつていたので、田島君や長井君達と別れて、二十六日から新興善学校に泊りこむことにした。

一階外來、二階一病、三階二病に分れ、若い中田大尉を隊長に、若手の軍医七、八名、看護兵、下士官、水兵十数名、日赤看護婦の藤井ミサ子婦長以下六十名ほどで、夜は当直を残し、他は富貴樓に泊つていた。収容患者は當時二六〇名ほどもあつたろうか、二階と三階の教室につめこまれていた。

私は早速三階の二病に配属という形になつたが、正規の軍医ではないので、軍の規律にも束縛されず、手隙きの際は自由に外來の加勢をしたり、収容患者の血球計算をしたりしていた。

八月三十日頃から、患者たちに白血球減少、高熱、出血斑、下痢、咽頭痛、脱毛等の急性放射線中毒症状が現われ、何らなす術もなく、毎日十五名位の死亡者が続出した。死亡者の収容場所がなかったので、すぐ前の女子商業学校の焼跡で火葬したが、その火は九月下旬頃まで絶えることがなかつた。特に九月上旬の台風の折は、三日間雨が続いたために焼くことが出来ず、一階のある一室に五十体以上の屍体が溜まり、物凄い悪臭に悩まされたこともあつた。

医療器具、包帯材料、主食等は、さすがに軍隊だけあって、当時としては物凄く豊富で、調達に苦しんだとの記憶は覚えていない。ブドウ糖などはジュース代りに五〇ccのアンプレをポンポンあけて飲んだり、アルコールに至ってはドラム缶で置いてある程であった。しかし治療法も確定せず、新鮮血の補充のみが有効手段と解つていても、周囲の人も栄養失調寸前であり、まして被爆者ときにはそれも叶わず、包帯交換、自家血液五cc筋注、ブドウ糖、ビタミンB、C、止血剤、消化剤、下痢止め、肝製剤、サルファ剤（一基のルジールが愛用されていた）等を、エネルギーッシュに繰り返しだけ。尚、色々書かれているように、重症者は注射針の跡が腐れ、出血死という状態で、多くの死亡者が出たようであった。

私自身も八月三十一日、仕事の合間に、自分で自分の血球計算をして驚いた。赤血球三七二万、白血球一四〇〇、ザーリー七八%である。九月一日には発熱三九度、包帯交換中に病室で意識が朦朧となつて倒れた。

中田大尉は二十名の看護婦を並ばせて、「他の人は兎も角、吾々の後輩である堤君は絶対に死なせる訳にはいかん。君等も疲れとるだろうが、新鮮な血液を提供してほしい。B型前へ！」かくして山口、福田、谷口さんたち、十九才の乙女の新鮮な血液を、九月三日、四日、五日と戴き、その他ブドウ糖、ビタミンB、Cを強制的に注射された。そのためか少しは元気が出たようであった。

ところが七日には、前述の小曾根君の五十日祭を行うという知らせがあつたので、三十九度の熱と咽頭痛、下痢のため、四日以来少量の食物しか摂つていなかつたが、無理して矢上まで出掛けた。然し日見トンネル近くで歩けなくなり、通りかかった馬車の荷台に乗せてもらつて、何とか行くことが出来た。

又同じ矢上で、中島直人君が寝ている話を聞いたので、見舞に寄つた。私と同様に彼も元来瘦せてはいたが、一層やつれ、蒼い顔に頭髪も抜け、出血斑が全身に現われ、高熱を出して苦しんでいた。私も彼も永くはないなと思つたが、幸にして二人とも今日まで生き延びている。

夕方やつとのことで家に帰つたが、その夜から私にも出血斑が現われた。今まで多

数の患者を診て來た経験上、いよいよ終りだなと翌日から家で寝ていたが、殆んど何も咽を通らなかつた。いつの間にか田島君が新興善救護所に私のことを知らせたとみえて、大薬、山口両看護婦が、リングルやブドウ糖液を持ってやつて來た。どうせ助からないのなら不要だと断つたが、五日後から自然に熱も下り、食事も摂れるようになつて生き返つた。

起されるようになってから、商工会議所に仮住居中の大学本部に顔を出すと、私の名前が死亡したことになって消してあり、そこに居合せた人達から、「幽霊が来た。足はあるか」と散々ひやかされた。

その足で私は新興善救護所を行つてみたが、いつの間にかアメリカの原子爆弾調査班が来aitて、三階の一番大きな角の部屋を占領し、そこで被爆者の血液検査などやつていた。彼等は軍医大佐 (Elbert De Coursey) を隊長とする五、六名の少数ではつたが、他の軍医は四十才前後の少佐級で、自ら検査物の跡片附をしたり、朝早くから夕方遅くまで仕事をして、ジープで大村に帰る時は、自分が運転して兵が後に坐つているなど、日本の社会制度の通念から考へると、びっくりすることが多かつた。

アメリカ軍医団の進駐と共に、今までいた海軍の兵士は、復員か逃げ出したのか知らないが、中田大尉（福岡）、陣内中尉（東京）の二名だけとなり、他の軍医や衛生兵たちは、皆姿が見えなくなつっていた。加えて看護婦も二十名を残して、解散した模様であつた。

恰かもその頃は放射線障害の最盛期で、重症者の死亡続出、新入院患者の増加、アメリカ調査班に対する協力等、人手不足と重なつて、キリキリ舞いの忙しさであった。アメリカ調査班への協力というのは、アナムネーゼを聞いて原子爆弾災害調査票に記入する位が主な仕事だったので、私自身の治療を続ける必要もあり、又新興善の救護のお手伝いをすることにした。その間にアメリカ軍の好意で、乾燥血漿の注射、総合ビタミン剤の投与を受け、十月中旬には漸次倦怠感も消失した。

因みに私自身の検血の結果を表記すると、

検査日	赤血球数	白血球数	ザーリー
八月三十一日	三七二万	一四〇〇	七八%
九月六日	四〇八ク	二三〇〇	七六ク
九月十六日	三三〇ク	五五〇〇	六二ク
十月一日	四五二ク	六〇〇〇	八五ク

異常の赤血球、白血球は見なかつた。

その後白血球数が四〇〇〇になったこともあるが、昭和四十年以後は、赤血球数五〇〇万、白血球数六〇〇〇と、大体正常値に戻つてゐるようである。

十月中旬には原爆以外に色々な事に出遭つた。米軍から大量のペニシリンと綜合ビタミンの給与を受け、色々な疾患に使用させて貰つたが、記憶に残つてゐるのは、

水瘤の患者が発生した。ペニシリンを投与していると、瘻疽の進行が一時的に止つた。或いは治るかも知れないと希望を抱いていたが、結局は死亡の転帰をとつた。

毎日被爆者の検血をやつてゐると、いつも白血球は減少していたが、或る日增多の患者があつた。それは影浦内科出身の久保田看護婦（通称雲助）の弟で、どう考えても急性虫垂炎としか思えなかつた。近所の外科医を探したが、連絡がとれない。久保田看護婦は、死んでもいいから手術してくれと云う。止むなく私と九大の学生三人で、急造の手術室で手術を行つた。

三人の中で、九大の二人は手術を見たことがないと云う。私は幸に調先生のアッペルの手術を二回見たことがあると云うだけで、執刀者ということになつた。数名の看護婦の助言で、ああでもない、こうでもないと乏しい知識を出し合いながら、約一時間半もかかつて終了したが、幸いペニシリン使用のお蔭で、経過良好、一週間で退院の運びとなつた。今日思えば完全な医師法違反で、冷汗三斗というものである。

ところがこの事がアメリカの軍医に知れ、自分達は大尉にならなければ虫垂炎の手術はさせて貰えないのに、よく学生の身分で出来たものだと感心し、その後彼等の態度が俄然良くなつたのは、皮肉なものである。吾々が、日本の学生はアッペルの手術

らい、誰でも出来るんだ、と大法螺を吹いたためもあつただろう。

又こんなこともあつた。香焼島の人で、突然高熱と共に全身に発疹が現われ、それが何か分らぬので、皮膚科の北村（包彦）教授を探し出し、診て頂いたところ即座に、「君、よく覚えておき給え。これが天然痘だ。」知らぬが仮、発疹発現以来三日間もひねくり廻してゐた私達は、早速風呂をわかし、クレゾール液を入れ、私も數名の看護婦も、着衣のまま頭までもぐつて全身消毒、一時は原爆よりも怖かつたが、幸にして二次感染は起らなくてすんだ。勿論患者は數日を出でずして、不帰の客となつた。

或る日瀕死の妊婦が九ヶ月で出産、医師は誰も居らず、看護婦と私だけ。母親は出産後約一時間で死亡。この時も實際のお産は見たこともなく、本の知識のみ、臍帶はどこで切つていいものかも分らず、遂に婦長の助けを求めて処置をすましたような始末。生れた女児は原子（原爆の子の意）とでも命名しようと言つてゐたが、三日目に亡くなつてしまつた。

十月中旬から九大三年生の浜、猪野両君が飛び込み、泊り込みで大活躍された。また家族が満洲に住んで帰る家がないと云つて、予科練の梶川、菅沼、松本の三名も救護所に住みついた。海軍は帰る、大學関係者は時々顔を出す程度で、二、三階の入院患者は、殆んど我等三名と看護婦達で処置していた。

或る夜我等六名が屋上でアルコールをしたか飲み、高歌放吟、酔つた勢で長椅子をかかえあげ、外に投げ捨てた。偶々折り悪く米軍M.P.のジープが通りかかり、その車の直前に椅子が落ちたからたまらない。「へーイ」という声と共に、三名のM.P.が車から飛び降り、屋上にかけ上つて來た。手に手にピストルを構えている。我等は酔も一瞬に醒め、両手をあげてエクスキューズミー、ヘルプ、ヘルプ。他の言葉が全く浮ばない。騒ぎを聞きつけ、仕事をしてゐた調査班の米軍医がかけつけ、「彼等は我々の仕事の手伝いをしている者で、故意にしたのではない。赦してやつてほしい」となだめ、間に這入つてくれたので、無罪釈放となつたこともあつた。

しかし或る日、アメリカ軍の撮つた航空写真を見せて貰つたが、それは疊二枚程の

大きさで、市内の家の瓦一枚一枚が判別出来、道を歩いている人の姿まで写っている。ような精密なもので、県庁と三菱造船所の造船台とを結ぶ線の、県庁から北の点を中心にして、五〇〇メートルづつの同心円が描いてあつた。その中心点の上空五〇〇メートルが原爆炸裂の予定地点だったそうで、そうすると湯れ谷の市内は全滅、約三キロほど離れている鉄筋コンクリート建の医大は、当然残れるから、自分達は医大の施設を利用して調査をする予定だった。目標が狂って残念だったと云つたら、西洋亭に昼食に呼ばれた席では、大佐殿曰く、「自分は日本の女性は大好きだが、男は嫌いだ。真珠湾は忘れていない」と云つたりして、全く馬鹿にしている。調査とは自分達の為の調査で、日本人はモルモット扱いだと憤慨したが、敗戦国民の悲しさ、抗議も出来なかつた。

食事は軍の米が沢山あつたのだろう、毎日銀飯がたらふく食べられたが、副食には相當に苦労したようで、市に交渉して時々浦上屠殺場まで消防自動車を出して貰骨は碎いて、本河内水源池近くで刈りとった茅と一緒に、五右衛門風呂の釜に叩きこみ、大釜一杯のスープを作つて食べさせたこともあつた。

ドロしたのを各部屋で飲んでみせるが、患者は薬だと云い聞かせても、誰も飲んでくれなかつた。私は何回か相当量の血を飲んだが、殆んどの患者が飲みこんだ後で嘔吐に悩まされたのに、私は別に吐き気などは一回も起らなかつた。

又十月下旬になると、村上（文也）先生と土山（繁雄）先生が応援に泊り込まれたり、大村の方とも連絡がとれだしたので、転送出来る患者は転送し、スムーズに運當用出来るようになつた。その頃東大から上田、二階堂先生等も調査に来られた。私は上田英雄先生（後東大上田内科教授）の助手として、ベアを組み、精力的に協力した。元氣も恢復したし、アメチャーンの時とは違い、心から応援した積りである。別れに際々一筆記して下され、大変喜んで帰られた。先生達の仕事ぶりや議論討論ぶりの激しいこと、さすが東大だなとつくづく感じ入つたものである。

十一月下旬には入院患者零となり、日赤救護班も解散したが、その前夜のお別れ会は、村上、土山両先生と私達学生三名、予科練組三名と日赤看護婦残留者二十名余り、男女の区別もなく、難居寝の三ヵ月と共に苦労して來た為か、皆うちとけて深夜までよく飲みよく食い、大賑いだつた。女性がこんなにアルコールに強く、一旦そのトレランツを越えると、踊る、抱き合う、泣く、笑う、絡むと、全く男以上に別人のようにならぬ姿を發見したのも、後日大いに参考になつたものである。

日赤の解散と共に、私も自宅に帰り、その後は新興善外来に時々出向いて、日を過した。

#### 後記

米軍の放出衣料を沢山もらい、又日本海軍の軍医用白衣、毛布、看護衣（寝巻、白、うぐいす色）等を多数もらつたが、物資不足の折から、数年間非常に助かつた。

翌年大学が大村に移つた時、私が起居していた当時知り合つた看護婦さん（吉川、山口さん達）が数名居られたので、食糧の頻回の差入れ、遠足など非常にいい思いをしたことも、余暉の一つであろう。

十月末頃から芥瓣に罹り、テールパスタや米軍の硫黄入り軟膏をつけたりしたが、なかなか治らず、年末には同病の予科練梶川君と雲仙小地獄に湯治に行き、二日間で十回もつかつたためか、すっかり治つたのに驚いた。

翌年一月、永田鑑藏君と串山村の級友竹下正七君の墓参りに行き、夜口ノ津の彼の家についてが、その後から悪感発熱、翌朝近所の女医さんに急性黃疸と診断され、一週間寝込んで彼のお母さんに散々お世話になつた。その間人工カルルス泉塩とMMのみの服用で解熱したので帰つたが、今思えば血清肝炎ではなかつたかと、思わずゾッ

とする。何れにしてもよく助かったものである。

予科練の三人は暫らく慈恵病院（市民病院の前身）に居候をしていたが、翌年早々、お家族の方も無事に満洲から引揚げて来られたので、梶川君は東京に、菅沼君は大阪に、松本君は長崎にと、別れ別れになつた。その後梶川君には、医専廃校決定の時、吾々が文部省に二回に亘り陳情に上京した折、皆泊めて貰つて大層お世話になります。菅沼君には私が大阪に転校した時、引揚者で不自由されているにも拘らず、居候させて頂き、何とも感謝に耐え難い次第である。

最後に、師を、親友を、妹弟を奪つた原爆を恨む氣持と共に、人類始まって以来の災禍を体験し、それに負けなかつたぞという気持との入り混つた複雑な氣持の中で、永井先生、中田大尉、上田先生、村上先生、土山先生に、感謝の念をこめつつ筆を擱きます。

（四八、一二、一五）

## 原爆の日の体験

長崎県西彼杵郡時津町浦郷  
当時付属医専三年生

中島直人

八月九日、空襲警報もとけて、警戒警報中の辰前十一時過ぎ、近々に迫つてゐる内科の卒業試験（仮卒業）の一夜ヅケ的勉強のため、私は内科病棟四階北側の端にある内科図書室で、学部学生六、七名と一緒に、本を読んで居りました。今考えてみると、幸運にも私は、出入口に一番近い机に席を取つていました。私は丁度、教科書の流行性脳脊髄膜炎の項をノートにメモしながら、他方では地下（現在は一階皮膚科）のボックスに置いてある弁当でも取りに行こうかな、などと考えておりました。同室の人達は、名前は知りませんが顔見知りの学部学生さん達で、矢張り卒業試験のことでした。

すると何時もの爆音が聞えて来ました。いつも十一時頃になると、約一週間ぐらい

前から唯一機のB29が飛行して、そのまま帰つて行くのが常でしたので、ある学生が、「いつもの偵察機だな」と、云い終るか終らないうちに、ザーッという落下音、既に八月一日に大学構内に爆弾を落されて経験済みでしたので、二五〇キロの爆弾だと直感し、すぐ本能的に廊下に飛び出し、少し階段の方へ走り、いつも訓練された姿勢で、両拇指で耳孔を塞ぎ、他の四指で両眼を覆いながら、図書室の隣の便所の前で床に伏せました。

炸裂音も閃光も気付きませんでした。気付いた時は真暗で、「死んだ」と思いましたが、すぐに「死んだら死んだと思うのは可笑しい。矢張り生きているのだ。ただ眼をやられただけだ」と思い返し、懸命に目を擦りましたが何も見えません。真暗です。今思い返しても、あんな暗黒の状態は見たことがありません。

その時、頭上からコンクリートらしい塊が落ちて来て、お尻に当つたことを覚えています。頭でなくてよかつたな、と時々思い出すことがあります。

暫らくして、影浦教授室の破れた窓を通して、外の様子が橙色（？）から次第に明るくなつて見えて来ました。それは綺麗な色の変化でした。

その間、何秒だったでしょうか。生きている、目も大丈夫だと思つてホッとしていると、今までいた図書室の方から、「助けて!!」と叫ぶ声が聞えて来ました。爆弾はてつきり図書室を直撃したのだな、と思つて立ち上ると、首のあたりから鮮血がふき出しているのに気付きました。頸の動脈をガラスで切ったのだと思つ、助けを求めて階下へ降りようとしたが、肝心の階段口が崩れ落ちた材木等で塞がれて判りません。確かエレベーターの左横だったと思い出し、材木を払いのけて階段口をやつと見付けだし、降りようとしているところ、図書室からとび出して來た二人が、先に降りて行きました。

続いて階段を降り、三階のロビーに来た時に、角尾内科の台湾出身の人（名前は忘れました）と出合つたので、頸の出血を診て貰つたら、頭皮からの出血と云われたので、一応安心して、一階の学生用ボックスに入れてある救急袋を取りに行きました。グループの友達や看護婦さん達も、そこに集つて来ましたが、肝心のボックスは爆風

に飛ばされて、影も形も見えませんでした。

四階から一階までは夢中で降りて来ましたが、裸足だったので両踵に釘を三ヵ所づつ六ヵ所も踏みつけており、その上右第二足指の骨折で痛みが強いので、暫らく横になっていました。まだその時点では、爆弾は内科病棟を直撃したものと思つていましたので、琴尾誠弥君も、「他の病棟に応援を頼んで来る」と云つて、東端の出入口から出て行きましたが、すぐに戻つて来て、「八角廊下も長廊下もみんな無くなっています。大学下の町家もあちこちから火を吹いておるぞ。」と大声で叫びました。それを聞いて皆は、昨日の大詔奉戴式で角尾学長が話された新型爆弾などと氣付きました。

どうしようかと迷つている中に、火が出始めたので、一応山の方へ逃げようということになりました。私は足が痛むので、その辺に散乱していた草履を片チャンバに履いて、東端の出入口から影浦内科の婦長達と一緒に脱出し、すぐ前にある薬局棟の壊れた窓から中へ入りましたが、ガラス片が散乱した薬剤室で、看護婦が一人坐つて泣いていました。手を引張つても立ち上らない。腰が抜けていることは本当にあります等、呑氣なことを考えながら、迫つて来る火の手を見て背負おうとしましたが、私の背中にはガラス片が無数に刺さっていたので、背負うことも出来ず、困つていたところに無傷の男が入つて來たので、背負つて貰つて一緒に山側の窓から出ました。

その時に入つたのは、将来増築のために一時的に塞いだ、外来本館の廊下のコンクリート壁が、二階も三階も共にはずれて落ちていたのと、汽缶場の煙空がくの字なりに曲っていることでした。改めて爆風の強烈だったことを知られ、驚く外はありませんでした。

私は近視で眼鏡を飛ばしていたので、人々の後についてソロソロ山へ登つて行きました。途中で全身火傷の百姓さんや子供達に会いましたが、「寒い、寒い。大学の先生、助けて!!」とタコ董の中から呼びかけられましたが、何もやつてやることが出来ず、振り切つてビックを引き登つて行きました。

中腹で一息入れて休んでいると、火がどんどん迫つて来ると云われ、三、四人一同となつて穴弘法の方へ避難しましたが、草履は骨折のため却つて痛いので、また裸足

になりました。首筋の出血はいつの間にか止つていたようです。

ところが今度は、左側腹部に大豆大ないし小指頭大のガラス創が三つあるのに気付きました。その中二つは止血していましたが、一ヵ所だけは淡い血清様の液が絶えず出ています。これはきっとガラス片が腹腔内に入つたためだと思います。その上嘔吐もあるので、外傷性腹膜炎になるのだと、習いたての知識で自己診断し、放置すれば一昼夜ないし三十六時間の命だ、この状況では手術も出来ないし、どうしようと坐り込んでしまいました。その頃から黒い雨も降つて来て、嫌な気分でした。

ぼんやりした近視の目で、大学の燃えているのを見て考へ込んでいる所へ、調教授が側を通られ、皆を力づけ指揮しておられるのに気付き、先生に傷を診てもらおうと、「氣にするな」と云われましたが、嘔気が続くので、矢張り腹膜炎の前徴だ、死ぬなら母親のもとで死のう、と思い立ち、山を越えて螢茶屋に行き、国道伝いに、母のいる疎開先の矢上へ帰ろうと決心しました。

金比羅神社横の井戸までやつと辿りつき、これで咽の渴きが癒やせると思つていたら、軍の人から駄目だと云われたので、ひと頑張りして諏訪神社の方へ下つて行きました。途中薬局の真野さんや看護婦さん達と、又逆に大学の方に行かれる一ノ瀬賢吾先生と会いました。

私の格好が裸足で、上半身はアンダーシャツがガラス破片でズタズタ、血まみれで裸同様のが痛々しかつたのでしよう、途中の家々の人が、下駄や下着を下さったことを覚えていました。

伊良林小学校が軍の救急病院になつてゐると聞いたので、足の痛みも忘れて急ぎ、午後五時頃に辿りつきました。診療室の講堂に入ると、すごい行列です。一度に全身の力が抜け、寝ころんでしまいました。咽の渴きがひどいので手洗の水でも飲もうと思つて、傍の壁に立てかけてあつた竹棒を杖にして立ち、歩こうとしたら側から、「こちら、その棒は駄目だよ」と云われ、振りかえると古屋野教授でした。そこで私の腹の傷のことを相談すると、軍医のところまで行かれ、ゾンデを持って来て傷にさし込み、「君、傷は腹膜まで達していないよ」と云われたので、一度にホッと安心しま

した。

吉屋野先生の足許には、全身火傷の人がしがみつき、何かを必死に頼んでいました。私もボンヤリしてその側に坐り込んでいました。

それからどれくらい経ったか、私は矢上方面へ行く救急車や消防車に拾つてもらおうと、電車通りの歩道に寝ころんでいたが仲々乗せて貰えず、仕方なく今夜はこのまま寝ようと思っていたところ、又々空襲警報が出たので、もう二度と爆弾は御免と、勇を鼓して矢上に帰ることを決心し、ピッコを引き引き国道筋を歩いていると、途中から肩を貸してくれる人があり、そのお蔭で深夜の一時ごろ家に着きました。

途中、日見トンネルの出口あたりで、螢の飛びかう光を珍らしく見たのを、今でも忘れません。疎開していた家族は皆無事でした。爆弾の落ちたあと、大学病院の書類が山を越えて矢上まで飛んで来たので、母は私がどうなつたかと心配していたそうですね。お互に無事を喜び合つたのは、云うまでもありません。

両足裏に出来た釘傷が心配になり出しました。大学付近には破傷風菌が多いと聞いていましたので、裁縫針をローソクの火焰で焼いて、傷の一つを焼き焦がそうとしましたが、痛くて我慢が出来ず、破傷風になるならなれど、やけっぱちになつて、足指には布を巻いたまま寝てしましました。十日朝四時頃だつたでしょう。

#### 【追記】

側腹部の傷のため、死ぬなら母の許でと思い、その日のうちに爆心地を離れたこと、足の傷のために被爆後、家で静かに寝ていたことが、原爆症（高熱、下血、吐血、皮下出血、口内びらん、脱毛等）で死にかかった私に生氣を与え、今日まで生きていらざることを思うと、何となく運命論者にならざるを得ません。

後日、同室にいた学部の学生達は、原爆病で皆亡くなられたと伝え聞いています。

図書室の窓が、原爆中心地に向つて開いていたからであります。

（四八、一二、二〇）

【調補記】 中島君から直接聞いたところによると、同君は腹部及足趾の傷が癒えたので、八月二十五日に大学病院に行き、初めて原爆であつたことを聞いた。帰り

に人がジロジロ見るので不審に思つたが、顔色が著しく蒼白であったとのこと。二十六日に熱はなかつたが皮下出血斑を発見し、二十七、八日頃に清木教授の講義を思い出し、原爆症ではないかと思うようになった。

八月三十日頃から痔出血（或いは下血）があり、九月二日に咽頭痛を生じたので、矢上の開業医に診て貰つたところ、そのような被爆者は一週間位で駄目になるとが多いと云いながら、頭髪を引張つたりした。その時は抜けなかつたが、家に帰つて見ると、枕の所に沢山な毛髪が落ちていた。

それからはすぐに病床につき、ブドウ糖注射、柿の葉を煎じたものを飲み、生の鶏の肝臓などを食べていた。発熱、下血、吐血、脱毛などあらゆる原爆症状が出て、この頃に堤君、達木君、土山君たちの見舞を受けたことがある。九月九日に蘿芋を食べた後ひどい鼻出血があり、数時間後に漸う止つたが、その後は漸次快方に向い、九月末には起き上ることも出来るようになったので、十月上旬に新興善救護所を訪ね、貧血があるとアメリカ製の乾燥血漿の注射を受けた。その翌日から大村海軍病院に収容され、種々の治療を受けて、退院したのは十一月中旬だったと思う。

十二月からは新興善で講義やポリクリが始つたので出席したが、三年生の生存者は極めて少なく、淋しい毎日があつたという。

以上が中島君が話してくれた大要である。

## 角尾内科予診室での被爆

広島県賀茂郡高屋町小谷三六七七  
当時付属医専三年生

西川隆志

あの日、私達のグループ（永田、永見、中山、檜林、西川、西村、野上、野口、以上八人）は角尾内科でポリクリの試験の日でしたが、永見は八月一日の爆弾攻撃で爆死しましたので、七人の級友が外来本館二階の予診室に集つて、予診をとつていまし

た。

十一時になつたので、私が「ボソボソ持つて行こうか（予診用紙）」と云いながら、何気なく部屋の窓から外を眺めたところ、斜下方の外来本館の玄関あたりにいた五、六人の人達が、あわてふためいて本館の中に走り込むのが見えました。後で考えると、この人達は空中に何かを見て、逃げ込んだものと思われます。すると突然閃光が走り、爆発音らしい轟音がして、直撃かなと思つたのは、その直後でした。

夢中でしゃがみ、やがてゆっくりと階段を降りた記憶があります。周囲の人も皆ゆっくりと歩いているのが、不思議な気がしました。

この時まで、自分一人が助かつたつもりでした。後で聞いても、皆一人一人そう思ひながら、部屋を出たそうです。鋭い悲鳴も何も聞えなかつたように思います。

徐々に外に出て、黒い煙らしいものと、そしてあたりが薄暗いのに呆然としながら、「下宿も駄目だな。」「本は惜しいことをしたな。」など考えながら、暫らく立ちつくしていました。私の下宿は、病院から五、六十メートル離れた南浜口町にあります。そして病院下の木造家屋は、全部潰れて燃え出していたのです。

病院の裏の防空壕へ向う途中で、調先生にお逢いしました。甘えるような気持で、背中を診て欲しい旨を申し上げると、簡単に「ああ、大丈夫、大丈夫」と云われました。先生は勿論憶えておいでにならないだらうと思います。

壕の中に重傷者がゴロゴロしているのを見て、初めて事の重大さを感じました。

それから壕を出て、煙を避けながら東へ東へと進み、裏の山に向つて登つて行きました。そして軍の監視哨を見つけ、付近の草の斜面に横になりました。勿論一人でです。間もなく医大の救護隊の人が二、三人來たので、「苦しいから強心剤を打つてくれ」とお願ひして注射して貰い、頭に包帯をして貰つたのを憶っています。それから草の上で夕方まで眠つたようでした。

夜になって兵隊の横穴壕に入れて貰いましたが、飛行機の音や負傷兵の唸り声やらで、少しも眠れませんでした。兵隊は隊長らしいのだが、全身にミイラのように包

帶をしていましたが、他は皆裸でした。

私はそこで握り飯を一個貰いましたが、空腹を感じないので、ただ転々としていたところ、夜半、闇の中から、「大浦の陸軍病院から来た。歩ける者はついて来い」という声がありました。負傷兵の大部分はついて山を下りたようですが、私は大儀だつたので行きませんでした。

明くれば八月十日、私はトボトボと山を下りました。方角が判らないので、とにかく真直ぐ下りました。私の傷は、頭部、左眼瞼部（これは眼鏡での傷）、右手掌、背部等に出来た無数のガラス傷です。

カッターシャツは破れ、頭には白い包帯、足は裸足です。静かな、静かな、あの世のような中を、「なんと静かだな」と思いました。なつかしい浦上の天主堂が、静かな中にパチパチと燃えており、運動場に入つてみたところ、何も建物は見えなくなつております、誰か仰むけに死んでいて、膝蓋部の骨が露出して見えています。

静かな熱い灰のようなものの中を、道ともわからぬ中を一人、それこそトボトボと西に向つて歩いたことでした。鉄道線路に沿つて歩いて、たしか道ノ尾まで行つたと思います。

どこかで下関中学の後輩に偶然に逢い、「西川さん、連れて帰つてくれ」と云われて、一緒に駅まで行きました。彼（氏名不詳）は生化学の講義中に建物がつぶれたとかで、胸をおさえて歩いていました。列車に乗るのは無料、肥前山口でおろされて宿に一泊しました。父から非常用にと貰つていていた十円札だけが、頼りでした。

何とか下関の自宅まで帰つたのが、さだかではありませんが、十一日か十二日頃です。北九州の爆撃されるのを見た記憶はありますが、十四、十五日頃から約一ヶ月間、高熱と嘔吐で寝たきりでした。

昭和十八年に下関中学から長崎に入学したのは、私一人かと思つていましたが、一年先輩の高木君もいましたし、薬専に岡本省三君も入学していました。二人とも原爆でやられて、何とも云えない悲しい氣がしました。

# 運命の日の思い出

長崎市新中川町二  
当時付属医専三年生

## 西 村 純 一

運命の日も早や二十八年余の彼方に過ぎ去つて、記憶も相當に薄らいでしまった感じですが、それでも尚断片的ながら色々と思い出される、ということは、如何にあの時の印象が強く焼きついているか、ということに外なりません。

原爆の数日前、大学病院に爆弾が投下されました。その中の一発は婦人科の手術場の上に落ち、我々の待避したのが眼科の地下室、地下と云つても半地下で、天窓から明り取りがしてありましたから、若しボタンを押すのが一瞬でも遅かつたら、婦人科を通り越して我々の所に命中していたかも知れない、とゾーッとしたものでした。その地下室にたしか内藤教授と一緒にいますが、廊下に出て前を行かれる教授の、何か放心状態の後姿が思い出されます。そして御不運にも、原爆で亡くなられた後でお聞きして、何か思い当る気が致しました。

地下室で誰かに会つたような気がしましたが、よく覚えておりません。かなり慌てていたものと思います。

外へ出たところで福島君と出会いました。お互に頭と顔からかなりの出血があり、白衣の裾を破つて包帯代りとしました。仰ぐと空全体が薄墨色で、太陽がうすぼんやりと見え、三菱製鋼所の方から数条の焰が上るのが見えて、山王神社の方向は山手の木が全部倒れ、見渡す限りノッペラボウになっていました。唯もう呆然と何を考えるでもなく立っていた所へ、汽缶室の方から全身灰を被つたような調教授が歩いて来られるのに出会い、これは大変な事だとか何とか、二言、三言交わして別れたように思います。

しかし、そんな大それた厖大な被害を受けているなど、想像もつかないことが、やがて判つて來ました。

「兎に角、外科へ行つて治療して貰おう、福島君」と話しながら、表玄関から二階へ、そして長廊下の方へ行つて、びっくりしました。木造だった廊下が全部消えなくなつてゐるのです。その時やつと、前日の大詔奉戴日に角尾学長が話しておられた「特殊爆弾」というものに違ひないと思いました。

引返して表玄関へ戻つて来た頃、下の方から全身火傷の人達が、恐らく治療をして

無くなつてしまつたような、何かに翻弄されているような、空中に浮いているような、痛みも何もない、耳の中がシーンとなるような一瞬を過ぎて、そつと目を開いてみましたが何も見えません。

閃光で目をやられたかと思いながら、顔に手をやると、生暖かいものがヌルッとします。暗闇の中で頭の中を探りました。しかし傷口ははつきりしません。一、二分ぐらい経つてからでしょうか、時間ははつきりしませんが、うすぼんやりした中を手探りで廊下に出ました。しかし廊下は両側からの窓枠や檻がバリケードのようになつて、全く通れない状態でした。仕方なく小階段を地下室まで下つて、やつと外に出ることが出来ました。

原爆落下的当日は朝から快晴でしたが、繰上げ卒業試験前の皮膚科の番となつており、十時頃中学時代の友人喜多君が、血液型を調べてくれないかと訪ねて來たので、古屋野外科本館の一階突き当りの看護婦室へ案内して、血液型を調べ、外來本館の玄関まで彼を見送り、その足で三階の皮膚科へ昇り、北村包彦教授のポリクリニに就きました。患者は工具風の青年で、疥癬だったと思います。当時のグルーピーは田川大吉郎（原爆病院）、隆杉明（耳鼻科開業）、森茂美（小児科開業）、山本雅之（東京で開業）、福島五朗（死亡）、芳賀久（原爆死）と私の七名だったと思います。皆一年休学して、やつと出て來た病人ばかりのグループでした。

南側の窓を背にした北村教授と、患者を半円型にとり囲み、私は真中の辺で右側が窓の位置でした。約十分も経つか経たない後のことでした。

全く突然、窓辺に青白い閃光と殆んど同時に、強烈なグワッという感じの、床が引

貰いに、と思ひますが、這うようにして上つて来ました。しかしどうしてよいのか、さっぱり分りません。

福島君も私も、肋膜炎上りの体に息を切らせながら、炊事場のあたりから高南、高

北へ登つて、芋畠の中を穴弘法の方へ向いました。恐らく裏門の方から上つて来たと思われる、火傷や怪我の人達が、ぞろぞろ登つて来ました。赤黒く焼けただれ、手の先から焼けた皮膚をボロボロになつてぶら下げながら、「寒いよう、寒いよう」とふるえて泣いている少年に会いましたが、手当をすることも出来ず、破れた白衣を着せかけてやるのが、精一杯の有様でした。

穴弘法に着いたら、穴の中も一杯の負傷者でした。その中で特にひどかつた同級生の某君は、頻回の下痢で立つことも出来ず、提灯をお尻に当てがつて、取つて貰つていました。奥の院では家が倒れて、大きな梁の下敷になつて死んでいる、お婆さんも見ました。

午後二時頃と思ひますが、西山の方に下ることにしました。その足で、今朝病院で別れた脅多君が氣になり、諏訪神社の近くの家を訪ねましたところ、彼は無事で、何でも発車中の電車にとび乗つたので、千馬町あたりで被爆したとのこと、ホッと胸を撫で降りました。

その日は鳴滝の親類の家に一晩お世話になり、翌日愛野に疎開中（父は応召中）の我が家に辿りつきましたが、貧血及び白血球減少のためか、フラフラ寝たり起きたりの状態が、約二週間ほど続きました。その後二、三年は疲れ易い日が多く、すぐ横になつてばかりでした。

（四九、一、三二）

## 終戦前後の憶い出

別府市上人本町一―三  
当時付属医専三年生

野 上 義 雄

もう非常に古い話で恐縮ですが、昭和二十一年、長崎医科大学が原爆で壊滅し、大村海軍病院を一時医大が借用していた頃、大村の街から空腹をかかえて久原の方へトボトボと、友人と一緒に帰っていた時、急に電に遭う一幕がありました。私はそのまま青白い稻妻を見るや否や、無意識に身をかがめて走り出しました。

友人はその有様を見て、ゲラゲラ笑い出しましたが、私がこのように稻妻を恐れるようになったのは、忘れもしない、二十八年前の八月九日、長崎で原爆にあつた時から以後であります。原爆が炸裂した際に発した光が、丁度この稻妻に似ていたからではないでしょうか。潜在的にある恐怖感が、私を無意識に走らせたものと思います。

顧りみると昭和二十年七月頃、我々は一枚十銭の誤まれる新聞の報道や、又ニュースにただ盲目的にだまされて、本土決戦の信念を固めながら、山里町北部三一三の下宿から通学していた時であります。アツツ島及びサイパン島の玉碎、各都市の空襲など、敗色の色濃い報道に対し、もう爆撃されない都市は、京都、奈良、小倉、別府、長崎等と数えるほどしかなく、毎日毎夜、いつ空襲されるかと恐れおののいた日々でありました。

大学病院の建物は黒の迷彩をつけ、更に屋上には赤で大きな赤十字を入れて、万一の誤爆に備えたものですが、これとも二十年八月一日の昼間に空襲に対しては、却つて好目標となり、二五〇キロの爆弾が六発も落され、婦人科手術室、第二外科手術室、耳鼻科病棟、結核高南病棟付近等が破壊され、付属医専の学友三名が死亡するという有様で、私は内科病棟で廻診中にこの空襲に遭つたのですが、耳鼻科に落ちた爆弾は内科病棟から三〇メートルも離れておらず、私は一階まで脱兎の如く駆けおり、伏せて居る看護婦の尻の間に頭を突込み、ガタガタと胴震いをしたものであります。



この恐怖感もまだ醒めやらぬ間に、あの原爆の落下となつたのであります。

この日は丁度内科のボリクリで、外来診察棟の三階で予診をとつてゐる時でした。

一瞬にして万物が壊滅に帰し、世の中が一変していることを、おぼろげながら認識し得たのは、果していつの頃だつたか判りませんが、グルーベの野口君、西川君、檜林君、永田君、中山君等の助けで、裏の山の中腹まで運ばれたことが、後でわかつた次第です。頭部外傷で逆行性健忘症になつたのか、下宿の名前も所番地も忘れてしまつた有様でした。

あさま外来診察棟で倒れていたら、後で出火したのできっと死んだらうと思うと、寒心に堪えません。グルーベの学友に心から感謝している次第です。

浦上の街の燃えたのも、外来診察棟が燃えたのも、記憶にないところをみると、翌日まで裏山にいたものと思われますが、それも判然としません。ただ命だけはとりとめたと安堵したことは事実です。

私は爆心地から七〇〇メートルの所で被爆したわけで、傷は頭部打撲挫創、顔面挫創五カ所、右浅側動脈挫創、右股関節打撲傷、硝子による切創約七〇カ所、両手で顔を覆つたため両全指に切創あり、左小指遠位指關節伸筋腱切断創等でした。

友人の野口隆君が諫早出身だったので、是非諫早まで連れて行つてくれと頼みましたが、右下肢が動かず、止むを得ず断念して救助を待つより外ありませんでした。しかし幸に歩けなかつたお蔭で、安静を保つことが出来て、予後がよかつたのだろうと嬉んでいる次第です。

島原から来ていた消防隊の人達に担架でかつがれ、運ばれて行つたのが「く」の字型に曲つた煙突の下で、真夏のこととて、何とか煙突の影には寝かされたものの、いつも迄も放置され、今にも煙突が折れて落ちかかりはしないかと、ビクビクしたものでした。

それから高南病棟の廊下に運ばれた時は、大勢の同級生に会い、大変心強く思いました。しかしその中に同県人（大分県）の麻生弘君がいて、精神に異常を来し、パンツを穿かしても脱ぎ捨ててしまい、遂に死亡したことは、氣持のよい友人だつただけ

に、残念でした。

穴弘法へ行く途中の豚小屋で、豚が死んでいるというので、南瓜と一緒に煮て食わされたような気がします。それから時津に救護所が出来ることで、是非運んでほしいと願い出で、トラックで運ばれたのが八月十二日でしたが、約四キロ離れた岩屋クラブで、電灯も雨戸もない板の間でした。

調教授の指揮下で、元気のよい同じ下宿の蛭崎武徳君に、色々とお世話をなりましたが、調教授が大工の使う鋸で下腿切断をされたことや、級友の青木茂君が自分で脛を診ながら、ビタカンファーを打つてくれと云いつつ死んでいったこと、一級下の賓來潮君があえなく死んだので下の河原で焼かれたこと、その遺骨の容れ物がなく、ミルクの空缶に入れて家族に渡したこと等、が思い出されます。

前夜は無灯下にボソボソと話し合つていた隣の人が、朝には死亡していて、元気のよい級友達が、毎日のように三人五人と運び出していたのが、忘れられません。

終戦の福音放送もなかなか信用出来ませんでしたが、一足先に帰る同級生の吉田武郎君に、怪我はしているが元気でいると父への伝言を頼み、何とか杖をたよりに歩行練習をしたものでした。

当時は創の消毒も不充分で、衛生材料もなく、ましてや抗生物質等も何一つない時代であり、患者の多くは創に蛆がたつて卵を生みつけ、これが夏の暑さですぐに蛆に変り、生きながら蛆がわく有様でしたが、木戸先生の戰陣外科で教わったマゴットテラピードと云いながら、取り除いたものでした。

十八日にはこの救護所も閉鎖されるというので、時津に行つたものか、大分に帰つたものか、なかなか思案が纏らず、道ノ尾まで出たところ、長崎の人々が行李を背負つて、大勢線路伝いに行くのを見て、どうしたのかと尋ねたら、米軍が長崎に上陸して来ることと、道ノ尾駅から上り列車には満員で乗れないで、止むなく下りで長崎行き、長崎から上り列車に乗りました。しかしこれがまた満員で、既に便所に入っている二人に頼み、私も入れて貰つて何とか鳥栖まで行き、更に小倉、宇佐と乗替えて、十九日午後、故郷に帰つた次第でした。

追記 私は二十三年に学部に入学、二十七年卒、戦時中は調教授の近くに下宿していって、学部四年の宮城美津次さんや、医専同級生の蛭崎武徳君と同宿でした。

卒業後、三十五年まで第二外科にて、四十三年から現住所で外科を開業しております。

(四九、一、四)

## 級友浅田君の死

佐世保市大宮町二六一五

当時付属医専三年生

原 寛 翌

原爆投下の前日、私は河村大君と誘い合せて、荷物を取りに佐世保に帰っていた。翌九日の正午頃、恐らく夕立も来そうにない晴天の空模様なのに、ドロローンという様な音を聞いて不審に思ったが、それ以上氣にも止めず、翌十日に長崎へ向った。

所が、大村あたりから少し様子が変って、「新型爆弾」という声を聞いた。大草あたりから愈々ただならぬ気配がし、道ノ尾の手前位から列車は止り、折り返し運転となつていたので、それから先は歩いて浦上に入り、あの光景を眼のあたりに見たのである。

見渡す限り、どす黒い硝煙が立ちこめ、方々で木造と云わざ鉄骨と云わざ、真赤な炎を出してパチパチと燃え盛り、浦上天主堂がすさまじい音を出して崩れ落ちる音が、今なお思い出される。大きな鉄柱や線路が飴のように曲げられ、倒る所に人々がうずくまり、或いは最早事切れて横たわっている。

ほんの数十分前まで、真夏の太陽を浴びながらここへ来たというのに、全く日暮れ時のような暗さで、小雨すら降っているのではないかと思われた。茫然として学園に向つてトボトボと歩きながら、友人達に会合わぬものかとあたりを見廻わし、大学では基礎教室から病院へ、それから裏山まで彷徨い歩いた。

確かに丘に登る途中で、浅田君（長崎市出身）が腰を下して力なく坐っているのを見

かけ、私もそこへ坐つて何か話したように思う。ただ彼は大変疲れているようで、黙つてポケットから煙草を出して私にも吸えと云い、二人で吸いながら暫らく時を過しつたようと思うが、はつきりした記憶はない。彼も亦亡くなっている。

場所をはつきり思い出せないが、薬理の祖父江先生が、「どうもみんなの症状を見ると、レントゲンカーテー（宿醉）のようだ」と、云つておられたのを思い出す。又病院裏の丘の上に、角尾学長と成島先生が居られるということを聞いた。成島先生は確かにお見かけしたように思う。学長はかなり弱つておられるということも聞いた。それからどこで廻り会つたか、同級の執行政善君、村島秀治君、河村大君等と落ち合い、一応帰省して出直そうということになつたようだ。

私は調先生のアンケートに、翌十一日に佐世保へ向つて帰つたと報告していたが、執行君に電話を入れて確かめたところ、十日の夕刻であることが判明した。あまりに暗い中を歩いたので、今まで一晩過したように錯覚していたものと思う。

兎に角、道ノ尾の折返し列車まで歩き、四人で鉄兜にアルコールをついで、廻し飲みしながら帰つたように思う。私は家へ帰つて又すぐ出掛けようとしたが、家人の引き止めに合つて、そのまま終戦を迎えた次第である。

その頃、佐保光康君が私の家に疎開して來ていたが、彼の頭髪がボロボロと抜けるので見て、恐ろしく思ったのを憶い出す。まぎれもなく原爆症である。ただ彼は幸運にも、現在東京で活躍中である。

幸に私は今日までこのようにして生きて來たが、死亡された諸先生、学友諸兄には、ただただ申証なく、安らかにお眠り下さいと合掌するばかりである。

(四九、一、七)

# 原爆体験記

福岡市西区田島五丁目一一四一  
当時付属医専三年生

## 原

## 駿

あつたこと等を考えると、運命にも因果関係があるなどと唱える人々に、同調することは出来ない。

十一時頃、ズズーッという異様な爆風音を感じ、「来たな」と思うと同時に、強い風圧と天地晦冥の中に叩き込まれた。直撃弾を受けたとのみ思い、咄嗟に机の下にでもぐつた。閃光は余り記憶がない。

求めに応じて筆をとったが、既に二十八年前のことでの記憶のあいまいな点が多く、当時徒らに右往左往した個人的回顧に過ぎない記録が、世を裨益することのないであろうこと、記述が冗長化し、且つ客観視し得ないであろうことなどを惧れるので、数年前、眼科教室での原爆慰靈祭で述べたことを骨子に、事実の列記に留めたいと思う。

×      ×      ×

昭和二十年八月当時、私達は付属医専の三年生で、戦時線上げ短縮のため、既に卒業試験に入っていた。春休みも夏休みも返上し、講義はぎっしりつまっていたし、教育内容は質・量共に、平和時に匹敵していたようだ。

「忘れな草」の編者の調教授なども、手術がすんでもから臨床講義をされたし、しばしばそれを暗くなるまで続けられた。調教授がレ線写真の骨を模写される時、我々はその巧みさに感嘆したものだ。空襲がひどくなつた時期、外来棟の地下救護室で手術をされるのを見学したことがある。

八月九日当日、私は丁度木戸先生の外科の卒業試験に当っていた。その頃の調外科の医局や手術室は、南講堂の裏から中央廊下を曲り込んだ所にあり、小じんまりと纏まった一角で、教授室の真下に医専の控室があり、廊下を隔てた真向いの部屋に、学部の控室があった。教授室も挨拶の折に一度入つたが、そう広くはないが涼しい落着いた、如何にも学者の部屋といった感じで、隅に金魚鉢があつた。

被爆の際、グループの他の者達は病室廻診についていたが、私は独り控室に残つていた。真上には調教授が居られた筈である。木造家屋にいた人は死亡し、鉄筋コンクリート内でも、爆心側に居た人は総て死亡したこと、偶々私の位置が爆心と反対側に

あたりを見ると、もぐつた積りの机も、読んでいた外科の本も、傍に置いた筈の上衣なども総て見当らず、部屋の中は爆風のために吹つ飛んで、ガラン洞となり、土色に焼けている。

事態がよく呑みこめぬまま外へ出て見ると、まだ天空は冥く、渡廊下は倒壊して、下敷きになつた人であろうか、あちこちから女の悲鳴が上つてゐる。

瓦や木材を越えて、当時下宿していた山里町の被害は如何かと、崖の所まで出て浦上の町を見下した時の状景は、この世の地獄絵図そのもので、如何なる誇張した表現も、誇張し過ぎることはないと思われた。谷間の町一帯は壊滅し、あちこちから火を吹き、阿鼻叫喚の声は天地に満ちていた。ナポレオンが燃えるモスクワの町に呆然と佇む絵があるが、あれを拡大増幅しても到底及ばない。

倒れていた廊下も火を吹き出した。逃げ道は金比羅山以外にはない。散乱する木材や樹木に足をとられながら、穴弘法に向うと、ぼつぼつと周囲に、やはり避難する人々が見受けられ始めた。精神科の上の辺で、北村（包彦）教授と青木茂君（同級生、後に死亡）に出会つた。道ノ尾に向うという二人に別れ、道なき道を辿つて行くと、所々に負傷者が倒れている。手足に出血している人もいたので、ゲートルを包帯代りにと思ったが、何時まにか失くなつていて。やつと道らしい所へ出ると、避難して来た人達が行列をなしていた。振りかえる

と、浦上の町全体が一大溶鉱炉化して、紅蓮の炎は天に冲している。

現在、原爆公園に醜悪な巨人像が建っているが、以前はそこに刑務所があった。苦役に出ていたと思われる囚人服の数名が、被災者を力づけたり、リードしたりして登つて行くのが見られた。彼等はそのまま逃亡したのだろうか。

頂上近くまで来た時、同級生で同下宿の吉川高覽君に出会った。小男で一見優しそうだが、仲々肝っ玉の坐つた所もある男で、私の顔を見るなりシャツの胸から万年筆を出して、振りまわしながら、「これだけ助かつた」と時々大笑した。ここで初めて笑顔に出会い、私もつられて笑つた。

暫く行くと大学関係者の一群に出会つた。中に古屋野教授の姿もチラリと見うけた。日頃の学問学術が無力化し、虚脱したように行んでおられる姿に、非人道的な戦争の象徴を見る想いがした。古典的様式の戦争は、必ずしも嫌いではない私だが、近代戦は罪悪であるということを、痛感せざるを得なかつた。

下界は尚盛んに燃え続けていたが、私はそれを後にして旧市街に下り始めた。後で聞くと、浦上の町は夜を徹して燃え続けたといふ。山を下る途中、頭に包帯をし杖をついている同級の浅田君に会つた。好漢浅田は、「俺なんかよか方ばよ」と、長崎弁丸出しで気丈なことを云つていたが、後に死亡した。

下り中腹の畠の中の小屋に数名の学生がいたが、その中に当時医専一年在学中の弟（註、原義君）を見つめた。奇遇というより外はない。聞くと小野直治先生の解剖学の講義中だったそうで、閃光の一瞬、小野先生のアッと驚いた顔を最後に、何が何だか判らなくなり、気がつくと裏の山を一心に逃げていたという。今にして思えば、よく逃げて来られたものと嘆する外はないが、柔道で鍛えた頑健な体が、不可能を可能にしたのだろう。

他の人々は、街へ下つて又爆弾の洗礼を受けるより、ここに留つているようにすすめたが、私達兄弟は、何とかして故郷の佐賀へ帰ろうと山を下りた。

西山の諏訪神社の裏手に出たが、旧市街は全然被害がなく、悲惨な浦上から來た目には、却つて白日夢のように感じられた。その夜は片瀬あたりの横穴壕で過したが、

附近的の市民で満員の有様、話は新型爆弾の恐怖に終始し、頻発する警戒・空襲警報に怯えながら、互に眼を見交していた。弟は次第に起居が困難になり、遂には寝たきりとなってしまった。

十日以後の事は、余り長くなるので、記述を端折ることにする。

十二日夜までは、段々意識のなくなつて来た弟を、担架であちこちの救護所や横浜壌へ移動するだけの仕事に追われた。偶々長崎にいた父やその部下の人達、見も知らぬ町の人々の援助をうけ、医専三年中山幹雄君一家の好意も受けた。

その合間に、救護所で医療班の手伝の真似事もした。瀕死の人やひどい外傷を受けた人が一杯で、我々はマーキュロでもヨーチンでもない、多分リバノール液と思われる黄色い液を、たた塗りたくるだけであった。

十二日、長崎本線再開近しと聞いたので、夜になつて弟を長崎駅に運んだ。闇の中を灯もつけぬ列車は、時ならぬ停車を繰返しながら走り、十三日の朝十時頃、肥前神埼駅に着いた。その後は母が看護した。十四日朝、弟は死亡した。翌十五日に日本は降伏した。予想はしていたが、原爆に続く深刻な打撃であった。

米軍の進駐を控え、不安と慌しさに満ちていた頃、長崎へ引き返した。浦上一帯は大学病院と三菱製鋼所の残骸以外には、一物も止めていなかつた。南講堂付近に大学関係者は集つていたが、その中に数人の級友もいて、ことに日頃颶爽としていた麻生弘君の変り果てた姿は、痛ましかつた。

山里町の下宿の跡は、隣の国友名誉教授宅の庭のあたりに、先生の胸像が残つているのみで、人影もない瓦礫の連なりの中に、尚残る屍臭が漂つていた。

忽然と一人の人が現われた。私と同下宿であった学部一年の瀬口恒雄君のお父上であつた。はるばる豊前の中津から、令息の消息を求めて来られたのである。死亡した場所も遺体も不明で、虚しく四眼を眺めながら、「生きてはいまいと思っていたが——」とつぶやかれる。身を灼く夏の陽光の下ながら、氣分は陰々滅々たるものがあつた。

思えば当時私も、若者のもつ非情の一面と、相つゞ戦時下の異常事態に対する馴れ

とで、以上の総てに割合い冷静に対処し得たと思う。現在の私だったら、どの程度耐え得るであろうか――。

その後、後遺症らしいものもなく、特別な被爆者意識も持たずに過して来た。今にして、弟の死をしみじみと哀れと思う。即死であれば悲しみも少なかつたかも知れない。例えば、解剖学講堂には白骨が教壇に一つと、学生のものが多数机についたままの形で、順序よく並んでいたという。だが他の基礎講堂内の遺骨は散在していて、苦しみ多き死であったことを物語っている。

然し、生き残った私達にとって、必ずしも生ける駄ばかりはなかつた。これが死者に対する幾らかの慰めにならないだろうか。住むに甲斐なき世と観する時、彼等は死をを得たと強いて思うのは、私獨りの慰めだろうか。

(四八、七、一〇)

## 軍用バスで滑石の仮救護所へ

長崎市大浦町八一三一  
当時付属医専三年生

北郷武照

八月九日、朝七時から空襲警報が発令されたが、敵機襲来ではなく、九時に解除されて警戒警報に移った。私は古屋野外科の石崎助教授と話をしていたが、病棟にある助教授室から外来本館一階の外科外来へ行つた。卒業試験中で、同じグループの深山君や范君たちは既に予診をとり終え、窓の近くで風を入れながら話をしていた。私は廊下側に坐つて、患者の予診をとり始めていた。

間もなくゴーッと、爆弾の落下に似た異様な音が聞えた。と思うと同時に、ピカッと物凄い閃光が走つた。アッと思う間もなく、ドカンと吹き飛ばされた。

それからどれ位の時間がたつたか判らない。気がつくと、後頭部から背部にかけて、かなりの傷を受けていたようである。まだその時は原爆とは知らず、八月一日に病院が爆撃された時と同じく、本館が直撃弾を受けたと思った。通りかかった友人が、附近にあつた白布で頭部の圧迫包帯をやつてくれたが、私は<sup>うつぶせ</sup>になつたままで

動くことが出来なかつた。

そのうち担架で運び出され、一時内科病棟の地階に置かれたが、全館に火がまわつたため外へ運び出された。担架に俯せになつたまま自分で脈を調べてみたら、微弱でわずかに触れる程度であつた。

病院本館前では、永井隆先生が頭に包帯をした姿で、色々と指揮されていたが、私の側に来て、「北郷、君もやられたか。こんな状態ではどうしてやることも出来ない」と云いながら、肩にかけた水筒から水を飲ませて下さつた。それから病院上の広場に運び上げられた。

何時頃だったかはつきりしないが、多分夕方近くであつたろう、父が尋ね探してやつて来てくれた。自宅の様子をきくと、弟は即死、母は負傷。学徒動員で兵器製作所に行つている妹の消息は、不明のことであつた。

やがて水と何か食物を持って来てくれた。水は飲んだが、何も食べなかつた。日が暮れて來た。病院はドンドン燃えているようであつた。その様子を見ようと、伏せている身体を少し横に向けようとするが、思うように動かすことが出来ない。長時間かつてやつと横を向くことが出来た。

周囲は負傷した人々の叫び声、呻き声などがやかましく、眠ることも出来ない。暫らくウトウトするうちに、少し睡気がさして來た。このまま眠つて楽に死ねたら、と思つた。

気がつくと夜が明けていた。その時ひょっとすると助かるかも知れないと思つた。

しかしこのような状態では、充分な治療は受けられない。しかもかなり出血しているので、助かるためには何か食べなければ、と急に食欲が出て來た。でも一日中カンカン照りの広場に置かれた我々負傷者にとっては、苦しくてたまらない。やがて高南病棟の焼跡に移されてホッとした。そこで頭部や背部の硝子片を取つてもらい、傷の手当も受けすることが出来た。

最初に手当をして頂いたのは、角尾内科の土山敏雄先生であった。傷をアルコールで消毒し、背中や頭の大きな硝子片を取り除き、沃丁もマーキュロクロームもないの

で、アクチゾールのアンプルを切って、振りかけて貰ったように記憶している。

そこへ父母が訪ねて来たが、母は肩胛関節を脱臼していた。木戸先生から診てもらつている時に、丁度調先生が来られて、母の脱臼を整復して頂いた。

永井先生も、私が生きていたので喜んで下さった。どうやら身体も少し動かせるようになつた頃、十二日の夜であつたろうか、陸軍の救護隊軍医として來ていた松永春二君の兄さんが、私を軍の救護用バスに乗せてくれた。

そのバスには角尾学長を初め、職員・学生たちの負傷者が、約二十名ほど乗つてい

た。暗い闇の中を徐行して、やがて調教授の開設しておられた仮救護所（岩屋クラブ）に着き、そこに収容された。

その夜角尾学長は暫らく坐つて、元気に色々なお話をしておられたが、翌十三日の

朝、山根先生と一緒に滑石太神宮の拝殿に移られた。山根先生の方は学長に較べ、大分重傷のように見受けられた。この救護所に、滑石町に疎開中の北村包彦先生も一度お見えになつたが、硝子破片で負傷しておられたのに、大変お元気であった。

救護所で一緒だつた久野さん（学部四年生）は、手と頭を負傷し、傷口には蛆がわいていた。傷の手当は主として木戸先生からやつて貰つたが、あとでは無傷の同級生も数人来て、治療を手伝つていた。

血便を出す下痢患者が出たので、当時はテッキリ赤痢と考えられ、薬がないため、調先生が梅エキスを集め飲ませるように、指示されていたように記憶する。

この仮救護所でも、被爆者が次々に死んでいった。同級の青木茂君は、顔半分を火傷した姿で死亡した。赤痢様下痢をしていた人達は大抵死んだ。患者が死ぬと下の河原に担いで行って、同級生の学生達が焼いていたが、私は幸に次第に体力を恢復して、元気になっていったので、お世話にならずにすんだ。

八月十五日、私はこの救護所で終戦になつたことを聞いた。十六日だつたか、私は長崎に帰ろうと思い、長い棒を杖にして、裸足で坂本町まで帰つて來た。

浦上一帯は焼野原と化し、方々に瓦礫の山が出来ていた。大学病院本館前の広場は、運び込まれた屍体で一杯であった。

坂本町の自宅の焼跡に行つてみると、家族は石垣に戸板を立てかけて、雨露をしのいでいた。大橋の兵器製作所に勤務されていた妹が、無事に帰つて来るので嬉しかつた。然しその後、八月三十一日には姉が、九月五日には母が、原爆放射能の障害で死亡した。

私の傷や、その後に発症した膀胱や、白血球減少などの症状が恢復し、再び元気を取り戻すには、相当に長い時日を要した。

（四九、一、九）

## 被爆体験略記

大阪府東大阪市荒川二一五九  
当時付属医専三年生

前田春雄

八月九日が古屋野外科の卒業試験だったので、前夜はその準備に追われたが、警報が度々出るので能率が上らず、遂に徹夜して九日の朝睡眠中に原爆落下、被爆場所は稻佐町一丁目の稻佐郵便局。当時局には女事務員が三名いたが、驚きの余り私の所にかけより、一緒に彼女達をかばいつつ、爆風と反対の方向に避難した。その夜は稻佐警察署で、一人で被爆者の治療に専念した。  
(四八、一二、二八)

## 原爆被爆の体験

北九州市小倉区井堀町五丁目  
当時付属医専三年生

松永信之

昭和二十年八月九日午前十一時二分、落下傘に吊されて投下された新型爆弾は、松山町の約四九〇メートル上空で炸裂、一瞬にして全市を粉砕し、死者七三、八八四名、負傷者七四、九〇四名を出したと伝えられるが、傷者の一人として、当時の惨状

を偲ぶ時、身のひきしまる思いがする。

受傷時意識を恢復したのは、既に夜半であつたろう。真暗の中にワーッというような、異様な騒音が、重く廣く、而も深く持続的に聞える。それこそ傷者の苦痛の叫び、阿鼻叫喚というのである。

「助けてくれ!」「水をくれ!」苦しそうな呻き声が、悲痛な響きでこれにまじる。

うつぶせに倒れていたのだろうか。頭を一寸動かしても、頭部に激痛がはしる。頭をかかえ、膝を曲げて苦痛に堪え、幾何の時がたつたものか、顔をあげると、浦上駅の方面にあたつて、大小の火が点々と燃えている。眼鏡がなくなっているので、ボンヤリとしか見えないのだが——。爆音をひびかせて飛行機が近づいたことがわかつても、動く気力はない。

この日の朝、下宿を出る時、何か予感があつたのか、ズボンを二枚もはいて、三角巾と包帯を腹に巻きこみ、大事な書物はリュックサックに入れて、防空壕に入れておいた。但しこの書物は、後に雨にぬれて出て來た。

当時は卒業試験中で、調外科の担送患者は、前日に建物北端の地下室に移され、被害の瞬間には、丁度木戸先生について、この部屋の廻診を見学していた。北窓を背にして吉川高麗君と一緒に立っていたが、爆発の閃光はおぼろげに覚えているものの、次の瞬間から意識恢復までは、全く空白である。吉川君は殆んど外傷を受けなかつたそうで、材木の下の私を助け出し、病院の上の芋畠まで運び、後頭部や背部から出血するのを見て、傷の応急処置をするために、背部の大きなガラス片を除こうとして指を入れたところ、人さし指の根元まで入つてしまつたとのことで、この創ではとても一緒に逃げられないと判断し、彼は山を越え諏訪神社の方へ逃げたと、後日聞かせてくれた。また顔見知りの看護婦さんが、私が死んだものと思い、席をかけてくれたそうである。

気がついた時の場所は、更に芋畠より上の野原だったので、或いは下の方から火に追われ、人々が上へ上へと移動するのにつられて、這い上つたのかも知れない。

翌日、夜があけて見ると、すぐそばに学友の芳賀久君がいて、上半身はすっかり焼け爛れていった。何處か治療してくれる所はないかと相談し、二人でトボトボと坂を下りかけた。途中学友の大浦治君に出会つたが、彼は元気で、傷者に食物を与えるために、飯盒でジャガ芋を煮ていたが、食べるよう勧められても、全く食欲がない。彼は乾パンの人つた袋を腰にさげてくれた。

更に治療所を求めて、燃えている浦上天主堂の横を通り、松山方面に向つた。道路の痕跡もなく、燃えつきの灰燼や瓦礫をふんで、真黒焦げの死体を見て、恐怖や憐憫の気持が記憶にないことから、全く呆然自失の体だつたというのが眞実であろう。漸く線路に出た所で、家族を探しに来たと思われる数人の人と会い、全市が消滅して救護所どころではないこと、汽車は道ノ尾までしか来ないこと等を聞き、遂に二人は家に帰ることを決心、枕木が焦げ、飴状に曲つた鉄道線路伝いに歩き出した。道ノ尾まで三、四時間もかかつたであろうか。駆につく頃また爆音に追われ、橋の下に避難したのも思い出される。

道ノ尾から貨物列車の片隅にやつと乗ることが出来た。乗ると云つても、貨物列車のことだから、床にしゃがんでいたことだろう。その様子は全く記憶にない。

諫早駅で芳賀君と別れ、大村線に乗替えたわけであるが、偶々傍にいた五十才年配の婦人が、私の血にまみれたボロボロのシャツを見て、「古いけれど洗つたシャツですから——」と云つて着替えさせ、着ていたシャツはくるんで腰につけて下さつた。このシャツは洗つて、長い間母の簞笥の抽出しにしまわれていた。当時この婦人のお名前を聞きそびれたことが、残念でならない。

佐世保駅で更に柚木線に乗替えたが、同じ列車に叔父や姪たち数人の親戚が乗り合させていたのに、私が誰だか判らなかつたとのこと、頭から顔、手、シャツ、ズボンに至るまで、凝血と埃にまみれ、穴だらけのボロを纏つて杖をつき、放心状態を呈した姿は、まさにこの世の者とは思えなかつたと云う。

汽車を降りて病院に立寄り、背中の創から数個のガラス片を剔出されたそうであるが、今以つてレントゲン写真を撮ると、母指頭大の異物が数個見られる。その後三十

分かかつて坂道を上り、漸く我が家に辿りつき、コップ一杯の砂糖水を飲んだが、その味は今も忘れられない。

そのまま床につき、激しい頭痛と嘔吐に悩まされ、呻吟の一ヶ月を送ったわけである。

帰宅後數日たつた頃であつたか、四十度に及ぶ高熱と扁桃腺腫脹が起り、白色の苔がついて、シフテリーではないかと大騒ぎになり、血清注射を受けたところ、全身

に発疹が現われ、下痢を來した。脱毛は著明でなかつたが、一ヶ月後でも白血球数は三千、赤血球数は二百五十万であつた。

八月の末頃であつたろう。島原の松本勉君から——彼は入院治療中であつた——「全身に皮下溢血斑が出たので、長くはないだろう」との便りがあり、頭や胸に包帯をしたまま島原まで出かけたが、出血斑は蚤に刺された跡だと解り、泣き笑いしたこともあつた。

十月、大村の海軍病院で講義が開始され、死亡者名簿の中には、幽靈ではないかと学友にからかわれたりしたが、再会し得たことは大変嬉しかつた。

しかし昭和二十二年三月、付属医專は「長崎医大の復興に支障を來す」との理由で廃校となり、学友は全國に分散を余儀なくされ、見知らぬ土地で、食糧事情の悪条件と戦い、得も云われぬ辛酸を嘗めたのである。一緒に東大付属医專に転校した和田政太郎君は、原子病で頭髪が全くなくなつた程ひどい放射能を受けていたが、転校後の六月に肺結核を發病して略死し、国立大蔵病院で肋膜外充填術や横隔膜神經捻除術を受け、東大物療内科に移つて、胸廓成形術も受け療養に専念したのであるが、二年遅れて卒業後、間もなく中野区古田の聖母病院で亡くなつてしまつた。

核爆弾の筆舌に尽し難い虐殺性を体験し、二度とあるまじきを強調すると共に、平和な現在が幾多の戦争犠牲者によつて得られたものであることを銘記し、病める隣人健康回復に微力を捧げている次第である。

最後に、謹んで、原爆の犠牲になられた角尾学長はじめ、諸先生、先輩、後輩の諸兄の御冥福を祈る。

(四八、一〇、二〇)

## 二十八年後の今日思い出すことなど

千葉県安房郡千倉町平館七一七  
当時付属医專三年生

松 永 春 二

話は少し遡るが、二十年八月一日、私が午前中に調外科三階の検査室で、血液塗抹標本の白血球分類をしていた際、本館の方に爆弾が落され、同級生の永見（幸夫）君や、二年生の大野（明）君、益田（良和）君たち三人が爆死しました。その時爆弾の破片を拾つて帰宅し、母たちに、「爆弾なんか落ちても、僕は死なんよ」と、法螺を吹いていたので、原爆の際も家では、大して心配していなかつたそうです。

さて、原爆当時のことは、逆行性健忘症のためか、確かにないというのが本当のようです。例えばあの際急上昇（？）したB29の爆音も、ずいぶん後になって聞いたことを思い出しました。着衣はたしかランニングシャツに白衣を着た薄着でした。本館の中央玄関に近い階段付近にて、突然物凄い高熱感と暗黒感で倒され、脳震盪を起したようでした。気がつくとあたりは暗く、本館の前庭に這い出してみると、こちも夕方の如く黄色の世界でした。

たしかあの朝はよく晴れた天気でした。後頭部から背部、大腿部にかけて突つ張るような痛みを感じながら、裏山の方へ歩いて行きました。数人の男たちが、鉄兜を背中にだらりとかけ、丁度幽霊のような恰好で、背中をまるめてトボトボと山の方へ行つていました。

私は中等度の近視なので、眼鏡を吹つ飛ばした時は、朦朧としか見えない筈でしたが、下の岩川町の方では、既にあちこちに火の手が上つてゐるのが分りました。蛭崎君（？）だったでしょうか、「新型、新型」と大声で叫びながら、山手の方へ行つてしましました。

ボロボロの白衣の一部を裂いて負傷者の手当をしたり、歩けない人（たしか男の人）を背負つて、山の方へ移動したりましたが、その場に永くいると火事の煙にまかれ

そうだし、私の自宅は思案橋にあつたが、その方も心配になつたので、長崎駅の前の山腹を通つて勝山小学校の方へ歩いて行つたが、途中どこかに倒れて意識を失い、目が覚めた時は勝山小学校に収容されていました。後頭部の創からの出血が多かつたので、脳貧血でも起したのでしょうか。

この山腹沿いに移動中、黒い小雨に遭つた記憶があります。寒さと渴とで気がつくと、夕刻でした。私は小学校教室の板の間に寝かされていました。誰（私の印象では古屋野先生？）かが黒い背広を着せてくれ、チョークで私の名を榜の床に書いてくれました。渴がひどいので側にいた少女に水をねだり、茶碗で「くちくち飲んだら突然嘔吐し、吐物はそのままにして、顔をそむけて寝ました。

そのうち伊東君（同級生）が、元気にも私の家まで連絡してくれたので、警防団の方々が担架を持って迎えに来られ、思案橋の自宅で机の下に蒲団を敷いて寝ました。その時家人は防空壕へ行つておつたと思います。

その後、何日だつたか覚えていませんが、兄（調註、松永一君）が陸軍の救援隊として井樋ノ口のお寺（聖徳寺）の高台に来て、被爆者の救急処置をしていましたので、一、二日加勢に行き、帰りには自分の傷の手当材料をもらつていきました。大変暑い日々でした。

私は終戦後、高知県の中村市や高知市で勤務していた頃、てんかん発作が出て困っていましたが、脳波にもはつきり出ないので、自己診断で外傷性てんかんの晚発型ではなかつたろうかと思つております。原爆被爆の際に受けた脳震盪が、実際は軽い脳挫創ではなかつたのでしょうか。幸に現在では、もう十年以上、全然発作が起りません。

また放射能障害が少なかつたのは、コンクリート建物内で被爆したことや、被爆後早く中心地から脱出したこと、比較的よく安静を保つことができたことなどによるのではないかと思います。私を助けてくれた伊東君は、その後放射能障害で死亡したそうで、何となくアイロニーを感じさせられます。私の場合、放射線量がBergoni Tribond-eauの法則による、刺激量ぐらいだったのではないのでしょうか。

総ての誤の結果が戦争であり、全ての謬の始まりが落第転校でした。ABCに勤務していた頃、ある米人から、「長崎に原爆を落したのは、太平洋戦争の起源となつた真珠湾攻撃の際に使われた魚形水雷を製造している工場を破壊する為だった」と、直接聞いたことがあります。今回は目的が異りますので、詳細は省略することに致します。

擧筆にあたり、原爆の犠牲となられた恩師、学友の御冥福を祈ります。

（四八、一二、一九）

## 長崎原爆の記

今治市松本町二丁目七番地  
当時付属医専三年生

村島秀治

四、五年前、左膝部に屈伸時の疼痛があり、益々増強するので、該部からガラスの破片を摘出した。その後も屢々、頭部が疼いて搔きむしると、これもまたガラスの破片、勿論これらは、共に原爆被爆によるものである。

被爆場所は古屋野外科の二階病室、八月一日の爆撃の際に負傷して、入院していました。同室に医専一年の金子吉孝君も入院していました。

八月九日は、空襲警報が鳴つたので一応避難したが、間もなく解除になったので、病室に帰り、知らぬ間に眠つていたらしい。ザーッという音に目を覚ますと同時に、病室の壁が落ちて来て、全身がその落下物に埋まつた。

私は一瞬、艦砲射撃ではないかと思った。どうにかして這い出すことが出来たが、その時はもう同室の金子君の姿は見えなかつた。

一階の廊下に降りてみると、フラフラしながら、五人の人が右往左往していた。最初に会つた知人は古屋野外科の山下静子（？）看護婦で、彼女は前額部から相当の出血をしていたので、お互に包帯の巻き合いつこをした。この時気付いたのだが、私

は入院中でもあり、又夏で暑くもあったので、フンドシ一つの真っ裸であった。

二人はそれから小児科の方に向って歩いて行つた。彼女とは何處で別れたか憶えていないが、彼女の巻いてくれた包帯は、その後もゆるむことなく、長い間もつていたのは有難かつた。

次に会った知人は、同級生の蛭崎武徳君だったと思う。彼とも暫く一緒に歩いていたようだ。それから私は眼科病棟と小児科病棟の間の道に出た。眼科側でも小児科側でも、十数人の人々が、或いはうすくまり、或いは坐り、又は寝こんでいた。馬も一頭不安そうにしていた。

眼科の窓枠に仁王立ちになり、且つ顔から出血したまま包帯もせず、同級生の上野謙吉君が、「山へ逃げろ、山へ逃げろ！」と叫び続けていた。私は彼の足を引っぱつておろし、「余り張り切るな」と一緒に山の方へ歩いて行つたが、彼とも間もなく別れてしまつた。多く人々が穴弘法の方へ歩いて行く。その途中、台湾出身の仮卒業生の野村有徳さんが、腹をかかえるようにして屈んでいた。「一緒に行きましょう」と云つたが、もう既に歩く元気もなかつたようだ。

穴弘法には数人の同級生がいたが、高木恒信君、田島耕吉君以外の名は思い出せない。同級の有富重康君が、「白いものを着ろよ」と云いながら、金比羅山の方へ登つて行つたとか。どういう意味なのか、私には判らない。

いつの間にか原駿君と一緒にになつていて、激しい雨が降つてきたので、金比羅山裏側の一軒家で、二十人位の人と共に一時休んだ。この間に敵機も来たようである。この日はこの一軒家で泊つたのか、ただ一時的に休んだのか、記憶は判然としない。とにかく原君と一緒に山を下つた。途中で十才位の黒焦げの男の死体を初めて見つた。黒焦げになつて震えていたから、まだ死体とは云えないな、と思つたりした。下方に行くと、このような状態の人が、向うに三つ、こちらに五つと見受けられた。皆皮膚はボロ切れのようにちぎれていた。アメリカ軍のビラなるものを初めて読んだが、「何だ、この野郎」ぐらいにしか思わなかつた。

いう私とは、別れたようだ。下宿は豊後町だったので、家が無事で一応の服装は揃つた。同じ下宿の香月健君は、後日基礎教室に泊りこむようになったが、彼と井上直春君と私が下宿していた家に、その夜一泊したかしなかつたのか、その辺の記憶は曖昧である。

多分十日頃と思うが、井上君と連れ立つて大学病院に行つた。彼は諫早の自宅に帰つていて無事だった。病院への坂路に馬が死んでいた。あちこちに死体があつた。ガス充満で、死体は皆ふくられ上つていた。

外来の地下室にいた被爆者たちに水を配つた。たしか木戸先生か永井先生の指図だつたと思う。道ノ尾の仮救護所に二回、食糧や医薬品を運んだことを覚えている。亦病状を起してコロコロ死んで行く人々を前に、調生先は少なからず弱つておられた。

長与で開業していた父の兄、時津の開業医に嫁いでいた父の姉、これらの家で井上君と腹一杯食べ、五本の水筒を貰つて大学病院に引返した。

八月の何日だったか、眼科の裏側の所でソ連の参戦を聞いた。香田金朝君が、「村島君、いよいよ君達の番ばい」と云つたのを覚えている。

これも何日だったかはつきりしないが、精神科の下で、「オイ、村島君」と弱々しい声がした。見ると同級生の麻生君が、頭が二つに割れたかと思われるような大怪我をしている。充分に水を飲ませ、井上君ほか二、三人で、眼科の廊下まで運んだ。小児科の廊下に運んだが、後日、外来前の広場で死んでいた。

一級下の五島の梁瀬和正君の家族が、同君を捜しに来られた。彼がよく同級生の入院患者を見舞に行くのを知つていて、或いはと思って案内すると、ベットの上で呼吸しながら眠っていた。現在元気に五島で開業している由、それを聞いたことが何より一番嬉しかつた。

数日経つたある日、伯父と伯母が、早く福岡の自宅に帰るよう薦めた。また佐賀付近から肉親を捜しに来る人達は、戦争が終つたので、夜もあかあかと電灯がついて

いると云う。張りつめた心もゆるみ、私は遂に帰宅を決心した。但しそれが八月何日だつたか、はつきりした記憶がない。

角尾内科の看護婦内尾文子君の家が、帰る道筋なので、篠島先生の許可を受け、かなり重態の彼女を励まして、一緒に夜行列車に乗った。北九州の折尾駅についた時、駕員も周囲の人々も非常に親切にしてくれた。彼女を両親に渡して帰宅したが、それから間もなく、彼女の訃報に接した。

私は俗にいう「顔の広い方」であつたらしい。「オイ村島、水をくれ」と、いろんな人々から呼びかけられた。医局員あり、学部生あり、医専生あり、看護婦あり。今じつと眼を閉じて、これらの人々の名前を思い出そうとしても、一寸のところで駄目になる。情ない気がする。

あれから二十八年経った現在でも、何處かに向って、誰かに向って、大きな声で云つてやりたい事がある。しかし編集の趣旨に反すると思い、とりとめのない文を羅列した。

(四八、八、一一)

## 原爆第一日目の思い出

東京都清瀬市野塩一一三二八  
当時付属医専三年生

山本雅文

閃光一瞬によつて心が動転した私は、ただ本館の皮膚科外来診察室から逃げ出すことに懸命でした。全く無意識のうちに、穴弘法に駆け上るうとして小径を走り、根こそぎ倒れている松の木や、降つて来たと思われる大きな木の枝が蔽いかぶさつていて、邪魔になつてゐるのをくぐり抜けながら、数人の者と先を争いました。

岩穴に辿りついてみると、もうそこには既に幾人かが、穴の奥の方に潜んでいました。中には顔面が火傷で腫れ上り、眼もあかない程で、頭髪は灰の髪をかぶつたようになつて、焦げて縮み、しきりに嘔吐を繰り返している人もいました。

聞もなく同級の香田君が穴に這つて来て、「山本君、顔から血が出るばい」と教えてくれましたので、顔に手をやつてみると、眉間にあたりに血の凝つたのがこびりついていることがわかり、白衣の裾を引き裂いて後鉢巻をしました。

それから数刻過ぎた頃、やつと救護の為に大学に帰らねばと思ひ返し、一人で山を下り始めました。道の周辺には多数の被爆者が倒れているので、「しつかりせんば」と激励すると、皆一様に「水が欲しか」と嘆きます。仕方なく岩穴に引返し、倒壊して瓦屋根が蔽いかぶさつている寺の下にもぐり込み、漸く柄のついた杵を見つけ出したので、水槽（防火槽？）の水を汲みあげ、しきりに渴を訴えている人の所まで、運んでやりました。

このようなことをしながら、数回往復しているうちに、黒い雨が降つて来たので、吹き飛んだトタンの破片を頭に翳して、尚もこの仕事を続けました。然し水を与えるとすぐに尿がしたいと云うので、下着を脱がすと今度は坐らせてくれとせがみます。私のみた範囲では、看護学校の若い生徒が多かつたように記憶しています。そして尿が出たか出ないうちに、坐った状態から後のめりに倒れかかり、それを後から支えている間に、意識がなくなつて死んでしまう者が、幾たりかいました。

又、真夏の事とて、焼けつく暑さに耐えかね、背負つて下つてくれと哀願する者も多く、その人たちを背負つて、大学の崖の斜面に造られた防空壕まで、幾度か往復しました。その途中、「おい君、これを角尾学長の所へ持つて行け」と、カンフルオレーフ油五ccのアンプル三本を渡されましたので、それを持參すると、寝ながら介抱を受けておられた学長は、私の顔や背中の血糊を認めて、「君は大丈夫かね」とおつしやつたり、又周囲の者を見渡して、「誰か落下傘を見たそなだが、君達は見なかつたかね」などと、お訊ねになりました。

そして帰途（事によると翌日の記憶違いかも知れませんが）、小児科病棟の前の校道を通つていると、地下室から大きな物音が聞えて来ます。誰か居るなと考へ、降りてみると其処には、褐色の大きな農家の牛が室内に這入ろうとして、ドアから体が後半分出ているのです。室内に誰がいるのか声をかけてみましたが、一向に返事があり

ません。仕方なく、怖る怖る牛のお尻を押してみましたが、なかなか動きません。死にかかって弱っていたのではないでしょうか。止むを得ず牛の腹の下をくぐり、室内にやつとはいることが出来ましたが、そこには人は誰もおらず、コンデンスマルクの新しい缶が、沢山散らばっていました。白衣をぬいで一抱え抱えると、牛の鼻づらを引っぱり、室内に入れて一目散に防空壕に帰り、ミルク缶が沢山あることや、牛が今後の食糧になるので、持主には気の毒だが、今のうちに殺しておいてはどうかな、などと、報告しておきました。

その時、確か眼科病棟だと記憶しておりますが、誰か一人生き残っているらしいと情報を聞き、病棟に行ってみると、一階の廊下に白衣を着た看護婦さんが、壁によりかかって坐つております。かなり弱っている上に、体格が大きい人ですので、小柄の私には背負うことが出来ません。加勢を頼んで救護所まで連れて行きましたが、火傷のため全身の浮腫が強く、とても重かつたように見えます。その人の名前が誰であったか、又加勢に来てくれた人がどんな方であつたか、どうしても思い出すことが出来ません。

その後も、被爆者を背負つて運ぶ仕事を続けたために、疲れ果てて、既に暗くなりかけていた岩屋山の中腹まで辿りついた時は、とうとう倒壊物で隠されていた肥溜めの中に、落ち込んでしまいました。大声をあげて助けを求めるが、近くにいた農家の人が駆けつけて、引上げてくれました。然し腐熟した糞尿を全身に浴びた私は、大学に帰る力もなく、そのままその場に坐りこんでしまいました。そうしているうちに、先程の農家の人、「先生さん、今夜は暗くなつたから此処で泊りなさい」と勧めてくれましたので、漸く決心して草むらの上に寝転びました。

あたりには一本の木もなく、焼野が原です。夜空は澄みわたり、満点の星が輝いています。然し市街の大火灾のために、山の下は明るく、燃える電車でしょうか、又はデパートの窓でしょうか、花電車のように窓枠が美しく並び、大きな花火のように時々火勢が強くなります。眺めていると浦上方角に、ガスタンクでも爆発したかと思われるような火柱が立ち、火勢は天に冲するかと見えました。

暫らくこの光景に気を奪われていると、先程の農家の人、「胡瓜を新聞紙に包んで、煮た南瓜と一緒に持つて来てくれました。勿論白焼きで味もない筈ですが、腹の空いた私にとっては感謝の味で、これほど美味しく食べられたことは、現在までないよう思います。

その後その付近の被爆者を診察してまわり、消毒マスクと一緒に入れてあつた注射器を出して、浸しておいたヨードチンキの綿球で消毒しながら、カンフルオレーフ油を少量宛注射してやつたりしました。人数は十数人であったように思いますし、殆んどが農家の人であったように記憶しています。

私はその夜、火災で明るく染められた夜空を眺めがら、今日亡くなれた方の事を思い出し、これ等の方々は、まだ最後に看取つてくれる先生、先輩、同級生がいたし、死後の处置も一応受けられたからよいが、これから死ぬであろう私達は、一体どうなるのであろうか、等と考えました。そして「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍」だ。國の為には、どちらにしても大した事はない、と自分に云い聞かせ、不思議と父母兄弟のことも、郷里のことも考えませんでした。否、寧ろそのようなことを考える方が面倒くさいほど疲れていて、星空に瞬く天体を見ても、「下天のうちに比べる生命の儚さを憶う心のゆとりは、もはやなくなつていて」という風に思います。

原爆後の数日間の光景は、まるで数年間にも亘つて経験したように感じ、その一齣が、連續して撮つた写真の物語りであるように胸に刻まれ、未だに夢に見ることでございます。

そしてこの私達が経験した光景を、後世に永く語り伝え、その意味を永久に人類の歴史に留める義務のあることを、痛感する次第でございます。

最後に、謹んで、原爆の犠牲となられた多くの方々の御冥福を祈つてやみません。

# 被爆体験記

大分県臼杵市大字権現一四六八一一  
当時付属医専三年生

吉田武郎

眼科外来で、眼鏡の鏡検中に被爆、窓から飛び出し、中庭に倒れていた三才位の子供を抱いて裏山に逃げた。右上腕火傷、治療まで約一〇〇日を要した。

(四八、一一、二七)

## 原爆の其の日

佐世保市相浦町一六二六  
当時付属医専二年生

井手一郎

原爆前夜の想い出は、「忘れな草」第三号に、「同宿者三人の憶い出」として載せていただきましたので、当日以後の想い出を、まとまりのつかないままに書き綴つてみました。

× × ×

その日は、晴れ渡った、太陽がギラギラと照りつける真夏の暑い日であった。

昨夜、学部四年の古賀典志さん、肥後実さん、それに医専二年の私と、医専一年の奥野昭君との四名は、古賀さん御夫妻の六畳、灯火管制で薄暗くした部屋に集つて、午前一時頃まで、雨戸を開けっぱなしにして駄弁つていた。そのためか九日の朝は、皆いつもより遅く起きたようであった。それでも四人は間もなく身仕度を整えて、次々に下宿を出て大学へ向つた。

この下宿は、西山の青木教授のお宅の近くにあり、高等商業学校正門前的小高い岡の上で、西側は川添いの森にかこまれた、永原ヨシという小母さんの家であった。

奥野君が玄関で靴をはき、ゲートルを巻こうとしていた時、洗面を終えた私は、彼の後姿に向つて「奥野君、一緒に佐世保に帰らないか」とすすめてみた。彼はうつむいたまま、「七月入学早々の新米は、当分帰れませんね」とにっこり笑いながら、元気よく出て行つた。同郷の親友でありながら、これが今生の別れになるとは、つゆ思いがけない二人であった。

奥野君を送り出して暫らくたつた後、私は鉄道運賃学生割引証を貰うために、大学の学生課へ出かけて行つた。途中、長崎駅前の荷物一時預り所にトランクを一個預けたが、このトランクには、昨夜古賀さんから譲つて頂いた本でなく、父の古い医書や、私の中学生までの古い写真がつめてあった。この医書の中に今裕著の病理学総論のあつたことや、写真は全部アルバムからはがして、トランクの蓋の裏のポケットに入れたことを覚えている。

午前九時ごろ大学本部に着いた。木造の古めかしい建物の中にある学生課で、小佐々さんという顔見知りの二十才位の事務員から、往復の学生割引証二枚を書いてもらつた。その時一緒に割引証を書いてもらつたのが、四国今治出身の医専二年相原博君であった。

「君も帰るのか。今治まで帰つたら、いつ長崎に出て来られるかわからんぞ。」

「まあ、出たとこ勝負で帰つてみるよ。何しろ昨夜今治が空襲を受けて、全滅した

というニュースが入つたので、家が気になるんだよ。」

「それは大変だ。一緒に長崎駅に行つて切符を買おう。」

こうして二人は、同じ電車で浜口町から長崎駅へと急いだ。多分九時半頃だったと思ふ。

当時、と云つても約半年ほど前から、学生割引証は一人当たり年間四、五枚程度に制限され、切符発売の緊急度も、ほとんど軍用と同程度に特別発売されていた。私は幸に相浦まですぐに買うことが出来たが、相原君にはクレームがつき、今治市が空襲混乱のため切符発売停止ということで、学生割引証の効果もなく、切符が買えず帰省が不可能となつた。可哀想ではあつたが、当時としてはどうしようもないことであつ

た。

その時ふと母から頼まれていた眼鏡のことを思い出した。佐世保の眼鏡屋はすべて軍用の店ばかりで、普通の人はどうしても買えないとのこと、幸い相原君は眼鏡をかけているので、或いは店を知っているかも知れないと相談してみた。

「それなら新大工町の裏通りに一軒売つちよるぞ。下宿の近くじや。案内してやろか。」と彼は云う。「よい土産になる」と、喜ぶ母の顔を瞼にえがきながら、その店へ案内して貰うこととした。

途中、浜の町を電車で通過中、電停近くで中学同窓の牟田広公君を見かけた。彼は学部一年生でカンカン帽をかぶっていたが、あとで聞くと、この時がカンカン帽の初おろしだったそうで、彼もまた浜屋の交通公社に帰省の切符を買いに行き、その帰りだつたとのことである。

間もなく新大工町の眼鏡屋につくと、相原君は自分の役目もすんだという顔して、そそくさと近くの下宿へ帰つていった。店の前には客が行列をつくつて並んでいたが、店主はその一人一人を台帳と見くらべながら、悠々と判をおしていた。いつまでかかるかわからぬ。私は午後一時か二時頃の汽車に乗る積りだが、こんな機会は二度とないので、仕方なく腰をすえて待つことにした。

約二、三十分も待つたであらうか、その間、聞くともなく店先のラジオから流れるニュースに耳を傾けていた。

「西部軍管区情報!! 西部軍管区情報!! ○時現在、島原半島上空の敵一目標は、島原半島を目標西進中である。」これは国民普及型ラジオから流れる情報であった。私はそれを聞きながら、頭の中で杜撰な計算をやつてみた。

島原半島の中心部を西進すれば、約四、五分で長崎の上空に達する筈である。警戒警報も空襲警報も出でていないのにどうしたことだらう、と半信半疑で思いめぐらしていた瞬間、けたたましい爆音が聞えた。まさか今の情報の敵機ではあるまい、と軒と軒との間のせまい空間を仰ぎみた時、それが運命の一瞬であった。諏訪神社の方から空一杯に広がつた紫色の閃光、その閃光が軒間の薄暗い闇を通して、私の全身を包ん

だ。

熱くも痛くもなかつた。大きな爆発音も聞かなかつたので、何が何だか見当がつかなかつたが、それでも咄嗟に、私はガラス張りの陳列棚を土足のまま跳び越えて、置の上に肘と膝で支えながら、うつぶせに伏せた。目をつぶり、口を固く結んで、眼を両手で被い、示指を耳の穴に突っ込んだ。

次の瞬間に起つたのは、地震である。神棚の花瓶が落ちる、襖が倒れる、灰神樂が立つ——。私はこの時、父から聞いた関東大震災の時の話を思い出した。

父はその頃、神奈川県衛生部に勤務していたが、新婚の母はただ一人野毛の家にて、机の下でふるえながら父の帰りを待つていたとか、丁度このような状態だったろうと、生きた気持はしなかつた。

地震は数秒間でおさまり、どうやら家の下敷にならないですんだ。眼鏡屋の主人夫婦もどこからか出て来て、「学生さん、危いから裏の防空壕にお入りなさい」とすぐめてくれた。云われるままについて行つたが、途中、茶の間のお膳の上に乾パンが散らかっていたのが、未だに眼底に焼きついている。

防空壕は、當時各家庭で急造していた極めて粗末なものであった。暫らく入つてゐる間に、「今のは果して爆弾だつたろうか。もし爆弾だつたらどこに落ちただらうか」など、いろいろ考へている間に、また関東大震災を思い出した。

地震の後には必ず火事だ。うつかりしてはおられない。こんな奥まった木造家屋の裏庭の防空壕にいたのでは、火事になつたら絶対に逃げられない。今のうちだ、と思ひ、お礼もそこそこに新大工町の通りに出た。

通りでは、「やられたー!」、「助けてー!」と、子供達や若い女性、大の男までが、大声で叫びながら右往左往している。家の窓々からは、煙とも灰神樂ともつかぬものが濛々とふき出し、道路は割れ瓦や看板で埋まり、屋根屋根は鱗をはいだように飛げている。何が何だかさっぱり判らない。

私がもし独身でなかつたら、先ず妻子のことが気になつたに違ひないが、身軽な学生だつたためか、兎に角さつき別れに相原君に会つてみようと思い、片瀬の下宿へ向

つて走った。「相原！ 相原！」大きな声で彼の二階の部屋めがけて怒鳴った。ところが意外にも、彼は玄関先の防空壕に胸まで水びたしで待避しており、ゴソゴソと退出して来て、開口一番、「どこぞ爆弾落ちたんか」と、四国訛りで答えたのである。

この時、西山高部水源池の上空に、真黒な煙がたちこめていた。そのためか、高等商業の上方に爆弾が落ちた、という人がいた。しかし私は、自分の下宿のある西山の空に異常がないのと、火災らしい様子のないのを、確認して安心した。

そこで私は相原君と相談し、報國隊員としての任務を果たすために、分隊長はいかつたが、単独で「報國隊」の腕章をつけ、かねて救護所に指定されていた、伊良林国民学校の救護活動に参加することにした。

学校についた時はまだ十二時前で、誰も来ていなかつたので仕方なく、相原君と別れて西山の下宿に帰つたが、ここにも誰もいなかつた。家族は小母さんと女学校生の娘、小学六年生の娘三人があつたが、小母さんのタンスが二つに折れて庭に転がり、襖は吹き飛び、窓ガラスは割れて、何とも云えぬ乱暴狼籍であつた。

程なく三菱工員の渡辺さん夫婦が帰つて來たので、三人で少しつつ片付け始めた。そして、この様子ではとても佐世保に帰ることは出来ない、と思い始めていた。

渡辺さんは、「藝專が焼けたらしい」という。近所の人の話では、「大学病院も焼けたそうだ」とのこと。更に次の人の話では、「浦上にはもう何もなげなばい」と、話は次々に拡大されていった。広島と同じような新型爆弾が落ちて、浦上方面が全滅したという確かな情報が伝わつたのは、私の下宿付近では午後三時か四時頃であつたようである。

それより前に、私は駆前に預けたトランクを取りに行つてみた。中町の天主堂が燃えており、焰が横なぐりに吹きつけて、とても近寄れない。長崎駅へはどうしても行けそうにないので、思い切つてトランク取りを断念することにした。今考えると、トランクの中の写真が、私の身代りに燃えてしまつたような気がしてならない。

下宿に帰ると、小母さん親子三人と、古賀夫人の四人が帰つていた。聞けば、皆驚いて裏山へ逃げていたとのことであつた。

今日学校を欠席した罪ほろぼしに、今からでも一度様子を見に行きたいと思い、小母さんに地理を聞いてみたが、金比羅山を越して行くより他に道はない。それには歩いて三時間ぐらいかかるだろう、とのことであった。片道三時間もかかれれば帰りは夜遅くなるので、翌日登校することにした。

夕方、古賀さんが帰つて來た。金比羅山越しに歩いて帰つたのである。奥さんが最初に気付いて、飛び出して行つて連れて帰つて來た。

間もなく近所の子供達が、「近くの防空壕に大学の看護婦さんが沢山逃げて來ているから、井手さん来て下さい」と走り込んで來た。行つてみると、壕の中に近所の小母さんがいて、皇后陛下御手巻の包帯を出してくれた。私はそれを皆に巻いて差上げた。彼女たちは耳鼻科の看護婦さん達のグループで、日々に、「長谷川先生のお宅へ行こう。部長先生が避難する時は必ず自分の家へ来るよう」に、と常々仰しゃつていたから——』と云つていた。私は直接教えを受けたことがなかつたが、先生の御人徳を垣間見るような氣がしてならなかつた。

古賀さんの看護や、壕内の看護婦たちの救護で、私の身辺は急に忙しくなつた。古賀さんは意外に外傷は少なかつたが、頭の軟部組織にヒビが多くはいつて、「痛い！！ 痛い！！」井手君、モヒを注射してくれ」と、呻き声を出していた。

一方渡辺さんは、「今夜もう一発、被害の少なかつた県庁中心部に落すだらうから、今からその準備をしよう」と云い出した。帰省と登校を断念した私は、渡辺さんの説に従つて行動することにした。それで肥後さんと奥野君の帰りを待ちつつ、二人で夜の準備にとりかかつた。

「もし下の方から燃え出したら、川を伝つて上へ逃げよう。上方で火事が起きたら、川を伝つて下手の方へ逃げよう」というのである。いずれにしても、荷物は川べりに並べておいて、いざという時には川に蹴落せるように、並べておいた。私は父に無心した古いオリンパスの顕微鏡を、第一番に並べた。これを燃しては父に相済まぬ、と思ったからである。

盜難を防ぐためには、床下の防空壕に入つて不寝番をする必要があつた。古賀さん

夫妻は二階に、渡辺夫人と下宿の親子三人の女ばかりは、夜はまた山へ逃避することになつた。私と渡辺さんの二人が、床下の防空壕で不寢番をしたが、不思議に眠くなかった。その夜も何回か、浦上方面で曳光弾か照明弾らしいものが、あかあかと燃えたような記憶がある。

明けて十日。

今日こそ是非登校せねばならぬと、九時頃下宿を出た。駅の前はもう燃えてはいなかつた。浦上方面から沢山の人が歩いて来る。意外に元気な人たちばかりである。学生も沢山いた。一人の角帽の学生に、学校はどうなつていて尋ねてみたが、「僕は九大の学生で、いま道ノ尾から歩いて自宅に帰るところです」という返事で、取りつく島もなかつた。

井樋ノ口では、一年生の時に空襲警報の際、付近の消防団詰所に配置されたことを思い出し、もし昨日ここにいたら、今頃どうなつたか判らない、など考えながら、大学へ行く山下の道へ曲つた。すると道路脇に片腕のない少年が倒れていた。「しつかりしなさい。君は昨日何處にいたんだ」と尋ねると、「城山の三菱の寮にいました。一昨日夜勤だったので、昨日昼寝をしていたら、知らぬ間にここに倒れていました」という。家は何処かと尋ねると、矢上だと答えた。私は、「すぐ救護隊が来るから、それまでしつかりしなさい」と励ますだけで、何にも出来なかつた。

大学病院の坂には、馬が一頭倒れていた。馬術部（当時は騎道班と呼んでいた）にいた私は、「城清」ではないかと思つてよく見たが、判る筈もなかつた。坂を登り切った右手の汽缶場の近くに、調先生、篠島先生、その他数人がおられた。その中に青い服を着た男の人が、頭の毛髪部を完全に削ぎとられ、頭蓋骨を丸出しにして元気歩いていた。後で知つたが、青い服は囚人服だつたらしい。

附近の壕の中では、木戸先生が長いピンセツトで学生の治療をしておられた。この学生は後の小児科助教授久野文次郎先生だったとのことである。（久野先生談）この時調先生と篠島先生は、「早く都市より逃避せよ!」というビラを見ておられ、私も見せて貰いた。文面は省略するが、私がその時直感したことは、

一、文章全体が日本人ばなれしていること、

一、教階書体で印刷してあるのは、念が入りすぎていること、

一、長崎市民、長崎県民、等の言葉がない点から、広島を除く日本国中どこでも散布してもよいように、印刷されていること、

一、広島原爆投下後に印刷されたものであること、  
などと考えてみたが、原爆投下前に撒布されたものであれば、その後焼野原になつた場所で、先生方が見られる筈がない。そう考えて私は、十日朝に撒布されたことに何の疑問も抱かなかつた。

話はそれたが、私は大学病院に来て初めて、大学本部が調理所裏にあることを知つた。そこへ行く途中で、同郷の友広嘉久君に会つた。彼は私を見るなり、「今生存者名簿を作つてある。君も生存者に入れておくからな」と云つて、連絡活動のために立ち去つた。

本部の所には、「大學は休みに非ず。全員登校すべし」と大書してあつた。私は、井上寿一君等が昨日夜を徹して金比羅山越しに大学へ入つたと聞き、登校が遅過ぎたと思った。ここで学生の大部分の生存者が、穴弘法へ逃げたことを聞き、早速行つてみることにした。

病院の裏門附近で大分県出身の佐藤恕一君に会つたが、服装は余り乱れておらず、片腕を三角巾で吊つてゐるだけで、元気そうに大分へ帰ると云つてゐた。

穴弘法は無数の職員・学生で一杯だつた。医専の先生がとつておきの葡萄糖の塊を皆に分け与えておられたので、私も戴いて佐世保出身の犬塚喬二君に与えられたが、彼は食べようともせず、佐田八郎君に付添わされてゐた。医専三年の大浦治さんにも会つた。彼は当時家が北松だったので、よく汽車で一緒になり知つていた。

被爆した人達は皆顔がすすぐて、誰が誰だか見当がつかない。「誰か」と尋ね、名乗つてもらつて初めて判る始末である。帝國女子医専で妹が教わつたことがあると聞いていた薬理の新任教授の祖父江先生もおられた。「先生! 水をくんで参りましようか」と申し上げたが、先生は飲みたくないと言つた。よく見ると先生は、靴下を

すり下げる靴の代りにしておられた。

拱手傍鏡とはこの事か——。無法地帯というものがあるとすれば、これを云うのだろうか——と子供心に思つた。何の註文を聞いても、何の要望を聞いても、私一人では何も出来なかつたのである。

私は目的を一つに絞ることを考えた。同宿の肥後さんと奥野君を探すことだけにしたのである。穴弘法の方で、昨日学生課で証明書を書いてもらつた女事務員に会つた。笑いながら昨日のことを話して元氣そうに見えたが、やはり亡くなつたのではないか。それから基礎教室の方へも行つたが、二人の姿は何處にも見当らない。探しあぐんで、その夕方下宿へ引返した。途中松山町を通ると、公園の横の川には虚空をつかんで倒れた死体が折重なつていて、水が堰止められている程であつた。

下宿に帰つたら、肥後さんの兄さんが来ておられた。先日話に聞いた針尾海兵团配属の軍医中尉の兄上である。肥後さんの遺体は、放送局の下の防空壕で、兄上が発見されたことであつた。

私は古賀さんの看護の外に、肥後さんの死亡で急に忙しくなつた。十日夜は下宿で

皆と一緒に肥後さんのお通夜をし、十一日には兄上に手伝つて、長崎高等女学校（現在の東高）の前の空地で火葬にいた。

私は奥野君の遺体や古賀さんの病状がなお氣掛になつたが、十一日夜佐世保に帰ることとし、二、三時間かかつて道ノ尾駅まで歩き、十一時頃発の夜行列車にやつと乗ることが出来た。

この列車は満員で、ステップにすがりつくようにして早岐駅につき、駅の待合室で朝まで寝て、十二日の朝、やつと我家に辿りついたのである。

× × ×

何時かは書かなければいけない、と思いつつ、筆のにぶる原爆の記であった。もう大分記憶もうすれてるので、一生書くまいと思つていた。本年三月頃、調先生から何か書くようにと仰せつかった時も、気が進まなかつた。

偶然の機会から、昭和四十八年六月二十三日、長崎新地の会樂園でゲビロ六・七期

会が催された時、黒崎勇君のはからいで調先生の御出席を得た。先生は老いて益々お元気で、白衣で廊下を歩いておられたスマートなお姿は少しも變つておられず、余生を原爆の記録に捧げておられるのに今更の如く感激し、ここに惡筆を顧みず、私なりの体験記を書いてみました。

全く体に異常のなかつた学友の一人として、地下の恩師・先輩・学友の靈の安からんことを祈りつつ、少しでもお役に立てば幸と思い、筆を執つた次第であります。

(四八、七、一四記)

## 原爆記、亡き友の憶い出

佐世保市相浦町一六二六  
当時付属医専二年生

井 手 一 郎

夏が来れば嬉しい出す——。

二十八年前の真夏のあの魔の日。一瞬の閃光とともに母校長崎医科大学は、職員・学生もろとも、吹き飛んで灰と化した。それは「平和の鐘」とか、「平和は長崎から」などという言葉では埋めることの出来ない——阿鼻叫喚の巷であった。

八月十日朝、浦上へ入つた私が、大学病院の玄関から下方を眺めて得た最初的印象は、もしこの世に破壊といいうものがあれば、これこそ人類のなし得る破壊の極限であり、この世に無法地帯といいうものが存在するならば、この浦上の野こそ無法地帯そのものであらねばならぬ、ということであった。

「軍艦陸奥は瀬戸内海で沈没した。お前達はまだ△帝国海軍健在なり△と信じていらるのか」。四国出身の仁志川頼一君が、南講堂の机にまたがつて、檄を飛ばすような口調で話したのは、半年ぐらい前のことだつたろうか。今にして思えば、彼はそれほど時局の情報に詳しかつた。

沖縄防衛軍は玉砕し、六月二十九日の夜には、下宿のラジオで、手に汗を握りながら

ら佐世保空襲の逐一を聞いた私であった。学校は入学以来、「月月火水木金」で、夏休み、冬休みなどは勿論ない。たまの休講の時間には、防空壕掘りの作業があるか、又は次の講義が繰り上つて、結局二倍の時間の講義がある。

この頃には、学外に出かける勤労作業も多くなつた。軍の命令で田<sup>たがみ</sup>の頂上に、対戦車戦用の壕も掘りに行つた。山の頂上から谷間を走る茂木街道まで、両手間隔に稻妻型に並んで、約二メートルの間を一人で一日中掘つた。そして一日でこの壕は出来上つた。目的は茂木に上陸するであろう米軍の戦車を、ここで防ぐ想定であるといふ。黄色の火薬を使った爆弾を棒の先につけて、戦車の下に躍り込む。或いは諸君がその役をしなければならないかも知れない——。若い配属将校の説明に、何の抵抗もなく耳を傾けていた私達であった。

毎月八日は恒例の大詔奉戴日で、必ず全学の職員・学生生徒を集めて、グラウンドで学長の大詔奉読が挙行されていた。昭和二十年八月八日、角尾学長は、「今朝東京から帰つて学長室についたばかりで、洋服も着替えることが出来なかつた。大変恐縮だが、ワイシャツだけ取替えて來たのでお許し頂きたい」と前置きして奉読された。

奉読の後学長は、

「昨七日広島を通過したが、今回広島爆撃に用いられた爆弾は、新型爆弾で、どうやら空中で炸裂するものらしい。その証拠に、爆弾の落下地点と思われる彈痕がどこにもなく、而も被害は広島全市に及び、想像以上の被害であった。これを見ても、本學に於ては、早急に疎開を断行すべきである」と訓詁された。

訓話がすんで別れた途端、広島出身の池之子肇君が突然、「長崎が今日まで大空襲を受けなかつたのは、その新型爆弾を使うために残しているのだろう」とつぶやいた。私は池之子君らしい発想だと思った以外、特に印象はなかつた。角尾学長の訓話と池之子君の発想とが、翌九日に早くも実現しようとは、神ならぬ身の誰も知る由もなかつた。

二列縦隊に学年別に並んで、学長の訓話に耳を傾けていた幼な顔の、あの顔、この

顔が、いま私の胸裏に浮んでは消え、消えては浮んでくる。

私たち医専二年生は百六十名、それを八十名づつの二小隊に分け、更に各小隊を十六名づつの五個分隊に分けて、講義、學習、試験、勤労動員、教練、体育など、すべてがこの小隊・分隊単位で行われていた。私はアイウエオ順に並べられたこの区分で、第一小隊第一分隊に属していた。

赤崎安孝君、秋月栄君、芦沢正徳君、荒牧貴敏君、安楽芳照君、生島一夫君、池田博実君、池之子肇君、石井立夫君、石塚充君、井水信夫君の十一名、それに生存者の相原博君、秋山一男君、井上寿一君、井上公明君、私と計五名、以上十六名が同じメンバーであつた。

#### 赤崎安孝君

眼鏡をかけていた君は、おとなしい人だった。父君は大正十二年卒の赤崎安富先生である。父君が私の父より二年後輩で、お互に知己であったため、よく話の合う君であつた。鹿児島弁で、開聞岳の話を毗々とよく話してくれた君は、純朴そのものであつた。山里町で近くに下宿していたこともある君であつた。

#### 秋月 栄君

小柄な君は好男子であった。大村出身だったので、時々汽車で帰省する時、一緒になることがあつた。努力勤勉の士で、たしか夜間中学の出身であると聞いていた。

#### 芦沢正徳君

地元の長崎中学出身、分隊の、否小隊、クラスでの御三家的存在の君であつた。長中アルプスの話は君から聞かされた。秀才肌で能弁、長身の君が今いたら、立派な外科医にでもなつていることと思う。被爆後、君の家に私は何度も足を運んで連絡に当つた。ソ連の参戦を聞いたのも、君の家で君の姉上からであつた。

#### 荒牧貴敏君

自宅はたしか大浦方面であつた。少し足が悪かつた君は、体育や教練の時間には、じつと見学していたように思う。おとなしい人であつた。

#### 安樂芳照君

宮崎県油津の出身。半年ぐらい前まで、君と下宿を共にしていた私であつた。山里

町の永井様方。松山橋を下手から渡つて、川沿いの道を行つた一番奥の路地を右に入り、左手の家。一度行つてみたが、現在はあまりはつきりしない。

三期の木下富之助先輩と、五期の朝倉多計久、森周造、六期の安楽芳照、落合潔水の諸君と私がいた。私は一足先に、二年進級と同時に西山へ移つていた。

君は絵の天才で、或る夜自室に閉じこもつて、内から鍵をかけ、誰も入れてくれなかつた。一夜明けたら、絹の布切れに絵具で立派な武者人形を写生していた。人形は下宿の娘さんのものであつた。池田教授の骨の写生も、君は一回でフリーパス。私は先生から、「君の絵は非科学的だから書き直し給え」と云われて、二回目は君の絵をまねて書いたらパスした。

蜜柑箱一杯につめてあつた下宿のカンコロを、君と二人で学校から帰る度に一つづつ揃んで食べていたら、いつの間にか半分に減つていて、小母さんにばれてしまつたことがあつた。落合潔水君とは同郷だつたためコンビで、油津の漁船の話をよく聞かされたものだつた。

### 生島一夫君

ショウジマと呼ぶのだが、一小隊一分隊に入れられていた。佐世保中学の私の後輩。君は常に私と行動を共にしてくれた。一夜遅く私を訪ねて、「今夜の点呼（當時徴兵適合未満の学生は、学校で一定時間の点呼を受けねばならず、点呼は夜間に行われていた）で、永井先生から一杯喰わされた。点呼の途中、関係のなかつた永井先生が、突然軍装をして来られて、「今、私は諸君を指揮して、天草に上陸した米軍との防衛戦に向うべく、大波止から出港するように命を受けた。今から直ちに出発する。用意の出来ている者は手を挙げよ。」と云われた。僕は一旦下宿へ帰つて荷物を整理しなければならないので、手を挙げなかつた。大部分の者も手をあげなかつたので、永井先生は一喝、「そのような心構えで点呼を受けても駄目だ。今は、諸君の心構えをみる積りで云つたまでのことである。」と告白された由を、面白く語つた君であつた。ことほど左様に緊迫した学生生活であつた。戦後、一年余も遅れて君が登校したので、私は小躍りして喜んだ夢を諫早で見た。

池田博実君

佐賀中学出身。下宿は、大学病院の裏門から正門へ行く道の、右手の一寸高い所にあつた。佐賀弁は君が教えてくれたようなものだつた。几帳面な字を書く君のノートは、よく整理されていて、いつもノートを借りて君の下宿を訪ねた。教練の時間は、二人で駄弁るのが楽しみであつた。いつも端正な服装をしていた君の姿が、今もありありと目に映る。

### 池之子篤君

大詔奉戴式の直後、突然前記の言葉を口にした君が、その新型爆弾で斃れようとは、夢にも思ひぬ私であつた。私は生涯、角尾先生のお言葉と、君のつぶやきは忘れることが出来ない。長身の君は能弁で、ユーモラスな人だつた。色の白い貴公子のような君だつた。

### 石井立夫君

福岡県の東筑中学出身。医專二期の石井宣利先輩の令弟であると聞いていた。咄々として話す君には、既に川筋気質の片鱗がうかがえた。

### 石塚 充君

地元長崎中学出身。眼鏡をかけた優しい人であつた。第一分隊の分隊長で、芦沢君と共に分隊の良きリーダーだつた。女学生のようにおとなしかつた。生え抜きの長崎っ子の君も、今生きていいれば、既によき長崎のオッチャマになつてゐる筈である。物静かに抑揚をつけて話す君であつた。

### 井水信夫君

御存じの平井孝先生の甥御さんである。「叔父がいたら、もうそろそろ我々に講義するのかも知れないなあ」と、常に戦地にあつた叔父君を慕つてゐた君。

君と行き違いに、平井先生は復員して大学へ帰つて来られた。平井先生にお会いする時、私は必ず君の話をすることにしている。タバコ好きの君は、右手の示指と中指がニコチンで黄色になつていた。山里の下宿の時、隣同志だつたので、よく煙管を持つ君の部屋を奇襲し、煙草を喫わせてもらつた。秀才だつた君は、ノートの整理は

余りしない方で、何でも頭の中に入れていたので、ノートを借りても、とりつく島のない君であった。平井先生から戦後水く教えを戴くようにならうとは、當時夢にも思わなかつた。飄々たる哲人の如き君であつた。

× × ×

解剖実習に、生化学実習に、講義に、体育に、教練に、防空当直に、常に一緒に分隊のクラスメートのプロフィルを、私なりに書いてみました。

あの友、この友を憶い出す度に、自分の生あるを不思議に思い、友をして今日あらしめたならば、私の現在も亦自ら違つた存在であるに違ひない、と思つたりします。地下の靈よ、どうか安らかに眠つて下さい。もう、私たちも人生の半ば以上を歩いて来ました。あなた達を忘れないために、そしてあなたの存在を後世に伝えたいために、敢て悪筆を物した次第です。合掌

(四八、七、二三記)

## 原爆当夜の思い出

佐世保市日字町六七八  
当時付属医専二年生

大串郁夫

八月九日午前十一時といえば、長崎市に原爆の落ちた日時である。然し私は直接原爆は受けていない。当時私は長崎医大付属医専二年に在学中であったが、原爆落下時には長崎にいなかつた。それは八月五日に、同下宿の友人で長崎高商生だったのが、短期現役として久留米入隊がきまり、今生の別れと思い、久留米まで送つて行つたためである。

八月九日は午前十時ごろ久留米をたち、一路長崎に向つた。途中大村で下車し、姉

などが真黒によごれ、皮膚が焼けただれた人達ばかりだつた。

しかしその時はまだ、長崎があのような惨状になつていようとは、思いもしなかつた。午後八時半ごろ道ノ尾に着いた。汽車はそれより先には行けないとことで、歩くことにして下車して驚いた。一体どんな爆弾が落ちたのだろうか。待合室やホーム、駅前広場などには一杯の患者ばかり。服は破れ、顔や手足は汚れ、爛れて剝げた皮膚は、黒ずんでめくれあがり、ピラピラしながら垂れ下つている。これが人間なのだろうか、と慄然とせざるを得なかつた。

午後九時半頃であつたろうか。丁度住吉と大橋の中間あたりで、飛行機の爆音が聞え、誰かが突然「空襲」と叫んだ。急いで道端に伏せる。何か柔らかい物にふれたので、火災の明りでそつと見れば、焼けただれた屍体だ。可哀想に、と思う暇もない。耳をすますと、あちこちから、「助けてくれ——」「水をくれ——」と叫ぶ声が聞える。しかしその方向に行こうにも、火の海の状態でどうするとも出来ない。大学の方角を見れば、山里小学校の火災が最もひどく、パチパチという音と共に、紅蓮の炎が夜空をこがしている。鎮西中学校は殆んど燃え尽き、時々強い炎が吹き上つてゐる。下宿は鎮西中学校裏で、城山寄りにあつたが、そのころ盛んに火の手があがつてゐた。

大学に行くことに決め、大橋までやつて來たが、それから先は道路を進むことが出来ず、電車道を通つてなんとか浜口まで行つたが、それも倒れた家が燃えていて、病院は見えるのに一步も進むことが出来ない。

仕方なく引き返すことにして歩き出したところ、高商生に呼び止められた。聞けば医専の生徒を助けているとのこと、感謝しつつ行ってみると、同級生二人だったが、二人とも案外元氣で、傷らしい傷は殆んどない。級友の消息を聞くと、衛生教室で講義を待つていた一瞬の出来事で、家がつぶれて下敷きとなり、やつと脱出して逃げて

來たが、他の学友たちは殆んど全滅だらうという。私は思わず何とも云えない恐ろしい氣持に襲われた。

三人は物も云わず、火事の燃え盛る中を走るようにして、道ノ尾へ向つて歩き出した。途中再度の爆音を聞いたので、道の片隅に避難したが、その頃から一人の友達は嘔吐を繰返し、次第に元気を失い始めた。私は、頑張れ、頑張れ、と励ましながら歩いたが、中々に道は抄らず、幸に午前一時頃であつたろうか、救護列車が大橋の近くまで来たので、それに乗つて諫早に向つた。

列車を待つていた間も、あちこちで、「助けてくれ——」「水をくれ——」の声が聞えたが、何もしてあげることが出来ない。ただ心の中で、頑張つてくれ、夜が明れば救護の人来るだらう、と叫ぶのみだつた。

一人の友にはぐれ、弱った友と共に汽車のデッキに坐つて長崎を離れ、早岐まで来てそこの小学校に友を収容し終えた時は、もう十日の午前十時頃であった。しかしその友も後に故郷へ帰り、十日位あとで鬼籍に入つたことを、家族の方から札状と共に知られました。

今は亡き多数の友の冥福を祈りつつ、拙ないこの筆を擱く。

#### (四八、九、一八)

【調　追記】 大串君が救護された二人の同級生は誰であったか、照会して聞いてみたところ、当時二年生は二つの小隊に分れ、自分は第一小隊だったが、その二人の級友は共に第二小隊に属していて、席も離れており、分隊も別で、作業、野外教練、その他殆んど一緒になることがなかつたので、話す機会もなく、名前も知らない状態であつたとのことであった。二十八年後の今日、どうしても思い出せないと云われるのも、無理はないと思う。



## 私の原爆体験記

長崎市草庄町二〇八  
当時付属医専二年生

福　井

順

昭和二十年八月九日、当時私は医科大学付属医学専門部二年生、十八才でした。午前九時からの外科講義（石崎助教授、南講堂）に出席していたのは、私を含めて約三〇名、そのうち生存し得たものは僅かに四名でした。

生と死の間から、ほんの紙一重の差で私を生に導いたのは、ただ神の恵みとしか云いようのない幸運の積み重ねと、限りない母の愛情によるものであつたと思います。

前日の八月八日、医大の運動場で行われた大詔奉戴式に、私も参列していましたが、東京出張から帰られたばかりの角尾学長は、宣戦の大詔を朗誦された後、重大な内容の訓辞を、列席していた教官や学生に向つて述べられました。

それは東京からの帰路、八月七日に学長が通過された広島市の、慘憺たる被爆後の生々しい状況報告であります。学長は「新型爆弾」「地上に何物も残さぬ想像を絶する破壊力」「広島全市の壊滅」「落下傘で投下さる」「人は焦げ、眼球は突出して圧死」といった言葉を使用され、更に「我々は精神力を大いに鼓舞して、この困難にもめげず戦わねばならない」と訓辭されたのです。この貴重な学長の訓辞が、私の被爆体験にも大いに役立つたと思います。

八月九日は外科の講義が十時に終了し、次は細菌学の講義が衛生学講堂で行われる予定でしたので、大半の同級生は南講堂から歩いて、基礎の方へ移動しました。

私は細菌学教授（内藤教授）の到着が遅れるという情報を耳にしたので、一部の学生と共に、病院で行われている臨床実習の見学に残りました。そして一、三の実習を見学したあと、再び南講堂に戻りました。

南講堂は大きな講堂で、一階も二階も階段教室になつておらず、臨床実習用の白衣を入れている木製のロッカーも備えてありました。私は臨床実習を終えると白衣を学生

服に着替え、鉄兜とノートを入れた鞄を手に持つて、一階の最後部に近い椅子に坐りました。

それは午前十一時近くで、講堂内にはそのような学生が二十数人居たと思ひます。思い思ひに本を読むものもあれば、トランプに興ざるものもあり、早目に弁当をぱくついているものもありました。そうしているうちに、遠くから飛行機らしい爆音が聞えてきました。

その日は朝空襲警報が一度出されており、それが解除されて、そのまま警戒警報中でありました。空襲警報中は授業ではなく、警戒警報中は授業が行われることになつていきました。だから十一時頃は、授業なり実習なりが、実施されていた筈であります。

誰かが「B29のようだ」と云いました。私達は爆音で飛行機の機種を判断する訓練を受けていたので、爆音が近くなるにつれて、「確かにB29だ」と確認しました。西側の窓の近くにいた河添君（佐世保出身、即死）が、「どれ一つ見てやるか」と窓を開けて上空を見ていたが、「オヤ、落下傘だ」と云いました。

その一瞬でした。私の脳裏に、昨日の角尾学長の訓辞がよみがえりました。私は夢中で鉄兜をつけ、矢のように階段教室を教壇の方に走り下りました。

その途中です。「シャーッ」という鋭い落下音を聞いたのは、私は飛び降りるようにして、教壇の下の板張りの床に身を伏せました。あとからいくら考へても、ピカッと光つたことも、爆風の衝撃も、思い出せません。ただ眼と耳をおさえて伏せようとしたことだけは、記憶があります。

意識が戻ったのは、暗黒の中でした。上腹部がひどく痛み、身体をもがくと手も足も動きました。「生きている。だが、いつたいどうしたんだ」。身体は何か散乱して積み重ねられた木片の上にあるようでした。

「見えない。何も見えない。真暗だ。眼がやられたんだ」。眼を押えてみました。その時突然のように、周囲が赤く見えました。「火事だ!!」と思いましたが、それはやがて濃いオレンジ色に変り、魔法のように普通の視界に戻りました。

漆々たる土煙り、身体の下は千々に散乱した木材、周囲は狭い四角のコンクリート壁です。「いったい何処なんだ」。咽はカラカラです。天井の方からは、間断なく小

さなコンクリートの破片が、バラバラ降つて来ます。

あとで判断出来たのですが、私は南講堂の八角廊下側人口付近の土台である、コンクリートの桟の中に居たのでした。恐らく強烈な爆風で、南講堂の木材部門が浮き上がり、吹き飛ばされて木片は千切れ、粉碎された無数のガラスの破片は、宙を飛んでいたに違いありません。南講堂は一瞬にして、その土台をつくっている桟型のコンクリートと、外郭だけが残つたのでしょう。私は自分が伏せたと思つた場所よりも、かなり離れた場所の桟型の中にいました。

コンクリートの土台に手をかけて、夢中でもがき上つた私は、急いで出口を探しましたが、方角が全く判らず、余りにも一変した周囲の状況に戸惑い、暫らくして初めて外郭と土井だけ残っていることに気付き、濛々たる土煙の中を、山手に向つて脱出した。講堂の中で死骸のようなものを見たようにも思いますが、無我夢中だったのでは、はつきりしません。口の中は泥や砂のようなもので一杯で、吐こうにも唾も出ませんでした。幸い避難する道端に剝出しの水道管を見つけ、水で口を漱<sup>すす</sup>いとしましたが、熱湯だったのでそれも出来ず、そのまま弘法の方へ逃げました。

周囲は薄暗く、夕闇のようでした。高北病棟の所から登つて行きましたが、道の傍には行き倒れた瀕死の人々や負傷者が多く、血と泥にまみれて、皆幽鬼のような姿でした。顔面が黒く爛れ、髪を振り乱した女性と思われる人が、手を差しのべて、「先生、助けて——」と、私のズボンをつかみました。

私は朝のうちは、黒の学生服の下にワイシャツ、それに黒のズボンにゲートルを巻き、白い靴を履いていたのですが、原爆で鉄兜は飛び、上衣はなくなり、ワイシャツは短冊型にピラピラと破れ、ズボンも數カ所綻び裂けて、左胸と右肩に受けた傷で皆血に染まっていました。それに体も弱っていたので、被爆者達が可哀想ではありますたが、彼等を助けることは、私には不可能でした。

坂道を更に登つて、病院を見おろせる所まで来た時に、顔が泥とも油ともつかぬもので黒く汚れ、額に火傷を負つて髪をパサパサさせ、眼だけギョロギョロ光らせている学生に会いました。

「福井——じやないか」。その男は云いました。その顔を食い入るように見つめていた私は、「東——君——か」。彼は大きく頷きました。「一寸笑つたようにも見えました。「東——顔が真黒だぞ——傷はないか」と云いますと、「お前だつて——黒くて分らんじやないか」という声が返つて来ました。この東君は八月十四日に死亡したと、後で聞きました。

その辺で暫らくあたりを見廻しました。青々とした夏の緑はなく、山の木々は爆風で倒れ、深々とした緑の葉は影もなく、ところどころ燃つて煙を出していました。

一面の芋畠は、赤土色をむきだした肌に変り、正午近くというのに、辺りは夕闇のようすに薄暗く、病院や基礎教室の方からは焰が燃え上り、浦上の空には異様な煙と火炎が吹き上つていました。そして其処から此処に纏めく人影、全くこの世のものとも思われぬ、悽惨な光景でした。

いつの間にか東君とも別れ、重い足を引きずつて畠の道を登ると、すぐ上の畠に調教授の姿を見ました。私の方から、「先生、たつた今角尾教授が背負われて、あちらの方に行かれました。負傷しておられたようです」と声をかけると、教授はハッときれた面もちで、「そうか」と一言、その方に飛んで行かれました。

四才か五才の男の子を拾つたのは、そのあとでした。全身が焼けただれて、皮膚らしい皮膚ではなく、見捨てるには余りにもごたらしかったからです。抱いて歩いてみましたが良くな歩けません。背におんぶして歩くと、痛いと云つて火のつくように泣きました。仕方がないので短冊型に破れたワイシャツを脱いで、それくるんで抱きましたが、どうしようもありません。壊れた民家の屋根下から、毛布のようなものがみ出でいましたので、更にこれくるみ、その場に置き去りにしました。力ないその子の瞳が、今でも眼の奥に残っています。

そのあとで、一年先輩の中山幹雄さんにお会いしました。彼は頭に受傷したらしく、血が顔面に流れています。彼が着ていた白衣を裂いて、圧迫包帯をしました。杖をつきながら坂道を登る彼と、上半身裸の私とは、一緒に穴弘法に向つて歩いて行きました。穴弘法が見える所で、中山さんは一休みすると云いましたので、私も腰

を下しました。全身がだるく、何も考えたくありませんでした。ただ水だけ飲みたいと思いました。「水を飲みに行って来る」と云いますと、彼は「駄目だ」と云いました。「何か探して来る」と云つても、「駄目だ」と云います。それは、折角一緒になつた私を、失いたくないようにも見えますし、何か信念があるような口振りでもありました。私も動きたくないでの、坐りこんだまま、暫らく時間がたちました。

その時、油のようなベットリした雨が降り出しました。私の上半身は裸でしたので、すっかり濡れてしましました。後でわかつたのですが、爆心地付近の水や、畠から掘り返された芋や南瓜には、大量の放射能があつたらしく、それを飲んだり食べたりした者は、放射能の影響で、腸がただれたり、赤痢のような症状を起して、高熱や血便で死亡したものが、多かつたということでした。先輩の中山さんと会わなかつたら、私は何か口に入れて、死んでいたかも知れません。

やがて私は中山さんと別れ、金比羅山から市民運動場、諏訪神社の方へと避難の道を辿つたのですが、その途中、中学の先輩だった岡部氏が倒れているのに会いました。下肢からの出血を圧迫包帯で止め、ジッと寝ておるよう命じ、救助を依頼するからと約束して別れました。

金比羅山を下る時、初めて元気そうな人に会いました。それは警防団員の方でした。が、その人から戴いた藁籠の麦湯のよいしかったこと、被爆以来初めて口にした水分でした。

市民運動場まで来た時、又爆音を聞きました。「敵機だ!!」もう一度同じ爆弾が落ちたら、もう生命はない。恐怖が、初めて人並みの恐怖が、私を襲いました。

あとで思ったのですが、今まで余りにも悲惨な光景だったために、恐怖感を超えて、また哀れな被爆者を何とかせねばならぬ、という医師としての義務感から、恐怖を感じさせなかつたものと判断されます。金比羅山を越えて初めて、生存の可能性が生じたために、急に恐怖を覚えたものと思います。隠れる場所もなく、道端の排水溝に身を伏せて、早く爆音の通り過ぎるのを祈りました。

諏訪公園から神社の境内に辿りついたのは、午後四時頃だったでしょうか。或いは

三時頃だったでしょうか。附近にある同級生の芦沢君の家を訪ねました。

芦沢君も、私と同じ南講堂にいた一人でした。家族の方から防空壕に寝ていると云われ、見にまいりますと、足に負傷してかなり弱った様子で横になっていました。

上半身裸だった私は、芦沢君のシャツを貸していただき、戦斗帽を被り、芦沢君と再会を約して炮弾町に出ましたが、そこで又爆音を聞きました。急いで防空壕を探そうとしてハッと思い出したのは、金比羅山附近で止血包帯をして寝かせておいた、中学の先輩岡部氏のことでした。彼の家は炮弾町でしたから、早速家を訪ねて、彼が負傷していること、動けないことを話して、その場所を知らせました。すると数人の人が早速、救助に出かけたようでした。

やがて市の中心部まで辿りついた私は、自転車屋に修理を頼んでいた自転車に乗って、土井ノ首の自宅に向いました。左足と右肩に負傷していたので、右足でペタルを踏み、左手で運転しながら、やっと八キロ離れた我が家に帰ったのは、夕刻の六時過ぎだつたと思います。母を初めとして、妹や弟達がどんなに喜んだかは、想像に余ると思います。

父は当時南支に出征していて不在、母と一緒にいたのは、一番年上の私、十五才と十三才の妹、十一才、九才、七才、四才の弟達で、以上八人暮しの家族でした。一人の兄は京城大学在学中で不在でした。

疲れ切っていた私は、広い横穴の防空壕に入つて横になりました。左の胸から出血していたのは、小さいコンクリートの破片が入つたためで、土井ノ首に疎開して來ていた病身の医師である叔父が、これを剔出してくれました。その後私は上腹部の痛みを訴え、嘔吐を繰返しては昏々と眠つたのです。それは原爆の阿鼻叫喚の地獄の中から生還した、心身共に消耗して横たわる一人の人間でしかなかつた様だったのでしょう。

その後「日本はもう負けだ」と口走つていた私は、終戦のラジオを比較的に静かに受け入れた一人だったので思います。

全くなかつた食欲もやや恢復して、注射器や注射液を飽に入れ、八月十六日に諫訪

神社横の芦沢君の家を訪ねました。彼は瀕死の床に横たわっていました。しかし翌七日には米軍が上陸するというデマが飛び、私は母と妹達のことを案じて家に帰りました。芦沢君は私を頼りにしていたのでしょう。何度も何度も私の名を呼んで死亡したそうです。十九日に芦沢君の死体をお寺の焼け跡で焼きました。積み上げた廃材の上にトタン板をのせ、その上に芦沢君の遺体を載せました。若かった彼は、この世と別れるのを嫌がっているように見えました。

誰も死んだ、彼も死んだと、私の耳には次々に同級生や知人の訃報が、ひっきりなしに入りました。「皆死ぬのか」と思いながらも、私は比較的元気に、八月下旬を過しました。買出しにも行き、散歩もし、魚釣りもしました。

九月になってから、何となく疲れたような感じがするようになりましたが、五日の朝歯を磨いていますと、どうした加減か、歯齦からかなり出血しました。少し頭も痛く、食欲もないでの、一日中横になっていますと、夕刻、中学時代の同窓生で土井首小学校の代用教員をしていたH君が、新聞をもつて訪ねて来ました。

タブロイド版の新聞を、「オイ見ろよ」と云つて、私の前に突き出しました。その

中の「広島に新しい原爆症状発生す。」という見出しが、私をとらえました。  
「新しく発生した原子爆弾症状は、先ず歯齦より出血し、発熱して、扁桃腺炎のような症状を呈し、急速に衰弱、出血性傾向が強く、高度の貧血を来し、全身に大小の皮下出血による斑点を生じ、遂に死亡するに至る。適切な治療方法は見つかっておらず、死者は増加の一途を辿つてゐる。」といつた内容でした。

いくら眼をこらして読んでも、生命が救われた記事は一行もなく、「死に至る」「方法はない」「死者の数は増加の一方向」という活字だけしかありませんでした。  
その日の夕刻、体温は三十八度を越えていました。夜、母の依頼で、近所に仮住居されていた長崎医大古屋野外科講師の島内先生が、往診に来て下さいました。先生は川南工業病院江川分院の院長職を兼ねておられたと思います。診断は一応扁桃腺炎で、サルファ剤の投与を受たように思います。

翌日は更に体温が上昇して四十度に達しました。頭痛、全身倦怠、脱力感が強く、

歯齦出血以外に、鼻出血もありました。島内講師はわざわざ顕微鏡で私の血液を検査し、貧血が高度であることを母に知らせていました。赤血球一三〇万、白血球一七〇、断片的に私の耳にも入りました。

翌日、口腔の中は次第に壞死に陥り、経口的には何も入れることが出来なくなりました。自分の手を見ると、なんと大小の紫色或いは暗赤色の斑点が出ているではありませんか。母にそれを見ると、「蚤や蚊に刺されたあとででしょう」と、私の手をこすりながら申しました。しかし母の目からは、涙が出ていたようでした。

私はその皮下出血斑が何を意味しているか、よく解りました。それは「死」を象徴するものに外ありませんでした。「死ぬんだな」と思いました。情なく、悲しく、涙が出来ました。母は最後に島内先生の往診を依頼しました。

「間違いありません。原爆症状です。私の力ではどうにもなりません」。先生はすぐの手当をして帰られました。そのうちに意識がぼんやりして来ました。朝とも昼とも夜ともつかぬ時間の中に、私は居ました。

私は意識の世界にいるのか、空想の世界にいるのか、判らなくなりました。夢のようでもあり、現実のようでもありました。仰臥している足の方から、斜め上方の宙空に、身体がスープと引込まれるような気が、何度もしました。

「死ぬのだな」と思いました。「誰でもみんな、あの爆弾を受けた人は死ぬんだ」と思いました。死んだ友人や、好きだった友達の妹（原爆で即死）のことも考えました。「皆死んだんだから、俺も例外ではないんだ」と感じました。そして又、足の方から宙に引込まれる気分になりました。

「頑さん、しっかりするのよ!! しっかり!! 頑さん!!」朦朧とした意識の中に、

母の声が聞え、力のない手に、母の握りしめた手の感覚だけが残っていました。死と生との間に残っている、唯一の触感でした。

意識を失い、意識が戻るたびに、母は傍に居ました。三晩、母は一睡もしなかつたそうです。「死なせてなるものか。あの世に行かせてはならない。この手だけは離すものか、としつかり握っていたのよ」と、母は述懐する。

この原爆第三期症状と呼ばれた死の約束から、私が逃れることができたのは、この母の限りない愛の力であったと思います。

約三日間、生死の間を彷徨した私は、九月十一日か十二日の朝、「水、水を——」と云ったそで、それから少しづつ意識が戻つたと、母が話してくれました。

「とにかく、生きたもんのことなかつたとよ。全身に皮下出血斑が点々として、手足は細い棒のように痩せ、肘と膝だけが妙に目立つてね。顔は半分腫れ上つて、鼻と目の区別がつかんぐらいやつたしね。眉毛や頭髪は抜けるし、口の中の粘膜は腐つてどう黒くなる、まるで牛の口のようで、濃汁がひつきりなしに出てね、その悪臭で部屋にはほかの人は入りきらんことあつたとよ。」とは母の話である。

又、当時の私を見た人は、「三角形の白い布を額においてたら、まるで地獄の亡者だとしか思えなかつた」と云っていました。

この最悪の状況が乗り切れた理由に、いくつかの欠かせぬ幸運がありました。父が出征して不在だったことは、不運のようではあります、父の意志で、「自分

のいない間でも代診はおくな。薬品は地下に入れておく。」と云つて、藏っていた薬品がかなりあったことは、私にとって幸運でした。リンゲル液、ロック液、ブドウ糖液、ビタミン剤、解毒剤（ゲドックス）等のアンプル多数です。

しかし父の残した薬品が底をつく時、もう一つの幸運が私の生を支えました。

父が出征したあと病院を閉鎖したので、入院室がいくつか空いていました。そのうちの二部屋を、当時土井首にあつた「太刀洗陸軍航空隊燃料タンクの警備小隊長」の住居に当てていました。その燃料タンクに、従業員として働いておられたのが、長崎市内の薬品問屋の社長さん達でした。

母の姿に感動したK隊長（中尉）の命令で、薬品がかなり手に入りました。当時としては不可能な事だったと思います。その上に若い下士官や兵の方々が、A型の血液を私に下さったのでした。

死ぬべき運命の私がよみがえったのは、数々の幸運の積み重ねであり、それによつて紙一重の差で死の一歩手前から、生へと向うことが出来たのでした。

注射は島内講師や、市の中心部から疎開していた女医の叔母が引受けってくれ、誰も

いない時は母がしてくれましたが、その島内講師も大学に帰られ、女医の叔母も長崎

市内に戻り、母だけになりました。

しかし母の努力も体力も限界がありました。九月十七日のことだったと思います。母が私に、「順さん、若し正さん（私の兄）が帰つて来たら嬉しかね」と尋ねるので

す。「嬉しいさ」と返事しますと、「帰つてきても吃驚せんね」と母が申します。

「うん」と頷きますと、母が「正さん！」と呼ぶが早いか、兄が部屋に飛び込んできました。京城大学医学部にいた兄が帰つて來たのです。兄は「こんなになつて——」とそれだけ云つて、私の手を握つたりさすつたりして泣きました。母が予め私に「若し兄が帰つたら」と尋ねたのは、私が余りの喜びのためにショックで死ぬかも知れぬと、判断したからだつたそうです。

注射の役目は、その日から兄が引受けてくれました。又しても私の生命はつながりました。大邱と釜山から買って来たというリンゴと、弁当箱一杯の砂糖。翌日初めて私が水以外のものを口にしたのは、このリンゴをおろしたものに砂糖を混ぜたもの、それと卵黄と片栗粉を混ぜたゼリー様のものに、砂糖で味をつけたものでした。

「美味しい！」兄は満足し、母は初めて昏々と深い睡眠をとつたと云います。

九月下旬だったと思います。二階から見える長崎港外の海を、続々と白い波をたてながら、港内に向う米軍の上陸用舟艇群を、床の上に横たわつたまま眺めて、今更のように日本は負けたと痛感し、そして、「私は生きた」と思いました。

十月、私の家にも米軍海兵隊が、土足で上つて來た日がありました。かつて病院だったといふことで、自動小銃を持つた兵数人が、麻薬や毒薬はないかと捜索に來たのでした。米兵達は臥床している私を見て、どうしたのだと兄に尋ねました。兄は英語で「atomic bombによるものだ」と答えました。すると米兵は無言のまま、私の布団にチョコレートやガムを投げて寄こしました。この時ほど、米兵を憎いと思つたことはありませんでした。私は手に触れたものを投げ返しました。死んだ多くの友人、好きだと云うひまもなく即死した友人の妹の靈に対し、私が米兵に行つた精一

杯の反抗でした。米兵は首をすくめて帰りました。

しかし占領軍の石鹼、薬品、食糧などは、當時飢餓状態にあつた我が家の中では、何等からの形で、特に私の治療のために使われたことは、間違いないと思います。

昭和二十一年十月三十六日、満十九才の誕生日には椅子に坐ることが出来ました。暮には漸く歩くことが出来ました。

昭和二十一年の正月には、九大医学部に転校した兄に背負われるようにして、福岡まで行き、九大口腔外科で上顎骨の腐骨を剔除する手術を受けました。「白血球二六〇〇、赤血球二四〇万じや、酔酒もよう出来んわ」。骨錐がバリバリと上顎骨門歯部を噛み取る時は、氣絶しそうでした。

昭和二十一年四月、ようやく入歯いわせをはめた私が、大村国立病院に移転していた医大に登校し、生き残りの同級生に会うことが出来た時、生存し得たのは、神の恵みと母の限りない愛情があつたことを、心に刻みつけました。

原爆落下時、登校していた同窓生が約一三〇名、そのうち生存者四名、基礎教室（木造）にいたものは生存者〇、生存者四名の内、南講堂にいたもの二名、そのうちの一名が私で、他の二名は現在佐世保で開業している藤瀬実君、やはり五十音順で割り当てられた八月七日の防空警備隊の一員、他の二名のうちの一名江口君は、八月一日の空襲で胸部盲貫爆創をうけ、臍脇にて大学病院に入院臥床中に死からまぬかれ、もう一名は梁瀬（和正）君、別の入院学生和田（弘行）君を見舞つていた時、その病院で被爆、幸に助かって現在五島有川で開業中です。

こうして私は、奇蹟的と云つてもよい程の運命を辿つて、生存しています。

昭和二十一年四月末、南支から復員して來た父は、鹿児島で長崎医大全滅の悲報を聞き、浦賀から母にあてて打った電報に、「——スナオノコトハアキラメテイル」と付け加えています。これは父の母に対する思い遣りだつたと思います。

父との再会、今でもあのガッシリした父の腕が、私の背中をかきむしるようにして、しつかり抱いた時のことは忘れません。

昭和二十七年までは、白血球が三万に増えて白血病かと驚いたり、貧血があつた

り、肺結核に罹患したり、痔瘻の手術を受けたり、決して健康とは云えない時を過しました。しかし同年四月、脳軟化症で半身不随、失語症になつた父の跡をついで、兄と共に仕事をしだしてからは元気で、特記すべき病氣もなく、昭和三十年、医療法人

病院を設立してからは、十八年間病氣で病院を休むこともなく、健康で通しているのは、一体どうしたことでしょうか。

私の胸からコンクリートの破片を取り出しててくれた叔父は、昭和二十年十月末に死亡、最悪の時期に私を診療して下さった島内講師も、昭和四十一年に直腸癌で死亡、

父も昭和三十四年に死亡、京城から帰つて私に注射してくれた兄も、昭和三十八年末に肝硬変で他界した。それなのに、私は未だに生存中——。毎日患者を診る度に、私は何故こうして生かされているのか、と神に問うてみことがあります。

昭和三十二年に三十一才で結婚、三十四年と三十六年に共に女兒を恵みました。こんなにひどい原爆症患者だった私は、もしや奇形児でも生れてはと思ひ、結婚を断念していた時期もあった程ですから、これも伴せなことでした。

原爆二世、私の娘達はそう呼ばれることでしょう。彼女等がすくすくと健康に育ち、その将来に神の恵みのあらんことを祈る毎日です。  
私の原爆体験記はこれで終ります。私はこれまで、原爆体験記を書けと云われたことが度々ありました。しかし、いつもそれを思いとまりました。それは紙に書いて伝えられるものではない、と思つていたからです。

言葉で質問に応じ、断片的に話したことはあつても、これだけの文章に纏めたことは初めてです。今の私を見た人は、誰もこのような経験を持つた人間とは信じないでしょう。しかし多くの人々が、原爆の洗礼をうけて即死し、或いは原爆症で死ぬ、又現在も罹患している人が大勢います。

私のこの拙い記述が、その人達の冥福を祈ることになり、或いは元氣づけるのに役立ち、また二度とのようないよううに、と祈る縁ともなればと思ひ、元気を出して書いてみました。

特に母の限りない愛情については、いつの日かは書き留めておきたいと、念じてい

たものの一つでした。

(四九、一、一〇)

## 級友益田良和君の死

長崎県南高来郡千々石町  
当時付属医専二年生

真 島 真 平

昭和二十年八月一日、午前十一時頃、医専二年は南講堂で講義を受けていた。突然空襲警報のサイレンが鳴つたので、講義は中止となり、学生達は避難のため講堂から駆け出した。私は益田君と一緒に裏口から出て、二本煙突のある汽罐場の方へ走つた

が、B25四、五機が金比羅山の方から飛んで来て、爆弾を投下するのが見えたので、「爆弾だ!!」この床下に入ろう」と、調外科床下の入口を示したが、益田君は、「俺は先の防空壕に行く」と云つて走り去つた。

先の防空壕というのは、古屋野外科手術場裏の防空壕で、調外科床下から約五〇メートル先にある。私は「間に合わんぞ!!」と叫んでとめたが、そのまま走り去つた。

私が床下に入ると殆んど同時に、物凄い爆発音がして、今にも建物がつぶれるように地面が揺れ、土煙であたりが暗くなつた。暫らくして明るくなつたので、裏山に避難しようと思つて床下から出た。入れ代りに数人の同級生が床下に入つたが、何分急いでいたので、誰だったか覚えていない。

床下を出た私は、裏の丘に一応あがつて、十分あまり後に帰つて來たが、益田君は既に死んでいた。松尾宏君が安置所の横で、「益田君にお別れをしろよ」と云つたが、私は足がすくんで入れなかつた。ただ顔に白布がかけてあるのを、そつと見ただけだつた。(四九、一、一二)

【調追記】八月一日に投下された爆弾六個の中の一つは、調外科と古屋野外科の中間から、高南病棟へのぼる石段の途中に落ち、それから下を大きく抉つていた。益田君は古屋野外科裏の防空壕に向う途中、この爆弾にやられたものと思われる。私

は外来本館地階の救護室で益田君を診たが、殆んど即死の状態であった。若し真島君の勧めに従つて、調外科の床下に入っていたら助かつていたのに、と残念でならない。

## 原爆前後の思い出

北九州市小倉区上到津本町三一九〇〇  
当時付属医専一年生

### 東 英二

調名養教授より突然、原爆前後の思い出を書いて欲しいとのお便りを戴き、何分私は当時新入生で、入学後僅か一ヶ月しか経つていませんでした（この年は特に七月一日の入学でした）、且つまた文章の下手な小生なので、如何したものかと困り果てた次第でしたが、先生から懃々の依頼でございましたし、諸先輩先生に、何だ、つまり記事を、とお叱りを受けるのを覚悟の上で、思い切つて、数え年十八才の若輩の脳裡に鮮明に感じ、いまだに焼きついて離れない事などを、少しばかり記してみると致しました。

× × ×

入学後一ヶ月も過ぎて八月になると、長崎方面は俄かに空襲が激しくなり、下宿での夜毎の炊事も、真夏にも拘らず、雨戸を締めてやらねばならぬ状態でした。急に用事が出来、又今考えると、このようではいつ焼け出されるかも判らぬという、何か予感みたいなものが働いたのかも知れませんが、二年生の井上公明兄（大分県出身で現在北九州市小倉区で開業）を誘い、八月四日でしたか、小倉の実家へ帰省しました。

用事を済ませ、八月八日夜に長崎へ帰ろうと小倉駅まで行くと、八幡付近の空襲で汽車が不通とのことで、止むなく翌九日朝に出発しました。岡らざるもののお蔭で、命拾いしたようなわけでした。

列車が正午過ぎに諫早に着くと、長崎方面に物凄い黒煙が立ちのぼり、そのまま正に天をつくばかり。これを見て乗客一同はびっくり仰天、車内が騒然とした不安のうちに、午後一時ごろ道ノ尾に到着しましたが、これから先は運行不能で、皆列車から降されました。

あたりを見ると、屋根瓦は落ち、線路上にはガラスの破片が散乱して、今更ながら爆風の凄さに驚かされました。道ノ尾からは皆と一緒に、線路伝いに長崎へ向いますたが、大勢の人が雪崩のよう長崎からこちらへやつて来ます。浦上方面には濛々と一面に火の手があがり、その範囲は長崎市全体に及んでいるように見えます。果して何処まで行けるか分らないままに、走るようにして道を急ぎました。

長崎から逃げて来る負傷者たちは、殆んど裸のままの状態で、怪我の人、火傷の人は、とても見るに忍びない哀れな人ばかりでした。更に進んで行くと、浦上川では半裸体の被爆者たちが、川辺で折り重なるようにして倒っていました。

それから先はまだ火事の真最中で、一面の焼野原、煙と死体の散乱で進むことが出来ず、止むなく浦上駅近くから、再び道ノ尾へ引返しました。

この淒惨な光景を目あたりに見て、これで戦争も、短い人生も、終末が近づいたということを強く感じました。生き地獄とは全くこんなものか、という感じでした。

道ノ尾近くの畑にポンとあつた一個の大きな南瓜を失敬し、これを持つて途中で逢った薬専三年の椎名兄（長野県松本市在住？）と一緒に、駅の近くの家に一晩厄介になりました。その夜の頻回な敵機の偵察は、全く無気味そのものでした。

翌日諫早に引返しましたところ、駅のホームに重傷者が続々と運ばれ、ホームに着くや否や、息を引き取った人も何人かいきました。上級生だったら何らかのお役に立つことも出来るだろうに、と考えながら、いらだたしい一日でした。

角帽姿だったので、負傷者から何とか尋ねられたこともありましたが、何分入学したばかりなので、どうしようもない有様でした。

専門部一年生の中、登校していた者は全部で約百八十名。それが皆死亡したと記憶しています。この中には調先生の御子息はじめ、当時の面影をはつきり思い出せる人

が、何人かいます。

八月九日が土曜日か日曜日だったら、食糧事情が悪かった関係上、帰省する生徒も多く、これ程の犠牲者が出なかつたのではないか、と残念に思つたことでした。且つ又、爆弾の投下されたのが空襲警報中でなく、警戒警報中であったことも、犠牲者が多かつた原因だと聞かされました。前記の椎名兄は、コの字形防空壕の中にいて助かつたとのことでした。

尚、八月九日の朝、北九州市小倉の上空が快晴であつたら、当時のアメリカ飛行士の記録にあるように、あの原爆は当然小倉に投下され、小生の家は全焼、一族の多数の死亡は免れなかつたことあります。

八月九日が毎年やつて来る度に、小生はどうして現在生きているのだろうか、と考えさせられます。運命とは——。一瞬の、且つ一個の原爆ではあります、小倉の身代りになつた不運な長崎の、あの大きな犠牲、北九州市八幡の大空襲、こう云つた事と自己の運命との関連を、折にふれ、いつも厳粛に考えさせられるのです。

今年の夏、少し時期的に遅かつたと思ひますが、小倉の中心部に、長崎原爆碑が建立されましたことを、御報告申し上げます。

戦後、昭和二十二年の春、GHQの命令で長崎医大の附属医専が廃校となり、小生は千葉医大に転校したわけですが、廃校がなかつたらずつと長崎でお世話になり、現在とはかなり変つた、医師としてのコースを辿つたことだらうと思います。

終りに臨み、原爆死された恩師、同窓の御靈に合掌しつつ、筆を擱きます。

(四八、九、二二)

## 原爆の日の思い出

長崎県南高来郡有家町中須川一五九  
当時付属医専一年生

磯野雄

去る六月二十三日、長崎新地の会樂園で、ぐびる会六、七期生の同窓会が催された

折、調先生から、「君がへぐびる会誌に出していたような手記を、△忘れな草△に載せてくれないか」とのお話があり、個人的なことで恐縮ではあるが、いくらかそれに補筆して、私の原爆体験記の一端を披露する次第である。いわば△生残りの記△ともいうべきものである。

× × ×

吾々七期生は、まさに最終学年で、終戦の年、昭和二十年七月に入学、わずか一ヶ月余りでかの原爆の洗礼を受け、「悲劇の学生時代」が幕明けしたのである。

当時、私は城山町の叔母の家に下宿し、夢多き医学の勉強に、華々しくスタートした時であった。

数多き同胞の尊い生命を奪い去つた原爆から逃れて、生き残らえていたことを思う時、かの生き残り帰還兵の横井さんが、「充分な御奉公も出来ず、恥かしながら帰つてまいりました」と告白した心にも似たものを感ずるのである。

その前日、叔母から「郷里に帰るから、荷物を持って一緒に来てくれ」と、たつての頼みがあり、随分考へた上で、しぶしぶついて行つたのが、運命の別れ目であった。一つは父が食糧を取りに来いと、再三云つて來ていたことを思い出して、それにひかれたからもある。当時一日でも学校を休むことは、大変なことだった。

こうして、その当日である八月九日の朝、私は肩に背負いきれるだけの食糧をかつき、両手に持てるだけの荷物をぶら下げ、勇躍、家を出て再び長崎に向つた。

それも朝一番の汽車に乗る積りで、郷里の有家駅を行つたのだが、丁度空襲警報のため、まだ当分、汽車は出発点の加津佐駅を出ないということで、荷物だけ駅前の店に預けて、再び家に引き返していった。そして大分遅れて、汽車は有家駅を出発した。これがまた幸いしたのである。

運命の原爆は、諫早で島原線を降りて、長崎行に乗り替えようと、本線のホームに降り立つた時に、投下されたのである。

あの閃光が諫早駅のホームまで閃き、轟音が耳をつんざいたことは、はつきりと覚えている。時まさに八月九日午前十一時二分であつたのである。

然し駅長も、機関手も、乗客も、ただ長崎方面に新型爆弾が落ちたようとの推量だけで、誰もそれが広範な被害をもたらした原爆であったとは、知る由もなかった。

下り本線の汽車は、そのまま定刻通り、乗客を満載して長崎に向った。この汽車が原爆投下直後、真先に長崎に滑り込んだ乗物と云えよう。

既に長与の駅で、すれちがいの上り列車の、こなごなに破れた車窓から、山のような負傷者が運ばれているのが見えた。窓越しに、その車の中に向つて、「長崎の街はどうか」と尋ねてみた。「もう何もない。皆やられた。行ってみたらわかる」と、悲愴な返事が返つて来た。

「そんな筈はない。しかし相当ひどくやられたようだが、爆弾の落ちたのは一体何処だろう」などと考えてみたが、今までの常識と違つて、被爆者の形相は異様なものであった。私はまた、「私の住んでる城山は町はずれだし、まさか、ここは大丈夫だろう」とも考えてみた。いや私だけでなく、今長崎に向つている一人一人が、自分の家だけは大丈夫、と考えていたに違いない。

汽車は道ノ尾駅でストップし、乗客は皆ここで降ろされた。丁度駅の近くに友人の家（友人の父は現在大波止の昭和閣主人、辻田寅次郎氏）があつたので、そこで荷物を整理し、すぐに食べられるものだけを持って長崎に向い、線路伝いにひた走りに走つた。

浦上の駅に着いたのは、午後二時頃ではなかつたろうか、全土が火の海であつたことは云うまでもない。あの長与駅で破れた車窓から返つて来た、悲愴な情報を裏づける、いやそれどころか、全く想像を絶する修羅地獄絵図であった。

かくして原子野に一週間余、夢中で原爆負傷者の救護に当つた。折から、炎天下の灼熱の大地と、すさまじい爆発後の放熱で、とうてい足の踏み入れようもなく、ただ偶然と立ちつくすのみ。しばらくして火の衰えるのを待つて、松山橋付近から浦上川に降り、水に浸りながら川下に向つて下る。ここでも又地獄絵図を見た。渴きをこらえきれず水を求め、重傷の体を引きずつて、やつと水辺に辿りついたまま、顔を埋めて息絶えている人、まだうごめいている人、数限りない人々が、たつた今先、原爆

の光線をまともに浴び、瀕死の重傷を負つて折り重なつっていた。

そんな人達をかき分けるようにして、ただ一人元気な自分だけが、川を下つて行ったのである。

城山の元鎮西学院の北側の崖下、石割り場近くにあつた私の下宿（従兄八十川純一宅）の所にやつて来たが、一帯は焼野原と化し、まだ火が残つていて、足の踏み入れようもない。従兄夫婦が住んでいた家は、もちろん影も形もない。

川辺で突然、片手に棒切れを持ち、仁王立ちになった凄まじい形相の若い男に会つた。どの人だか知らないが、「妹が半死体になつて、余りに悶え苦しむので、たつた今打ち殺してやつた」という。もはやこの世の出来事ではない。恐らく体の半分が失くなつた状態であったのだろう。

その日、医專の丘にも上つてみた。まだ半死体の友がいて、黒焦げに焼け爛れた顔に、ただ目だけを光らせながら、私の名を呼んだ。「君は誰だ」と問いつかれて相手を知る始末、可哀そうに、何と云つていいのか慰めようもない。すまない、すまない、とただ泣き伏すのみ。

「今から野母に帰る」と、包帯で顔や頭をぐるぐる巻きにした、中学時代からの同級生の岩永要範君とも会つた。「早く元気になつて、又会おう」と励ました。あの時が最後だったのだ。

また同じ中学時代からの医專の同級生、錢座町の井上政治君とも会つた。彼は不思議に、一糸纏わぬ素っ裸であった。傷もない。しかし全身フラフラだったので、道ノ尾の友人（前記の辻田寅次郎氏）の家に連れて行つたが、三日目、看病の甲斐もなく、最後に口から泡を吐き、全身を硬直させたまま他界した。

それも、お父さんの井上先生を錢座の防空壕からお連れして、（先生も原爆で重傷を負つておられた）面会させた後、間もない時刻であった。それまで父の名を呼び続けていたのだが、その顔を見て、本望と思ったのだろうか。

話はあと先になるが、原爆の落ちた日の夕刻、付近で被爆して生き残つた人達を、松山町の市民グラウンドに集めることになった。誰だか指揮する人がいて、町別或い

は隣組別に列を作るようにして並ばされた。そこに居合せた人達の数は、さだかに覚えていない。

被爆が昼食前の十一時二分であったから、皆腹ペコペコの状態であった。指揮者が、「誰か大波止の本署まで行って、乾パンを取つて来てくれるものはいないか」と呼びかけた。勿論私は真先に立ち上つて、その役を買って出た。もう一人若者が加わり、二人で出かけることになった。既に日は西山に没して、原子野のところどころには、まだ火がトロトロと燃え、或いはくすぼり続いている。そうした中を目的地に向つて、右往左往しながら歩いて行く。

原子野には、まだ収容しきれない負傷者があちこちにうごめいていて、暗闇で引つかかつた足を突然攔まれ、「水をくれー」とせがまれて困惑した。

背負いきれるだけの乾パンをかついで、再び皆の待つている浦上の市民グラウンドに引返した。長崎駅前通り過ぎた所で、敵機來襲の爆音、その音は急に頭上に近づいて来て、明らかに急降下爆撃を予感させる。もう生きた心地はなく、担いでいた乾パンを放り出して、大地にうつ伏す。途端に屋をあざむくような照明弾の閃光、思わず息をのむ。敵が、直後の有様を撮影しようとしたのか。すると一瞬、明るくなつた空から、ヒラヒラとビラが舞いおりて来た。一旦手のひらに握りしめたものを、やがてじっと開いて見る。例の「日本国民に告ぐ。即刻都市を退避せよ。そしてこの有様を日本國天皇に告げよ」といつた意味の、アメリカ軍の宣伝ビラであったのである。

乾パンはその後無事に届けられ、被爆者の皆さんに、大変に喜ばれたことは勿論である。

思い浮べれば切りがない。あの悲惨な、噩夢のような、苦しい原爆の日の思い出。

「二度と繰り返してはならない」。言い古された言葉だが、改めて、あの日の悽惨な浦上の地を思い浮べ、もう一度あの空に向つて叫び、その言葉の意味を深く噛みしめてみた。

稿を終るに臨み、改めて亡き友の冥福を祈り、生き残った者の幸せを囁みしめ、その使命の重大性を、更に深く認識する次第である。

(四八、七、二五記)

## 原爆を免れたいきさつ

東京都新宿区下落合二一一一四一〇号  
当時付属医専一年生

前田利郎

当時のことを、私は、あまり人に話していない。もちろん、書いてもいない。  
原爆にあわなかつたのだから、というのではない。

長崎医專に在学していて、なぜ助かったのだ、と聞く人には答えている。その人は、「学校をサボッて、助かつて、よかつたですね。フーン」と感心する。その人は、それだけのことである。

しかし、私には、それだけでは終らない。一生、この思いはついてまわることだろう。わずかの期間だったが、誠心誠意教えてくれた先生たち、同じ志を抱いて、紅顔を寄せあつた級友たち、オレだけ生きていて申しわけない、と私は、この申しわけなきを大事にしたいと思う。みんなの分だけ、この世に貢献してやるぞ、といった、だいそれたことではない。二度と、戦争があつてはならないし、非人間的な、悪魔道具をつくらせてはならないし、そのためには、精いっぱいやろうという、私の願いの原動力になつてていることだけは、確かである。

八月一日の空襲は、ほんとにこわかった。

午前十一時すぎ、空襲警報が出て、講義が早めにおわった。警報が出ても、敵機なんかめつたに来なかつたから、みんな講義が早めに終つたことを、喜こんでいるふうだつた。

「こりやあ、ついてる。いまの時間なら、病院のうどんを食えるぞ」「早く行って並ぼう」

私は、二、三の級友と喜び勇んで、病院への坂をおりて行つた。

本来なら四月の入学なのだが、この年、昭和二十年は、中学生があつちこつちの工場へ勤員で出かけていたためか、七月一日が入学式だった。鹿児島県立二中生とし

て、愛知県の常滑や半田の飛行機工場で、偵察機の組立をしていた私は、動員解除が遅れ、七月も相当遅くなつて入学したようにおぼえている。だから、級友との顔などみも少なく、この時の友人もまだ、お互いに名前は知らなかつた。

病院のうどんが食える、ということは、極めて重大なことだつた。食糧事情が悪く、下宿生活の私は、いつも飢えていた。いま、私は時々、家内に弁当をつくつてもらうことがあるが、下宿でつくつてくれる弁当は、いまの私のおかず入れと同じ大きさのアルミニウム箱だつた。それに、コーリヤンや大豆カスや麦がほとんどのごはんが薄く入つていた。「食いもののウラミは——」というが、ほんとに、この弁当の情ない中味は、いまもアリアリとおぼえている。うどんが売り切れないうちに、と病院の廊下を走つている時に、バリ、バリッという機銃掃射の音が聞こえた。ふりむくと、敵機がグングング迫つてゐる。操縦士の顔さえみえる。

「地下だ。地下だ。走ろう」

病院の廊下は長かつた。お年寄り、女性の多い患者さん的一群が、おびえた表情でうずくまる。地下の廊下へころげるよう、おりたところで、ズシン、と地響きがし、あちこちのガラスがわれ、重い風が走つた。耳に手をつめて、かがむ。

「一トン爆弾だな」と誰かがつぶやく。

前の老人が、スキ間だらけの、名ばかりの箱をアタマにかぶつたのが、妙におかしかつた。

火事が起つたようだ。あちこちで悲鳴が上がる。ケガ人も出でているらしい。私のそばに、やはり鹿児島二中から來た、今給黎君がいた。

「裏山へ逃げよう」

二人は逃げだした。実は私たちの小隊は、永井隆さんが隊長で、こういう時は、消防活動や、患者の避難を誘導しなければならなかつた。あとで聞くと、級友たちは、勇敢に活動していた。

しかし、私には永井さんが、コワイ存在だつた。永井さんはある時の訓示に、「敵にうしろを見せるな。いつたん、事ある時は、諸君は、生命を屠して、火の中、水の

中へ飛びこんで行け」と、きびしい表情で、ハッパをかけられた。

「軍國」鹿児島に育ち、「軍神横山少佐につづけ」が合言葉の二中で鍛えられ、自らも、海兵、陸士を受け（て落ち）たほどの軍國少年だつたハズの私だが、實際には臆病者だつた。戦後になつて、永井さんが敬ケンなキリスト信者だつたことを知り、意外な思いをしたことがあるが、永井さんは、軍國主義的なハッパをかけられたのではなく、医の道に入ろうとする者の倫理、自己犠牲を説かれたのであろう。しかし、当時は、そんなことはわからず、ずい分、きびしいことをいう先生だ、と思つていた。ともかく、二人は逃げた。このあとも空襲がつづき、講義も休み、休みで、あとかたづけの作業などが多かつた。

八月六日になつて、私と今給黎君は、帰省する相談をはじめた。というより、私が帰る、といいだしたら、同じように心細い思いをしていた彼が、「そんならボクも」と同調したのである。

空襲もこわいが、毎日、毎日おなかがすいてたまらないのである。当時、医專の二年だつた兄がいたら、まだ食糧の工面の方法もあつたのだろうが、その兄は「夏休み返上になつたし、家から日本刀をもらつてくる」といつて、帰省してしまつた。受験に來ただけで、西も東もわからぬ長崎で、友人もまだできず、配給分だけ出さない下宿の食事を、補う方法は何もなかつた。二人はおそるおそる、担任の斎藤先生のところに頭を下すと、帰省許可と学生割引証の交付を願い出た。

名目は何にしたか、よく覚えていないが、動員解除が遅れて、動員先から直接長崎へ來たので、ということでもあつたろうか。

先生はニコニコしながら話を聞き、「帰省するのはいいが、帰りの汽車が大丈夫かねえ、汽車はネラわれるそだから、やめておいたら」と、いつたんはとめられた。しかし、二人は大丈夫です、とがんばって、とうとう、OKをもらつた。

私は下宿の隣の部屋の同級生に、「この分では長崎は近く大空襲を受けるだろう。そうなると学校も休みになるから、いまのうちに郷里に帰つてくる」というメモを残して、八月七日に汽車に乗つた。

斎藤先生以下、学校へ出ていた級友は、一人残らず原爆死した。隣室の友人も、御

までも黙悼をつづけた。

両親が息子さんの机のわきにあつた、私のメモを見つけて、「この人は神様のような見通しをもつた人だ」といわれたそうだが、当時、米軍機が空襲を予告するようならをまいていたから、そう思つただけで、非人道的な原爆攻撃など、夢想だにしなかつたのは当然である。

汽車は空襲警報のために、走つたり、停つたり。八日になつてもまだ熊本県下を走つていた。片田舎の線路に長時間停つた時、汽車からおりて農家へ入り、食糧を売つてほしい、と交渉した。おばさんは事情を聞くと、おにぎりをつくつてくれたが、お金はどうしても受取らなかつた。乞食をしているようで、情ない思いで汽車へ帰るが、前に坐つていたモンペ姿のおばさんが、炒つた大豆を手のひらにのせてすすめながら、広島の新型爆弾の話をしてくれた。広島を通過する時に、焼けたあとを見たというのである。

「なんか、ピカッと光つたら、一べんに何もかもなくなつたんだそうです」

大豆を口の中へ入れたまま、私はイキをのんだ。

二日ばかりで、ちょうど長崎が原爆に襲われた九日の夕方、郷里の鹿児島へたどりついた。医大の前身の医専を出て開業している父は、食糧事情ごときで帰省した息子に、情なさそうな表情だつた。

まもなく、長崎にも新型爆弾が落ちたことが伝えられ、つづいて終戦となつた。

年があけてから、生き残つたものばかり、つまり、当日、帰省していたか、病氣で休んだり、サボつたりしたものだけで、級友の遺骨を集めてまわつた。

原爆から相当、日時がたつてゐる、といふのに、私たちのクラスがいた生化学の講堂跡には、まだ相当大きな骨が残されていた。みんな黙々とコンクリートのかたまりを持ち上げ、その下にかくれてゐる友の骨を拾つた。アルミニウムのひしやけた弁当箱、柏の葉をかたどつた徽章も――。

ここで、当日、斎藤先生は、広島の新型爆弾の話をされ、「落ちたら逃げる以外になからう」とおっしゃつていた時に、閃光が走つたという話を聞いた。私たちはいつ

生残りの組は、外地から引きあげてきた医事生徒や、各地からの転入生といつしょに、九大の付属医専に預けられたり、諫早のバラック教室で授業を受けたりしたが、昭和二十二年になつて、医専が廃校になるから、それぞれ転校せよ、ということになつた。私もいったんは鹿児島医専に転校したが、まもなく、新制大学の基礎づくりといふネライで、大学付属長崎高校という理科だけの旧制高校ができることになり、医専が廃校になつた年に、その一年生として入学した。入学試験は手加減してやるから、医專の新三年は一年生、新四年は二年生と「格下げ」に応じろ、というわけだったが、考えてみれば、終戦のドサクサでロクに勉強をしていないから、仕方のない処置だった。ほとんどの同級生は長崎大学医学部に進学したが、私は京大法學部に入り、新聞記者になつてしまつた。

今回、調先生に頼んで「忘れな草」一、三、四号を送つていただいた時、夜を徹して読んだ。自らも愛児を、しかも一人まで奪われた調先生や御遺族の方々が、原水爆禁止運動に、また当時の記録保存や、慰靈祭、遺族への慰問、年金などについての政府への働きかけに、日夜苦労なさつてゐる事情がよくわかり、頭が下がると同時に、自分のいたらなさを思い知られた。また御遺族の方たちの、愛児へのいたわり、痛憤、動哭が、あれから二十八年たつても、変らないどころか、ますます深まつてゐるのを知つて、胸をふさがれた。御遺族たちの年令が七十年代、八十年代に集中しているという当然の事実に、あらためて気づいてショックだつた。

こんな「忘れな草」に、原爆を逃れ、ノホホンと生きてきた、私の「思い出」はふさわしくない、とためらわれたが、思いきつて書いてみた。原爆で先生以下、同級生みんなが一人残らず死んでしまつた、という生涯の痛恨事を、いつも心のスミにひつからせながら、元気でやつてゐる息子さんの同級生が、ここにいますよ、といつてみたら――。「息子のかわりに、しつかりやれ」とおっしゃる方もいるかもしれない、と思うようになったからだ。それこそ、息子さんのかわりに、いつまでも長生きされることを祈つて――。

# 忘れ得ぬ日

武庫川学院女子大学教授  
当時付属薬専三年生

富田恒夫

昭和十九年の暮、私は母校で級友八名と共に、覺醒アミンの新合成の仕事を手伝わせてもらつたが、他の友は学徒動員で、山口県小野田の田辺製薬と、大分県中津の武田化成に、日夜徹宵の重労働をしていた。

年は明け、戦局はいよいよ末路を辿りつつあったが、私共は卒業が繰上げられ、九月に学窓を離ることになったので、六月に学生動員を解除され、一同間もなく元気一杯で帰つて来た。暫らく学窓を離れている内に、すでに自己本来の反省を忘れ、社会の悪染を汲みとつた同僚の姿ではあつたが、しかし尚、青年の若々しさや朝氣は失われてはいなかつた。当時騒然とした学舎も、間もなく元の静かな真剣な学生の姿にかえり、少しでも多くの知識を吸収せんとするが如く、講義を受ける姿になつた。

江口部長以下の教授会は連日開かれ、講義を続行すべきか、図書・薬品の疎開を完了すべきかが討論され、着々と実行に移されつつあつた。

一方、薬学の大防空壕は既に半年がかりで、粒々として築かれていたのである。校庭に隣接した射撃場の溝から、更に東南の丘を目がけて削り抜かれ、當時、奥行一〇メートル、高さ一・五メートルの円形壕は、入口を二つにして、丘の中で会合する相当に頑強なものになつていた。そして講義終了後、昼休み、研究の余閑に、誰かしらスコップ、鍼、鶴嘴をにぎつては、岩に挑んでいた。

清木先生はいつでも、ただ黙々として壕に向つておられ、あたかもブルトーザーの如く、ひたすら壕の完成へと自ら範を示されていた。学内では、或いは陰口をたたく者、職員の中にもすら罵詈する人も出たりしたが、生來の温厚なまなざしに微笑さえ浮べ、あたかも来るべき惨事を予感したかの如く、それこそ真剣な労働を続けられていだ。この間一度も強要されるようなことはなかつたが、同志は次々に集つて、互に生

命の安全をこの壕に託するのだった。

教授会の決議は、遂に私ども三年の講義を六月一杯で打ち切り、只管に壕の突貫作業を強行することになった。その頃、学内は一、二年生の学徒動員で、全く淋しいものであつたし、私ども三年生を除いては、僅かに病弱な学生が数名居残つているだけだつた。薬草園も私共が入学した頃は、実に美しい芝生と薬草で、学園に一つのオアシスを与えてくれたし、講義が終つた後や、ドイツ語で追い出された後などは、芝生に寝ころんで放談もし、笑いのたえない庭園だつたが、手入れもされず、雜草園の名そのままになつてしまい、それどころか、さつま芋で一面が芋畠になつてゐた。

浦上天主堂は、薬草の葉蔭からいつも美しい姿を見せていた。あの特異な煉瓦造りの塔からアンゼラスの鐘が鳴り、私共に一種の慰めを与えてくれたりもしたが、戦局が急を告げるようになってからは、一層鬱れきを加えて行つた。天主堂を見おろす丘の一面には、芋畠が山の頂まで続いていたが、丘を横ぎつて信者の白い葬列が、一日と數を増してゐた。實に長い葬列で、頭に白絹をかざし、口に聖書の一節を唱えつゝ、いつまでも続くのであつた。

西日が斜めに稻佐山にかかると、紫色に染まつた山脈を通して、陽光が夕暮の教会の十字架を、キラッと黃金色に染めては消えた平和そのものの浦上、その姿はすでに私共の中から消えて、長崎古来の風情も、楽しむ余裕は殆んどなくなつてゐた。かかる空虚の氣持は、連日朝の九時から午後四時半に亘る壕掘りの労働によつては、いささかも満たされはしなかつた。笑いを忘れた道化師のように、ただ汗にまみれ、泥によごれ、黙々として働くのではあつたが、一刻も早く戦列につきたいという焦りを、如何ともすることは出来なかつた。陸軍幹部候補生や海軍予備学生として一人去り二人去つて、その送別会も空襲下のもととて、個別に送り出さねばならず、街では何処でもヤケクソの祭り騒ぎが行はれていた。その間にも同僚の中から一人さぱり、二人休みして、総員四十九名の三年生は、八月頃には三十名になつてゐた。全国の各都市はその年頭から連日の空襲で、も早や無傷の都市は五指を屈する程にしか残つてゐなかつたが、長崎も最後まで空襲から逃れ得た都市の一つだつた。

初めて長崎が敵の艦載機により襲撃を受けたのは、八月一日だったが、正午ごろ造船所への銃爆撃も一時鎮まつたので、私は末永と一緒に壕の裏山へ登つて見物していだ。丁度その時突如として東の穴弘法の頂から、B29が七機音もなく病院目がけて滑り込んで来ると同時に、黒いものをボロボロと落として去つた。瞬間に病院は火煙の中にかくれ、私は草の上に頭から突つこんだ。初めて私は死の予感を体験した。

「末永生きどるか」「富田大丈夫か。」

二人は一目散に転ぶようにして、森の中を壕へ逃げ帰つた。

「誰だッ。今頃入つて来た奴は——」杉浦さんの叱声。

「ははん。富田と末永だな。」秋山さんの声。

「馬鹿野郎！ 皆の命も考えず、敵機襲来下に壕に入つて来る奴があるかッ、我々の居所が敵に知られたらどうするか」。これは大きな頭巾を目深かに被つた江口主事の声。

病院では相当数の死傷者が出ていたが、この日を契機として、学生は連日当番で宿直にあたることになった。蚊が多くて、とても眠るわけにいかない。私は大実験室の長椅子によく寝たものだった。この室は薬品の臭いで、蚊が余り寄りつかないためだった。又、大抵の者は教壇の上で寝ていたらしい。台が高いので、蚊に喰われる率も少いわけであった。

私はその頃、よく末永の家に往々來した。彼は実に器用であり、分析が特に巧であった。絵画にも相当の趣味があり、その当時、余り有名でなかつた清水昆氏と親戚であつたため、私も一、二枚昆氏の漫画を戴いたことがあつた。

八月八日、角尾学長は、全学の職員・学生を運動場に集めて、広島の新型爆弾について、医学的立場から、実に適格な注意や処理法を数時間に亘つて述べ、今後我々のなすべきことについて説かれたのであつたが、その惨状は殆んど想像もつかないものだつた。

この学長の訓辞を聞いたその夕刻、蒸し暑い長崎の夕凧に、私は兄（當時熊本医大に進んでいたが、暫らく帰省していた）と末永の家に招かれていた。奈良崎、多田の

両君と五人で酒を飲み、久し振りに大騒ぎをしたのだったが、十一時半、別れぎわに多田は、「どうも明日頃、俺は死にそうな予感がしていかん。淋しいから俺を見捨てんで一緒に居てくれ」と云つて、長崎会館の玄関前で寝てしまつた。私は兄と無理に起して、終電車に乗せたのであるが、翌日の運命は、私と兄を残して皆死んで行つたのである。

明けて九日は、朝から雲が少く、幾らか乾いた夏空、常に変らぬ一日であった。

昨夜の痛飲は、今朝の気持を爽快にした。この日、私はいつになく身体の調子が良かったので、早目に起きて登校したら、まだ二名しか来ていなかつた。常日なら定刻より十五分ほど遅れて作業についていたので、大抵は比較的楽な土運びだったが、この日は、二列横隊の右翼から三番目の後列に私は入つたのである。正九時、荒木はいつも如く、右翼から四名指名して鶴嘴をわたした。ところが、清木・杉浦両教授が、「今日は一寸馬力をかけてやろう」と提言されたために、私の列まで計六名が壕の中へ入つて行つた。私の他は、池田・奈良崎・田中・柏・椎名の五名であった。私の左の列には山崎・江島がいたが、私の列を界として、その後二時間目に生死を異にしたとは、誰が想像し得たであろう。

「さあ、今日は大分つらい役目にあたつたぞ」と、内心ウンザリしながら、鍼と笊を持って壕へ入つて行つた。皆一様に禪一つの裸であつた。九時二十分に作業は始められた。絵画にも相当の興味があり、その当時、余り有名でなかつた清水昆氏と親戚であつたため、私も一、二枚昆氏の漫画を戴いたことがあつた。

奈良崎と田中は水飲みに壕を出でていたし、杉浦先生は西日本新聞の記者の来訪を受けた。薬草園の案内に出て留守だった。私は清木先生・池田・椎名と並んで、休みながら互に雑談を交えていた。

丁度十一時を針が指した頃、清木先生は突然、「あの音!! 静かに」と叫んだ。幽かなB29の金属音がひびく。「誰か壕の外へ出て、皆に木蔭で暫らく休むように云つ

て来なさい。」と云われ、池田が飛び出して直ぐ戻つて来た。私は田中・奈良崎が早く帰ればいいがと思い、皆声も出さずに耳を欹てている時だつた。

激しい雷鳴と地鳴りと共に、猛烈な激震が起つて、目も潰れるような闪光が頭の中をかけ巡り、ズズズと地底に引き込まれ、私は地上にたたきつけられた。先生も学生もなかつた。生物も無生物もなかつた。先生の体にドッとぶちあたり、一間ほど飛ばされた。耳がガーンとして何も聞えず、呼吸は苦しく、数十秒の間何も憶えず、顔は息苦しさにぼてつて來た。

「壕の入口にB29が落ちたらしい。入口が塞がつたぞ。俺達は生理めに会つたぞ」と、目前の窒息死を感じつた。先生は真先に氣付かれたのか、「おい大丈夫か、傷はないか、鍼をとつて入口を掘り出さねばならん。ぐずぐずしては生理めだ。」と叫ぶ。池田・柏の両名が真先に飛び出す。私はそろそろ両手を頭から離した。すると何処からか、冷い空気が流れ來るではないか。

「先生!! 我々は助かりました。何處かに出口が開いているに違ひありません。」正に歎声だ。入口とおぼしき方向をすかして見ると、段々と明るくなつて、ポツカリ入口は開いていた。「ああ、助かった!!」

すると外から池田の声、「先生!! 外は大變です。皆のものは見分けがつかない。建物は何もありません。早く、早く!!」

「何ッ、何もないだと!!」先生は飛び出した。私も出ようとした時、入口から真黒の人影が飛び込んで來た。「やられたッ!! 僕は残念だッ!!」私は両手で抱きあげ、顔を見た時ゾッとした。これが人間、否動物の顔だろうか。全身の皮膚はヌルリとして血がにじみ、頭髪も眉毛も焼け落ち、顔面は焦げ爛れ、正しく埴輪の形相で、この世の姿とどうして云えよう。

「君は誰か?!」私は失礼とは思つたが、聞かざるを得なかつた。「松本登だ」。ああ、かの美青年を、今にして誰が相像し得よう? 私は肩につかまらせて、壕の奥へ横たえてやつた。

「俺は残念じや。B29一機から三個の色のついた落下傘を見た時、一寸普通の落

傘と様子が違うがと思い、もしか広島に落ちたものと同じじゃないかと、とつさに想像して入口まで逃げたんじやが、も一度見上げた時、アッという間にたたきつけられた。痛い。何とかしてくれ」。意識ははつきりしていたが、興奮は非常なものだった。

その間に清木先生や椎名が、大火傷の友を壕へ運ぶ。私は壕の中へ順々に導いては横にさせてやつたが、一人一人、名前を聞かねば見きかいがつかない状態であつた。  
「君は誰な?」「池田だ。富田ッ、わいは全然怪我しとらんね。おいの姿はどうんな。眼蓋が焼けついて、眼がよう開かんが——」。ああ、何ということか。無傷の自分を見なおした時、私は皆に相済まぬと思った。一応瞞してはみたが、何の薬にもならない。僚友は皆、両手を前にあげて、手首からただれた薄皮をダラリとさげたまま、火傷の苦痛を耐えしのんでいた。私の顔を見上げている姿に接しては、じつとしておれず、先生や椎名等と皆を励まして廻るだけだつた。

荒木は真正面からペニスをやられ、その苦悩の姿は見るに耐えない。宮本は既に内部の食道を犯されている如く、「富田、俺の下宿に行つて征露丸をとつて来てくれ」と泣き叫ぶ。

約十二、三名の友を壕内に引き入れた。この間にも壕の外では、十一名の僚友が池田・椎名の後を辿つて、穴弘法の山肌きして登つて行つたと云うが、全身の苦痛と熱線傷のために、悉く中途で悲惨な最後を遂げたと思われる。

爆発後十五分か二十分経つてであろうか、一陣の風が生温く吹き始めた。風は風を呼び、見る見る壕の外は火焰の坩堝となつた。一抱えもある材木が風に乗つて飛来し、烈風と豪火が刻々と壕の周囲に近づいていた。

椎名は、「富田君、俺達はこのまま居ては、蒸し焼きになるだけだ。逃げよう、山へ。」と避難をすすめてくれたが、私はこの十数名の友を横に見て、どうしても逃げ出せなかつた。「俺の家はすでに無いだろうし、孤独になつたからここで死んでもいい」と、壕の奥で坐つてしまつた。彼は一瞬ためらつたが、「ではお元気で」の一語と共に、固く手を握り合つて、煙の中へ消えていった。

彼が飛び出すと同時に、壕は全く火に包まれたのである。一丈もあろうと思われる大木が空中を飛び、三層もあるうと思われるトタン板が、紙片の如く舞い落ちた。くすぼった木片が壕の入口を埋めて行き、熱風がゴーッと中へ巻き込んで来る。壕内は全くの煙になつて、一尺先も判らなくなつた。私は褲をとつて泥水に浸ませ、口を被う。傷つける友の泣き叫び、煙にむせぶ姿を見ても、私と先生の二人では、何の施しが出来ようか。

入口に埋る木材を壕の外へ投げ上げていた時、清木先生の背に焼けた大木が落ちて、一瞬先生は失神された。「もう僕は駄目だ。後のは呉々も宣敷く。出来たら病院に応援を依頼して来なさい。私より学生を、一人でも多く助け出るように」。先生は昏睡の状態にあつた。

「先生、眠つちや駄目です。皆をそのまま死なせる積りですか。」私はゆすぶつた。だが先生は頷くだけで声が出ない。一時は生けるもの唯自分一人になつたかと心配したが、間もなく蘇生されたので、先生を横に寝せてあげた。壕の奥から渡辺がときれい声で、「先生、人間なんて中々死なないものですね。死にきれるとことは、むづかしいですね」と、声をしづつて叫んだ。瘠身の渡辺の身体から、どうして斯かる美しい言葉が出たか、不異議でならない。

目を転すると、田中は壕の入口すでに絶命していた。彼は野球の選手だったが、手に確かに石を握っていた。恐らく数秒の差で、壕に戻るのが遅かつたのだと考えられる。村山は壕の入口でうつ伏せになり、地下水を口と鼻から吸っていたが、すでに意識はなかつた。米田と江島の両巨人人は、壕の一番奥の椅子に寝かせていたが、苦しいとも何とも云わなかつた。ただ平穏な顔に苦痛を耐えているのが、可哀想でならないかった。

既に二時間の苦闘を経て、一風吹き去り、焼き尽された跡には一物の生物もなく、火は徐々に流れ去つた。先生を見るとズボンもはいて居られない。横に池田が猛烈な痙攣を起しだしたので、自分のズボンを被せてやられたらしい。「富田君、時計がない。探してくれ。」と先生が私を呼ばれた。この場になつて何で時計なんかに未練

があるのかと、私は少々あきれもしたが、真赤な溜り水の下を探していると、池田の身体の下から泥にまみれたロンジンの時計が出て来た。まだカチカチと動いていた。後から考えて、矢張り時計が出て来たお蔭で、時の経過を知り得たのは貴重なことであった。

「どうやら火も治つたようだね。一刻も早く病院に報告せねばならぬが——。さき程、柏君を伝令に出したのにまだ帰つて来ないが、途中で火に巻き込まれたんじやなかろうか。さあ出発しよう」と、先生はフラフラ立ち上られた。私も先生も、さき程の猛火を防ぐため、全身に泥を塗っていたので、お互に泥色の姿だ。

私は被爆後二時間もしてから、初めて外の異変を見たのだつた。全く驚愕以上の恐ろしさを見たのである。山里・城山・松山の一望の廢墟の彼方に、稻佐の山々は焦げていた。壕を包んでいた美しい森には、一本の木蔭もなかつた。径一尺もある大木の森だったが、悉く地上二尺の根本から難ぎ倒され燃えつくしていた。太陽は舞い上つた塵芥の彼方に、黒い車輪の如くかかっていた。ゴーギャンの絵のようだつた。

清木先生は焼け残つた五尺の棒材を杖にして、ただ落涙されるのみである。私はうしろから先生を押して歩く。土は灼けてじつと止つて居ないのである。二人とも裸足だったので、ガラス・釘につまづくこと限りない。

生化学の図書館が猛烈に火を噴き出していた。私の父が粒々として収めた数々の図書も、一冊一冊燃えては、ひらひらと舞い散つていた。火炎の中に、学部の各教室も次から次へと落ちていつた。生化学の横を這い上り、本部へ下りて行つた。本部の横には、歪んだ鉄カブトや事務員の自軽が散乱し、当時の惨状を物語つていた。ただ一人の生存者もなかつた。

勿論本部の防空壕には、御真影も入つていなかつた。私等二人は病院を見おろして、第一、第二、第三病棟が火に包まれ、構内が瓦礫の山であるのを見た時、救援の望みを失つてしまつた。その頃の先生の姿は、歪んだ鉄カブトを被り、一方の足には半焼けの地下たび、他方には底だけのズック靴をつっかけておられた。私は丘の上の芋畠で、ちぎれたゲートルと片足の地下たびを拾つた。

「富田君、これではとても病院の者は助かっていないよ。困ったね。誰に救援を頼むべきかな」。先生の頭には、壕に残して来た学生の顔のみが去らぬらしい。その時、土手の上から全裸の四十男が下りて來た。「ああ、もしもし、大学病院の医者や看護婦を見ませんでしたか。」と先生は問われた。「あッ、病院の人でしたら、この畑を三つ越した向うの山腹に、赤十字の旗を立てて避難していますよ。」「ああ、よかつた。どうも有難う。」

私達は助かつた。急いで土手の上からトボトボと、山肌を穴弘法を左にして登つて行つた。芋畠の中腹に来て、私は足がすくんでしまつた。幾千名という全裸の男女が、身悶え、子供をかばい、既にこと切れた乳呑子とも知らずに、無数のガラスの刺つた乳房から乳を飲ませている母親。親を、友を、呼び続ける狂乱の姿、まことにこの世のものとも思えなかつた。

彼方此方には、恐らく学生と思われる若者の、今を境とノタウチ廻り、天に拳を振り上げそのままパツタリ倒れるもの、「水、水——」と絶叫して息をのむ者など、数知れなかつた。「先生、水を下さい。私は大学の学生です。先生の講義を聞いたことがあります。早く外科に救援を求めて下さい」。腹からしぽり出す声は咳となり、のどに詰つて聞きとれない。「よし、苦しいだろうが、暫らく待つていなさい。直ぐに呼んで来る」。先生も私も、周囲から這い寄る数十の人々を前にして、このように答えて逃げねばならなかつた。我々の任務は壕に残して來た十三名の生命の上にある。

やつと赤十字がはつきり見えた。旗の下は黒山の人の群だつた。よく見ると、血染めの赤十字である。頭を相當に傷つけられた学生が一名、雄々しく旗を保持していた。教授連の横たわつてゐる中に、学長を見出し、清木先生は薬学部の報告をされた。学長は顔面蒼白、頭から血が流れていたが、静かな姿だつた。私にも、「御苦勞さん。よく学生達の面倒を頼む」と云われた。

次で私達はレントゲン科の永井グループを見出した。さすがにこの一団は永井先生を囲んで、次々と出される指令に走り廻つてゐた。「永井さん」「おお、清木先生ですか。貴方も無事で何よりでしたなあ」。固い握手がかわされた。「いや、薬専の学

生を壕に残している。私はどうでもいい。誰か学生達を助けて下さらんか」。手を合せて哀願された。しかしそうと、元気な教授も、助教授も居なかつた。

私は疲労のため、草むらにぶつ倒れた。ウツラウツラしていると、「富田君、眠っている時じやない。直ぐ戻ろう。途中で山水を探すんだ」。私はハツとして飛び起きた。帰りは水だけを探して歩くが、何処にもない。やつと見つけた谷間の水も、幾百という死者の群で埋められていた。

山肌の中途まで來た時、大学事務官の筒井氏に会つた。一升壠に大切な水を詰めて、突つ立つてゐた。清木先生は事情を話され、氏の好意によつて、早速戴くことが出来たのである。私共は、これで級友に少しでも償いが出来ると感謝しながら、焦る心で壕に飛び帰つた。

壕の中は号泣、怒号の声。しかし既に呼吸絶えた友もあるらしく、声が少なかつた。入口で死んでいた田中の口から順々に、僅かの水を十三名の友の口へ注いでやつた。この愛すべき、正に息を引きとらんとする友への最後の手向けに、ささやかな奉仕だつた。それでも水を口に含んで、全く満足げに再び横になる友の笑顔ではあつた。更に多量の水を飲ませてやれたらと、空虚な私の頭は、ただそれだけしか考えなかつた。

その時、清木先生は、「今思い出したぞ。我々は何をしていたんだろう。この壕の横にはタンクがあつた筈だ。必ず水があるに違いない」と洩らされた。その時まで、あの急激なショックで、私共は全く忘れていたわけだつた。タンクへ駆けつけた。既に蓋は開けられ、学部の学生らしい二名の水死体が浮んでいたが、水は満々とただようつていた。私は躊躇する暇もなく、側の鉄カブトで汲み上げ、壕の友へ、一人一人に心ゆくまで飲ませてやつた。天の与えてくれた唯一の慰めだつた。友は泣いた。狂喜した彼等は、一呼吸に飲み乾した。大抵二杯の水を飲むのだつた。大火傷に水は禁ぜられているが、今の私に何が出来よう。ただ無上の歓喜と満足感を与え、安らかに死につかせるだけである。生死の境に水を求めた友は、満足げに死んで行つた。生命力の旺盛な友は、母を呼び、兄弟を呼び、苦しみから身を避けようとするのだつた。

夕陽は斜にかかり、午後四時頃だったろう。私と先生は再び医療班の旗の下に走った。どうでも、医者と看護婦を呼んで来なければならない。出来得れば、注射の一本でも打つてやりたいとの一念だった。清木・永井両先生の努力で、外科の助教授一名と看護婦四名に同行して戴くことが出来た。壕への帰路はもどかしかったが、それでも私は嬉しかった。途中、芋畠で敵機の低空射撃に遭い、何度も畠に伏せねばならなかつた。「今度爆弾が落ちたら仕舞いだ。殺すなら殺せ」と、覚悟を決めたこともあつた。

壕に帰つた頃は既に暗く、壕内は明りが必要だった。看護婦さんが紙片を束にして火をつけてくれた。実に親切な助教授と看護婦諸姉の取扱いで、一人一人診断して下さつたが、既に半数以上の友は「処置なし」と断ぜられ、残りの者に一本づつのビタカンフルを注射してもらつた。麻薬がある時じやなし、むしろ苦痛を増すと考えられたが、この場合、私達に出来る最大の医療だったのだ。

被爆後すでに五時間以上を冷土の中に横たえた十三名の友は、皮膚から浸み通る地下水に震え出した。「寒い。寒い。」と叫ぶ。私達は看護婦諸姉に手伝つてもらい、未だ元気でいる負傷者を壕の外へ出してやつた。松本（登）は、「ああ、空気がうまい。気持ちがスーッとする。この上に美しい水が、きれいな水があつたら、他に何の望みもないがね。」と、満足げに云うのだった。

確かに壕の外は穏やかに風が吹いて、あの大火も今は穴弘法の上へ上へと這上つていた。私達は助教授及び看護婦諸姉に厚く礼を述べて、帰つてもらつた。

夕陽が西に傾く頃、私達も寒くなつたので、壕の中の方が温度の変化も少く、風当たりを防ぎ得ると考え、再び友を壕の中へ運び入れた。

やがて夕日は西に沈み、薄董色の夕もやに閉ざれんとしていた。空は紅に変り、赤褐色の灰を降らせていた。浦上の一きわ小高い丘には、真紅の炎をあげて燃える天主堂があつた。赤煉瓦は大音響と共に散り、ギヤマンのガラスが火焔に映えて、キラッキラ輝いては消えてゆくのが、淋しく望まれるのだった。

夜に入ると共に、何らかの連絡の便宜を計る上に、どうしても永井教室グループと

合流する必要を感じ、三度山を登つて行つた。血生臭い風で呼吸が止まりそうになりながらも、暗い烟を通つて行くと、眼前に一人の婦人が立ちはだかつた。皮膚は焼けたれ、綿屑を一杯つけていた。「誰か医者を呼んで下さらんか」。弱々しく頼まれた。先生と私は、婦人について或る石室に入つてみた。初めは血の臭いだつたが、目が闇になれて来ると、何十という白い眼玉が我々の方を凝視している。誰も声を出さない。かれこれ幾十人かの男女が、ぎつしりと立つていていたのだ。亡者の群とはこのようない姿だろうかと、肌に寒さをおぼえ、私共は黙つて外へ出た。外はまた風が吹きはじめ、風の合間に、遠く、近く、親を子を呼ぶ数万の声が木霊して、いよいよ悲惨な光景を呈していた。山の頂から風に乗つてくる母親らしい女の声——これ程はつきりと肉親感をおぼえたことはなかった。私はこの頃、既に家は失つたものと断念していた。母も兄も弟も亡くなつたものと諦めていた。

「海ゆかば水浸くかばね——」の合唱が聞えて來た。先生は「恐らく永井グループの歌声に違いない」と云われたが、正しくそれだつた。私はこの時、「ああ、やつと助かつた」と思った。

永井先生から乾パン一包をいただいた時は、泣けるほど嬉しかつた。重本・松本（忠）両君は被爆の際、薬品庫の地下に居た筈だつた。或いは助かつてゐるかも知れず、若しかしたら火を頼つてこの辺に來てゐるかも知れない、と清木先生はおつしやつた。私は彼方此方を大声で呼んでみた。どのくらいしてか、幽かな声で、「清木先生——」と呼ぶ者がある。「誰だ——」。又静かな闇になる。「重本です」。ああ、彼は生きていたのだ。松本君は怪我をして倒れているとのこと、私達は永井グループを混えて、一応壕に帰ることになった。

壕では既に静まりかえつていて、私と先生は並んで横になつても眠れず、ウトウトするだけだつた。夜明けが待遠しかつた。不思議に一匹の蚊すら飛んで来なかつた。長崎名物の夕凧に飛んで来る蚊群も、羽をたたき落されたのだろうか。明けて十日、昨日の悪夢を忘れたかの如く、コバルト色に晴れ渡つた。私達は生存せる僅かの友を壕の外へ出してやつた。この朝、生存者は僅かに数名となつてゐた。

米田・江島・村山・渡辺等は、既に死に絶えていた。未だ六時頃だった。遠くから「松本さーん」「松本さーん」と叫びながら、泣きたいばかりの声で歩いて来られた夫婦であった。松本登君の下宿の人だったが、買物籠に握り飯や果物・生ナスビ・キユウリ・ジャガイモを一杯詰めて、恐らくこの新鮮な野菜を松本に喰わせるためにと、親の如く駆けつけて来られたのだった。今や生死の境を放浪する松本のうわ言を聞き、尚一心に看護に当られる姿を見て、私は落涙をどうすることも出来なかつた。彼もこの下宿の夫妻に気がついたのか、笑顔を見せて感謝の手を握り合つた。十時半頃、「お母さん、お母さん、万才!!」と幽かに叫んで、呼吸を引きとつた。

この頃、最後の生存者は岡本省三君ただ一人だった。彼はどこかに死場所を探すべく、トボトボと歩き廻っていた。恐らく両親を想い出し、最良の温かい場所を求める如くに——。ふと私の傍に寄つて来て、「おい、富田、俺が死んで行くまで、傍に居つてくれ。こんなみじめな姿で大死するのは、全く淋しい——。ああ、一寸疲れた。

横にさしてくれ」。弱々しくささやいた。私は彼に被せてやる上衣のないのが、はがゆかつた。友としての償いは、心の結合だけだった。私は左腕に彼の頭をのせ、少しでもやわらかな枕の代用にと彼を寝させた。彼も次第に疲労が増して来ている様子だった。出来るだけ直射日光を受けぬよう、私は身体で蔭を作つてやるより他に手段がなかった。彼はじつとして居れなくなり、左に右に転々とした。やがて虫の知らせといふか、「おい、富田。何處に居るや。眼がかすんで何も見えん。貴様の顔の形だけが、かすかに見えるだけじゃ、もう駄目らしいな。母や親父に会つて死にたいよ。母はきっと俺を探しに来てくれる筈だ。その時、若し会つたらこの時計を——。この時計を——渡してくれ。あ——」そのまま首が動かなくなつた。眼は開いたまま虚空に両親を探し求める如く、顔には笑顔さえ浮べて、遂に十二時四十五分、哀しくも息を引取つたのだった。共に学びつつ労働に励んだ友の、最後の一人を失つてしまつた今、私には何の興感もなかつた。余りにも青年の命の短かく散つて行った姿を見て、青春の何たるかを疑わざるを得なかつた。

夕刻には久留米師団から軍隊の出動があり、負傷者の収容が始まつた。その頃、私は江口主事の令息（学部二年）を運び終えた後、そつと病院の薬局に入つてみた

達の壕は大学内で一番堅固を誇つていたので、生き残りの大学々部の学生が數十人、一様な慘めな姿で、壕の周囲に転々としていた。兵隊がやつて来て、重傷者を大学病院の本館まで運ぶように伝えて來た。私は比較的元気な学生を肩をかつぎ、打ち折られた大樹・電柱・全壊した病棟のコンクリートの山を越えて、一人、二人と運んでは戻つて來た。正に重労働だったが、私は飯も食いたくなかった。握り飯を見ると、吐き気を催すのだった。丘隊は私の姿を見て驚嘆していたし、一人の将校は賞めてもらつた。

私は江口主事の令息（学部二年）を運び終えた後、そつと病院の薬局に入つてみたが、薬は何もなく、灰の山だった。二階から三階への階段には、五、六体の焼死体が當時の惨状そのままに、或いは抱き合い、或いは手すりに寄りかかつて仆れていた。頭をさわると、ボロボロと灰になつて散つた。全く男女の区別さえつかないのであつた。

その晩、私は壕内が寒いので、病院本館入口の死体の灰の上で寝た。適度の温りがあつて、當時としては別天地の寝床だった。

明けて三日目の十一日は、朝から市民が病院本館につめかけ、数千名を数えるようになつて、身動きも出来なくなつたので、幾らか冷えてきた本館建物の中に、重傷者が整理されて行つた。私の同僚で当日運よく休んでいた友が、統々と駆けつけてくれた。中でも懃々、熊本から本田君が帰つて来てくれたのには感謝した。皆は当時の惨状を茫然として私から聞くだけだった。私は病院本館との連絡をやつていた時、期せずして病院食堂の前で弟に会い、家の様子も大凡判つたし、母も無事だと聞いたので、気持は大分落ちついてきた。同僚の手を借りて、私と清木先生が壕の中から亡き友の死骸を運び出している時、私の兄は穴弘法を山越えして、私をさがし廻つていたそうで、壕に辿りついて私が生きていることを知つた時には、さすがの兄もボロボロと涙を流して泣いていた。

皆で壕の外に友の死骸を埋葬し、私は木片に炭で各人の名前を記し、位牌の代用にしてその上に建てた。

かくして、一応は皆の埋葬を終えたので、清木先生は、「ここで解散しよう」と提案された。

一同、亡き友の前に整列し、先生の指揮で最後の別れを告げ、茲に私は三日目に家路をさして帰つたのであった。新大工町に橋本の下宿していた洗濯屋さんがあり、私の家とも懇意だったので寄つてみたが、橋本は帰つていなかつた。壕の土運びをしていたので、恐らく十一名と山を越えて逃げたであろうが、途中で動けなくなつたのではないか、と私は伝えておいた。

家では母が私を見て卒倒したりしたが、二、三日は寝ていても後の整理が気になつて、再び十五日頃から大学へ出て行つた。八月下旬になると、全国から遺族が駆けつけられ、私は毎日、同僚の御家族を案内して、共に骨を集めめたのだが、壕の十三名は兎も角として、行方の知れない十一名の家族の方々には、何としても氣の毒で、慰めの言葉を知らなかつたのである。

×            ×            ×

思えば原爆の恐怖は、八月九日の一日で終つたのではなかつた。生体組織の奥深く侵入した放射線は、組織を変えた。徐々に発症する潜伏期があることを知つて、人々はさらに恐怖の底にねとされた。

放射線は神経を刺激することなく、まず一番もろい骨髄を侵すのである。九月になると、アメリカ病院船が長崎に入港した。当時、市内では九大、熊本大、山口大などの調査班が、診療と解剖検査に忙殺されていたが、その中にわり込んだリーボー軍医らは、手当たり次第、次から次へと、人体組織を標本びんに詰めて持ち帰つた。日本の医師団が使つていた解剖用メスが、刃こぼれしていく中に、彼等の替刃式メスは、素晴らしい威力を發揮していた。爆弾を落しておいて、死者を拾い集めて帰る。この神経を何と見るや、この矛盾を神は許し給うであろうか。

その頃の日本には、DDTはもちろん、総合ビタミン剤、乾燥血漿すら研究もされていなかつた。米軍の放出したペニシリンを見て、その威力に驚愕したものである。すでにアメリカの科学は、ヨーロッパを遙かに超越していたのである。私たちは彼等の科学を何も知らなかつた。

日本は負けるべくして負けた。がその代價は、あまりにも大きかつたのである。

四半紀を過ぎた今日でも、私には当時の状景がはつきりと想起され、八月の夏がやつてくる毎に、悲しい思いにくれるのである。

【調追記】これは原爆當時、付属薬学専門部三年生だった富田恒夫君が、昭和三十年に長崎大学医学部で出版された「追憶」に寄稿されたもので、その後、昭和四十三年の「長薬同窓会報」第十号にも転載されたが、この度「忘れな草」第五号を出版するに当たり、親しくお目にかかる機会を得たものである。

それは本編が最終編なので、薬学専門部の被爆状況が最も詳細に描かれている同君の手記を、本誌の読者の方々に紹介したかったからである。



御 遺 族 の 方々 へ の 報 告



# 一、台灣人学生の原爆犠牲者追悼会

## 長崎原爆台湾同学犠牲者追悼会 を挙行するに至った経緯

愛媛県上浮穴郡久万町立病院  
昭和十六年長崎医科大学卒業

### 林 忠 実

昨年の十一月五日には、調長崎大学名譽教授が御老体にもかかわらず、佐藤純一郎医学部長、近藤厚病院長、辻泰邦教授、松田源治教授等と同道にて元気に来台され、台北で挙行された「長崎原爆台湾同学犠牲者追悼会」に御臨席頂きましたことを、厚く御礼申し上げます。

私は原爆当時、長崎医大の産婦人科教室にて被爆し、恩師内藤勝利教授、角尾晋学長をはじめ、多くの恩師を喪い、同時に十八名の台湾同学とその家族五名を喪つて、終戦の年の末に、台湾に帰国致しました。

帰国後、台湾の長崎医学同志の親睦、並びに母校との連絡のため、同じ学園で学んだ長崎薬専出身の方々をも含めて、長崎医薬台湾同学会を結成し、幸に諸先輩、同輩、後輩の推薦と支持を得て、その世話役を命ぜられ、最近まで大過なく勤めさせていただきました。

一九六六年（昭和四十一年）の十一月に、調先生及び佐藤純一郎先生からの御依頼で、台湾出身原爆犠牲者の遺族調査を開始し、早速同学会の全員並びに心当たりの人達に通知を出しましたが、ただ六名ばかり判明しただけで、あとは雲をつかむような状態だったので、止むを得ず諦めて居りました。

ところが一九七〇年には、両先生から再び調査の催促を受けましたので、エキスボ七十に渡りしました折に、調先生のお宅に参り、「忘れた草」をいただき、一九七一

年の渡日の際にその第四号を戴いて、先生の遺族に対する切々たる御関心と御努力に心を打たれました。日本に於ける遺族調査の進捗に較べ、台湾の調査が遅々として進ぬのが大変恥しく、心苦しく感じた次第であります。幸にして一九七二年四月には、偶然にあと五名、合せて十一名が漸く判明致しました。

長崎では毎年、原爆記念日は遺族の方々に集つていただき、医大関係の原爆犠牲者の慰靈祭が行われておりますので、台湾でも是非慰靈祭を行つて、遺族会々長の調先生や、長崎大学医学部の先生方に御出席を願う計画をたて、同学会幹部の同意を得て挙行が決定したわけであります。

慰靈祭挙行が愈々決定されましたので、更に強力に遺族調査を再開致しました処、幸にも同学の沈水雲先生、康封印先生、康嘉音先生、黃纏宗先生、林益松先生、倪衍元先生、黃世超先生、蔡永正先生、林政吉先生、その他留学生父兄の羅慶坤先生、これらの方々の御協力を得て、一九七二年八月までに、呂雲龍助教授以下十八名の原爆犠牲者の御遺族全部を確認するに至りました。この時は喜びの気持よりも寧ろ、私の七年間の努力の足りなかつたことに對し、慚愧の念にかられたのであります。一方、慰靈祭を挙行するに際して、遺族会長の先生や医学部長が懇々台湾までお出で下さるのに、尚未だ不明の遺族があつたのでは、と一安心した次第であります。

昨年（一九七二年）十一月五日に、台北で行われました二十七年振りの慰靈祭（台湾では追悼会と申します）は、実は第二回目に当ります。と申しますのは、原爆の投下された一九四五年（昭和二十年）の十一月に、台湾の長崎医大関係者が日本を引揚げます前に、當時原爆の直接の被害を受けずに、比較的元気だった薬専の李明道先生が、物資欠乏の折にも拘らず、方々へ折衝して、ささやかではありましたが崇福寺に於て、誠心誠意、長崎医大原爆犠牲者の台湾出身者、及びその家族の慰靈祭を行つたのであります。それが第一回で、その後二十七年間の空白を経て、この度第二回目の慰靈祭を、故國の台北で挙行した次第であります。

今度の追悼会が予期以上に盛大且つ有意義に挙行されましたことは、全く調遺族会長の御仁徳の到すところでありまして、遠路はるばる御来台下され、母校よりは佐藤

医学部長はじめ諸先生方が、御多忙中にも拘らずお時間を御割愛下さつて、御臨席下さいました賜であると、感謝致して居ります。

時節柄、新聞や雑誌に宣伝も致さず、専ら同学の心からの追悼の意を表することに致しましたが、台北市医師公会、台湾省医師公会、熊本医大台灣同学会等から、追悼の言葉と花籠が贈られ、調会長と佐藤医学部長の追悼のお言葉をいただいて、追悼会に光彩を添えましたことを、心から感謝致して居ります。

会場の臨濟護国禪寺は、私と周百鍊先生（今般中華民国監察院の副院長に当選就任されました）と、車で台北市内を四日間走り廻って、やっと見付けたお寺であります。追悼会終了後、寺内で中国式の精進料理を参加者八十名で戴きながら、先生等を中心し、同学・御遺族も共に、心温まる思い出話に意義あるひとときを過すことが出来ましたことも、併せて感激感謝致して居ります。

追悼会のあと、私は家庭の事情で来日致しましたが、二十有余年に亘つて世話をさせていただいた台湾の同学会も、基礎が固まり、日本の大学の台湾同学会の中でも、最も團結のとれた同学会と定評を受けるようになり、心残りながらも安心致しております。

最近台湾から来日して居ります台湾長崎同学も、十名近くになります。更なる母校の恩師先生方の御指導をお願い申し上げます。

(四八、五、八)

## 長崎原爆台灣同學犠牲者追悼會式次

民国六十一年十一月五日  
於 台北市酒泉街五巷二七號

### 臨濟護國禪寺

長崎原爆發生於民國三十四年八月九日。當時全市罹難人數不下八萬人、長崎醫科大學關係者犠牲者達八八九位。母校恩師角尾學長等及台籍同學呂雲龍副教授等、均不幸遭遇犠牲。於今匆匆已二十七年。我台灣同學會茲為記念罹難師長及諸同學、特擬期於

本日舉行追悼會、藉慰亡靈。

茲將長崎原爆犠牲師長及同學名單列后：

恩 師 角尾 晉學長	池田 吉人教授	梅田 薫教授
大倉 玄一教授	金子 直教授	清原 寛一教授
國房 三三教授	祖父江勘文教授	高木純五郎教授
内藤 勝利教授	内藤 達男教授	山根 浩教授
呂雲龍副教授	吳福順醫師	黃過云醫師
蘇百齡先生	戴懷德先生	羅時達先生
楊炳煌先生	李鈞光先生	陳克振先生
劉有德先生	謝遜英先生	何振欽先生
林榮主先生	劉嘉瑞先生	郭芳徽先生
		(及家族五名)

### 追悼會程序

(民國六十一年十一月五日下午三点開始)

#### 一、誦 経

#### 二、公 祭

1. 長崎医業台灣同學會（會長：李克承先生）
2. 長崎医大原爆犠牲者遺族會（會長：調來助先生）
3. 長崎大學医学部（部長：佐藤純一郎先生）
4. 台灣省医師公会（理事長：吳基福先生）
5. 台北市医師公会（理事長：鄭沢生先生）
6. 台灣同學犠牲者遺族代表（羅時雍先生）

#### 三、同學會總幹事報告（林忠美先生）

#### 四、拈 香

1. 長崎医業台灣同學會會長
2. 長崎大學医学部來賓
3. 各位來賓

4. 同学、父兄  
5. 遺族

五、礼成

主弁者 長崎医兼台灣同学会

## 祭文

### 一、緒

中華民国六十一年十一月五日、長崎医兼台灣同学会会长李克承、率本会全体同学、謹以香花清酒、致祭於長崎原子弹犠牲之台籍

全体同学之靈曰：

賜呼同学 秉賦頗異

立志濟世

研修医学 負笈東瀛

壯士未酬

竟致犠牲

幸被三島 奉祝靖國

万世瞻仰 悼念英靈

痛極涕零 致祭維虔

來格來歡 賦呼哀哉

尚饗

### 二、追悼の辞

一九四五年八月九日午前十一時二分、長崎市の上空で魔の原子爆弾が炸裂し、我が長崎医科大学が一瞬にして灰燼に帰すると共に、八八九名の職員並びに学生たちがその尊い犠牲になつてから、早くも二十七有余の歳月が流れましたが、凄惨を極めた当時の光景は、まだありありと我等の瞼に焼きつけられております。

妖光一閃、哀れ青春多き学生たちは、或いは傷つき、或いは焼け爛れ、苦悶の中に水を求め、母の名を呼びながら、大学病院裏の丘の上で、敢ない最後を遂げたものの、その数を知らず、幸にして家に辿りつき、或いは救護所に収容された負傷者たちも、旬日を出でずして鬼籍に入るという、実に悲慘極まる有様であったのであります。留学中の台湾の学生諸君も全くその通りで、真に痛恨に耐えません。愛子愛弟を喪なわれた御遺族の方々のお悲しみも、さぞかしとお察し申し上げる次第であります。

この度は、呂雲龍助教授をはじめ、助手三名、学生十四名、合せて十八名の台湾出身の方々、並びに角尾学長以下十一名の恩師の方々の追悼会が、台北市に於て行なわれるに當り、旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会を代表して、参列の榮を賜りましたことを、私は衷心より厚く御礼申し上げます。

この機に臨み、原爆の尊い犠牲となられた在天の御靈、特に十四位の学生諸君の英靈に対し、一言慰靈の詞を申し述べたいと思ひます。

あなた方は、遠大の志望を抱いて遙々海を渡り、笈を負つて長崎医科大学の学舎に学び、医学の研鑽に余念なく、日夜精励しておられましたのに、悲しくも唯一発の原子爆弾により、業半ばにして異郷の地で斃れられ、定めて無念に思われたこととお察し致します。

然しながら、あなた方は当時立派な日本人であり、大東亜戦争の為に尊い犠牲となられたことは、日本国政府も充分認めておりますので、去る十月に行なわれた秋季例大祭以来、護国之神として、東京九段の靖國神社に合祀されたのであります。諸君の英名は未來永劫、燐として輝き、栄誉ある犠牲者として万人讃仰的となつております。

長崎大学では諸君の英名を永遠に後世に伝えるために、銅板に名を刻んで原爆記念講堂の壁に安置し、毎年八月九日には、医学部長主宰の下に慰靈祭を行つております。大東亜戦争終結後、不幸にして諸君の祖国とは境を異にすることとなりましたが、長崎大学医学部に留学される諸君の後輩は、今なお跡を断たず、現在までに

既に五十八名の多数に達しております。

この人達は、学成り卒業の時には、或いは故郷の台湾に帰り、或いは日本に留つて、諸君に代り立派に医療奉仕の実を挙げ、医人としての使命を全うしておられるのであります。

どうかこれら後輩の将来を見守りつつ、安らかにお眠り下さい。私は心から諸兄の御冥福をお祈り致します。 合掌

一九七二年十一月五日

旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会々長

調 来 助 謹白

#### 四、維

長崎大学医学部長 佐藤純一郎

#### 三、慰靈の詞

本日、長崎医薬台湾同学会主催のもとに、原爆に付れた長崎医科大学台湾出身医学徒の諸靈を迎え、厳かに慰靈祭を執り行われるにあたり、謹んで靈前に申し上げます。

憶え巴、今を去る二十七年前の八月九日、長崎市は米軍の投下による原子爆弾のため、一瞬にして焦土と化し、その慘状は眞に耳目を掩わしむるものであり、筆舌を以ては尽すべからざるものであります。

殊に諸士の母校、当時の長崎医科大学は、校舎、付属病院等悉く鳥有に帰し、諸士をはじめとする教職員、学徒、凡そ九〇〇名に近い生命もまた奪い去られるといふ、惨憺たるものであります。まことに痛惜措く能わざるのみならず、遺家族各位の哀傷を想うとき、惻怛の情今日尚極まりないところであります。

併し諸士が戦時下向学の志に燃え、職に殉じた精神は、必ずや母校に学ぶ後進によつて受継がれ続けるであります。

又戦争の終結は諸士と私共とを相隔て、國を異にするを余儀なくせしめ、剩え昨

今は國交も亦不正當な状態におかれることは、誠に遺憾の極みに存じますが、併し諸士の母校である我が医学部にあつては、戦後全国の大学にかけて、再び台湾からの留学生受け入れを主張し、実行してきました。而して此の方針は、今

後共維持する所存であります。

かかる措置が諸士の遺志を繼ぐ後進を育て、ひいては両国を結ぶ堅い絆を編み出す役を果すことにも通ずるかと信ずるからであり、かくてこそ我々は諸士の靈に応えるところがあるかとも考るからであります。

どうか安らかにお眠り下さい。茲に諸士の母校長崎大学医学部を代表し、無量の感概をこめ、哀悼の辞いたします。

昭和四十七年十一月五日

#### 四、維

中華民国六十一年十一月五日、台灣省醫師公會理事長吳基福、致祭於

長崎原爆台灣同學犠牲者呂雲龍先生等靈曰：沈沈華族今日彷徨、青年酣睡今夢黃粱、志氣銷磨空道德亡、維君幼篤兮學謹昌、天挺聰明兮露鋒芒、男兒志願兮猶未償、何為戰禍兮、同遭災殃、幽冥永隔兮、泉路茫茫。嗚呼哀哉！ 尚饗

#### 五、維

台北市醫師公會常務理事吳作仁代表、謹追悼於日本長崎受難故醫門同學之靈前。

嗚呼！

我們同學台灣模範青年、學業優秀、好學心重、負笈離鄉、遠遊他鄉、求學長崎医科大学、托望精益求精、將能成為濟世救民之良醫、以盡天生之善性、誠堪贊佩。

惜哉！

於時不利、第二次世界大戰突發、人心變兇、製出絕人道之殺人軍火以滅人群、我們同學亦受其災、人功難挽、同歸於天。

痛哉！

我們同學、品行良好、生活規律、樂善好施、求仁心切、誠能成為、濟生良医、同學之亡、人皆不幸、聞逝東瀛、舉世惋惜、寥落英魂、悲焉令恨難消。

哀哉！

受難同學、事經三十年之今天、欲誌無從、悲今憶昔、涕淚傷魂、靈其有知、鑑我真  
惜、並祈黃泉、万福無疆。

中華民國六十一年十一月五日

代表 吳 作 仁 輓

日本長崎医大原爆台灣同學犠牲者遺族代表

羅 時 雍 敬弔

## 六、祭文

已故呂雲龍・吳福順・蘇百齡・戴懷德・羅時達・林中鳳・楊炳煌・李釣光・陳克振  
・何振欽・黃過伝・周觀新・劉有德・謝遜英・李集鱗・郭芳徵・林榮主・劉嘉瑞之  
諸位：今天我以無比懷念而悲哀的心情、代表全體遺族向各位靈前、敬表哀悼之意。

我們難以忘記一二七年前的民國三十四年八月九日、當二次大戰末期第二顆原子炸  
彈落在長崎、諸位很不幸的犧牲了。

今天承長崎医大台灣医藥同學會發起，在台灣首次舉行非常有意義的追悼會，蒙諸位  
母校的醫學部佐藤部長・近藤教授・辻教授・松田教授及日本遺族會調會長等不辭遠  
途撥駕參加、便使追悼會增加哀榮、特代表全體遺族恭向各位教授・同學會的各位先  
生、致深深的謝意。

回憶三十七年前、美國投下第二個原子炸彈、迫使日本軍閥放棄無謂的抵抗、大戰得  
以提早結束、不然我們台灣同胞的死傷不知道會增加幾十、幾百萬・諸位是為世界的  
和平而光榮的犧牲了。

諸位負笈東渡日本長崎医大、離鄉背井有的數年或十年以上、有的剛去不久、又有畢  
業的先輩留母校指導後輩、無論在學的、學成的、諸位都是懷着大志、以醫術藥方服  
務同胞、雖很不幸的未能達成願望、但諸位以若冠遠離家鄉、越過西太平洋凶猛海浪  
東渡的宏志、將永永遠存留在我們的族譜、使後代子孫敬仰思念。

最後值得諸位安慰的是、多年來承蒙遺族會及同學會奔走請願、上年由日本政府核定  
、諸位以有功於和平而祭祀日本靖國神社。諸位的捨身犧牲有了果報、我們遺族也分  
享諸位的榮幸、敬以香花聊表哀悼的微忱。

尚饗

中華民國六十一年十一月五日

## 台北市で催された「長崎原爆台灣

同学犠牲者追悼会」に参列して

旧長崎医科大学原爆犠牲者遺族会々長

調 助

昨四十七年の九月末頃だったか、台灣の林忠実君から、突然「来る十一月五日に、  
長崎の原爆の犠牲となられた台灣人学生諸君の追悼会を催すので、遺族会々長として  
是非出席して欲しい」との招聘状を頂いた。

私は昭和四十一年に、「旧長崎医科大学原爆犠牲者遺族会」の会長に推挙され、  
爾來原爆死亡学生及びその遺族の方々の住所を調査したが、日本人学生では五一五人  
の中四九三人（九六%）の遺族が判明したのに反し、台灣人学生では一四人の中僅か  
に四人（二八%）しかわからず、どうしたものかと困っていたところ、林忠実君、葉  
國慶君、その他の同窓生諸君の御尽力により、昨年春ごろ偶然にも全部の遺族が判明  
したので、同窓会先輩の方々の間に、追悼会開催の議が持ち上ったとのことである。

台灣には以前から「長崎医大台灣同學會」という長崎医大関係の親睦会が組織せら  
れ、會長に昭和十一年長崎医大卒の李克承氏（新竹市在住）を戴き、林忠實君（昭和  
十六年卒、台北市在住）が總幹事となり、張嘉英氏（昭和十一年卒、嘉義市在住）が  
中部幹事、蕭秀河氏（昭和十六年卒、高雄市在住）が南部幹事となつて、他のどの同  
窓会にも優れて、よく本会を運営しておられ、會員は学部卒四十六名、付屬医專卒十  
一名、付屬藥專卒九名、合計六十六名の方々が、現在台灣全土に散在して、活躍して  
おられるのである。

この度の追悼会も、長崎医大台灣同學會主催のもとに行なわれたもので、一切の準

備は林忠実君が中心となつて遂行されたとのことであつた。

私が昭和十七年四月に、長崎医大に赴任して來た時、林君は産婦人科に助手として勤務中であったが、患者のことや研究の点で屢々お目にかかるので、三十年来の知友とも云うことが出来、最近も度々拙宅をお訪ね頂いたので、何としてもお伺いせねばならぬと、喜んで御招待に応じた次第である。

この追悼会には、長崎大学医学部からも佐藤純一郎教授（医学部長）、近藤厚教授（付属病院長）、辻泰邦教授（第一外科）、松田源治教授（生化学）の四人が参列されることになったので、一行は五名となつた。時は恰かも日中国交正常化の直後だったので、国民感情がどうかと心配していたが、そのような気配は少しもなく、賑やかな楽しい旅行が出来たのは、何よりも嬉しく、偉せなことであつた。台湾の人達には全く感謝の外はない。

林君からの指示で、出発は十一月四日午后七時二十五分、福岡空港発のキャセイ機と一緒に出かけることにした。

福岡空港から台北空港まで、飛行時間は僅かに二時間、舞い上つてすぐに食事となり、それがすむ頃には既に台北空港に着くという、誠に快的な飛行であつた。空港には林君はじめ、康封印君、その他多数の出迎えがあり、互に久闊を叙しつつ、直ちに台北駅近くの中国大飯店（Hotel China）に向つた。

ホテルでは、林君から追悼会や滞在中のスケジュールの説明があつて、各自の部屋に引取つたのは台湾時間の十一時頃であつたろうか。幸は風邪も大した異変がなく、遠い台湾でぐつくり安眠出来たのは嬉しかつた。

台湾滞在中の行事予定は、次の通りであつた。

- 一、十一月 五日 追悼会及び台北（北部）同学会出席
- 二、同 六日 高雄（南部）同学会出席
- 三、同 七日 嘉義（中部）同学会出席

四、同 十一日 台北大学医学院及び淡江文理学院見学

五、同 十二日 医師節慶祝会出席

因みに同学会というのは日本の同窓会に当り、医師節というのは台湾省医師公会（日本医師会に当る）の総会、といったものようである。

#### (1) 長崎原爆台湾同学犠牲者追悼会

台湾訪問の第一の目的だった追悼会は、五日の午後三時から臨済護国禪寺の大雄宝殿で催された。寺門には口絵写真に見るような字幕が高々と掲げられ、門を入ると前庭を隔てて華藏壁（広い待合室兼食堂？）があり、その右手に祭場の大雄宝殿が、渾酒なブロック塀に囲まれて建つている。

殿内は朱塗りの太い円柱で支えられ、正面に大きな金色の仏像が祀られていて、その前に口絵のような恩師と同学の位牌、香炉、鐘、その左右に孤を描いて黄菊の生花が幾十となく供えられ（口絵参照）、仏前のテーブルには、八人の僧侶が椅子にかけて、式の始まるのを静かに待つていて。

式典は午後三時、僧侶の読経によつて始められた。一時間余りでこれがすむと、祭主の李克承同学会々長を先頭に、長大教授、遺族、同学会々員の諸氏が靈前に整列して礼拝し、続いて冒頭に掲げた順序で祭文が奉読された。肅として声もない。最後に祭主初め、参列者全員によって拈香（焼香）が行なわれたことは、改めて云うまでもない。

かくして二時間に亘る追悼会の式典は、滞りなく且つ厳粛裡に終了し、その後一同は記念写真をとり、華藏壁に引揚げて、互に挨拶をかわし、無事を喜び合つて、其処にいとなどやかな風景が展開された。

六時頃になると、この室内に大きな円卓が数台持ち込まれ、北部（台北）同学会と遺族会が渾然一体となつて、我々としては嘗て味つたことのない、見事な精進料理に舌鼓を打つた。寺内とあって勿論酒類はなく、ジュース、サイダーを飲みながら、周百鍊氏その他の方々の卓話に耳を傾けた。この懇親会の終つたのは、多分夜の八時頃であつたろう。

### (1) 南部（高雄）同学会の懇親会

我々は追悼会の翌六日、南部同学会の懇親会に出席するため、林忠実君に案内され、午前八時台北発の特急山莒光一号に乗つて高雄へ向つた。その一等車で感心したことは、出発後間もなく美人揃いのお嬢さん達が、お絞りを配ぱり、備え付けのコップに美味しいお茶をついてくれたことである。日本でもグリーン車ぐらいいには、あのような奉仕があつてもよいのに、と羨ましく感ぜられた。

六時間後、高雄につくと、同学や遺族の方々に迎えられ、宿泊予定の克林大飯店に荷物を置き、寿山・左營など勝景の地を見物した後、懇親会に出席した。（口絵写真参照）

南部同学会の幹事は蕭秀河君（昭和十六年卒）で、会員の中には、原爆後肥前長田で、台湾出身の被爆学生諸君を献身的にお世話を頂いた、康嘉音君（昭和十八年卒）も居られ、親しくお目にかかることが出来て嬉しかったが、再度日本に来られる待望の日を待たずに、急死された由を聞き、夢ではないかと驚きもし、また惜しい人を亡くしたと、悲しまず居られなかつた。康君の代りには蔡永正君（昭和十九年付属医卒）が来られることとなり、本年十月上旬に来日されて、今では奈良尾町立病院で、元気に勤務中である。

懇親会に出席された彭明哲君（昭和十六年卒）は、辻教授と同級で、お互に久しう振りに会い、大変嬉しそうであった。黃耀宗君（昭和二十年卒）は私の教え子で、間もなく渡日される筈であったが、本年一月に来日、今では北松の生月町立病院で活躍中である。陳見發君は昨四十七年卒、卒業後すぐに帰台されたそうで、「皆が日本へ行きたがつてゐるのに、帰つて来るとは——」と、皆から冷かされておられた。

幹事の蕭秀河博士は、北村包彦前教授（前東京医科大学長）のお弟子さん。同君には高雄市ばかりでなく、日月潭にまで案内して頂いて、大変お世話になった。誌上をかりて深く感謝申し上げる。

### (2) 中部（嘉義）同学会の懇親会

この懇親会は七日の夜、嘉義の國華大飯店で催された。しかし此處でも遺族の方や

学生の父兄が多数参加されたので、三十人以上の盛会となつた。中でも葉國慶君（昭和十九年学部卒）、王文其君（昭和二十年学部卒）、黃世超君（昭和十七年医専卒）、

林政吉君（昭和二十年医専卒）の方々は、学生時代からの顔見知りでもあり、二十八年振りの再会は、殊のほか感慨深いものがあつた。

宴半ばの頃、某学生の御母堂から患者の往診を依頼されたが、主待医の台灣の方に無断で診察も出来ず、旅行中に国際的なトラブルを起しても円滑にお断りしたが、後で辻教授が主待医立会いの下に診察下さった由、聞くところによると、殆んど末期に近い重態とのことであった。お氣の毒ではあるが、ただ御平癒を訴るより外はない。

### (4) 台北大学医学院及び淡江文理学院見学

台北大学医学院は、元の台北帝国大学医学部、往時、外科には東大から河石九二夫教授、沢田平十郎教授が就任され、その他多数の日本人教官が活躍しておられたが、今はその教え子や、戦後の母校卒業生たちで運営されており、たゞ院長（学部長）の魏炳炎氏は、東京帝国大学昭和十二年の卒業だそうで、東大の故磐瀬教授、同故白木教授、元東大助教授安井修平氏、原爆で亡くなられた長崎医大の内藤教授などのことを、よく御存じであった。

会見後、私と辻教授は、李教授（外科）の案内で院内を隈なく視察したが、河石教授在任中の面影は全くななく、唯外觀だけが赤煉瓦で昔のままだとのことであった。序に基礎の各教室も外部から見て廻つたが、建物は赤煉瓦の一階或いは二階建で、規模は皆小さいものであった。

同日午後、我々は李克承氏の案内で淡水（台北の北方四〇キロ）に行き、同氏の経営しておられる淡江文理学院を視察した。アメリカ風の白い建物から成る私立大学で、文学部、理学部、工学部、商学部があり、理学部は数学系、物理系、化学系、電子計算機学系等に分れ、工学部も土木、機械、水利、灌漑、建築等に分れていた。商学部は台北市内にあつたので、これも視察したが、皆驚異に価するほど充実したものであった。

医師節というのは、日本で云えば、日本医師会の代議員総会みたようなもので、毎年一回、孫文の生誕日の十一月十二日に行なわれるのことであつた。今年は華泰大酒店に、台湾全土から代議員約三百人が集り、午后四時半から、労働者の表彰並びに祝賀の宴が催されたが、我等五人は日本からの来賓として、それに招待された次第である。

式場には中華民国の国旗が掲揚され、国歌を斉唱した後、台湾省医師公会理事長の吳基福氏、ほか二、三代表者の挨拶があり、統いて長大医学部長の佐藤純一郎教授が、来賓を代表して祝辞を述べられた。それがすむと、四十五年勤続者二十四名、四十年勤続者五十二名の表彰、並びに劉賛國氏に対する医学研究奨励金の授与があつて式を終り、三十余卓を並べての大祝賀宴に移つた。我等五人は周百鍊氏、林忠実君、王光柱君等、長崎医大出身先輩の卓につき、美味しい中国料理と紹興酒に舌鼓を打ち、心ゆくまで台湾情緒を満喫して、午後九時頃、執拗な二次会勧誘をお断りして、ホテルに引揚げた。

×            ×            ×

以上で台湾訪問の役目は無事完了した訳であるが、滞在の十三日間、我々五人は長崎医薬台湾同学会並びに原爆犠牲学徒遺族の方々の、心からの温かい歓迎を受け、用件の合間に、林忠実君や蕭秀河君、康封印君等の親切な御案内によつて、台湾の名所旧跡を余すところなく、観賞させていただいた。高雄（寿山）、左營、澄清湖、台南、日月潭、彰化（八卦山の大仏）、台北市内、花蓮、太魯閣、烏來（觀光を行つた順序）等々。私はこれら景勝の地を巡遊しながら、嘗て在住した五十年前の北京を思い出し、うたた無量の感慨に耽らざるを得なかつた。台湾の先輩諸兄には、衷心より感謝の微意を捧げたいと思う。

(四八、一二、一五)

それかと云つて止める訳にも行かず、一応名簿を作る積りで、十月一日に夜半一時過ぎまでかかつて、ガリ版の原紙を切り、翌二日、すぐに大学へ持参して印刷して貰つた。それが名簿第一号であつた。

## 二、遺族援護請願運動の回顧

### 原爆犠牲学徒の靖国神社合祀と 遺族援護に対する請願運動

調      来      助

この運動の発端は、遠く昭和三十七年八月九日の、原爆慰靈祭の日に遡る。恒例によりグビロが丘の広場で、第十七回目の慰靈祭を営み、統いて大学同窓会館二階の広間で、遺族懇談会が催された時、誰からともなく、「動員学徒の原爆犠牲者は、国家から手厚い待遇を受けているのに、医大の学生達は、何等の恩典にも浴していない。せめて靖国神社だけでもお祀りして欲しい。」ということが持ち上り、「それでは遺族一同で請願運動を起そう」ということに、衆議が一決した。

当時の遺族会々長は吉村安雄氏であったが、早速長崎在住の有志が理事となつて、その実行方法を協議することとなり、私は大学に奉職していた関係上、原爆死亡学生の名前と、その遺族の割り出しを受持つこととなつた。

幸い、昭和三十年に発行された「追憶」に、死亡学生の名が載つていたので、それを参考にしてリストを作り、正確を期するために、大学に残つていた死亡学生の連絡簿（四冊）と、遭難顛末調査書綴（六冊）を借り受け、連絡先の明記してある遺族三百〇名に往復ハガキを出し（九月中旬）、九月末に返信を整理したところ、遺族の判明したのは僅かに一六〇名に過ぎなかつた。記録が十七年前の、而も転々として住居の定まらなかつた頃のものなので、無理はないとは思つたが、そのあとはどうして探してよいやら、甚だ心細い思いがした。

感謝の微意を捧げたいと思う。

十二月四日には、自民党の倉成代議士が帰郷されたので、それを機会に、遺族会の理事六人（吉村、草野、滝川、田吉、大楠、調）がお宅にお伺いして、靖国神社合祀の件をお願いした。これが政界に関係がついた、そもそも最初であった。

倉成代議士のお話では、陳情に上京するなら十二月中旬がよいとのことで、早速翌五日にガリ版屋をよんで、陳情用の名簿の印刷を依頼した。この時の遺族判明者が、四三七名中二一六名（約五〇%）であった。（遺族名簿第二号）

遺族判明者の数は少なかつたが、兎に角一度上京して陳情しようという訳で、吉村会長を団長とし、理事の滝川、田吉、大楠、合せて四人が一団となつて上京し、倉成代議士にお願いして、国会並びに衆・参両院議長に請願書を提出した。（第一回陳情）倉成代議士御自身の御案内でも、文部省学术局や厚生省援護局などをお訪ねし、遺族達の願望を繻々陳情したとのことであるが、「長崎医大的学生は、本質的に出征学徒や動員学徒と異つている。」という政府当局の見解により、遺憾ながら取り上げて貰えず、「せめて靖国神社にだけは合祀して欲しい」という願いに対しても、「遺族援護の対称とならない死者を合祀することは出来ない。」とのことで、一同は涙をのんで帰郷した次第である。

しかし我々は、その後もこれを断念せず、不明の遺族を探し求めると共に、歴代の医学部長であった中沢与四郎教授や後藤敏郎教授をわざわざし、度々文部省及び厚生省当局と交渉を重ねて頂いたが、どうしても解決の糸口をつかむことは出来なかつた。三十八年の原爆慰靈祭の日には、遺族懇談会に倉成代議士をお招きして、本件に対する政府当局の実情をお伺いしたが、これを達成することは至極困難とのことであつた。そのためか、同年十二月には全遺族の陳情署名を集めて、第二回目の陳情を行つたが、矢張り無効に終つた。

ところが、昭和四十年からは社会党の中村重光代議士にも、応援して頂くこととなり、超党派的運動を展開したことが効を奏したのか、四十一年一月と三月に行つた陳情が文部省当局を動かし、同年五月に学生課長を長崎に派遣して、当時の実状調査が行なわれることとなつた。それでも事態はなかなか好転せず、全く予断を許さない状

態であった。私が吉村会長の御病気のために、その跡をつぐことになつたのは、丁度その頃のことであった。

四十一年八月九日、慰靈祭にお集りの遺族の方々にお計りした結果、請願運動強化のための御寄付（一口千円宛）を仰ぐこととなり、早速八月下旬には私も陳情團に参加して上京し、倉成代議士は勿論、長崎県選出の長老田口長治郎代議士（自民党）にも大変御尽力いただいた。

田口代議士は厚生省の援護局長、援護課長、文部省の学生課長の方々を一堂に集められ、我々陳情團をはじめて、この件に関する討論座談会を催されたが、厚生省側の論旨は常に、「長崎医大的学生は当時動員学徒ではなかつた」「授業中に被爆されたのだから、国家に忠誠を尽していたとは考えられない。」等の一点張りで、長時間に亘る討議でも、一步も前進させることは出来なかつた。

その後、四十一年十二月には滝川、蒲原、大楠、有富、四十二年二月には調、滝川、田吉、大楠等が上京して陳情にこれ努め、その結果、漸うにして倉成代議士のお骨折りにより、文部省の四十二年度予算から、各々七万円宛の特別支出金を、見舞金として戴くこととなつた。

以上が一時金のお見舞金をいたゞくまでの経過で、政府としては本件が一切完了したものと考えておられた模様であるが、遺族としては物足りなく、動員学徒の遺族と同様に、是非年金を戴きたいとの願い切なるものがあつた。依つて長崎在住の役員たちは、その後の方針を年金請求に切替え、四十三年八月には滝川、蒲原、大楠、有富の四人、同年十月には調、田吉の二人が上京して陳情を行つたが、既に問題は解決済みと考えておられる政府側の壁は厚く、どうしてもこれを切り崩すことは出来なかつた。（「忘れな草」第二号、六、七頁参照）

翌四十四年八月にも、調、滝川、田吉、大楠の四人が上京して、

一、旧長崎医科大学原爆犠牲学徒を、動員学徒並みに処遇して頂く事。

二、長崎医大附属看護学校の生徒も同様に取上げ、靖国神社に合祀して欲しい事。

三、昭和二十年八月一日、大学病院の屋上で防空監視中に直撃爆弾により死亡した

三名の学生を、原爆死亡学生と同様に、靖国神社に合祀して頂く事。

以上の三項目について種々陳情を行つたが、上記の第二項がやや有望だった外は、以前と全く同じ結果に終つてしまつた。（「忘れな草」第三号、二二頁参照）

余りの情なさに、この年の陳情は一回に留め、犠牲学徒の父母の方々から戴いた御寄付は、四十五年以降の陳情費に当てることとした。然し本件を有耶無耶に葬り去ることは出来ないので、どうしたら目的を達することが出来るか、時折り集つては作戦を練りつつ、時機の到来を待つたのである。

翌四十五年四月、私は厚生省の会議に出席する機会があつたので、滝川氏、田吉女、大楠女の三人を誘つて陳情を試みたが、これも遂に徒労に終つた。（「忘れな草」第四号、四頁参照）實に泣くにも泣けない、苦杯を嘗むる思いがしたのである。

同年八月九日の原爆記念日、私は慰靈祭にお集りの遺族の方々に御協力をお願ひし、自民党的代議士を御存じの方は紹介をして欲しい由を申し出たところ、次の方々から紹介状を戴くことが出来た。

菅原文彦様御夫妻（福岡県久留米市）——石井光次郎代議士

江口虎三郎様（佐賀県三田川町）——三池信代議士

古賀説一様（佐賀県福富町）——大坪保雄代議士

菅和人様（香川県宇多津町）——大平正芳代議士

岩永宝作様（福岡市）——進藤一馬代議士

三村仲二様（岡山県新見市）——加藤六月代議士

田中澄江様（東京都）——佐藤栄作首相夫人

最後の田中澄江様は御遺族ではないが、ふとしたことからお近づきになり、この件では大変御厄介になつた。まことに感謝に堪えない。

この間に私は、戦時に長崎医大で発行した「長崎医大報國團報」を某方面から入手したので、これらの資料を携えて、四十五年十月下旬に例の滝川氏、田吉女、大楠女等と上京し、幸に援護局長が長崎市出身の武藤琦一郎氏だったので、これを最後という意気込みで陳情を行つたが、やはり私情では何とも出来ない厳しい撻（？）に阻（はばか）まれて、何ら得る所もなく、すこすごと引揚げて来た次第である。（「忘れな草」第

四号、六一一四頁参照）

又私はこれとは別に、数年に亘つて九大医学部の事務局を訪れ、同所に保管されている文部省通牒の綴りを点検させて貰いた。それは戦時中に文部省から各大学に対して、夏休み中と雖も医学部学生を学校に拘束するような命令書が、実際に出来ていたかどうかを調べるためにあつた。長崎医大の書類は原爆によって全焼しているので、九大にお願いする外はなかつたのである。

大部の書類綴を点検するのは容易な技ではなかつたが、数回に亘つて少しづつ調べた結果、四十六年春になつて初めて貴重な通牒二つを発見することが出来た。それは

（一）決戦教育措置要綱（昭和二十年三月十八日閣議決定）

（二）決戦非常措置ニ基ク学徒動員実施要綱ニヨル学校別学徒動員基準（昭和十九年三月三十一日文部次官通牒）

（一）は昭和二十年五月二十一日に発表された「戦時教育会」（勅令第三百二十号）の基礎をなすもので、その中には、「直接決戦に緊要な業務に全学徒を総動員する」と定められ、「昭和二十年四月一日から二十一年三月三十一日まで、原則として学校での授業は停止するが、戦争完遂のために特に緊要な専攻学科を修めさせねばならない学徒に対しても、この期間中も学校での授業を継続実施する」と規定されている。この規定によつて、医学部の学生だけが学校に残されて、軍医養成のための速成教育を受けていたのである。

（二）の規定の中でも、若し医学学生が動員学徒でないとすれば、この中に記載がない筈であるのに、ちゃんと医学部学生に対する基準が定められているのは、医学学生も亦動員学徒であることを示すものと、云わざるを得ないのである。

以上の資料を携えて、我々は四十六年七月下旬（調、滝川、田吉、大楠）と、同年十月下旬（滝川、田吉、大楠）の二回に亘つて上京した。しかし厚生省当局はこれら資料を既によく御存じで、それに対する対応策は充分検討済みのようであつた。政治や法律に不馴れた我々は到底歯が立たず、いつもの通り、何とか彼とか云いまくら

れて、しおしおと引き下らざるを得なかつた。(「忘れな草」第四号、六一二一頁参考照)

このような有様で、四十七年中は失意のどん底に突き落され、陳情に対する意慾も萎えて、悶々のうちに一年の月日が無為無策のまま過ぎてしまった。この間に政府では内閣の大更迭が行われ、佐藤首相が田中首相に、斎藤昇厚生大臣が斎藤邦吉大臣に代られたことが、その大きな原因であつたかも知れない。また熱心な役員であつた大楠琴子女史が、長崎を離れて東京へ移住されたことも、見逃せない大きな打撃であった。しかし幸いなことに、この不遇な時期に、常に私を激励し、挫折しかかつた私の心を支えて下さつた二人の方があつた。それは田中澄江女史と中村重光代議士のお二人だつたのである。

かくして再び陳情に心を燃やし、輝やかしい成果を收め得た昭和四十八年を迎えることが出来た次第である。その詳細については後述の報告書(一八八頁)を御覽頂きたい。

(四九、三、四)

大臣は、それぞれ前向きに答弁してまいりましたけれども、実はまだ日の目を見ないであります。しかし先般、私が当社労委員会において大臣に具体的に質問いたしました際、そういうことを実はやろうと思つてゐるという、たいへん遺族の方々もホッときられるような答弁をなさつたわけでございます。唯今も大臣は、来年度の予算の中で、旧防空法に基づいて従事された警防団員や、或いは医療従事者に対しては、援護法の対象としての措置を致したいという、明確なお答えがありました。私は斎藤大臣に対しても敬意を表したい。遺族もたいへん喜ぶだろうと思います。

ただこの際、警防団員に先んじて七万円を支給された長崎医大的学生、或いは看護学校の生徒に対しても、警防団員と同じように、援護法の対象として取り扱うという考え方を明確にして頂きたい、ということで、お尋ねするわけであります。

私はこれと同様な内容を園田厚生大臣にお尋ねした時、当時の援護局長は、学生が教室に入つていたのではないか、教室にいたということは授業を受けていたのではないか、だとすれば、防空従事中でなかつたということになるのではないかという、極めて慎重な考え方を示していた。

ところが、長崎に原爆が投下された際は、空襲警報が解除されて警戒警報に入つてゐた。だから全員配置についていたのが、配置を解かれて教室に入つていた人もありましようし、或いはまだ部署に残つていた人もあったかも知れない、この様な状況で、軍の間違いから、あたら貴い人の命が奪われてしまうという結果になつたわけであります。

そこで私は、事務当局が云うように、教室に入つていて、授業を受けていたのではないかというような、その瞬間的なことをとらえて議論するのは間違いではないか。どういう環境に学生が置かれていたかということが重点でなければならないという、私の指摘に対しても園田大臣は、四十三年五月十六日の社労委員会で、こう答えておられます。「亡くなつた瞬間に従事しておろうが、勉強しておろうが、そういう業務に従事しておつたということは事實であると思ひます。従いまして、精神は総動員法に基づいてるべきであるが、規定以外に今のような措置、いわゆる弔慰の意味で七万

## 第七十一回国会 社会労働委員会議録

昭和四十八年四月十二日開催

田川委員長 中村重光君

中村(重)委員 私は、旧防空法に基づいて犠牲になつた方が、援護法の対象にならないで積み残されておつたことに対して、数年来、これを援護法の対象とすべきであると主張してまいりました。その結果、警防団員に対して七万円の特別支給金が交付される。それから長崎医大的学生、看護学校の生徒に対しても、これまで警防団員に先んじて、七万円の特別交付金が支給されたわけです。

しかしながら七万円の一時金だけではなくて、この援護法の対象として、遺族に対しては遺族扶助料を支給するのが当然ではないか、という私の質問に対しても、歴代の

円を支給したという、そうした措置をしたものであると考えております」。このように答えている訳であります。そしてこの問題に対ては、もう一べんそういう方向で検討したいと云つておるのであります。

昭和四十四年五月七日、斎藤昇大臣は山田委員の質問に対し、防空監視員は戦傷病者等援護法の対象とし、公務で死傷した者を援護法の対象とする。原爆に限定はない。公務従事中の死傷者を全部含めるのだとお答えになつておるが、これは防空業務従事中、或いは医療従事者のように、教育訓練を受けておるといったような場合、具体的には警防団、看護学校の生徒、医大の学生、或いはその他防空法に基づくところの業務に従事していたものを称して、公務ということになるのだろうと思いますが、如何ですかという質問に対し、斎藤昇大臣は、そういう意味で検討します、こう云つておられる訳であります。そこで私は、防空業務に従事していたという特別な事情から、七万円が支給されたという判断をする訳であります。でなければ、七万円という金が支給される筈はない訳であります。

医大の学生に対して七万円の特別支給をした当時の事情は、実は厚生省が三万円支給することを提案しましたが、文部省も七万円を支給することを起案し、同一案件に対しても二つの省から支給するのは適当でなかろうということになって、額の多い七万円の方を支給し、厚生省の三万円支給を取りやめたのであります。従つて警防団と同じように、それぞれの機関の指示によって防空業務に従事していた長崎医大の学生、及び看護学校の生徒も、援護法の対象として遇すべきである、このように考える訳でござりますが、大臣は同様な見解であるかどうか、伺いたいと思います。

斎藤国務大臣 警防団員の問題、医療従事者の問題、長崎医科大学の学生の問題、ほんとうに長いこと主張を続けられ、社会労働委員会において御審議をいただいてまいった訳でございまして、私共もその中で、援護法の取り扱い方はあくまでも公平であるべきである。こういう基本的な原則に立つて、今までその審議を尊重し、努力してまいりました訳でございますが、幸いに先ほど警防団員と医療従事者につきましては、結論的なお答えをいただいた訳でございます。

そこで、あとに一つ残りましたのが医科大学の学生並びに看護学校の生徒の問題であります。実は私、「率直に心事を申しますと、先般の社会労働委員会で中村先生の御質問にお答えいたしたと思ひますが、教室におつたとか居らなかつたとかいうことは、そう大した問題ではないと考えておりましたし、現在もそういうふうに考えております。

そこで私も、本当に云いますと、この学生や看護学校の生徒の方々を、何とか援護法のワクの中に取り入れて解決をしたいのです。したいのですけれども、いろいろ仔細に考え、更に又、この前見舞金を出した時には、実は厚生省でも予算を出しましたが、一応結論的には文部省としての取扱いにまさそう、金額は向うの方が多かつたとか何とか云うことは別といたしまして、矢張り文部省としての取扱いにまさそうとしたこと等もあり、更に又、この人々を防空業務というところに結びつけることが出来るかどうか、その辺にまだ私としては割り切れないものがございましたので、この学生さんや看護学校の生徒については、援護法によって取り扱うことは、どうも今の段階では困難ではないか、こういう結論を出しておるような次第でございます。

今日まで長いこと御論議をいただいておりますが、この問題は、援護法のワクの中で処遇することは、どうも一寸困難ではないか、こういうふうに今の処考えておる訳でござります。

中村（重）委員 大臣の今日の答弁は、前回私の質問に対てお答えになりましたことよりも、たいへん後退していると思います。私は前回、具体的に、警防団あるいは長崎医大の学生、看護学校の生徒、固有名詞をあげて質疑したのに対して、大臣は前回の答弁をなさいました。少くとも大臣は、事務当局の意向によつて左右されるような不見識な方ではないと思うのですけれども、私も法的関係というものを全く無視して、感情論だけで事を処理していくべきであるということは申しません。しかし、同じような環境の中についたものが、差別扱いをされることは間違いであると考えます。

警防団の七万円の問題にいたしましても、援護法の対象にすべきであるということ

で、七万円が支給されたのではありません。これは、前に医大の学生を文部省の方で起案させた前例もあるから、警防団は消防庁の方で起案させるのが適當であるうとうことで、私共も要請行動をして消防庁でやつたのであります。長崎医大の学生の問題も、当初厚生省が三万円の起案をいたしましたのは、実はその必要を感じられて起案したのです。しかし起案をした結果、どうもこれは適當ではない、文部省の措置にまかした方がいいだらうという、いわゆる突つばねた形でやつたのではなかつたのであります。その必要性を文部省も厚生省も考へた、しかし同一案件のものを両方の省から大蔵省に持ち込むのはどうも適當ではない。大蔵省から拒否されるのは間違ないといふことで、金額の関係もあって文部省の起案を採用したのが、当時の経過であります。私共はその当時から熱心にこの問題を取り組んでおりましたから、よく承知いたしております。

そうなつてまいりますと、私はここで警防団に支給された七万円と、医大の学生等に支給された七万円の根拠は何か、ということをお尋ねしていかなければならぬことになります。根拠がどう違うのか、この点を先ずお尋ねすることにいたしましたよ。

高木（玄）政府委員 長崎医大の原爆死亡学生に対しても、昭和四十二年に文部省で予算措置を講じ、一人につき七万円を、付属医院の産婆看護婦養生所生徒死亡者は、昭和四十五年に同じく七万円を支給しております。

私共で承知しておりますのは、この七万円の弔慰金を文部省が出した趣旨は、当時決戦教育措置要綱というものによりまして、國策にのつとつて夏季休暇を返上し、短縮授業により医師、薬剤師としての技術習得のために学業に励んでいたという戦時教育の特殊性と、原爆による災害によつて多数の学徒の命が失なわれたという点を考慮して、この特別支出金の支給の道が講ぜられたという結論に到達して、以上のような措置が講ぜられたようあります。

それから、厚生省の方で出した医療従事者或いは警防団についての問題でございま

すが、これは国会におきまして、旧防空法に基く防空従事者を援護法上どう処遇するかということが盛んに議論され、国会で御決議等もございましたので、昭和四十二年に厚生省に、大臣の私的な諮問機関として援護問題懇談会というのを設け、御検討を願つたわけでございます。その結果、旧防空法の防空監視員は、これを準軍属として処遇するのは適當である。しかし警防団員と医療従事者は処遇するのは適當でないという答申をいただきましたので、四十四年の改正で防空監視員を準軍属にしたのと並行して、警防団員と医療従事者に一時金を出した、こういうような経緯だらうと思ひます。

中村（重）委員 消防庁からも文部省からも御出席いただいておりますので、それぞれお答えをいただきましょう。

辻説明員 当時、警防団員について消防庁で事務を所管した経過については、大筋の点は、唯今援護局長が申上げましたような経過をもつて、その警防団員の後身である消防団員を所管している消防庁において、その事務を取扱うのが適當だという政府の結論が出まして、それに基づいて消防庁の方で処理したものと考えております。

遠藤説明員 当時、文部省で予算措置をいたしましたいきさつにつきまして、援護局長から御答弁された通りだと思います。特別補足することもございませんが、文部省としては、それ以前から動員学徒について動員学徒援護事業要綱というものを定めまして、動員学徒或いはそれに類した業務の過程で死亡、或いは傷病にかかつた学生に対して援護をやっておりましたので、それとの均衡を考慮して、弔慰の意を表するため特別支給金を措置したものでございます。

中村（重）委員 当時の消防庁長官松島政府委員は、私の質問に対して次のように答えております。性格としては弔慰金的な性格と考えております。七万円は、前に長崎医大の学生の被爆者に対する特別支給金が出ておりますので、均衡を考慮したと、こう云つておるわけです。これはもう全く同じなんですね。やはり私共が、旧防空法に基づいて当時、軍の命令によつて地方長官或いは学校長その他の機関の長が防空業務に従事せしめた、医大の場合は医大の学長でありますが、そういうことから、

当然これは総動員法の対象として、援護法の対象にすべしと主張してまいりました。

ところが、そうなつてはいない。

しかし当時置かれた客観的な条件と申しましようか、情勢と申しましようか、それらのことを考えてみると、これはやはり放つておけないので、何とかしなければならないのだということから、まだ援護法の対象とするところまで踏み切るには若干問題があるので、とりあえず七万円を支給しておこう、こういうことで医大の学生の七万円の問題が起り、続いて警防団等も当然防空業務に従事しておったことには間違はないということで、遺族の方々の運動展開となり、更に次には消防団員の方々の犠牲者にも七万円の支給、こういう形になつて来たわけであります。

ならば、警防団員に対しては、防空業務に従事しておつたことで援護法の対象としよう、医大の学生はどうも防空法にびつたりしないようだから、この対象とすることは矢張り無理であるという結論——とこう云う言葉を大臣はお使いになつたのですけれども、それは大臣、若干無理があると思います。

そこで具体的なことでお尋ねしてまいらなければなりません。医大の学生は当時徵用されておりました。或いは動員と申しますか、これが解除された。どうして解除されたとお考えでしようか。

高木（玄）政府委員　当時、決戦教育措置要綱というのが昭和二十年の三月、それから昭和二十年五月に戦時教育令、こういうものが定められております。これらのもの趣旨でございますが、その趣旨は、学生はすべて原則として動員をかける、それで工場等で兵器の生産に当らしめる。しかし例外的に國家の要請によつて、一部の者には授業を引き続き継続する。その一部の者というのが医学、歯学の関係の方々でございまして、これは軍医要員養成のため——軍医要員養成が当時極めて緊要な問題だというので、医学、歯学の学生に限つて動員を解除されて学校に戻され、学校で軍医なりにするための速成教育を受けていた、こういう事情があつたと承知しております。

中村（重）委員　わつしやる通りです。速成教育をしなければならなかつた。医者

はどんどん戦地に召集される。それだけでなく、本土空襲はどんどん行なわれる。そして負傷者が出て。救護隊を結成して救護活動を展開しなければならぬためにそうした。これは医者の卵である医学生を工場等で働かせるなんてことは、愚の骨頂であるという考え方であつたと思う。そこで学校へ帰つてきた。そしてこれはただ一途に勉強させることだけが目的である。防空のために特別訓練をやる。そして業務に従事させる、こういうことを実はやつたわけであります。

しかも、それは校長だけの単独的な意思ではなかつた。軍の命令、それから地方長官、そして長崎医大の場合は学長に、それぞれの防空法に基づいての命令がなされて、その命令に基づいて行動しておつたことだけは、これは間違いない訳であります。『文部省内には学校報国隊本部が設けられ、二三の重要都市に夫々地方部が設置された。本部は組織部と実践部とに分けられ、夫々の任務を司り、地方部は重要地方に於ける本部の事務を分掌する。云わば学校報国隊の活動を統轄する総司令部が本部であり、前線司令部が地方部である。』ということを、当時の手記としてはつきり書いてある。これは『忘れな草』第四号であります。

それと、長崎医大の学生が、明らかに軍の命令によつて学校報国隊に組織され、防空業務に従事をしたという証言と致しまして、原爆で亡くなつた角尾学長の後を継いだ古屋野学長の証言がござります。

「特に昭和十九年以降、戦争が益々苛烈となるに従い、学内及び市内の医師が次々に軍医として召集されてからは、長崎県第一次防空機関の防空演習実施計画が、佐世保海軍鎮守府司令官、長崎要塞司令官、長崎県知事等の命令によつて、本学及び付属医学専門部の学生を以つて当てることとし、昭和二十年四月二十六日、長崎駅及び大波止棧橋に爆弾が投下されて多数の死傷者を出した際にも、学生全員を出動させてその救護に当らせたのである。

昭和二十年八月九日、原子爆弾が長崎市に投下された時は、空襲警報発令と同時に学業を放擲し、教職員、看護婦と共に救護待機中、六百米の至近距離で被爆し、四百六十七名の学生が或いは即死、或いは放射能による障害で死亡するに至つた。その慘

状は実に目も当てられぬ有様であった。

以上の軍や知事の防空策定の計画に基いて、角尾学長にも軍及び県知事から救護及び医療についての命令がなされていたことに間違いない。私は角尾学長の被爆受傷後、学長に代つてその代理を勤めたので、当時の実状を知悉するものとして、以上の事実を証言する。」と云つています。

それからここに学生の手記もあります。「長崎医科大学防護団は、昭和十二年九月二十九日、勅令第五五〇号をもつて公布せられた官庁防空令の定むるところに従つて設立された機関であつて、本令第一条に謳われた国家に於て管理する施設、即ち本学に於ては長崎医科大学に包含されるあらゆる施設に関する防空の実施を目的とする。

従つて本学防護団では、その規約第一条に、『本団は戦後、事変、又は災災に際し、警備と防衛に備ゆるために之を組織する。本団は本学職員、学生、生徒及び患者並びに建物等を防護することを目的とし、時機に応じ、学外の救護にも従事することあるべし』と定め、之が運用に便なるため、一部八班、即ち「云々、とこうある訳であります。これは軍の命令によつてこういうものが結成され、そしてその活動がなされたということは明らかであります。

それから、学生の防空の実務、行動、これはすべて学外に出ております。七月三日の日には、「田上に軍の陣地構築作業に行く。壕掘りだつた。」七月二十七日の「十時半頃空襲警報が発令され、総員配置につく。」それから七月二日、これは前に戻りますが、「報国隊の編成が行なわれ、僕は第一小隊第一分隊に編入された。担任は学生主事の小野教授、この日授業はなく、空襲に備えて病院廊下の瓦剝ぎ、その他の行動を命ぜられた」。また、「昨晩防空當直で学校に泊りました処、空襲警報が鳴りつづき、遂に徹宵警備につきました。これで四日間寮に帰らずにおります」。これは父親にあたた手紙であります。それから、市内に派遣——医療隊として活躍していること、これもずっと手記としてあります。

このように勉強していたのは、医学生には速成教育が必要だったのです。特別訓練は救護作業をやる以上当然のことです。佐世保が空襲を受けた際にも、医大の学生が

救護隊を編成されて、佐世保に出動をやつたわけです。これは私も行つておりましたから、目のあたりこれを見ておられます。これは医大が任意的にやつたんじゃないのです。軍の命令によつて、こうした防空法に基づいての編成がなされ、行動がなされました。これらの点を十分勘案して、七万円の特別支給金というものが交付されている。だからして園田大臣の答弁となり、斎藤大臣の答弁となつてきました。それでよく事情を知悉していらつしやる、最も理解者である、そして私の質問に対しても歴代の大臣よりももっと前向きで御答弁になりました大臣が、警防団だけで、医大学生の問題については、援護対象として今のところ考へていないという答弁には無理がある。ただ事務当局の杓子定木のことだけをお聞きになりますは、大臣だめなんです。それで

は歴代大臣よりも最も理解者であるにも拘らず、あなたは最も理解しない大臣といふことになりますよ。あなたはそういう汚名を受けてもよろしいのでしょうか。それならば、あなたが今まで私どもに云つてきたことは、うそだということになります。私は共がここで質疑をする、このことは矢張り国民すべてが知る。それで大臣に対するところの感謝となり、ホッとした気持になつておる。それを裏切るという形になつてくると私は思う。私が自分の判断で云つているのではありません。感じで云つていいのではありません。具体的な資料をもつて、具体的な事実に基づいて、私は質問をしている訳であります。大臣、これに対しまして、少なくともあなたの考え方はお變りになつたと思います。それが当然であると思ひます。ですから、この点に対する大臣の前向きのお答えをいただきたい。

**斎藤國務大臣** 中村君のお尋ね、これで今度の国会で三度目でござります。最初の国会の時には、長崎医大の学生、警防団員、医療従事者、三つの問題についてお尋ねを受けまして、私の率直な気持をあの時も申し上げた訳でござります。私も出来るだけ援護法の中で何とか解決することは出来ないだらうかという気持は、終始一貫、今でも持つております。一つも変りません。

そこで、問題は防空法上の医療従事者という範囲の中に入るか入らぬか、私これはやはり一つの問題だと思うのです。これは旧防空法によりますと、医師とか、歯科医

師とか、看護婦とか、非常にはつきりしている訳ですね。そういう中でこの問題を解決することは、どうであろうかなあということを私は率直に申し上げておる訳でございまして、そういう考え方から云うと、医大の学生には一寸無理があるのでないか、こういふことを率直に先ほど以来申し上げた訳でございます。

しかし、私は基本的にこの問題については、中村委員か大原委員かのお尋ねに対して、見舞金を出したということは、ある程度、援護法の中に足を突っ込んだ問題だとということを、はつきり申し上げた訳でございます。かりにもその所管が文部省であるが厚生省であろうが、お見舞金を出したということについては、私は何か矢張り援護法的なものを頭に描きながら、その中に足を半分突っ込んだ措置があつたと私は思っています。

そういうことで、今でも私も何とかしたいと思ってているのです。ただ、この旧防空法の中に、医療従事者というところの中に、はつきり書いてあるのですね。そこがどうも問題ではなからうかなあということを、私は率直に申し上げた次第でございます。従つて、その辺の壁をどういうふうに破れるか、これは矢張り一つの問題だと思うのです。この中に「医師、歯科医師、獣医師、薬剤師、産婆、保健婦及び看護婦」、こういうふうにはつきり限定されておる仕事、しかもお話をりますと、その方々は医療救護班に入っている、こういう訳ですね。この調整をどうするか、これは矢張り問題だと思うのです。その辺から何とか解決する糸口を見つけることが出来なか出来ないか、これが私は問題解決の鍵だと思います。

従つて、私ももっと考えます。考えますが、今の今日現在のこの文字から云うと、一寸無理があるのではないかということを、私はさつき率直に申し上げたので、私の心中からの心境といふものは、初めから三つといふものが見舞金を出しているのですから、見舞金を出したということは、国家援護に一步足を踏み込んだと思うのです。国家援護の領域にはつきり足を半分突っ込んだことになるのだから、今後どうやつてこの問題を解決していくかについて、私にもう少し考えさせて下さい。文部省とも考えたり、将来の問題が関連して来ますから——。外にこういう事例があるかない

か、私は知りません。ですから、この防空法上に非常に限定されている医療従事者、これと学生さんや看護学校の生徒さんたちが、やつておったといわれる医療救護ですね、実際にやつておったというのですから、それとの調整をどう計つていいくか。その辺が私は問題解決の鍵だと思いますから、もう少し時間を貸して頂いて、研究させていただきたいと思います。

**中村（重）委員 大臣、たいへん前進したお答えがございました。ここで大臣の認識を新たにしていただきたい。**

この防空法を作りました際は、医療従事者としては医者であり、或いは歯科医であり、或いは看護婦でよかつた訳です。ところが戦争が苛烈になれば、どんどん医者が戦地に召集される。先程申し上げた通り、もうどうにもならなくなつた。

この防空法を作った 당시に、恐らく日本は勝つだろう、こういう状態が生まれるというようなことは考えないで作ったんじゃないでしょうか。ところが軍の見通しとは、即ちこの防空法を作った当時は、事情がだいぶ變ってしまった。そこでどうにもならなくなつて來た。一旦工場に徵用にしておつた学生を引戻さなければならぬという事情になつて來たのです。そして速成教育をしなければならない。また行動もやらせなければならないというふうに變つて來た。そういうことを予想しないで作つておつた。この文字だけを見て、そして、この文字だけにとらわれて現実に目をつむることは、私は正しい政治のあり方ではないと思います。だからして、七万円が支給されたという大臣の今の前向きになつた答弁、その中に私が今申し上げたことを生かしていかなければならぬと思います。この点、大臣は私と同じような心境、見解ではないでしょうか。

**斎藤国務大臣** 先程申し上げましたように、法律上ははつきり医師という資格を持つたということで、限定された表現になつております。ところが、今お話しのように、この人たちが医学教育を受けながらも、どういうふうな実態の行動をしておつたかということは、審議の中で明らかになつておる訳でございまして、その学生さんや、或いは看護学校の生徒が、戦争中どういう仕事を現にやつておつたか、その辺の

調整をどうやってはかっていくか、この辺が矢張り一つの問題でござりますから、もう一寸勉強させて下さい。

率直に、氣持ちはおわかりいただけると思うのです。私の氣持は、私は何とかしたいと初めから云つてゐるのですから——この制度が出来る時から何とかならんぞうか、見舞金なんか出さんで、何とか援護法に入れたらどうかというような意見も実際にあつたのです。ところが、あの当時はなかなかそこまでは踏み切れない、差し当たり見舞金を出そうじやないかといふときは、私も十分承知しております。

従つて、そういうことでございますから、もう少し文部当局とも相談致しますが、もう少し一つ結論を出すまでに、私に時間を貸して頂きたいということを申し上げて、御理解を頂きたいと思う次第でございます。

中村（重）委員 それじゃ援護局長、あなたに質問したいのですが、警防団員と医大の学生との相違点は、どういうところにあるのですか。

高木（玄）政府委員 警防団員と申しますのは、警防団令によりまして、本来的な業務として防空に従事すべく決められている訳であります。長崎医大の場合には、先程申しましたように、同年輩の文科系の学生は徵集猶予を取り消されて、いわゆる学徒出陣として軍隊に入つております。當時、国民学校の初等科以外は全部学校の授業が停止されていました。そのなかにあって、医師を養成するため学校に戻された速成教育を受けました。あくまでもその学生というのは、當時としては全く例外的に学校に戻つて教育を受けておつた、こういう立場の者だと思います。

中村（重）委員 その点は、先程私が申し上げた通り、教育訓練をやらなければ救護作業は出来ない訳だから、速成教育をやつて医師にして戦陣に送らなければならぬ。出来るだけ教育しなければ、負傷者に対する援護も出来ない、救護も出来ない訳だから、これは当然のことです。

だから、そういう形式的なことではない。ただ、私が云つた警防団と、唯今私が具体的な事実として指摘した医大の学生との相違点は何かという、具体的なことについての質問したのに対し、あなたからは形式的な答弁しか返つて来なかつた。恐らく

あなたには出来ないのだ。形式的な答弁、そういうのは今は通用しない。具体的な事実の上に立つて、そのことをあなたにも十分考え方してもらいたい、ということを申し上げたいのです。

もうよろしいです。大臣の前向きの答弁がございましたから、それに期待をいたしました。これで私の質疑を終ります。

#### 戦傷病者戦没者遺族等援護法等の一部を改正する法律案に対する附帯決議

政府は、次の事項につき、格段の努力を払うべきである。

一、国民の生活水準の著しい向上にみあつて、援護法の水準を更に引き上げ、公平な援護措置が行なわれるよう努力すること。なお、戦没者遺族等の老齢化の現状にかんがみ、一段の優遇措置を講ずること。

一、戦傷病者に対する障害年金等の処遇については、さらにその改善に努めること。

一、戦後二十数年経過した今日なお残されている未処遇者について、早急に具体的な解決策を講ずること。

一、生存未帰還者の調査については、さらに関係方面との連絡を密にし、調査及び救出に万全を期すること。

一、遺骨の収集については、さらに積極的にこれを推進すること。

一、旧防空法に基づき、命令を受けて防空に従事した警防団員及び医療従事者を、昭和四十九年度に必ず準軍属として措置することとし、あわせて所要の予算措置を講ずること。

一、特別支出金の支給を受けた旧長崎医大の学生等の遺族の待遇改善についても、実体を調査したうえ善処すること。

昭和四十八年七月三十一日に

## 掲載された長崎新聞の記事

昭和四十八年十二月に行つた  
陳情の記録

来年度予算で厚生省方針——警防団員、長崎医大生ら対象

【東京支社】厚生省は、来年度予算に原爆で亡くなった旧長崎医科大学（現長崎大学医学部）生、同看護学生、警防団員、医療従事者、（医師、歯科医師）を戦傷病者戦没者遺族等援護法の准軍属扱いにし、遺族に対し扶助料を支給する方針を固めた。

扶助料は同法の遺族給付金に当たり、日本被団協などが制定を要求している被爆者援護法の遺族年金に該当するもので、形式としてはともかく、被爆者に初めて遺族年金を出すことになる。

旧長崎医科大生らの遺族に対しては、これまで七万円の特別支出金（見舞金）を出したことがあるが、関係者は爆死した医科大生も旧防空法などにより、軍の命令によつて行動していたとして、遺族年金の支給を要求していた。

また三月八日、衆院社会労働委員会で「被爆者の救済に当たっては、戦争犠牲者の救済の公平を確保するうえから、速やかに施策を講ずる」との付帯決議がなされたところから、厚生省は被爆者援護法の制定は無理としても、実質的に遺族年金を支給する方針で検討を続けてきた。

近く省議で正式決定し、大蔵省に概算要求することにしているが、それによると、該当者は旧医科大学生四百十三人、同看護学生六十一人、警防団員一千二百九十五人（広島を含む）、医療従事者九十二人（同）の遺族に対して、総額六億七百万円を支給する。支給額は一律で、一人当たり約三十二万六千円になる。

旧長崎医科大学原爆犠牲学徒遺族会理事

田 吉 チ ハ

昭和四十八年八月九日、慰靈祭に続いて遺族懇談会が同窓会館で行われた時、倉成正代議士と中村重光代議士を迎へ、お二人から、「今度こそ、遺族の方々の予ての希望（爆死した学生が員学生並みに認められること）が叶えられそうなので、目下極力努力中である。」と、力強いお言葉を承つた時、私達は思わずホッと胸をなでおろしたことでした。

然し、そのまま他力に頼りすぎていてもよくなないと想い、色々話しあつた末、予算審議の機会をねらつて、最後（？）の陳情を行うことにしました。

幸い私は全国未亡人大会が、十一月末から十二月上旬にかけて開かれるし、調会長も十二月上旬に開催される、厚生省の原爆医療審議会に出席されるので、この機を利用し、在京中の遺族会役員大楠琴子女史と、遺族の一人である芸大教授の西大由氏に同行をお願いし、四人で要所々々をお訪ねすることにしました。

必然的な体力の衰えはかくしきれず、年毎に老令化していくれる遺族の方々が、「ああ、あたら青春を捧げたあの子等の死が、犬死ではなかつた」と、靈前に合掌出来る日の有様を臉に浮べながら、勇氣を出して出発したのでした。

東京での集合を、「十二月四日午前十時、第二衆議院議員会館の待合室」と約束していたのでしたが、何という不運、国労のストで、汽車は遅れ、電車も動かぬ朝となつたのです。然し約束なので、私は歩いてでも決めた場所へと、八時半に四ツ谷の宿を出て歩きだしました。

さて広い東京の市街は長崎と違つて、見える屋根も遙かなもの、歩けども歩けども中々近くならないもどかしさ。でも天の助けか、九時頃になつてスト中止、漸く動き出した電車に乗ることが出来ました。然し老令の女がのんびりと乗れる有様ではあり

ません。死ぬような込み方で、群衆に押し込まれ押しだされて、やつと会館に辿りつきましたが、肝心の調会長の汽車はどうなったのか、お姿が見えません。遂に二時間近くも待ちこがれてしまいました。

今度の陳情の目的は、厚生省から大蔵省へ提出してある概算要求を、是が非でも通して頂くようお願ひすることでした。この要求が通れば、あとは殆んど事務的に事が運ぶので、私達は勿論のことですが、議員さん達も必死になつて、当局との交渉に当つて頂きました。ただ時期が丁度国会中なので、議員の方々は大変忙しく、倉成議員と西岡議員にはとうとうお会い出来ませんでしたが、中村議員や初村議員には幸にお会い出来て、厚生省の石本政務次官や大蔵省の福田大臣との面会をとりつけて頂き、こんな嬉しい思いをしたことはありませんでした。

福田大臣との面会時刻は四日の午後四時半というので、一応ホテルに帰つて待機していましたところ、四時ごろ中村議員から直ぐに大蔵省へ行くようにとの知らせがありましたので、調会長、大楠女史と一緒に、取るもの取りあえず大急ぎで出かけました。丁度その頃は国会の本会議中でしたので、暫らく大臣のお帰りを待つていましたが、そこへ中村議員も来られて、四人で大臣にお目にかかりました。

一通りのことを中村議員からお話を頂き、私共も代わる代わる陳情を申し上げましたが、大臣は本会議で大変お疲れのところを、よく話を聞いて頂き、帰りには握手までして頂いて、心から感激致しました。この分なら或いは何とかなるかも知れない」と、足どりも軽くホテルへ引揚げて来ました。

翌五日は厚生省への陳情の日です。この日は芸大の西教授にも御足労をお願いし、

四人で先ず八木援護局長にお目にかかりました。八木局長は例によつて、「この問題は法的にも難問中の難問で、唯今大蔵省の査定でも少なからず難行しています。」と申され、がつかり致しました。然しこちらも「ハイ、そうですか」と簡単に引き下さ

ることも出来ません。調先生は言葉を尽して、学生の当時の使命や実状を繰返され、他の三人も交々情に訴え、老令遺族の為に是非にと頼みましたが、皆様その情景をどうかお察し下さいませ。

遺族の皆様!! ほんとに皆様が不思議に思われるくらい、壁を打ち砕くことは困難だと痛感しました。然し私共はこれでは浮ばれないのです。二十八年前のあの惨状を見た人ならば、若人の死に對して何とかすべきだと思われるを得ないと私は思います。私は目をつむつて、遙かあの焼け焦げた場面を瞼に浮べ、泣き出したくなりました。

○ 友を救はむとして火の中に飛び入りしまま遂に返らず  
ゲビロが丘の慰靈碑の歌を、お読みになりましたか。

累々たる白骨の遺体が、焼けた校舎の下敷きとなつて現われた姿を、今の人々にお見せしたいのです。肉親の人達がどんな思いで立ちすくんだか。それを法律の一線にかかるとか、かららぬとか、血も涙もない局長のお言葉に、陳情する私共の心は、ほんとに張りさけんばかりでした。

このあと、石本政務次官（女性）のやさしい励ましのお言葉に、少し心も和んで來ましたが、それでも何となく晴れやらぬ気持で厚生省を引き下り、四人は議事堂前の銀杏の枯葉がハラハラと散りしく道を、無言で歩きつづけました。

続く試練の連続、まだくじけられない、と思い直して、帰途に着いた次第でした。まだまだこれでは死んだ子に、そして子の名を呼びつつ逝かれた老父母の方々に、申し訳がないと思います。

生命は貴いのですよ、何よりも——と誰もが知り、叫びつづけているのです。あの大切な子が、何で死んだか解らぬ、では人間として済まされぬことなのです。

以上、要点のみですが、四八年冬の陳情報告を申し上げました。山々の頂いただきに白い降雪が見え、又新しい四十九年が近づいて来ます。体をして、又の朗報をお待ち下さいませ。

（四八、一二、九記）

# 昭和四十八年十二月二十九日の

## 長崎新聞の報道

被爆死の長崎医科大生ら——遺族年金を支給

【東京支社】 四十九年度政府予算の大蔵原案に対する二十七日までの次官折衝で、旧防空法により公務中原爆で亡くなつた長崎医科大（現長崎大医学部）の学生、看護婦、警防団員、医療従事者についても、援護法の適用を受け、遺族年金が支給されることになった。

同対象者は、長崎医科大生四百十三人、同看護婦六十一人、警防団員千二百九十五人、医療従事者九十二人、計千八百六十一人の遺族で、来年十月から支給される。同予算（四十九年十月から五十年三月）は総額三千百三十四万七千円。このほか原爆被爆者対象予算関係で、諸手当の所得制限が緩和され、現行年間納税額七万一千七千円が八万四十三円に引き上げられた。

【調 附記】 この大蔵省決定は昭和四十八年十二月二十六日の夜半になされたもので、二十七日の朝十時半頃確認されて、中村代議士から私の許まで電話で通報された。その内容は七月に厚生省から大蔵省へ概算要求されたものと全く同じで、ただ発足の時期が「四十九年十月から」と明らかにされただけである。

この記事が新聞に掲載された直後に、私は或る一人の遺族の方から、「四十九年度の予算額が甚だ少く、これでは一人分が月二千円位にしかならないが、どうしたのだろうか」との質問を受けた。しかしこの少額の予算は、次記の報告書でも解るようになり、年金の支給が五十年度からになっているので、恐らく事務費に該当するものであろうとお答えしておいた。

その後、本年一月二十一日に、御礼言上のため厚生省を訪れた時、正確な年金額を教えて頂いたが、それによると、

『遺族給与金（年額） 二七四、九五〇円

両親共に健在である場合は、上記のほかに一人につき九、〇〇〇円が加えられる

る。尚、四十九年十月から五十年三月までの分は、五十年四月に支払われる。  
弔慰金 死亡者一人につき五万円（国債）』

ということであった。報告書に書いた金額とは多少違つてゐるが、大差はないようである。

又、八月一日の爆弾に斃れた三人の学生諸君の御遺族に対する援護措置は、厚生省ではなくて文部省が取り扱うそだから、或いは弔慰金乃至見舞金に類するものではないかとも思われる。聞くところによると、初村代議士は、若し政府がやつてくれない場合は、自分のポケットマネーを出しても何とかしたいと云われたそうで、同代議士の熱意が文部省当局を動かしたものと推察される。

（四九、三、三〇）

## 原爆犠牲学徒の遺族に対する 援護法適用の認可確定報告書

調 来 助

皆様にはお家族お揃いで佳いお正月をお迎えのことと存じますが、私はこの輝かしい新年にあたつて、も一つの大きな慶びを皆様に御報告出来ることを、心から嬉しく思つております。

それは何かと申しますと、皆様すでに御承知のことと存じますが、私共が多年に亘つて請願運動を続けて参りました「旧長崎医科大学原爆犠牲学徒の遺族に対する援護法適用の件」が、國らずも昨年末、正確に申しますと昭和四十八年十二月二十七日に認可決定されたことであります。

ここに至るまでの経過を簡単に申し上げますと、昨年一月下旬に、私は田中澄江様（女流作家、数年前からこの件で大変お世話になつてゐる方で、お舅の田中民夫様は元長崎医大的教授でした）から御懇意なお便りを戴きましたが、田中様は政界にも知人が多く、田中首相にも私共のことをお話して頂き、私も首相にお願いの書簡を差上

げました。更に二月下旬に調、田吉、大楠の三人が陳情のため上京した時は、小坂徳三郎代議士の秘書山田氏、中村弘海代議士の秘書末藤氏、朝日新聞の記者佐々木氏等を御紹介頂き、同道して文部省及び厚生省を訪ね、長時間にわたり当事者と談合しましたが、遂に意見の一一致を見ず、涙をのんで帰つて参りました。

その後四月十二日には、社会労働委員会が開催されましたが、その席上で中村重光代議士（長崎県選出の社会党議員）と斎藤厚生大臣との間に激しい討論がかわされ、遂に「戦傷病者戦没者遺族等の一部を改正する法律案に対する附帯決議」の中に、「特別支出金をうけた旧長崎医大の学生等の遺族の待遇改善についても、実体を調査したうえ善処すること」という一項を附加することに成功されたのであります。（前記の社会労働委員会議録を御参照下さい）

七月下旬になりますと、厚生省から大蔵省へ、長崎医大学生四一三人、看護婦生徒六一人、その他警防団員、医療従事者等に対する概算要求が提出されました。このことは七月三十一日の新聞にも掲載されましたので、すでに御承知のことと存じます。

この頃、参議院の初村滝一郎代議士（長崎県選出）も、自民党の原爆対策委員会委員長をしておられましたので、種々御尽力いただいたことと存じます。

八月九日の原爆慰靈祭の節には、倉成正代議士（自民党政調副会長）と中村重光代議士が遺族懇談会に御出席下され、力強いお話をして頂きましたので、遺族一同は心から感謝申し上げた次第であります。

愈々十二月の予算定期に入りますと、私たちは矢も楯もたまらず、田吉、大楠、調の三人で陳情のため上京しましたが、確証をつかみ得ないまま長崎に帰りました。（田吉チエ女の陳情記録をお読み下さい）

その後私はどうなるものかと心配しながら、中村代議士の御指示によつて、福田大蔵大臣、斎藤厚生大臣、その他当局要路の方々へ、お願いの書簡を差上げて待つておりましたところ、二十六日の夜に中村代議士から、「復活要求で打つだけの手は打つた。あとは運を天に委せるだけだ」とのお電話があり、文字通り戦々兢々の思いで一夜を過しました。

概算要求が通過決定したとのお知らせを受けたのは、翌二十七日の午前十一時頃であります。私は手の舞い足の踏むところを知らず、目に涙を一杯たたえながら、思わず万歳を叫びました。長年苦労を重ねたこの懸案も、かくして無事に解決を見たのであります。皆様もどうか御安心下さい。

中村代議士の御帰郷を待つて、田吉女史と一緒にお訪ねし、詳しいお話を伺い、また感激を新たに致しましたが、一月元旦には初村代議士からも、「昭和四十九年度原爆被爆者対策関係の予算概要」についての書類を頂き、ほぼその全貌が判明致しました。そのうち長崎医大関係の部分だけを摘録しますと、次の通りであります。

『旧長崎医大原爆犠牲学徒の措置については、旧防空法六条一項二項によって命令が出していたものとして、対象に入れることになりました。

遺族年金——夫人、父母等——現行二九万六一〇〇円

弔慰金（一時金）兄弟等——現行三万円→五万円

昭和四十九年十月一日実施

中村代議士から承った所でも、「年金は死亡学生等の妻か父母だけに与えられるが、弔慰金は遺族代表者の全員に与えられる」とのことでした。又「本法は今年十月から実施されるが、お金が下付されるのは五十年四月からになるだろう」とのことでしたので、念のため書き添えます。尚、八月一日に爆死された三人の学生諸君の御遺族に対しても、援護措置が講ぜられるそうで、このことは初村代議士がはつきり申されましたので、間違いないものと思ひます。

以上のように、私共遺族が希望していましたことが、すべて達成されましたので、地下で眠つておられる学生諸君も看護婦生徒諸嬢も、定めてお喜びのことと存じますが、皆様におかれましても、どうか折角御自愛の上、末永く長寿をお保ち下さいますよう、衷心より祈念申し上げます。

昭和四十九年一月十日

### 三、残っていた遺族の手記

医專一年生 吉野克



長崎県西彼杵郡野母崎町野母深浦

吉野久代（母）

原爆から二十九年、また今年も八月九日の記念日がまいります。一日として忘れることは出来ません。死んだ子の年を数える、とよく昔の人は云いますが、いつの世も子を亡くした親は、それが本当ではないでしようか。

去年（四十八年）の記念日の前頃、調先生から亡子克の事でお逢いしたいとの伝言が、克の友人からありましたので、すぐにでもお逢いして、色々とお話を聞きたかったのですが、私がその頃病氣していたためにお逢い出来ず、漸うこの四月にお逢い出来ました。

先生から詳しいお話を聞きまして、初めて先生の方ならぬ御苦勞が分りました。お話によりますと、先生は長崎医大の原爆犠牲者の為に、そしてその遺族の方々の為に、私達が想像もつかない大変な御苦労をなさつておられますそうで、御老体の上に、お二人の御子息を原爆で亡くされたとのこと、只々尊敬と感謝の外はありません。亡き克もきっと喜んで、先生にお礼を申していることと思います。

今日まで名簿に記されていなかつた為に、私達は何も知らず、また慰靈祭にも一度も列席することも出来ませんでした。ただ毎年八月九日を原爆記念日として、家内一同で供養をいたし、十八日は克の命日として供養をしていただけでした。本当に申訳ないことと悔まれてなりません。この度先生にお逢い出来たのは、偏えに亡き克の導

きと思い、胸が一杯でござります。

頂きました「忘れな草」は毎日々々読ませて頂き、遺族の方々の手記はまるで自分の事のようで、昔の事が次から次に思い出され、涙が止めどもなく流れました。

× × ×

克は当時稻佐三丁目の叔父の家に下宿して、学校へ通つておりました。私たちは、私の実父が病氣でしたので、土井ノ首の平山という所に滞在しておりました。丁度八月五日に、祖父（私の父）の容態が急変したので、連絡しようと思つて矢先、克が突然来ましたので、暫らく学校を休んでくれるよう頼みましたところ、大怒りつゝ、「母ちゃん何を云うの、自分達は今は自分の体ではない。一日一日を大事に、早く勉強して軍医になって、戦争に行かねばならぬ身だから、とてもそんなことは出来ない。また今のように毎日々々空襲を受けるようでは、いつ死ぬかもわからぬから、その覚悟で、戦地にやつたものと思って誂らめてくれ」と、激しい言葉に返答も出来ないくらいでした。その日が祖父と克との永の別れでした。

父はいつも、「いつになつたら克が私の脈を取つてくれるようになるかなー」と、只々克が医者として社会の為に尽し、自分を看まもつてくれることを楽しみにしておりましたが、運命とでも申しましょうか、原爆の日の、而も正午頃に息を引きとりました。若し父が一日早く亡くなつていたら、克は原爆から逃れたのはなかろうかと、人の力ではどうにもならない運命というものを、しみじみ味わわされました。しかし原爆を知らずに死んだ父は、却つて幸せだったかも知れません。

午前十一前過ぎだつたかと思います。ピカッと青白いような光が、家一杯に差込みました。父の側に付き切りの身内のものは、ハッと思い、無意識のうちにフトンを被るもの、何かの物陰に身を隠すもの、それは大変でした。

何だろうか、何かわからない、只々不安な顔ばかり。長崎は？ 克は？ 暗闇に思いましたが、どうしても連絡することが出来ず、ただ父の死を待つばかりの私達でした。

間もなく父が息を引取つてからは、只もう克の事が気懸りで、居ても立つてもいら

れませんで、失神しそうでした。

正午過ぎだったと思ひます。長崎の方の空を見上げていると、大きな松原を広げた  
ような黒雲が、段々と広がつて行きます。克はどうしたるか、と黒雲を見守つてい  
るうちに、家の下を人がゾロゾロ通るようになりますが、訳を聞いてもさっぱり分  
りません。夜になつても克は帰つて来ず、父の通夜と共に一睡も出来ませんでした。

翌朝、父の葬式も出さずに長崎に行きましたが、下宿には人影もなく、探す術もな  
く、もしや帰宅しているのではと思い、空しく帰つて来ましたが、氣もそぞろで、父  
の死を悲しむ余裕もありませんでした。

そんな時に、克がヒョコリ帰つて来ました。ズボン一枚で上着もなく、裸で帽子  
も被らず、しかし外見は元気でした。その時の嬉しさは、嬉しきと云いましよう  
か、父の死を悲しみながら、死んだものは仕方がない、帰つて来て本当によかつた、  
と手を取り合つて喜び合いました。

克は祖父の死を大変悲しみながらも、爆弾が落ちてから的事を詳しく話してくれま  
した。ピカッと光つた瞬間、木造だった校舎（生化学講堂）が覆いかぶさるように崩  
れたので、ハッと思ひ机の下に身を沈め、暫らくして手を上へ突き上げたところ、易  
く穴があいたので、友達と一緒に外へ出たそうです。すると、もうどこがどこだか分  
らぬ、方向も分らずに、あちこちに逃げ惑つてゐるうちに、校庭で誰か先生に逢いま  
したが、その先生が、「しっかり頑張つて帰るんだぞ」と、力付けて下さつたそう  
で、大変喜んでおりました。

それから川を渡り、どこをどう歩いたのか、向う側の丘を上へ上へと登り、咽が渴  
いていたので、手当り次第に野菜を食べたそうです。そこで暫らく休んでいたが、夜  
に入つて段々冷えて來たので、丘を下りて防空壕に入つたそうですが、あとでそこが  
城山だと分つた、と云つていました。壕の中は、見るも哀れな老若男女で一杯で、皆  
水をくれ、水をくれ、と喚き叫んでいたので、克は近くの井戸を探し、爆風で飛んで  
来たお櫃を拾つて水を汲み、一晩中、大勢の人に飲ませたと云います。

夜が明けて稻佐の叔父の家に行つたが、留守で家中は目茶々々になつており、仕

方なく友人の兄の伊東さん（医専三年、原爆死）を訪ねたが、まだ帰つておられなか  
つたので、大波止から川南造船所の舟に乗つて江川へ渡り、そこから約一時間歩い  
て、平山の私達の所に辿りついたとのことでした。

このお話を聞くと、水、水、と云つて、何回となく水を飲み、水がおいしいと繰返し  
ながら、父母の許に帰れただけでも幸せだ、と大変喜んでいました。

然しまだ終戦前でしたので、早く安全な三重村（主人の故郷）へ行こうと、船を傭  
い、亡父には心で遊びながら、江川から三重まで決死の覚悟で参りました。四丁橋で  
したから船足は早く、スイスイと行きましたが、福田の沖で飛行機に出会い、折角こ  
こまで生きて来られたのに、と気が気ではありませんでした。

その飛行機は何の事もなく通り過ぎましたが、どうも不安なので、福田の裏にある  
大きな洞穴に船を入れ、そこで三十分余り待避しました。やがて飛行機のいないのを見  
定めて、船頭さん達は一生懸命に船を漕ぎ、夕方に目的地の三重につきました。そ  
れは八月十二日だつたと思います。

その頃、克は、口では元気に私達を力づけていましたが、立つのさえやつとでし  
た。家へ着いてからは安心したのか、「よかつたネ」と云いながら、只もう、水、水  
と、冷たいものばかり欲しがりました。

三重には加来先生と森先生と、二人のお医者様がおられましたので、すぐに診て頂  
きましたが、お二人とも手当の方法が分らぬと申されて、ただ注射だけして頂き、何  
でもよいから食べさせなさいと云われました。近所のあちこちでは、「あの人も死ん  
だげな」「この人も死んだげな」と、死んだ人の話ばかりでした。

この子も死ぬのだろうか、この子は助からんだろうか、何としてでも助けたい。  
不甲斐ない親、この子の為に何も出来ない親、でも涙を見せつてはならない、元氣をつ  
ければ、最後の五分間、いや一分間でも闘かわなければ——奇蹟というものがある。  
夜となく屋となく、井戸水を取り替える。一人では出来ない。先生は何でも食べるよ  
うに云われるが、火を焚けば煙が出る。でも何か食べさせたい。何が欲しいかと聞け  
ば、冷いトーフ、冷いトコロテンと云います。親類の人達があちこちからトーフ、ト

コロテン、水アメ、鶏のスープなど、色々作って来て下さいました。あの時の感激、嬉しさは、何にも譬えようがありません。

日に日に弱ってゆく克、十五日の終戦を迎へ、天皇陛下の御詔も聞いて泣きました。克も聞いて、「母ちゃん、よかつたネ」と喜びましたが、「進駐軍が上陸する」と、どんな事になるか分らんから、母ちゃんは妹や小さい弟を連れて、もつともつと奥山の方へ避難しなさい。僕と父ちゃんがここに居るから」と、今日とも知れず、明日とも知れぬ自分の命がわからず、私達の事を案じてくれました。

只もう水、水が欲しい。お腹(なか)が焼ける。何とかならんかな、と私達の顔をジーッと見つめる顔、目。代れるものなら代つてやりたい。何とかしてやりたい。でも出来ないのです。どうにも出来ないので。「母ちゃん、僕もう駄目だと思つ」と、十六日の朝、私の手をしつかり握つて、初めて口走りました。

主人の身内の方々も、毎日付き切りでいてくれましたが、その方達にも厚くお礼を云つて、主人と私には、「父ちゃん、母ちゃん、御免ネ、親孝行も出来ずに僕が先に死ぬなんて、本当にすまない。あとに残つた妹や弟たちを、立派に育ててね。僕は死んでも一生懸命勉強するヨ。お祖父ちゃんの側でお祖父ちゃんと仲よくするヨ。きっとお祖父ちゃんも喜んでくれるヨ」と、次から次と雄弁にお話をし、すぐ下の妹には、「俺の分まで勉強して、父ちゃんや母ちゃんに孝行してナ」と申し聞かせ、あと小さい妹弟には何も申さず、余りのことに、身内の方々もただ泣くばかりでした。

「もういいから何も話しなさんな」と云つても、自分が話すだけ話してからは、「もう自分は死ぬのだ」と云つて、「左様なら、皆さん左様なら」と云つたきり、顔色が変り、様子が変つたので、急いで先生に来て頂きました。私はアーニーこれが最後かと思ったあとは、どうなつたか無我夢中でわかりませんでしたが、暫らくして注射のためか、また克が元氣を取り戻しました。身内の方も大驚き、これは奇蹟だと云つて、もしかすると助かるのではないかと、半ば喜んだ人もいました。然しその時は、克はもうコーリ(氷)と云えず、ガリガリ、母ちゃん、ガリガリ」と云うだけでした。

帰つて来た時の傷は、あまり目立たなくなつていて、肩の火傷の部分がまた広くなつて深くなり、唇も物を入れる度に、「しめる、しめる」と云うし、食べたものはそのまま下に出て来る有様で、薬をのませてもそのまま、グルグルグルとお腹の中を通るばかりでした。これではとても身体がもつ筈がありません。お臂(ひじ)を取り替えてやる度に、「母ちゃん、すまん、御免ネ」と、お詫びとお礼を云われては、たまりません。日々抱きしめてやるばかりでした。

今私は、この手記を書きながら泣いています。泣いてはいけない。泣かずに、あの当時のことを詳しく書いて「忘れな草」に出して頂き、皆さんに読んで頂くことが、せめてもの克の為の供養と思い、一生懸命に書いているのですが、やはり泣かずにはおられません。

克はほんとに優しい子でした。十八才になるまで親に口答えをすることもなく、無口で、居るのか居ないのか分らぬような、それでいて大変な努力家でした。小学校、中学校と成績もよく、試験だからといって特に勉強するでもなく、毎日々々一定の勉強をして、いつも試験の時はノートを友人に貸していました。親戚の人からとても慕われていて、「いつになつたら克さんがお医者さんになって、私たちを診察してくれるかな。それまでは生きていなければ——」と、よく云われていたのでした。現在では田舎ほどお医者様が不足ですが、そんな時には、克が丈夫でいたら、残念でなりません。

十七日もガリガリ、もう何にも云えません。口から入れることも出来ません。ただガリガリと云うだけでした。でも頭はハッキリして、時々余りにも立派な口のきき方をするので、驚くこともありました。お臂の方が一寸でも汚れると、すぐに教えてくれるし、この日には一寸も私を側から離しませんでした。

あちこちで原爆死の人が、とても苦しんで息を引き取つたということを聞いて、この子も苦しむのではなかろうか、どうか苦しまないよう、苦しまないよう、と願うのみでした。それ以外にもうどうすることも出来ないのでです。

最後の、最後の五分まで、と頑張つてみましたが、とても駄目と締らめる時が来ました。

のでした。

十八日が最後の日です。口に入れるのはただ冷たい水だけ。お腹の上には冷たいタオルを載せていましたが、載せると間もなく熱くなるので、せめてこれだけでもと、懸命に取り替えました。一刻、一刻、死期は迫っているのです。とても苦しみました。私たちはもう涙も出ません。何とかして苦しますに、安らかに、と願う心は皆一つでした。ただ目と目とで力づけるばかりでした。

主人がしつかと抱きかかえ、「克、大乗大悟を知っているか」と叫びました。息を引き取ろうと苦しんでいる息の下から、はつきり「ハイ」と答えて、安らかに息を引き取りました。ああ、よかったです。私はただ突然として、急には涙も出ませんでした。十八日の午前十一時頃でした。

原爆の日から十日目、克は十八才を一期として亡くなりました。

それから私は、ただもう何と云つてよいか、自分でも解りません。一日、二日、三日、仕事も出来ず、食べることもいや、寝たきりの、病名もわからぬまま、死ぬことしか考えない母になってしまつておりました。

誰の話も聞かぬ、人と話すのもいや、主人や子供たちの慰めも、何の効もありませんでした。一番頼りにしていた父、一番頼りにしていた克、二人を十日間のうちに亡くした私は、あまりにも現世の無情に堪えられなかつたのでしょう。私がやつと人並みに元氣を取り戻したのは、半年も経つた頃だつたでしよう。終戦の混雑にやつと私の気持を取り直し、残つた子供達を立派に育てることが、せめてもの克に対しての供養だと思い、それからは一生懸命でした。

その後二十九年、いろいろと家庭の事情もありましたが、つらい、悲しい時は、何処からともなく、父と克が、「母ちゃん、頑張つて」という、その声に励まされて、やつと現在の私に辿りつきました。

亡き兄の話をしながら、子供たちも揃つて親孝行をしてくれます。お蔭で何の不自由もなく、幸せに暮しております。

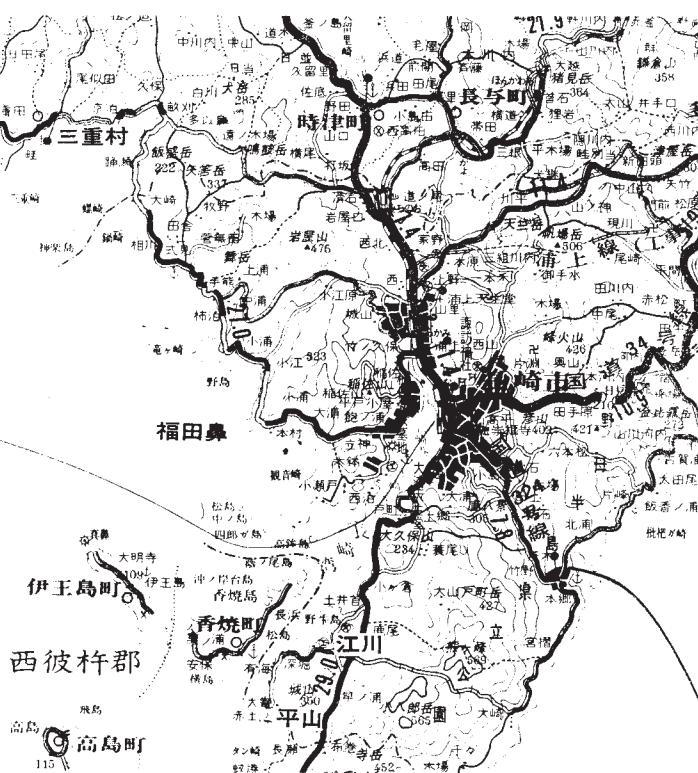
かつて父と、そして克とが、見護つしていくるものと思い、朝夕仏前に坐りながら

ら、感謝申しております。

× × ×

克の写真と一緒に、この拙い文を「忘れな草」に載せて頂きますとのこと、本当に光榮に存じます。と同時に、何か私のしなければならない事を、一つ済ませたような気持でござります。

お子様を亡くされた方々は、皆さん御老年と思います。どうぞお身体を大事に、一日でも長生きなさいますよう、お祈り致します。  
(四九、五、一〇)





平戸市岩ノ上町七七二一一

打田 タカ子（妹）

んと姉の遺骸がそこにありました。姉は手紙にあるように、一度帰りたい、帰りました  
いと云っていましたから、早く父に会いたかったのではないでしょか。  
私は体があまり丈夫でないので、もし姉がいたら、姉が恋しい毎日を過してお  
ります。せめて「忘れな草」の最終編でも一部お願いして、姉を偲びたいと思つておりますので、よろしくお願ひ致します。

(四九、一、一九)

## 父へ宛てた姉の手紙 その一

初めて筆をとらせて頂きます。私は一度  
でも慰靈祭にお参りしたいと、毎年思つて  
はおりましたが、色々と家のことや子供の  
ことに追われて、残念に思つております。

姉からの手紙が二、三ありますので、私はいつも出しては読んでおりますが、今度「忘れな草」の最終編が出版されますそう  
で、この際是非、先生にも御覧頂きたく、同封致しました。どれを読んでも食物の事  
ばかりで、どんなに苦しかったろうかと思うと、涙が出るばかりです。

丁度その頃、私は動員学徒で川棚へ行つておりました。原爆が落ちたのは、山の上  
で作業をしている時でした。寮へ帰つて窓から見ると、長崎の方の空が真赤に染まつ  
ていました。私は長崎に爆弾の落ちたことを悟り、一番先に姉のことを思いました。

その夜また空襲があり、私は防空壕の中に待避しましたが、そこで姉に最後の面会  
を致しました。日頃から姉は一度帰つて皆に会いたいと云つていましたが、それも出  
来ないことと締めていましたのに、姉は火玉となつて私に会いに来てくれたのです。

このことは若し私が一人で見たのだったら、それはウソだと云つて聞いてはくれなか  
つたでしょうが、イトコも同じように見たと云いますので、私は正しく姉に違いない  
と思いました。しかし結局、それは幻にすぎませんでした。

でもまだほかに不思議なことがあります。私が川棚から帰る前に、父は姉の安否を  
気遣つて長崎へ出かけました。猛火の中を大字病院に通りつき、姉を探したのですが  
見つからないまま、母の弟の家に泊りました。どうして探そうかと思案しながら床に  
ついたのですが、夢の中に姉が現われて、自分の亡骸の所まで案内したそうです。

翌朝早く、父は誰にも云わずに出かけ、夢を信じてその場所に行つてみると、ちや

拝啓 拝啓 拝り有難う御座いました。返事は書きながらも、近頃は穴藏生活をしてお  
りますので、出せなかったのです。大変心配されましたことでしょう。

三月に帰つた時より少しやせましたけれど、やはり肥えております故、御安心下さ  
い。タカ子も川棚へ行き、淋しいことでしょうね。お母さんは元気ですか。いつも体  
がお弱いので、とても心配です。昭義は今度の夏、お腹をこわさないようにさせて下  
さい。お父さんもあまり無理をしないようにして下さい。

私も元気です。戦争に勝つまでは死ぬつもりです。先日婦長さんが、私たちを家  
族に一度会わせるように、云つておられました。しかし帰られるかどうかは分りませ  
ん。近く帰られなくて、いつかは帰られるでしょう。婦長さんはまた、髪毛や爪な  
どを家に送るよう云われました。

それから済みませんが、豆やカンコロ、魚、ハッタイの粉などを送つて下さい。穴  
蔵生活で、非常食が必要ですから――。

## 父へ宛てた姉の手紙 その二

(昭和二十年六月)

## 父へ宛てた姉の手紙 その二

拝啓 先日の手紙届いたでしょうか。タカ子からは便りがありますか。初めて親の  
ものを離れて、さぞ淋しく床の中で泣いていることでしょう。親のものを離れると、  
故郷のことを思つて泣いたり、人の母を見ると自分の母を思いだし、何かにつけ思  
い出しますは泣くのです。だから済みませんけれど、もしヒマがありましたら、タカ子に  
小包を送つてやって下さい。

私もタカ子に面会に行きたいのですけれど、空からのお客が毎日のように来ますの  
で、汽車の旅が出来ず困っています。

昭義は元気に遊んでいたでしようね。お母さんを困らせてはいませんか。お父さんも忙しいでしようね。お母さんは家事が忙しくて、手が足りないでしょう。あまり無理をして体をこわさないようにして下さい。

私も蒸暑くなつたので、夜は寝られず、又蚊が多くて部屋には居られないのです。それから、長崎に爆弾が落ちて、私ももしも負傷して入院するようなことがあつたら、着替えが一番ですから、済みませんけれど送つて下さい。そして済みませんがお金を送つて下さい。ではお金と小包をお願い致します。

(昭和二十年六月)

### 父へ宛てた姉の手紙 その三

拝啓 先日はお金に切手、沢山有難う御座いました。

その後お母さんは元気でしようか。病院に居ると病氣の事がはつきりわかるものですから、心配でたまりません。床に寝て起きられないのですか。お父さんはさぞ困つて居られるでしょうね。タカ子が居たら御飯炊きぐらいにはなるのに……。

お父さん、大豆の草取りや、芋の草取りに忙しいでしようから、婦長さんに便りを出して下さい。この便りが書き次第、くわしく書いて出して下さい。婦長さんの所は「長崎医大精神科、有村婦長様」と書いて出したら届きますから、家が忙しくて母が病氣と書かれたら、きっとヒマが出るだろうと思ひます。はつきり書いて出して下さい。早く帰つて手伝いをしたくてたまりません。

八月からは帰られなくなるかも知れません。では便りを待ちます。

### 父に宛てた姉の手紙 その四

拝啓 七月十三日、盆がやつて参りましたね。松枝姉ちゃん、国ちゃんの初盆が参りました。今迄の事が色々思い出されて、泣けて仕様がありません。

その後父母様方や克ちゃん達は、皆元気で農業に励んで居られることでしよう。私もお蔭様で元気に穴藏生活を致しております故、御安心下さい。タカ子からも便りがあり、とても淋しいとのこと、可哀想でなりません。もしもここに入つていったら、姉妹二人で楽しく暮して行けるのに、と思いつつ返事を出しました。

それから昭義は元気でしようね。昨夜、昭義が自動車に乗せられて連れて行かれました。

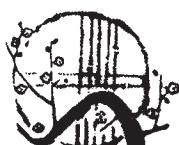
のを見て、泣きながら探している夢を見ました。もしやそのような事があったのではないかと、心配して居ります。空襲になつたら厚着をきして、濡れた手拭、厚い頭巾を是非つけさせて下さい。戦災患者の話によりますと、薄着をしていて破片が体の中に入つたり、又は濡れ手拭を持っていなかつたために、チッソクしたそうです。夜も用意して寝て下さい。

それから、小包は確かに届きましたけれど、どこかで取られているようです。豆は底の方に手で握るほどしかありませんでした。魚は袋に半分位ありました。沢山送られたでしようが、少しだけ私の手に入りました。でも大変おいしい豆でした。まだありますたら、済みませんけれど、大豆か白いカンコロ、又は何か非常食になるものを送つて下さい。皆持つておりますのに、私が持つていませんので、婦長さんから戴いております。私が帰れたら婦長さんにあげるのに、と思つています。

早く卒業して帰りたくてたまりません。今更やめると云つたら悪いと思つて、頑張つております。

今日は目がとても腫れて頭痛が致しますので、乱筆で済みません。では送られたら送つて下さい。切手もお願いします。

(昭和二十年七月十三日付)



# 編集後記

## 調査来助

永い間「忘れな草」を御愛読いただき、有難うございました。本誌の使命もほぼ達せられたように思いますので、これで終ることに致しました。あしからず御諒承下さい。

本号には主として、原爆生残りの学生の手記を掲載しましたが、併せて当時の在学生、特に離校の厄に遭つて他校へ転校した、付属医専五、六、七期生の消息を詳しく調査しましたので、その名簿を作製掲載致しました。（名簿の一九二四頁参照）

原爆の犠牲となられた角尾学長はじめ、教職員、事務職員、看護婦、学生たちの数は、前号（昭和四十六年十二月発行）では八八九名でしたが、うち二名は生存者であることことが判明したので削除し、代りに五名新しく発見されたので、差引き三名の増加となり、総数は次表の通り八九二名になりました。

それは台湾人医師一名、医専三年生一名（台湾の人）、医専二年生一名、医専一年

学生		職員			教職員			学長及び教授				
薬学生	医学学生	看護婦生徒	事務職員	看護婦	看護婦及び事務員	助手及び副手	助教授及び講師	一〇六	一〇五	一〇一	一七	
付属薬専生徒	医学部学生	看護婦及び助産婦の生徒	看護婦	看護婦及び助産婦の生徒	事務官及び事務員	一一〇六	一一〇六	一一〇六	一一〇五	一一〇四	一一〇三	
三六	五六	五八	五八	五一	一〇九	八九二	八九二	八九二	八九二	八九二	八九二	

生二名の五名であります。（本号六～七頁参照）

さて、本号の記事の中で、最も特筆すべき朗報は、何と云つても、年老いた遺族（父、母、妻）の方々に、年金支給が決定したことであります。これだけでも、本誌の使命が充分達成されたような気が致します。どうか末永くお健やかにお過し下さいますよう、心から御長寿をお祈り申し上げます。  
終りに臨み、遺族の方々並びに原爆体験者の方々の御健祥をお祈りして、最後の筆を擱きます。

（四九、五、七）

昭和四十九年五月二十五日 印刷  
昭和四十九年五月三十一日 発行  
原爆思い出の手記集  
（非売品）

## 忘れな草

編集 調査 来助  
長崎市本原町一一二九  
長崎市本原町一一二九 調査助方  
旧長崎医科大学  
原爆犠牲学生徒遺族会  
長崎市幸町六番三号  
印刷 大同印刷紙器株式会社